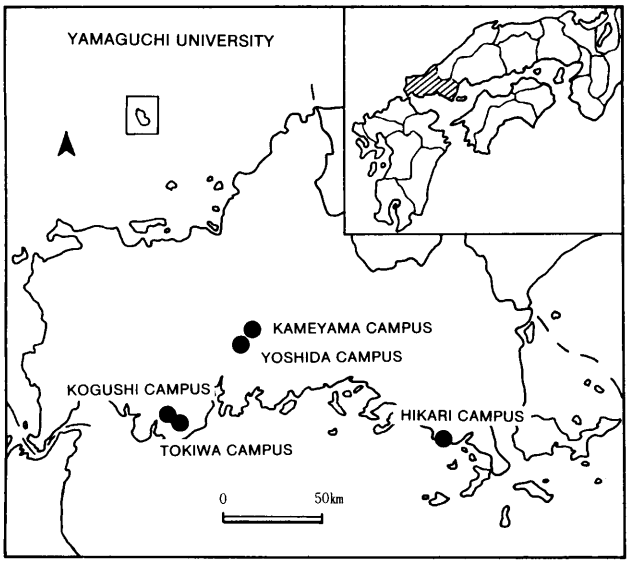
山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅷ

1990

山口大学埋蔵文化財資料館

山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅷ



1 9 9 0

山口大学埋蔵文化財資料館

例　　言

1．本書は、山口大学埋蔵文化財資料館が埋蔵文化財資料館運営委員会の指示を受けて、昭和63年度に山口大学構内で実施した調査の報告書である。また、付篇Ⅰとして昭和60・61年度の遺跡保存地区の発掘調査、付篇Ⅱとして昭和54年度の本部２号館新営に伴う発掘調査の成果を報告する。

2．現地における調査・研究は資料館員河村吉行・木村元浩が担当し、遺跡保存地区の発掘調査は山口大学人文学部考古学研究室、本部２号館新営に伴う発掘調査は人文学部考古学研究室・山口県教育委員会の協力を得た。出土遺物の整理は主に河村・木村が行ない、同館員古賀真木子（旧姓小川）が援助した。

3．調査・研究における事務一般は事務局庶務課庶務係が統括し、実施面においては各関係部局の事務部があたった。

4．遺構の実測は、人文学部考古学研究室の協力のもと河村・木村が行ない、遺物の実測は、第２章を木村、付篇Ⅰ・Ⅱを河村が行なった。

5．製図は、第２章第２節１を木村、他を古賀が行なった。

6．本文の執筆は、第２章を河村・木村が分担し、付篇Ⅰ・Ⅱを河村が行なった。

7．現地における写真撮影および遺物の写真撮影は河村が行なった。

8．石器の石質鑑定は山口大学理学部教授、松本徑夫氏に依頼し、懇切な御教示を得た。記して感謝の意を表したい。

9．本書の編集は館員が協力して行なった。

10．調査・研究においてはカラースライドを作成しており、出土遺物とあわせ埋蔵文化財資料館が保管している。広く活用されることを希望したい。

11．調査組織は次のとおりである（昭和63年度・平成元年度）。

調査主体	埋蔵文化財資料館	館　長	黄　基雄	〔～平成元年４月２日〕
		〃	近藤　喬一	〔平成元年４月３日～〕
		館　員	河村　吉行	
		〃	木村　元浩	〔～平成元年10月15日〕
		〃	杉原　和恵	〔～平成元年３月30日〕
		〃	小川真木子	〔平成元年４月１日～〕
事務局		事務局長	大谷　巖	〔～昭和63年３月31日〕
		〃	有地　成光	〔昭和63年４月１日～〕
	本部庶務部	部　長	田中　武雄	〔～平成元年３月31日〕

事務局	本部庶務部	部長	菊地　洋男〔平成元年4月1日～〕
	庶務課	課長	竹下　寛美〔～平成元年3月31日〕
		〃	佐野　紀　〔平成元年4月1日～〕
		課長補佐	大多和泰則〔～平成元年3月31日〕
		〃	宮原　毅　〔平成元年4月1日～〕
	庶務係	係長	野村　宗成〔～平成元年7月31日〕
		〃	楠元　敏胤〔平成元年8月1日～〕
			本田　正春〔～平成元年3月31日〕
			小野　静生〔平成元年4月1日～〕
			坪井　厚子
			三浦　勝弘〔昭和63年4月1日～〕
			山下　京子〔昭和63年5月20日～〕

12. 調査・研究にあたって下記の方々の多大な御協力と援助を受けた（官職は昭和63年度）。

山口大学事務局庶務部　人事課長　石川恒雄、同課長補佐　増谷　泰、同係長　有吉　明、同係　藤井純朗、池本誠也

経理部　部長　真塩　実、主計課長　木野光郎、同課長補佐　宮原　毅、経理課長　七木田晧亮、同課長補佐　河野繁之、総務係長　田中善人、監査係長　石崎啓介、管財係長　小林和生、用度係長　梅村　馨、用度主任　谷本信之、管理主任　正司三喜男、同係　須藤　馨

施設部　部長　藤岡　巌、企画課長　竹田忠文、建築課長　東山邦雄、同課長補佐　萩尾次男、設備課長　久芳　稔、総務係長　松永次郎、総務主任　三村文雄、建築第一係長　藤井　幸、同係　小川賀津夫、澤谷弘美、建築第二係長　稲垣實造、同係　河田徹也、電気係長　吉永峯生、同係　松田清司、機械係長　鈴木輝美、同係　鹿嶋正則、板垣健一

学生部　部長　青木秀夫、次長　中山昭成、学生課長　岡本昭夫、同課長補佐　嶋本拓司、学生係長　佐藤正治、同係　礒部孝至、金重達也

大学会館主任　端野輝昭

教育学部　事務長　西澤喜昭、同補佐　中村義満、庶務係長　松本正史、会計係長　森本茂雄、附属山口中学校長　和田　章、同副校長　田中健二、附属光中学校長　門前貞三、同副校長　藤山照夫、山口附属学校係長　林　威、附属光小学校長　三浦　肇、同副校長　河村龍弍

附属光学校係長　長谷知之

経済学部　事務長　原田晃威、庶務係長　廣政　登、会計係長　中島岩弘

教養部　事務長　梅原儀助、庶務係長　野中章彦、会計係長　伊藤敏穂、同係
三原秀脇、櫻井健二、藪　達己

医学部　事務部長　吉田博次、同次長　宮脇照男、総務課長　新田正人、同課長
補佐　廣石輝男、管理課長　出口小太郎、同課長補佐　兵頭欣二、
西野雅博、庶務係長　原　和男、管理係長　中村文穂、経理係長
野澤章三、施設係長　三浦幸一、設備係長　山本安雄、環境係長
山本直行

工学部　事務長　元永道徳、事務長補佐　柳　等、庶務係長　片山正雄、
会計係長　石川恒夫

人文学部考古学研究室

山口県教育委員会　渡辺一雄　戸成崇和（現 山口県立大嶺高等学校）

宇部市シルバー人材センター

末広産業

調査補助員

＜遺跡保存地区の発掘調査＞

（昭和60年度）

乾風千絵、岡村昌彦、杉原和恵、杉本とも子、森下靖士、吉田　寛、米倉智美、上野文子、小田信子、柏本秋生、高下洋一、定池博之、菅波正人、内山　治、辛島眞治、久野孝一、西本泰子、馬場道則、鱒村礼子、森　恒裕〔人文学部考古学研究室〕

（昭和61年度）

森下靖士、吉田　寛、内山　治、辛島眞治、久野孝一、富樫孝志、中原章子、馬場道則、鱒村礼子、南　時夫、森　恒裕、風間忠雄、鎌田ちのい、小畑三秋、西川　徹、西田　巌、村上智裕、舟橋加恵、前田晴美、綿重雅子〔人文学部考古学研究室〕

＜本部２号館新営に伴う発掘調査＞

石井龍彦、石橋　玲、井上直明、岡谷優子（旧姓井本）、岩崎仁志、亀谷尚子（旧姓藤井）、賀来孝代（旧姓杉野）、別府洋二、渡辺泰子（旧姓松尾）、渡辺　晃〔人文学部考古学研究室〕

作業員

有馬由里子、伊藤康浩、片山由香、中　則博、難波京子、武永光史、谷口只敏、福田健治、福田泰一郎、森原久男、山口悦子、山本　毅、吉岡　京、足立セツ子、有吉由紀子、石津彰子、糸永　均、岡本静枝、岡本弘子、岡屋知子、北村カヨ子、黒坂千代子、師子角由紀子、杉山幹男、高木悦子、谷川美彩世、中村多恵子、西見利子、早川幸子、藤井ヨシ子、藤原啓子、峯重つや子、宮家静代、村田治枝、山縣初子

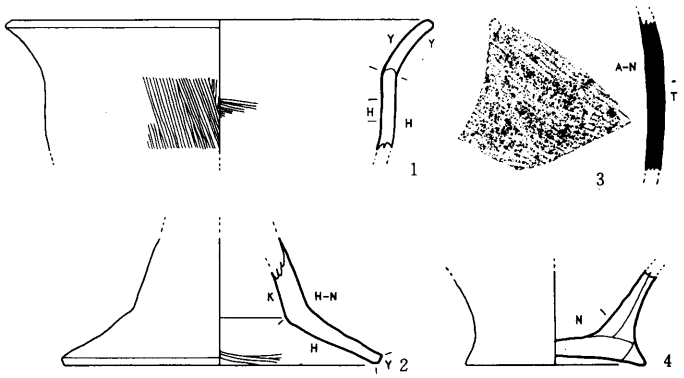
凡　　例

1. 吉田構内における調査地区および層位、遺構の位置は国土座標を基準として北から南へ1～24、西から東へA～Zの番号を付して50m方眼に区画した構内地区割のA－24区南西隅を起点（構内座標x＝0，y＝0）とする構内座標値で表示する。なお、平面直角座標系第Ⅲ系における座標値（X，Y）と構内座標値（x，y）とは下記の計算式で変換される。

   x＝X＋206,000

   y＝Y＋ 64,750

2. 各遺構は下記の記号で表記することがある。
   竪穴住居跡……SB，土壙……SK，井戸…… W，溝……SD，河川跡……NR
3. 本書に使用した方位は、吉田構内では国土座標を基準とした真北、他構内では磁北を示す。
4. 標高数値は海抜標高を示す。
5. 竪穴住居跡の床面積は1/20の図面をもとに、オーバックプラニメーター001Rで5回測定し、その平均値を記した。
6. 本文中の遺物番号は、挿図・図版・遺物観察表の番号と一致させた。
7. 遺物・土層の色調は農林省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(1976) に準拠した。
8. 土器の実測図は下記のように器種分類した。
   断面黒ぬり……須恵器、須恵質土器，断面白ぬり……縄文土器、弥生土器、土師器、土師質土器、瓦質土器、瓦，断面網目……陶磁器
9. 土器の器面調整については、断面周囲に調整の境界を記し、境界間に下記の略記号により明示した。ただし、風化等による不明部分は無記入とした。



【土器実測図の調整凡例】

〔種類〕

N ……ナデ (Nhヘラナデ)
Y ……横ナデ(Yhヘラ横ナデ)
H ……刷毛目、M ……ミガキ
K ……ケズリ、T ……タタキ
A ……タタキ当て具痕、C ……カキ目
J ……条痕、U ……施釉、X ……条線
HK……底部ヘラ切り、IK……底部糸切り
I ……板目圧痕、Oy……指オサエ

〔先後関係〕

H－N ……刷毛目のちナデ

1：口縁部内外面横ナデ。胴部は外面縦刷毛目、内面は横刷毛目が一部にみられるが調整不明。
2：外面刷毛目のちナデ。裾端部は横ナデする。内面は、脚柱部へラケズリ、裾部横刷毛目。
3：外面平行タタキ、内面はのち当て具痕をナデ消す。
4：底部内面のみナデが観察できるが、あとは内外面とも調整不明。

本　文　目　次

第１章　昭和63年度山口大学構内遺跡調査の概要 ……（河村）… 1

第２章　昭和63年度山口大学構内の立会調査 ……（河村・木村）… 5

第１節　吉田構内の立会調査

1　教養部複合棟新営に伴う自転車置場移設に係る立会調査 …… 5

2　国際交流会館新営に伴う排水管埋設に係る立会調査 …… 6

3　教養部複合棟新営に伴うケーブル埋設に係る立会調査 …… 7

4　サッカー・ラグビー場改修工事に伴う立会調査 …… 8

5　消防用水設置に伴う立会調査 …… 9

第２節　小串構内の立会調査

1　医学部附属病院病棟新営に伴う立会調査 …… 10

2　医学部運動場整備に伴う立会調査 …… 16

第３節　常盤構内の立会調査

工学部焼却炉上屋新営に伴う立会調査 …… 17

第４節　亀山構内の立会調査

教育学部附属山口中学校屋内消火栓設備改修に伴う立会調査 …… 18

第５節　光構内の立会調査

1　教育学部附属光小学校遊器具移設に伴う立会調査 …… 20

2　教育学部附属光小学校屋外スピーカー設置に伴う立会調査 …… 22

第６節　その他構内の立会調査

経済学部７号職員宿舎公共下水道切替に伴う立会調査 …… 26

付篇

付篇　Ⅰ

吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和60・61年度） ……（河村）… 27

1　調査の概要 …… 27

2　遺構・遺物 …… 28
(1)竪穴住居跡 …… 28
(2)土壙 …… 36
(3)溝 …… 45
(4)柱穴 …… 49
(5)河川跡 …… 50
(6)土器溜り …… 51
(7)性格不明の遺物 …… 54
(8)遺構に伴わない遺物 …… 55
3　小結 …… 55
4　あとがき …… 58

付篇Ⅱ

吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査 ……（河村）… 65
1　調査の経過 …… 65
2　層位 …… 66
3　トレンチ出土遺物 …… 66
(1)Aトレンチ出土遺物 …… 66
(2)Bトレンチ出土遺物 …… 71
4　遺構・遺物 …… 74
(1)弥生時代の遺構・遺物 …… 74
土壙 …… 74
(2)室町時代の遺構・遺物 …… 84
1)土壙 …… 84
2)井戸 …… 85
3)溝 …… 86
(3)柱穴 …… 93
(4)包含層出土遺物 …… 93
1)第5層出土遺物 …… 93
2)第6層出土遺物 …… 107

3)第７層出土遺物 …… 109
4)第２・３層出土遺物 …… 113
5　小結 …… 113

山口大学構内遺跡調査要項
山口大学埋蔵文化財資料館規則 …… 133
山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則 …… 134
山口大学構内の主な調査 …… 136
Summary …… 143

図　版　目　次

＜山口大学構内の立会調査＞　本文対応頁
ＰＬ．　1　小串構内全景（南西から）
ＰＬ．　2　医学部附属病院病棟新営に伴う立会調査出土遺物（表）…… 10～15
ＰＬ．　3　医学部附属病院病棟新営に伴う立会調査出土遺物（裏）…… 10～15
ＰＬ．　4　教育学部附属光小学校遊器具移設に伴う立会調査出土遺物
および御手洗湾採集遺物 …… 20～21
ＰＬ．　5　御手洗湾採集遺物 …… 22～25

付篇　Ⅰ
＜吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和60・61年度）＞
ＰＬ．　6　吉田構内全景（北西から）
ＰＬ．　7 (1)　昭和60年度調査区全景（東から）…… 27
(2)　昭和61年度調査区全景（東から）…… 27
ＰＬ．　8 (1)　第14号竪穴住居跡（南東から）…… 28
(2)　第19号竪穴住居跡（南西から）…… 31
ＰＬ．　9 (1)　第20号竪穴住居跡（北西から）…… 33
(2)　第20号竪穴住居跡出入口状施設（南から）…… 33
(3)　第20号竪穴住居跡出入口状施設（西から）…… 33

ＰＬ．　10 (1)　第21号竪穴住居跡（北東から）…… 35
(2)　第54号土壙（北東から）…… 36
(3)　第56号土壙（北東から）…… 38
ＰＬ．　11 (1)　第57号土壙（北東から）…… 38
(2)　第58・59号土壙（北から）…… 38
(3)　第65・66号土壙（北東から）…… 40・42
(4)　第67・69号土壙（北東から）…… 42
ＰＬ．　12 (1)　第６号溝（北西から）…… 45
(2)　第６号溝遺物出土状況(1)（東から）…… 45
(3)　第６号溝遺物出土状況(2)（北東から）…… 45
ＰＬ．　13 (1)　土器溜り遺物出土状況(1)（西から）…… 51
(2)　土器溜り遺物出土状況(2)（西から）…… 51
(3)　河川跡土層断面（北東から）…… 50
(4)　性格不明の遺物出土状況（東から）…… 54
ＰＬ．　14　出土遺物(1)
ＰＬ．　15　出土遺物(2)
ＰＬ．　16　出土遺物(3)
ＰＬ．　17　出土遺物(4)
ＰＬ．　18　出土遺物(5)
ＰＬ．　19　出土遺物(6)
ＰＬ．　20　出土遺物(7)
ＰＬ．　21　出土遺物(8)

付篇Ⅱ

＜吉田構内本部２号館新営に伴う発掘調査＞

ＰＬ．　22 (1)　調査区遠景（北東から）
(2)　Ｂトレンチ西壁土層断面（東から）…… 65
(3)　Ａトレンチ遺物出土状況（北から）…… 66
ＰＬ．　23 (1)　調査区全景（東から）
(2)　第１号土壙遺物出土状況(1)（南西から）…… 74
ＰＬ．　24 (1)　第１号土壙遺物出土状況(2)（南東から）…… 74

(2) 第1号土壙遺物出土状況(3)（東から） …… 74
(3) 第1号土壙（北西から） …… 74
PL. 25 (1) 第2号土壙遺物出土状況(1)（北東から） …… 80
(2) 第2号土壙遺物出土状況(2)（北東から） …… 80
(3) 第2号土壙（北東から） …… 80
PL. 26 (1) 第3号土壙（北東から） …… 83
(2) 第4号土壙（北西から） …… 84
(3) 第5号土壙（北東から） …… 84
(4) 第5号土壙遺物出土状況（南西から） …… 84
PL. 27 (1) 第1号井戸（東から） …… 85
(2) 第1号井戸遺物出土状況（北から） …… 85
(3) 第1号井戸石組状況（北西から） …… 85
PL. 28 (1) 第1号溝遺物出土状況(1)（北西から） …… 86
(2) 第1号溝遺物出土状況(2)（北西から） …… 86
(3) 第1号溝遺物出土状況(3)（北西から） …… 86
(4) 柱穴根石検出状況（北から） …… 93
PL. 29 (1) 西壁南端部土層断面（東から） …… 66
(2) 南壁西端部土層断面（北から） …… 66
PL. 30 出土遺物(1)
PL. 31 出土遺物(2)
PL. 32 出土遺物(3)
PL. 33 出土遺物(4)
PL. 34 出土遺物(5)
PL. 35 出土遺物(6)
PL. 36 出土遺物(7)
PL. 37 出土遺物(8)
PL. 38 出土遺物(9)
PL. 39 出土遺物(10)
PL. 40 出土遺物(11)
PL. 41 出土遺物(12)

ＰＬ．　42　出土遺物(13)
ＰＬ．　43　出土遺物(14)
ＰＬ．　44　出土遺物(15)
ＰＬ．　45　出土遺物(16)
ＰＬ．　46　出土遺物(17)
ＰＬ．　47　出土遺物(18)
ＰＬ．　48　出土遺物(19)
ＰＬ．　49　出土遺物(20)
ＰＬ．　50　出土遺物(21)
ＰＬ．　51　出土遺物(22)
ＰＬ．　52　出土遺物(23)
ＰＬ．　53　出土遺物(24)
ＰＬ．　54　出土遺物(25)
ＰＬ．　55　出土遺物(26)

挿　図　目　次

＜昭和63年度山口大学構内遺跡調査の概要＞
Fig.　1　山口大学吉田・亀山両キャンパス位置図 …… 2
Fig.　2　山口大学小串・常盤両キャンパス位置図 …… 3
Fig.　3　山口大学光キャンパス位置図 …… 4
＜昭和63年度山口大学構内の立会調査＞
　吉田構内の立会調査
Fig.　4　調査区位置図 …… 5
Fig.　5　調査区位置図 …… 6
Fig.　6　調査区位置図 …… 7
Fig.　7　調査区位置図 …… 8
Fig.　8　調査区位置図 …… 9

小串構内の立会調査
Fig. 9 調査区位置図 …… 10
Fig. 10 出土遺物実測図(1) …… 11
Fig. 11 出土遺物実測図(2) …… 12
Fig. 12 調査区位置図 …… 16
常盤構内の立会調査
Fig. 13 調査区位置図 …… 17
亀山構内の立会調査
Fig. 14 調査区位置図 …… 18
Fig. 15 土層断面図 …… 19
光構内の立会調査
Fig. 16 調査区位置図 …… 20
Fig. 17 出土・採集遺物実測図 …… 21
Fig. 18 調査区位置図 …… 22
Fig. 19 御手洗湾採集遺物実測図 …… 23
その他構内の立会調査
Fig. 20 調査区位置図 …… 26

付篇 I

＜吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和60・61年度）＞
Fig. 21 調査区位置図 …… 27
Fig. 22 第14号竪穴住居跡実測図 …… 28
Fig. 23 遺構配置図 …… 29・30
Fig. 24 第19号竪穴住居跡実測図 …… 31
Fig. 25 第19号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 32
Fig. 26 第20号竪穴住居跡実測図 …… 32
Fig. 27 第20号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 34
Fig. 28 第21号竪穴住居跡実測図 …… 35
Fig. 29 第21号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 36
Fig. 30 第54・55・57・58・70号土壙実測図 …… 37

Fig. 31 第53・54・56～59号土壙出土遺物実測図 …… 39
Fig. 32 第59～61・63号土壙実測図 …… 41
Fig. 33 第64～67号土壙実測図 …… 43
Fig. 34 第66・69号土壙出土遺物実測図 …… 44
Fig. 35 第69号土壙実測図 …… 45
Fig. 36 溝断面実測図 …… 46
Fig. 37 第６号溝出土遺物実測図(1) …… 47
Fig. 38 第６号溝出土遺物実測図(2) …… 48
Fig. 39 第９号溝出土遺物実測図 …… 49
Fig. 40 柱穴出土遺物実測図 …… 50
Fig. 41 河川跡土層断面実測図 …… 51
Fig. 42 河川跡出土遺物実測図 …… 52
Fig. 43 土器溜り出土遺物実測図(1) …… 53
Fig. 44 土器溜り出土遺物実測図(2) …… 54
Fig. 45 性格不明の遺物出土状況実測図 …… 55
Fig. 46 性格不明および遺構に伴わない遺物実測図 …… 56
Fig. 47 第３号土壙出土遺物実測図 …… 59

付篇Ⅱ

＜吉田構内本部２号館新営に伴う発掘調査＞

Fig. 48 調査区位置図 …… 65
Fig. 49 土層断面図 …… 67・68
Fig. 50 Ａトレンチ出土遺物実測図(1) …… 69
Fig. 51 Ａトレンチ出土遺物実測図(2) …… 70
Fig. 52 Ｂトレンチ出土遺物実測図 …… 72
Fig. 53 遺構配置図 …… 73
Fig. 54 第１号土壙実測図 …… 74
Fig. 55 第１号土壙出土遺物実測図(1) …… 75
Fig. 56 第１号土壙出土遺物実測図(2) …… 76
Fig. 57 第１号土壙出土遺物実測図(3) …… 77
Fig. 58 第１号土壙出土遺物実測図(4) …… 78

Fig. 59 第1号土壙出土遺物実測図(5) …… 79
Fig. 60 第2号土壙実測図 …… 81
Fig. 61 第2号土壙出土遺物実測図(1) …… 82
Fig. 62 第2号土壙出土遺物実測図(2) …… 83
Fig. 63 第3号土壙実測図 …… 84
Fig. 64 第4号土壙実測図 …… 84
Fig. 65 第5号土壙実測図 …… 85
Fig. 66 第5号土壙出土遺物実測図 …… 86
Fig. 67 第1号井戸実測図 …… 87
Fig. 68 第1号井戸出土遺物実測図 …… 88
Fig. 69 第1・2号溝土層断面図 …… 89
Fig. 70 第1号溝出土遺物実測図(1) …… 90
Fig. 71 第1号溝出土遺物実測図(2) …… 91
Fig. 72 第1号溝出土遺物実測図(3) …… 92
Fig. 73 第1号溝出土遺物実測図(4) …… 93
Fig. 74 第2号溝出土遺物実測図 …… 94
Fig. 75 柱穴出土遺物実測図 …… 95
Fig. 76 第5層出土遺物実測図(1) …… 97
Fig. 77 第5層出土遺物実測図(2) …… 99
Fig. 78 第5層出土遺物実測図(3) …… 101
Fig. 79 第5層出土遺物実測図(4) …… 102
Fig. 80 第5層出土遺物実測図(5) …… 103
Fig. 81 第5層出土遺物実測図(6) …… 104
Fig. 82 第5層出土遺物実測図(7) …… 105
Fig. 83 第5層出土遺物実測図(8) …… 106
Fig. 84 第6層出土遺物実測図(1) …… 108
Fig. 85 第6層出土遺物実測図(2) …… 109
Fig. 86 第7層出土遺物実測図(1) …… 110
Fig. 87 第7層出土遺物実測図(2) …… 111
Fig. 88 第7層出土遺物実測図(3) …… 112

Fig. 89 第２・３層出土遺物実測図 …… 113
Fig. 90 山口大学吉田構内地区割および調査区位置図 …… 145・146
Fig. 91 山口大学小串構内調査区位置図 …… 147・148
Fig. 92 山口大学常盤構内調査区位置図 …… 149・150
Fig. 93 山口大学亀山構内（幼稚園・小学校）調査区位置図 …… 151・152
Fig. 94 山口大学亀山構内（中学校）調査区位置図 …… 153・154
Fig. 95 山口大学光構内調査区位置図 …… 155・156

表　目　次

<昭和63年度山口大学構内遺跡調査の概要>
Tab. 1 昭和63年度山口大学構内遺跡調査一覧表 …… 1
<昭和63年度山口大学構内の立会調査>
小串構内の立会調査
Tab. 2 出土遺物観察表 …… 15
光構内の立会調査
Tab. 3 御手洗湾採集遺物観察表 …… 24

付篇Ⅰ
<吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和60・61年度）>
Tab. 4 出土遺物観察表 …… 60～63

付篇Ⅱ
<吉田構内本部２号館新営に伴う発掘調査>
Tab. 5 出土遺物観察表 …… 118～131

Tab. 6 山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員 …… 135
Tab. 7 山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員 …… 135
Tab. 8 山口大学構内の主な調査一覧表 …… 136～142

第１章　昭和63年度山口大学構内遺跡調査の概要

山口大学構内には、縄文時代後・晩期から江戸時代にかけての集落跡として著名な吉田地区（吉田遺跡）をはじめ、県内各地に分散する附属施設を含む地区に周知の遺跡が埋存している。山口大学埋蔵文化財資料館は学内共同利用施設として、これら各地区において現状変更を伴う諸工事に際し、埋蔵文化財保護の観点から調査・研究を行なっている。すなわち、埋蔵文化財調査を要する場合は、埋蔵文化財資料館運営委員会の議を経て、周辺における既往の調査結果や工事内容等を勘案しながら、埋蔵文化財に対する影響の度合に応じて立会、試掘、事前に区分した各調査方法によって発掘調査を実施し、保護措置を講じている。

今年度は12件の立会調査を実施した（Tab. 1）。

Tab. 1　昭和63年度山口大学構内遺跡調査一覧表

調査区分	調査名	構内地区	構内地区割	調査面積(㎡)	調査期間	挿図番号
立会	教養部複合棟新営に伴う自転車置場移設	吉田構内	Ｉ－16	1	4月15日	Fig. 90 －101
	国際交流会館新営に伴う排水管埋設	吉田構内	Ｏ－22	35	4月27日 4月28日	Fig. 90 －102
	教養部複合棟新営に伴うケーブル埋設	吉田構内	Ｊ－18	1	5月10日	Fig. 90 －103
	サッカー・ラグビー場改修	吉田構内	Ｆ－19 Ｇ－19 Ｈ－19・20	25	11月18日 1月27日	Fig. 90 －104
	消防用水設置	吉田構内	Ｋ・Ｌ・Ｍ－22	7.5	3月29日	Fig. 90 －105
	医学部附属病院病棟新営	小串構内		300	6月8日～ 6月22日	Fig. 91 －17
	医学部運動場整備	小串構内		220	3月7日	Fig. 91 －18
	工学部焼却炉上屋新営	常盤構内		225	1月6日	Fig. 92 －6
	教育学部附属山口中学校屋内消火栓設備改修	亀山構内		35	12月19日 2月6日	Fig. 94 －8
	教育学部附属光小学校遊器具移設	光構内		10	5月26日	Fig. 95 －6
	教育学部附属光小学校屋外スピーカー設置	光構内		0.5	8月26日	Fig. 95 －7
	経済学部7号職員宿舎公共下水道切替			1	4月1日	

吉田構内の調査（本部、人文・教育・経済・理・農の各学部、教養部：山口市大字吉田1677－1、教育学部附属養護学校：同吉田3003所在）

実施した5件の立会調査のうち、4件の調査で遺物あるいは遺物包含層、遺構が認められた。

キャンパスの中央部で行なわれた教養部複合棟新営に伴う自転車置場移設工事では、木炭を含む黒褐色砂質土の堆積が認められた。同層は過去に検出されている弥生土器を含む黄灰色粘質土の遺物包含層の上位に堆積しており、色調、組成などから遺物包含層の可能性が高い。したがって、同地域では少なくとも2枚の遺物包含層の堆積が想定されるに至った。

Fig. 1　山口大学吉田・亀山両キャンパス位置図

キャンパスの南端部で行なわれた国際交流会館新営に伴う排水管埋設工事では、遺物包含層、遺構を検出した。遺物包含層は弥生土器および弥生土器・須恵器を含む色調、組成の異なる2層が確認された。検出地点が異なり、また、遺物は量的にも少なく、時期が特定できなかったため、両層の堆積層順は明らかでない。遺構は河川跡ないしは溝を検出した。検出面で幅約80cmの規模をもち、北西－南東に走行するが、遺物は出土しておらず、時期は不明である。

キャンパスの南西部で行なわれたサッカー・ラグビー場改修工事では、木炭を多量に含む黒褐色土の堆積が認められた。同層の検出面は南に隣接する「遺跡保存地区」で検出される遺構の検出面より低く、色調、組成および周辺の立地などから竪穴住居や土壙などの遺構の埋土と考えられる。なお、工事による掘削は当初、

同層に及ぶ計画であった。しかし、工事の緊急度が高いこと、また、「遺跡保存地区」の竪穴住居群と一連の遺構であることが想定されたため、工事による掘削深度を埋蔵文化財に影響を及ぼさない範囲内に留めることとなった。

キャンパスの南端部で行なわれた消防用水設置工事では、河川跡を検出した。時期、規模は不明であるが、検出地点から「遺跡保存地区」において北西－南東に走行する古墳～奈良時代の河川跡と同一のものである可能性がある。また、教養部複合棟敷地で検出された縄文時代晩期の遺物包含層と同一層が確認された。遺物は出土していないが、木炭を多量に含み、少なくともキャンパス南半部には分布範囲をもつことが確かめられた。

小串構内の調査（医学部、同附属病院、医療技術短期大学部：宇部市大字小串1144所在）

実施した２件の立会調査のうち、１件で遺物が出土した。

キャンパスの中央部からやや西に位置する附属病院病棟新営地域では、試掘調査で旧石器時代の石器群が出土している。しかし、石器は二次堆積層である灰色砂層から中～近世の土器とともに出土し、原位置を遊離している。したがって、層位的な発掘調査はあまり意味をもたないと判断し、新営工事に先だって、人工層位的に同層の堆積範囲内について発掘調査を実施した。その結果、二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・剥片・敲石・礫・原石など38点が出土し、形態、使用石材の多用性とその類似性および縄文時代に遡る土器が認められないことなどから大半が旧石器時代に属するものと考えられた。

Fig. 2　山口大学小串・常盤両キャンパス位置図

なお、灰色砂層は堆積状況、周辺の立地などから、同地域の西、南方にさらに分布範囲をもつものと想定される。

常盤構内の調査（工学部、工業短期大学部：宇部市常盤台2557、尾山宿舎：同上野中所在）

キャンパスの北端部で焼却炉新営に伴い、立会調査を実施した。しかし、造成による構内の削平が著しく、顕著な遺構、遺物は認められなかった。

亀山構内の調査（教育学部附属幼稚園：山口市白石三丁目1−2、同山口小学校：同三丁目1−1、同山口中学校：同一丁目9−1所在）

教育学部附属山口中学校敷地の北端部付近で、屋内消火栓設備改修に伴い立会調査を実施した。調査地域周辺は公共下水道新設のため、過去に試掘調査を実施しており、その時点では遺物は出土していない。今回の調査は前回の調査地点のすぐ北側で実施し、二次堆積層からではあったが、土師器、磁器、黒曜石製の剥片若干が出土した。なお、同様な層は他に中学校敷地内でも検出されているが、色調、組成から区分される可能性が高い。

光構内の調査（教育学部附属光小学校、同光中学校：光市大字室積浦１－１所在）

「御手洗遺跡」として周知されている地域で、２件の立会調査を実施した。

キャンパス西端部付近で行なわれた小学校遊器具移設工事では、遺物包含層から歴史時代土師器、陶器、磁器が出土したが、その大半が近～現代の所産であった。

なお、両調査期間中、キャンパスの前面に存在する御手洗湾で、中世を主体とする古墳時代後期～江戸時代の遺物を多量に採集した。護岸工事前の波濤によって、キャンパス内に堆積する遺物包含層から遊離したもので、畿内系瓦器の存在は当地域では出土例がなく、注目されよう。

Fig. 3　山口大学光キャンパス位置図

その他構内の立会調査

山口市白石二丁目８－７に所在する経済学部の職員宿舎において実施したが、顕著な遺物、遺構は確認できなかった。しかし、同敷地の北側の水田では、歴史時代を主体とした土器が採集され、周辺に中～近世の未周知の遺跡が存在している可能性が指摘されるにいたった。

（河村）

第２章　昭和63年度山口大学構内の立会調査

第１節　吉田構内の立会調査

１　教養部複合棟新営に伴う自転車置場移設に係る立会調査

調査地区　吉田構内　Ｉ－16

調査期間　昭和63年４月15日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約１㎡

調査結果　工事は教養部複合棟の新営に伴い、新営予定地に存在した自転車置場を解体撤去し、複合棟の北西部分に移設するものである。工事による掘削規模は原則として現地表下約50㎝までである。この地域は、過去の調査結果から現地表から約100㎝下位までは構内造成時の置き土であることが明らかとなっている[1)]ことから、深掘りを伴う自転車置場の支柱基礎部分２ヶ所について立会調査を行なった。

その結果、２地点とも現地表下約100㎝まで腐植土および構内造成時の埋め土であったが、その下位には黒褐色砂質土の堆積が認められた。調査時の出土遺物はなかったが、同層には木炭が含まれており、遺物を包含している可能性は高いと考えられる。堆積厚は確認していないが、過去に今回の調査地点のすぐ南側で現地表下約120㎝で弥生土器を含む厚さ約20㎝の黄灰色粘質土が検出されており[2)]、同地域では現地表下約100㎝以下に少なくとも２枚の遺物包含層が堆積しているものと考えられる。

（河村）

[注]

1)、2)　山口大学埋蔵文化財資料館「教養部環境整備に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）。

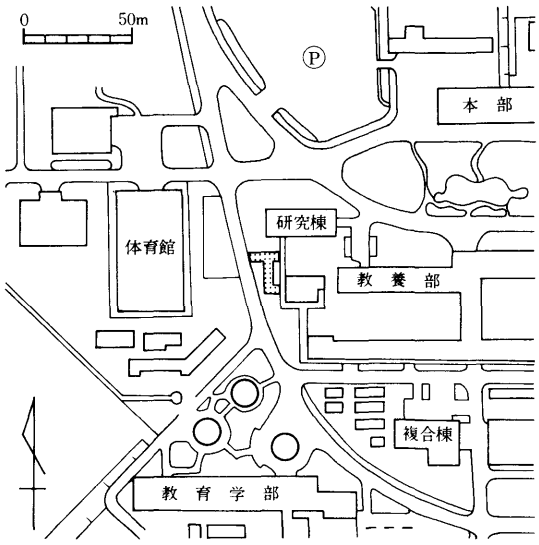


Fig. 4　調査区位置図

2　国際交流会館新営に伴う排水管埋設に係る立会調査

調査地区　吉田構内　O－22

調査期間　昭和63年４月27日、28日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約35㎡

調査結果　独身宿舎南東部に当たる埋設管路東端部では、現地表下約60cmで、落ち込みの緩やかな河川跡ないしは溝を検出した。検出面での幅は80cm、南北方向に流路をもつものと考えられる。検出面からの深さ40cmを計る。出土遺物はなく、時期は不明である。

中央部のやや西で、現地表下48～50cmにかけて、弥生土器片を含む茶褐色粘質土の遺物包含層を検出した。以下、現地表下60cmまでの間には淡灰褐色粘質土が堆積している。出土遺物はなかったが、包含層の可能性をもつ土層である。現地表下60cm下位は黄褐色粘質土の地山となる。これより西の地点では、現地表下64～75cmにかけて灰黄褐色土の遺物包含層が堆積しており、弥生土器、須恵器片が出土した。その直下には、灰黄色土が見られ、現地表下85cm以下に淡黄褐色粘質土の地山を確認した。このように堆積状況は、一様ではないが、埋設管路での基本層序は、埋め土、旧耕土、床土、遺物包含層、地山となる。

地山は西に向かうにつれ、より下位で検出され、東あるいは南から延びる丘陵は、独身宿舎西部付近では、あまり削平を受けていないものと考えられる。しかし、西端部の土層に見られるように埋め土の直下に地山が見られることから、大学造成時におけるある程度の削平は考えられる。現在独身宿舎西部と、国際交流会館との間に約1.5m程度の段差がついているが、これは地山の削平によって作り出されたものではなく、基本的には、盛り土によって、見かけ上の段差が生じているものと考えられる。

出土遺物は数点の弥生土器と須恵器であるが、いずれも細片のため図化できない。

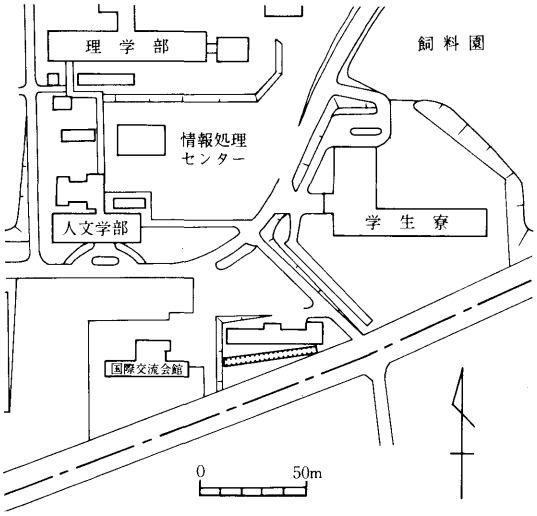


Fig. 5　調査区位置図

（木村）

3　教養部複合棟新営に伴うケーブル埋設に係る立会調査

調査地区　吉田構内　J－18

調査期間　昭和63年5月10日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約1㎡

調査結果　工事は複合棟への電気ケーブルの引き込みに伴い、現地表から約50㎝掘削するもので、工事面積も小規模であった。しかし、工事地点のすぐ北側に位置する複合棟敷地での発掘調査[1]で、現地表下約40～50㎝で弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡、河川跡および江戸時代の建物跡、井戸が検出されていること、また、これらの遺構検出面が縄文時代晩期中頃の遺物包含層となっていることが明らかとなったため、立会調査を実施した。

その結果、工事による掘削範囲内は構内造成時の埋め土であった。なお、工事区域内南端部で深掘りを行ない、現地表下約80㎝で弥生時代以降の遺構面であるオリーブ灰色粘質土（Hue10Y5/2）を検出したが、遺構は確認できなかった。さらに約20㎝掘り下げたが、縄文時代に遡る遺物は出土しなかった。

複合棟敷地と今回の調査地点の現地表面の高低差はほとんどなく、立会調査の結果、標高約18.10mで遺構面が検出されている。また、複合棟と教育学部附属教育実践研究指導センター[2]両敷地での弥生時代以降の遺構面は標高約18.40～18.50mで検出されることから、両敷地間は小規模な谷状の落ち込みに立地しているものと推察される。複合棟新営に伴う試掘調査で設定したEトレンチで検出された河川跡は、この谷状の落ち込みを東西方向に流れるもので、当該地域周辺の立地および遺構の分布状況が次第に明らかになりつつある。　（河村）

[注]

1) 山口大学埋蔵文化財資料館「教養部複合棟新営に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』、1988年）。

2) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属教育実践研究指導センター新営に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』、1988年）。

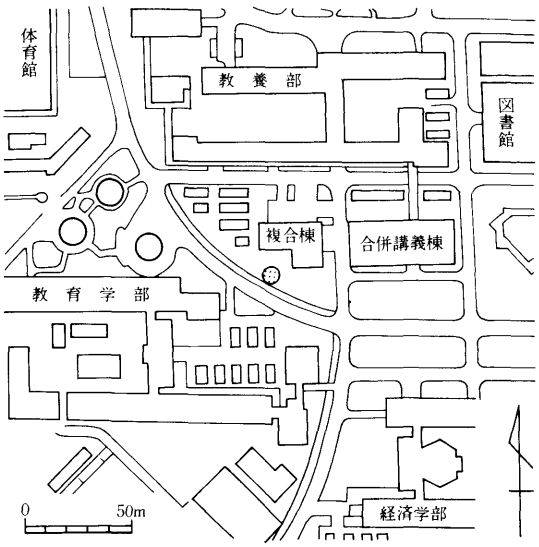


Fig. 6　調査区位置図

4　サッカー・ラグビー場改修工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内　F－19、G－19、H－19・20

調査期間　昭和63年11月18日、平成元年1月27日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約25㎡

調査結果　工事内容は、サッカー・ラグビー場の改修である。グランド面における表土のみの掘削については、埋蔵文化財に対する影響はないものと判断されたが、器具庫東側とラグビー場の南・北・東の3コーナーに新設される側溝部については、前もって埋蔵文化財の有無を確認する必要性があった。掘削深度は、器具庫まわりで現地表下15cm、ラグビー場まわりで現地表下17～19cmである。周辺の土層堆積状況は、遺跡保存地区に隣接しており、当地がグランドとして、その造成に対して大きく削平を受けていると考えられるものの、遺物包含層・遺構の存在が予想された。

11月18日、器具庫まわりで3ヶ所、ラグビー場まわりでは、東西2ヶ所において試掘坑をあけた。

その結果、器具庫東側では、現在の地表面から約15cm下位で、遺物包含層あるいは遺構埋土と考えられる黒褐色土が見られた。一方、ラグビー場東側では、現在の地表面から約31～45cmの掘削を行ったが、いずれも埋め土の範囲内であった。

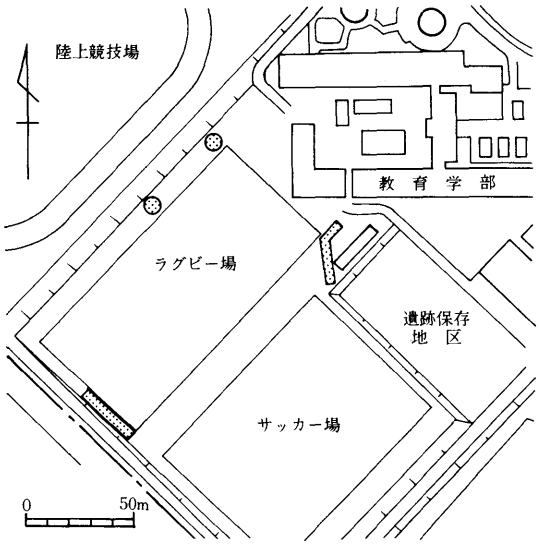


Fig. 7　調査区位置図

この時点で、器具庫東側の側溝部についてのみ、事前調査を実施する必要性が生じたが、関連部局との協議の結果、最終的に、掘削深度を13cmにする工法変更の措置がとられ、工事施工時における立会調査を実施することとなった。

1月27日には、その立会調査を実施したが、顕著な所見は得られなかった。なお、弥生土器の細片を数点、排土中から表採できたが、図化は出来得ない。

（木村）

5　消防用水設置に伴う立会調査

調査地区　吉田構内　K・L・M－22

調査期間　平成元年3月29日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約7.5㎡

調査結果　工事内容は、防火貯水槽の新営および同施設と連結・分岐する配水管の布設である。

配管部分については、東より（防火貯水槽付近）の土層堆積状況は、現地表面から70cmまでが、埋め土であり、以下、現地表下80cmまでが旧耕土、以下、地山と続く。地山は現地表下80～110cmの黄褐色粘土（Hue2.5Y5/6）とそれ以下の堆積層とに分層できる。現地表下90～100cmのレベルにかけては、多量の木炭を含んでいた。顕著な出土遺物はなかったが、同層は色調、組成から、教養部複合棟敷地[1]で検出された縄文時代に遡る包含層の可能性が高い。

また、防火貯水槽に隣接する最東端では、砂礫層の地山が現地表下60cmで確認された。

ハンドボールコートの北端にあたる管路西側の土層の堆積状況は、現地表面から25cmまでが腐植土で、以下、層厚15cmの構内造成時の埋め土の直下に弥生時代以降の遺構面を構成する層厚20cmの暗灰黄色粘質土（Hue2.5Y4/2）、層厚5cmのオリーブ黒色粘質土（Hue5Y3/1）、1cm未満の礫を含む砂礫層と続いている。なお、暗灰黄色粘質土は多量の木炭を含んでいた。

いずれの地点においても、遺構・遺物の発見はなかった。

（木村）

[注]

1) 山口大学埋蔵文化財資料館「教養部複合棟新営に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』、1988年）。

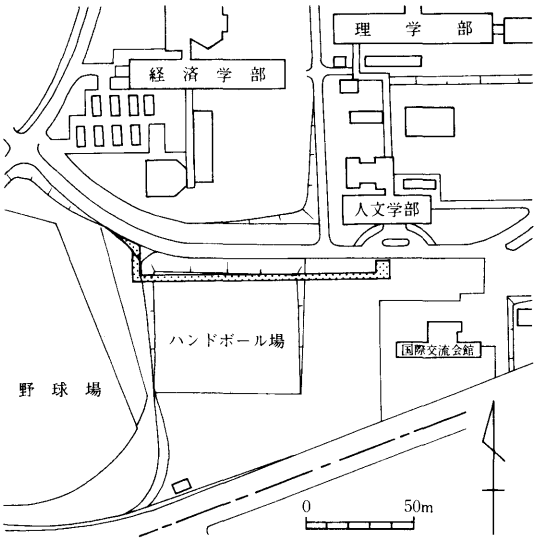


Fig. 8　調査区位置図

第2節　小串構内の立会調査

1　医学部附属病院病棟新営に伴う立会調査

調査地区　小串構内

調査期間　昭和63年6月8日～6月22日

調査方法　工事前における試掘・立会調査

調査面積　約300㎡

調査結果　病棟新営予定地においては、埋蔵文化財確認のための試掘調査を昭和63年1月19日、同年2月15日～3月4日にかけて実施している[1)]。その結果、予定地南西部に設置したトレンチから、ナイフ型石器・削器・二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・石核などが出土した。遺物は現地表下約140cmに堆積する灰色砂層に包含されており、同層は他に大きく時期の異なる遺物を包含していないことから石器群は旧石器時代の所産であると考えられた。予定地内の埋蔵文化財の包含、分布出土状況を踏まえて、埋蔵文化財資料館運営委員会は、旧石器時代の石器群を含む灰色砂層を掘削する場合には、綿密な立会調査が必要と結論づけた。同年5月に病棟の新営計画が具体化した。埋蔵文化財資料館は同運営委員会の指示を受け、同年6月3日、灰色砂層の堆積範囲が新営予定地内南西部の約300㎡に分布範囲をもつことを確認し、のち、6月8日から工事に先立ち立会調査を実施した。

調査方法は、約300㎡の調査範囲内に、5m四方を1マスとした区画を設定し、新営予定地南西隅を起点に南北方向に南からA・B・C…、東西方向に西から1・2・3…と付し、例えば、B－3区と呼んだ。試掘調査の結果、本包含層は、現地表面から150cm下位で検出され、少なくとも約70cmの層厚をもつ。遺物は灰色砂層の検出面から、40cm下位までの間に包含されることが確認されていることから、掘削は各区ごとに、5cmの人工層位を設定し、計8回にわけて行った。

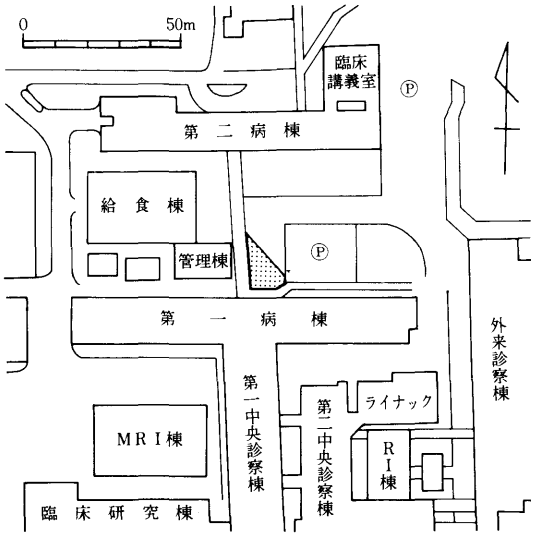


Fig. 9　調査区位置図

出土した石器類には、二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・剥片・敲石・礫・原石などがあり、表面採集品を含め

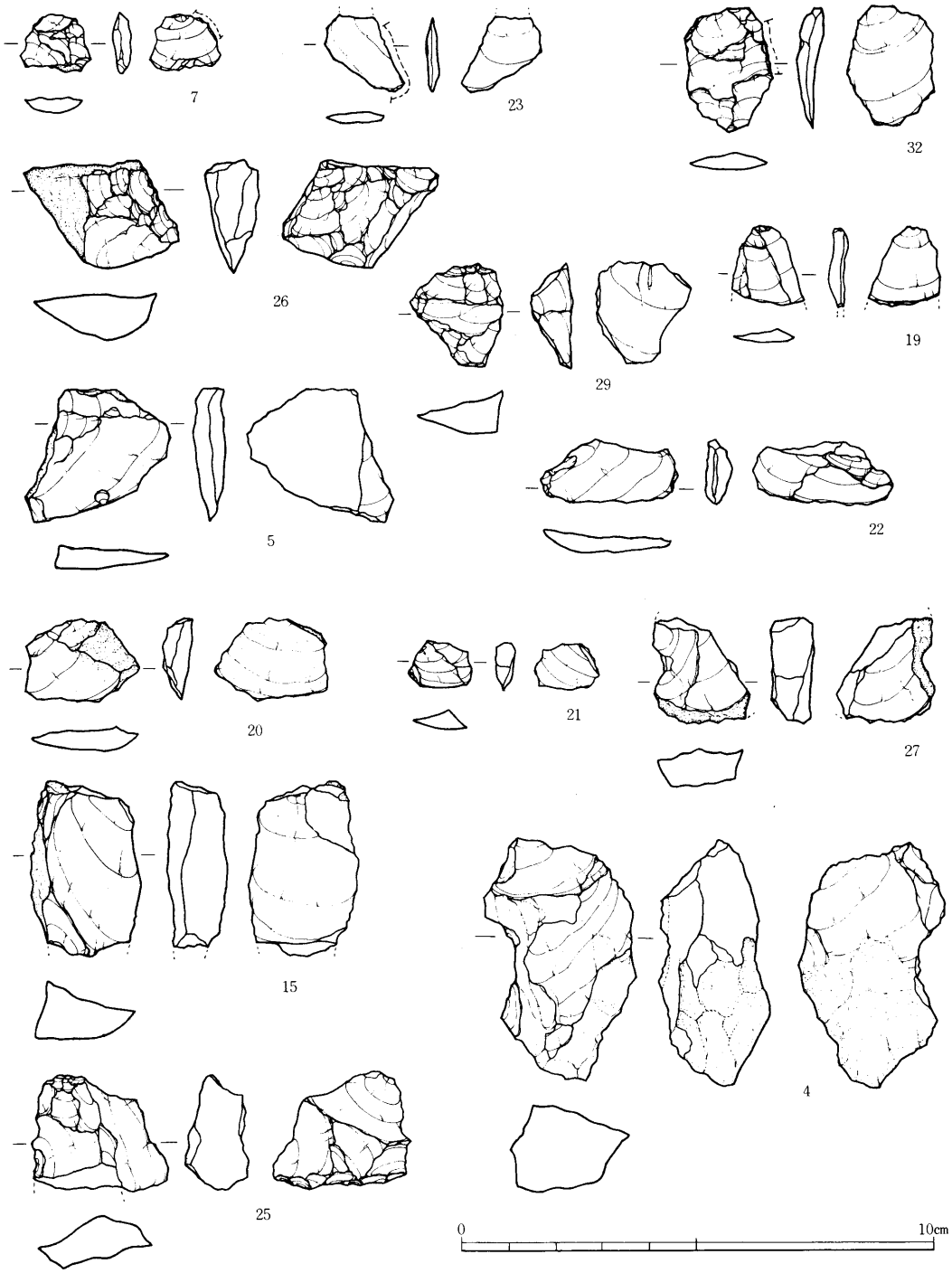


Fig. 10 出土遺物実測図（1）

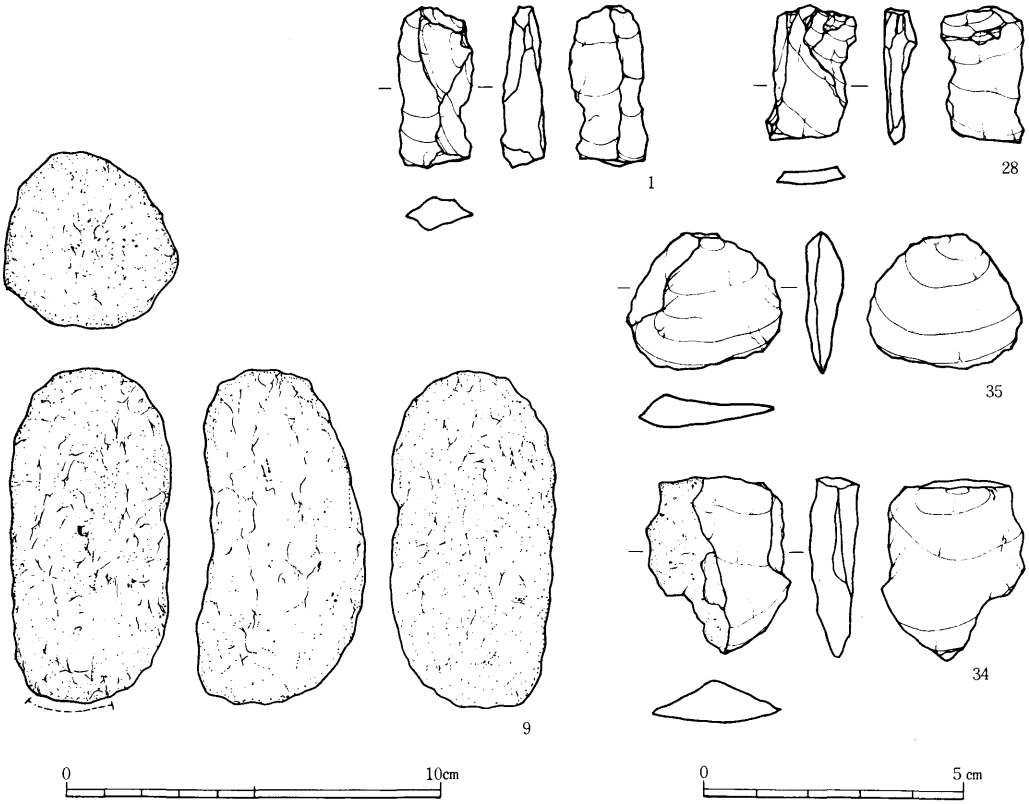


Fig. 11 出土遺物実測図（2）

た出土総点数は38点である。土器類には、土師器、土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、瓦などがあるが、出土位置は灰色砂層より上層の旧耕作土、青灰色粘質土、淡灰色粘質土からである。土器類については、全て細片であり、顕著なものもないため、ここでは触れず、以下では、石器類について説明を行いたい。なお、サメの歯・自然木が灰色砂層から出土している。

出土遺物（Fig. 10・11, PL. 2・3）

7・23・32は使用痕のある剥片、26・29は二次加工のある剥片、9は敲石、他は剥片である。

7は、腹面右側縁に微細な剥落痕をみる。下端は剥落している。打面部は、剥片剥離と同時に、潰れた可能性が高い。原礫面を残す。23は、打面部を欠損する。背・腹面の判別

はしがたい。使用痕は、背面相当面の右側縁に微細であるが、しっかり残る。32は、細かな平坦打面をもつ。背面右側縁上部に微細な剥落痕をみる。背面の剥離は上下両方向から行われている。26は、背・腹面の判別がしがたい。背面相当面には、原礫面と思われる面が残る。腹面相当面に、二次剥離面を見る。打面等は明かでない。29は、打面を除去するがごとく、リタッチを施す。腹面を見て、右辺は、後剥離しているものと考えられる。5は、原礫面を残す。背面相当面下部の大きな剥離面は左上からの打撃による剥離痕と見ておきたい。風化が著しい。腹面相当面の大部分は、剥落している。打面等は明かでない。19は、下半部欠損。打面部は、本来小さいものか、あるいは、当剥片の剥離時に、ほとんど粉砕したものと思われる。剥離面の方向は同一。素材原形は縦長の剥片と推定できる。20は、不定形の剥片である。打面部は明瞭でない。基部の平坦面は、原礫面で構成されており、原礫面を打面としている。15は、複剥離打面をもつ縦長の剥片である。一側辺に原礫面を残す。4は素材の大半に、不純物の集中部がみられる。使用不可部分を除いた、比較的大型の調整剥片と考えられる。21は、打面部を欠損する。背面の剥離面は、腹面と同一方向である。腹面打面部側は、欠失と考えられ、背面左側縁の剥離面もその可能性が高い。しかし、他の面と比較しても風化の度合いは、差異がなく、欠失・剥落とするならば、その時期は古く考える必要がある。不定形な剥片を素材としたものと思われる。22は、横長の剥片と考えられる。背面相当の三剥離面は、剥落であろう。打点は不明瞭だが、単剥離打面を有する。25は、打点・打面が明らかでない。背面相当面下端を欠損する。腹面下端三枚の剥離面は、その性格が断定できない。27は、上半部を欠損する。よって、打面・打点は欠失している。一側辺には、原礫面を残す。下縁も同様であろう。28は、調整打面をもつ。打点は腹面上部の剥落によって、欠失する。その下位の二面は、バルバスカーの可能性がある。35は、細かな平坦打面を有する。風化が著しい。34は、平坦打面をもつ。背面左側縁は原礫面と考えられる。バルバスカー・打点は明瞭でなく、風化が著しい。1は、縦長の剥片である。細かな原礫面を有する。風化著しい。9は、上下両端に敲打痕が残る。中央部のあばた状のものも敲打痕の可能性がある。

まとめ

灰色砂層は、組成・粒土・色調などから二次堆積と考えられ、病棟新営予定地の南西隅に限定的に分布する。また、石器は、垂直・平面的に遍在することなく、同層から一様に出土した。石器類の帰属時期は、灰色砂層がプライマリーな堆積状況を示していることか

ら、判断材料に乏しいが、昭和62年度に実施した試掘調査の際出土したナイフ型石器・削器・二次加工のある剥片・使用痕のある剥片と同一層から出土していること、使用石材の多様性と、その類似性・形態などから、その大半が後期旧石器時代の所産と考えられる。縄文時代のものも含まれる可能性もないではないが、石器の数に比べて、土器が出土しなかったことは、その可能性を低くしている。したがって、灰色砂層の堆積時期も縄文時代以前に終始した可能性が高いと言える。また灰色砂層は、海抜標高約1.4mほどに堆積しており、下層にも粒土・色調の異なる砂が連続的に堆積していることから、当地に石器群を残した人々の生活圏は、今回の調査地より高地にあったことを示していよう。また、サメの歯や樹木の出土から、当地域は海岸部の浅瀬に相当するものとも考えられ、人々の生活域は前面、あるいはごく近傍に海岸を抱えていたと推察される。

なお、病棟新営予定地内の灰色砂層は、近・現代の構築物の基礎、配管等によって、比較的広範囲に攪乱を受け消失している。しかし、その堆積状況、および北東から南西への旧地形の下降状況から推測して、さらに、給食棟・第一病棟方向へ延びることが十分予想され、当地域での掘削時には事前に十分な調査が必要となろう。　　（木村）

[注]

1)　灰色砂層の検出レベルには高低が存在するが、現地では、全面を人工層位による水平掘削を行い、結果的に一層中に複数の土層が混在することとなった。遺物の取り上げに際して最大限の注意を払ったが、後の整理段階でエラーが、わずかながら含まれていた。即ち、灰色砂層には、土器類は、包含されておらず、これらは、より上層に帰属するものと考えられるが、特定できなかった。

Tab. 2 出土遺物観察表

No.	器　種	石　材	地 区	人工層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
1	剥　片	チャート	B－2	7	3.0	1.4	0.8	3.07
2	剥　片	チャート	B－2	8				
3	剥　片	蛇紋岩	B－3	1				
4	剥　片	チャート	B－5	1	5.0	3.2	2.3	28.30
5	剥　片	チャート	C－2	1	2.7	3.0	0.6	3.49
6	剥　片	蛇紋岩	C－2	3				
7	使用痕のある剥片	チャート	C－2	4	1.2	1.4	0.4	0.56
8	原　石	チャート	C－2	6				
9	敲　石	安山岩	C－3	2	8.9	4.3	4.5	229.41
10	剥　片	水　晶	C－3	2				
11	原　石	チャート	C－3	2				
12	剥　片	蛇紋岩	C－3	2				
13	礫	チャート	C－3	3				
14	礫	安山岩	C－3	5				
15	剥　片	チャート	C－3	5	3.6	2.3	1.3	10.25
16	剥　片	チャート	C－3	7				
17	剥　片	水　晶	C－4	4				
18	礫	チャート	C－4	4				
19	剥　片	黒曜石	C－4	8	1.7	1.5	0.4	0.55
20	剥　片	チャート	C－4	8	1.7	2.3	0.6	1.75
21	剥　片	黒曜石	C－5	3	0.9	1.3	0.4	0.46
22	剥　片	チャート	D－2	2	1.3	2.9	0.6	1.70
23	使用痕のある剥片	チャート	D－2	2	1.6	1.6	0.25	0.41
24	剥　片	チャート	D－2	6				
25	剥　片	チャート	D－2	6	2.3	2.8	1.3	5.41
26	二次加工のある剥片	水　晶	D－2	6	2.2	3.3	1.1	6.27
27	剥　片	チャート	D－2	7	2.3	2.0	0.9	3.97
28	剥　片	チャート	D－2	8	2.5	1.7	0.55	2.04
29	二次加工のある剥片	チャート	D－3	7	2.2	1.9	0.8	2.84
30	原　石	チャート	D－3	7				
31	剥　片	蛇紋岩	D－4	1				
32	使用痕のある剥片	黒曜石（姫島産）	D－4	2	2.5	1.8	0.5	1.46
33	剥　片	蛇紋岩	D－4	8				
34	剥　片	チャート	D－4	8	3.3	2.7	0.9	6.12
35	剥　片	石英斑岩	D－4	8	2.6	2.9	0.7	4.10
36	原　石	安山岩	E－3	3				
37	原　石	蛇紋岩	E－3	5				
38	剥　片	蛇紋岩	表　採					

2　医学部運動場整備に伴う立会調査

調査地区　小串構内

調査期間　平成元年３月７日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約220㎡

調査結果　工事は小串構内の東端部、職員宿舎の東に隣接する約1650㎡の地域に運動場を新設するものである。運動場予定地内部はマサ土による盛土を行なうが、周辺地域との境界には擁壁とそれに伴うフェンスの設置が計画され、地下の掘削を伴うことから立会調査を実施した。

工事地域は南側に隣接する畑および西側の職員宿舎との比高差が、それぞれ約1.1m、約0.9mと段状に一段高くなっており、調査当初からかなりの盛土が行なわれていることが予想された。

調査は工事のうち最も深く掘削する西辺の擁壁設置部分について行なった。掘削規模は幅約1.7m、現地表面から約1.4mである。その結果、工事範囲内はすべて構内造成時の埋め土で、顕著な遺物包含層、遺構は確認できなかった。

職員宿舎周辺での環境整備に伴う立会調査[1)]では、現地表面から約0.7mまで構内造成時の埋め土を確認している。小串構内の立地および他の地域の土層の堆積状態から、当該地域でも同様な堆積状態を示しているものと考えられ、現地表下約1.6mまでの掘削を伴う工事では埋蔵文化財には影響はないものと判断される。

なお、南側の畑で遺物の表面採集を試みたが、遺物は採集できなかった。

（河村）

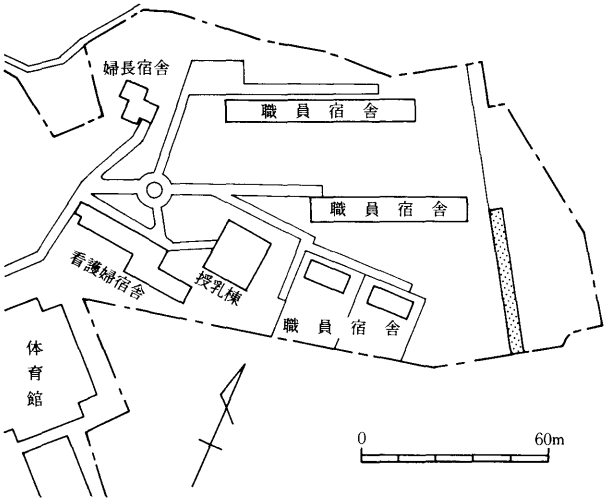


Fig. 12　調査区位置図

[注]

1)　山口大学埋蔵文化財資料館「医学部環境整備に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。

第3節　常盤構内の立会調査

工学部焼却炉上屋新営に伴う立会調査

調査地区　常盤構内

調査期間　昭和64年1月6日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約225㎡

調査結果　周辺地域では、数件の既往調査がある。今回の調査地点に近接する、昭和60年度の受水槽総改修工事に伴う立会調査では、上層から、腐植土・攪乱土、そして現地表下50cm以下において、明橙色の地山となっている。

本工事内容は、現地表面より、最高65cmの掘削を行なうものである。各地点の土層堆積状況は、北端中央部では、現地表下45cmまでの掘削であったが、埋め土の範囲内であった。中央部では、現地表下65cmまでの掘削で、埋め土の範囲内であったが、その直下には、黄橙色粘土の地山が堆積していた。南端中央部では、現地表下65cmまでが埋め土で部分的に深掘りを行った結果、現地表下70cm下位で黄橙色粘土の地山が、その下位に黄色砂礫層が堆積していることを確認した。いずれの地点においても遺構・遺物の発見はなく、現地表下65cmまでは埋め土の範囲内であったため、特に埋蔵文化財に対する支障はないものと判断された。

（木村）

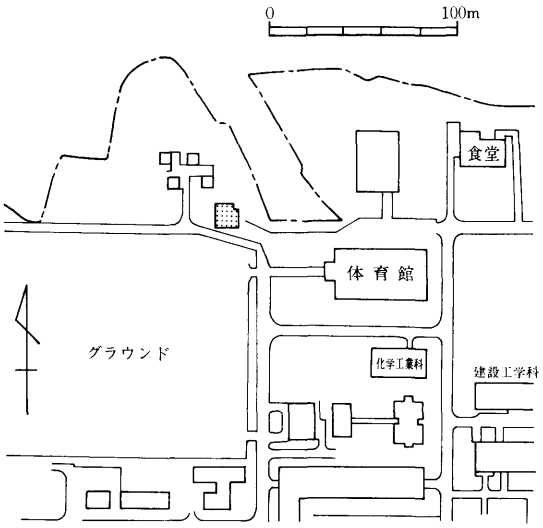


Fig. 13　調査区位置図

第4節　亀山構内の立会調査

教育学部附属山口中学校屋内消火栓設備改修に伴う立会調査

調査地区　亀山構内

調査期間　昭和63年12月19日、平成元年2月6日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約35㎡

調査結果　12月には、ポンプ室新営のための現地表面（アスファルト）から約1.7mまでの掘削に立会った。現地表下70cmまでが埋め土（攪乱土）であったが、昭和61年度調査時の遺物包含層である第5トレンチ第4層と同一層と見られる黒褐色粘質土がブロック状に堆積しており、若干の土師器片が出土した。以下、16の層に分層できるが、層の堆積は不整合で、粘質土・砂質土が同一レベルで見られることからも、河川跡あるいは沼であったかと思われる。なお、現地表下120cm以下に堆積する第14層：灰色粘土には、多量の植物遺体が含まれていた。

2月には、現地表面から、約80cmの掘削を行う配管埋設工事に立会った。実際の調査部分は、既往の調査地を基に限定した。即ち、ポンプ室からまっすぐ南へ通る管路とそれと直交して東へ向かい体育館脇にぶつかる路線である。このうち、遺構・遺物を発見したのは東西管路内であり、南北管路においては埋め土の範囲内であった。埋め土直下、現地表下32cmで土師器、磁器、黒曜石の剥片を含む包含層が一部確認された。既往の調査時の包含層とは、粒土・色調から区分される可能性が高い。また、河川跡あるいは沼跡が東西管路の西側部分約17mにわたって確認された。以東、工事掘削深度内は攪乱を受けていた。遺構の土質は、0.3cm以下の礫・石英片を多量に含む青色～橙色の砂礫層である。また一部には河川跡あるいは、沼跡の埋土と思われる不純物をほとんど含まないオリーブ

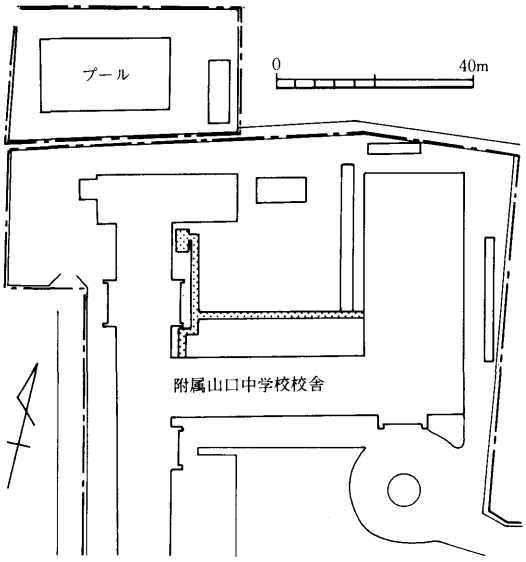


Fig. 14　調査区位置図

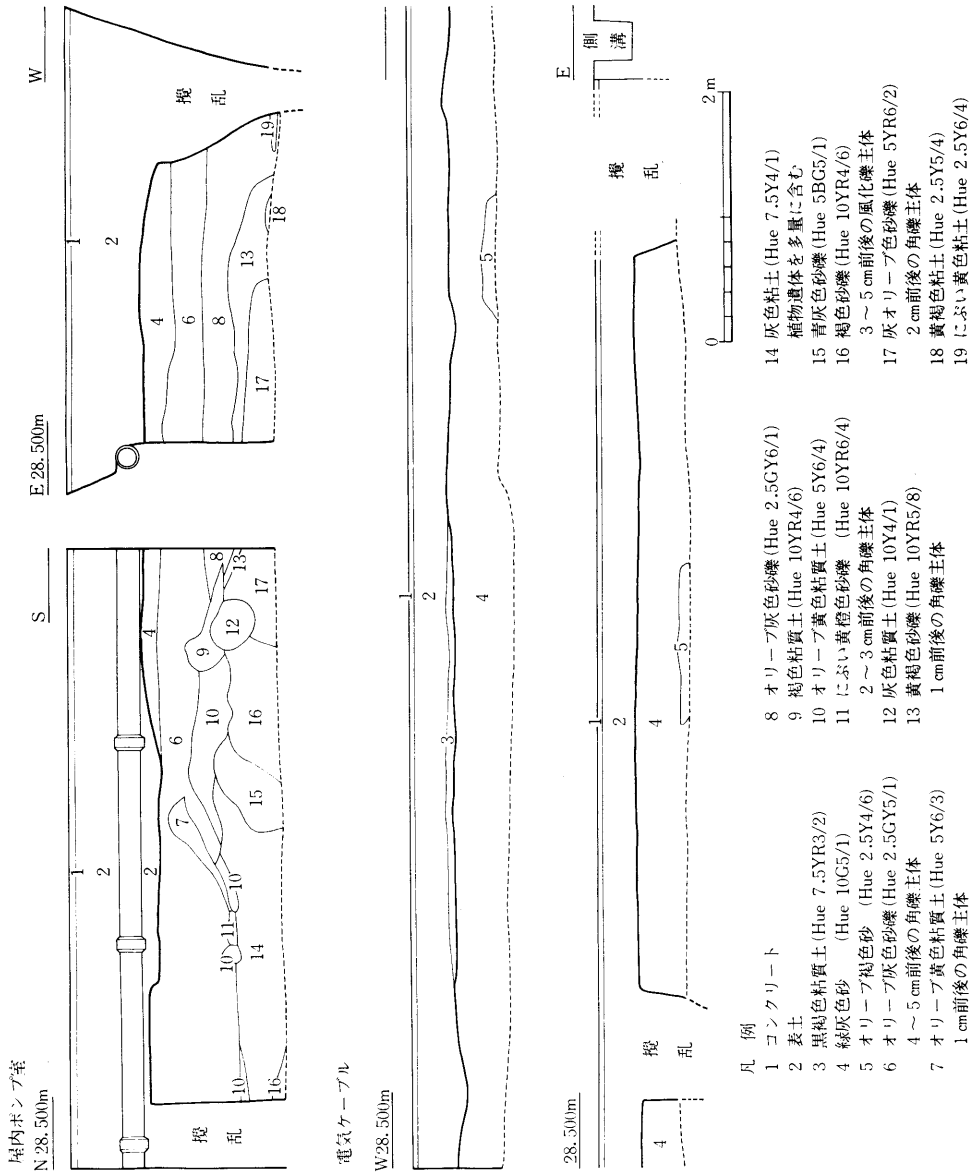


Fig. 15 土層断面図

褐色砂質土が堆積しており、より下位に位置するものであろう。即ち、当地の基本層序は、アスファルト、埋め土、遺物包含層、河川跡あるいは沼の埋土（2層）ということになる。

なお、工事による掘削は現地表下90cmまでで、以下の土層は確認していない。（木村）

第5節　光構内の立会調査

1　教育学部附属光小学校遊器具移設に伴う立会調査

調査地区　光構内

調査期間　昭和63年5月26日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約10㎡

調査結果　調査地区は、附属小学校グラウンド南端のほぼ中央部にあたる。

工事内容は遊器具を移設する際に、最高、現地表面より100㎝の掘削を行なうものである。既往の調査結果をうけて、包含層の有無・分布範囲、土層の堆積状況の把握を主眼に調査を行なった。調査地点は4箇所であるが、隣接し、約10mの幅におさまる。基本層序は、まず、埋め土があり、その下現地表下16～34㎝で暗黒褐色砂層、現地表下32～65㎝で黄褐色砂層（漸移層）、そして、現地表下50～76㎝で遺物を含む明黄褐色砂層の堆積がみられた。明黄褐色砂層の出土遺物はさほど多くないが、土師器、陶器、磁器片があり、ほとんどが近・現代の所産と考えられる。また、この遺物包含層は各地点で検出までの深さにばらつきがみられ、この周辺は攪乱（削平）を受けているものと考えられる。なお、黒褐色砂層は調査地点の西側で若干粘性をもっており、調査地点付近の土層が一様でないことを示している。最終的には少なくとも現地表下130㎝まで、明黄褐色砂層の堆積が続くことを確認した。

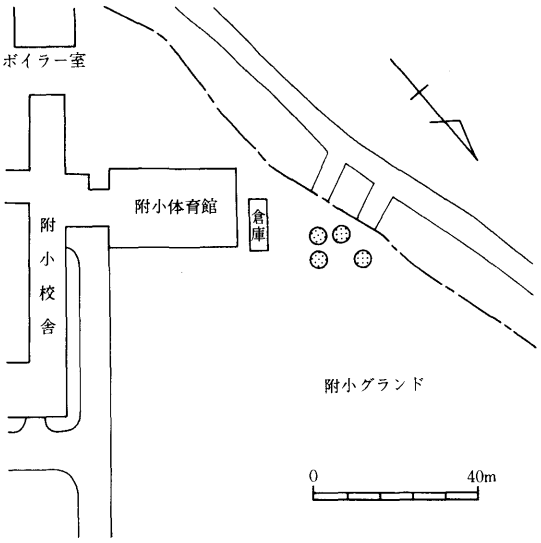


Fig. 16　調査区位置図

ところで、光構内では昭和40年、附属中学校体育館新営時、縄文土器、土師器、須恵器が出土し、黒褐色海成砂礫の遺物包含層が確認されている[1]。また昭和61年の附属小学校創立記念事業に伴う調査[2]では、黄褐色海成砂の遺物包含層が確認され、須恵器、歴史時代土師器が出土している。今回、明黄褐色砂の遺物包含層が確認されたが、出土遺物、堆積層の色調からは、昭和61年に確認された包含層と同一層の可能性が高い。また、第2層目に当たる暗黒褐色砂層は昭和40年調査時

の包含層に類似するが、出土遺物もなく、その比較検討資料の少なさから、これ以上の言及はできない。いずれにせよ、今回の調査地点を含めた附属学校敷地内においては、縄文時代～近世の遺物ならびに、2枚以上の遺物包含層が確認されており、今後は、特に遺物包含層の対比という点から詳細な土層堆積状況の把握が課題であろう。

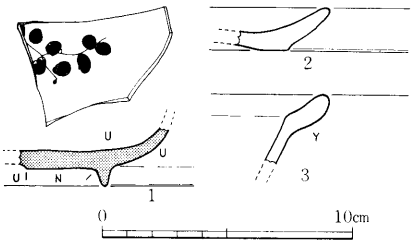


Fig. 17 出土・採集遺物実測図

以下、調査期間中に御手洗湾で多量の遺物を表採したので、紹介したい。

出土・表採遺物（Fig. 17, PL. 4）

1は磁器の埦。垂直に立つ断面三角形の高台をもち、外底面、高台の内側は無施釉。内面の見込み部分には、青色の呉須による草花文を施文する。素地は白色、釉は透明。第3層（明黄褐色砂層）出土。2は土師器の皿。糸切り底で、体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は尖りぎみに終わる。風化著しく調整不明。胎土、焼成良好で、外面はにぶい橙色（Hue5YR6/3）、内面は灰褐色（Hue7.5YR6/2）を呈する。3は土師質土器の鼎ないしは鍋。口縁部は短く外反し、端部は肥厚する。口縁端部は丸い。内外面とも横ナデ仕上げで、淡橙色（Hue5YR8/4）を呈する。胎土、焼成は良好で、胎土には金雲母を含む。2・3とも採集遺物。

ほかに採集遺物には、土師器、歴史時代土師器坏、台付皿、土師質土器甕、陶器甕など22点がある。いずれもローリングによる摩滅が激しく、図化はできない。一部、古墳時代に遡るものも含まれるが、大半が中～近世に属するものである。

（木村）

[注]

1) 福本幸夫編著「御手洗遺跡」（『先原史時代の光市』、光地方史研究会、1966年）。

2) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属光小学校創立記念事業に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、1987年）。

2　教育学部附属光小学校屋外スピーカー設置に伴う立会調査

調査地区　光構内

調査期間　昭和63年８月26日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約 0.5㎡

調査結果　工事は屋外スピーカー設置に伴う鉄柱の埋設のため、現地表面から100㎝の掘削を行なうものである。土層の堆積状況は、現地表下85㎝までは10㎝程度の角礫を多量に含む攪乱土で、その下の工事基底面までは、１～２㎝の円礫を含む褐色（Hue10YR4/4）の砂層が堆積していた。この堆積層からの出土遺物はないが、昭和40年、附属中学校体育館新営時に検出された、縄文土器、土師器、須恵器などを含む黒褐色海成砂礫の遺物包含層[1]に相当するものと考えられる。

なお、調査期間中に同構内の面する御手洗湾で、古墳～江戸時代の遺物約60点を採集したので、以下に紹介したい。遺物は現存する護岸用の石垣が組まれる前に、同構内に堆積、露出していた遺物包含層が波濤によって削られ、遺物が遊離したものである。海浜部のほぼ全面に散布しており、過去にも弥生～江戸時代の遺物が多量に採集されている[2]。

表採遺物（Fig. 19, PL. 4・5）

土師器、土師質土器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器などがある。

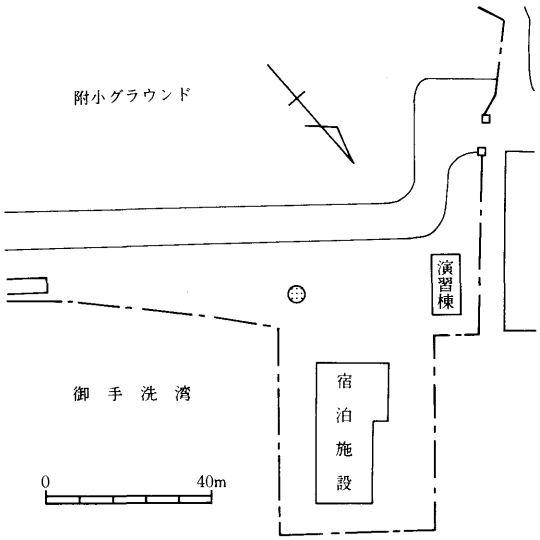


Fig. 18　調査区位置図

土師器（１～14）

１は坏。底部と体部の境に稜をもち、底部側面は高台状に立ち上がる。糸切り底。２は坏もしくは皿で、底部と体部の境に不明瞭な稜をもつ。３・４は皿。体部は直線的に短く外傾し、口縁端部は尖る。４は薄手で、体部は内弯してゆるやかに開き、口縁端部は尖る。５～７は埦。高台は低く、断面三角形のもの（５・６）と台形のもの（７）とがある。５は外開きの高台をもち、外底面は糸切りののち横ナデ。８～12は台付皿。８は口縁部で、端部でやや内巻きぎみになる。９～12は

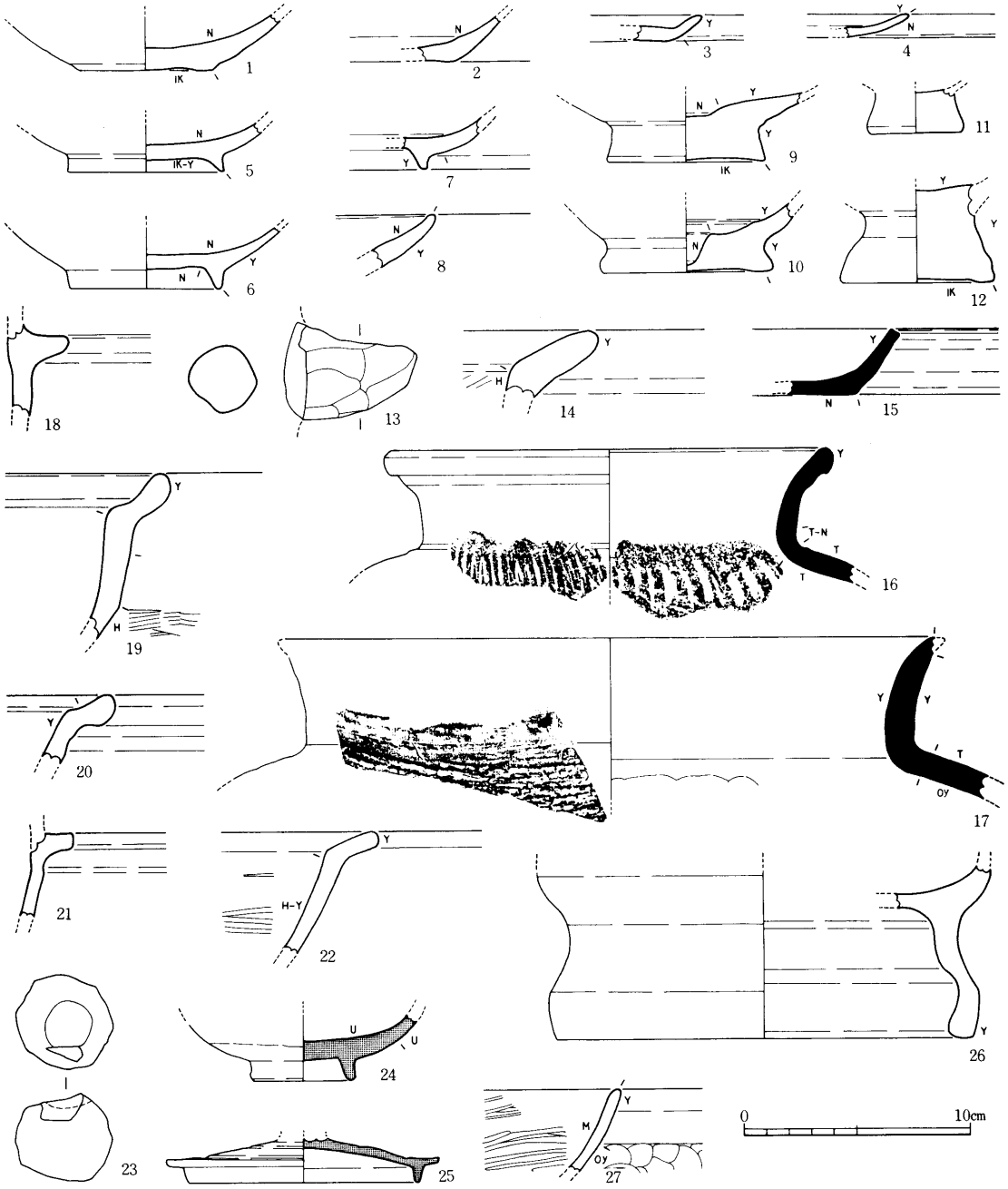


Fig. 19 御手洗湾採集遺物実測図

Tab. 3　御手洗湾採集遺物観察表

法量（　）は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
1	土師器　坏	② 6.0	①暗赤褐色 (2.5YR3/2) ②浅黄色 (2.5Y7/3)	良好	良好	
2	土師器　坏or皿		灰白色 (5Y7/2)	良好	良好	
3	土師器　皿		灰白色(2.5Y8/2)	不良	良好	
4	土師器　皿		①にぶい橙色 (7.5YR7/3) ②にぶい橙色 (7.5YR7/4)	精良	良好	
5	土師器　埦	② 7.0	浅黄色 (5Y8/3)	良好	良好	
6	土師器　埦	② 6.8	灰白色 (2.5Y8/2)	やや不良	良好	
7	土師器　埦		浅黄色 (2.5Y8/3)	精良	良好	
8	土師器　台付皿		①にぶい橙色 (7.5YR6/4) ②にぶい黄橙色 (10YR6/3)	不良	やや不良	
9	土師器　台付皿	② 7.2	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	精良	良好	
10	土師器　台付皿	② 7.5	①にぶい褐色 (7.5YR5/3) ②にぶい橙色 (5YR6/4)	不良	良好	
11	土師器　台付皿	② 4.0	①浅黄色 (2.5Y7/3) ②にぶい橙色 (2.5Y6/2)	良好	良好	
12	土師器　台付皿	② 6.8	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	良好	良好	
13	土師器　甑		にぶい橙色 (7.5YR7/4)	不良	良好	
14	土師器　甕		①にぶい褐色 (7.5YR6/3) ②にぶい褐色 (7.5YR5/3)	不良	良好	
15	須恵器　坏身		①灰白色 (10Y7/1) ②白色 (7.5Y6/1)	不良	やや不良	
16	須恵器　甕	①(19.4)	①にぶい褐色 (7.5YR5/3) ②灰白色 (2.5Y8/2)	やや不良	良好	
17	須恵器　甕	①(29.0)	①明褐色 (7.5YR6/5) ②灰白色 (N7/10)	精良	良好	
18	土師質土器　鍋		①褐灰色 (10YR5/1) ②褐灰色 (10YR4/1)	不良	良好	
19	土師質土器　鍋		にぶい橙色 (5YR7/3)	良好	良好	
20	土師質土器　鍋		①にぶい橙色 (7.5YR6/4) ②にぶい橙色 (5YR6/3)	良好	良好	
21	土師質土器　鍋		①浅黄色 (2.5Y7/3) ②浅黄橙色 (5Y7/3)	やや不良	良好	
22	土師質土器　鍋		①にぶい橙色 (5YR6/4) ②赤色 (10YR5/6)	良好	不良	
23	土師質土器　土錘		赤褐色(2.5YR4/6)	良好	良好	
24	陶器　埦	② 4.4	素地－にぶい赤褐色(2.5YR5/3) 釉調－緑灰色 (7.5GY6/1)	良好	良好	肥前系
25	陶器　蓋	① 10.2　③ 2.0	素地－オリーブ灰色 (10Y4/2)	良好	良好	体部に2条の圏線
26	瓦質土器　壺	②(18.4)	①灰白色 (10Y6/1) ②暗灰色 (N3/0)	良好	良好	和泉型
27	瓦器　埦		①暗灰色 (N3/0) ②灰白色 (5Y8/1)	良好	良好	

総高台の底部で、高台の高さ、底径には各種ある。9・10は内面中央部を強いナデによって窪ませる。13は甑の把手。14は甕で、頸部内面に鈍い稜をもち、厚手の口縁部は直線的に短く開く。口縁端部は丸い。

須恵器（15～17）

15は坏身。体部は直線的に短く開き、口縁端部は窪む。16・17は甕。口縁部が外弯して開き、16は口縁端部が肥厚する。

土師質土器（18～23）

18～22は鍋。18・21は体部外面に短い鍔部をもつ。19・20は口縁部が内弯して短く外方に屈曲し、頸部外面と口縁部内面下半を強く横ナデして端部を肥厚させる。22は直線的に短く「く」の字に開く口縁部をもつ。23は球形の土錘で、上下両端中央部を窪ませる。

陶器（24・25）

24は直立ぎみの削り出し高台をもつ小形の椀で、体部下半から外底面は無施釉。肥前系。25は蓋で、撮み部を欠損する。天井部から体部にゆるやかに下降し、口縁部は水平に開く。体部には2条の圏線が巡る。

瓦質土器（26）

壺の脚部で、直立ぎみに立ち上がり、上半部で屈曲して外弯しながら内傾する。

瓦器（27）

和泉型の瓦器椀で、内弯して立ち上がる体部の内面は粗雑なヘラミガキ、外面上半は横ナデ、下半は指オサエされる。口縁端部は丸い。

（河村）

［注］

1) 福本幸夫編著「御手洗遺跡」（『先原史時代の光市』、光地方史研究会、1966年）。

2) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属光小学校創立記念事業に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、1987年）。

第6節　その他構内の立会調査

経済学部7号職員宿舎公共下水道切替に伴う立会調査

調査地区　山口市白石2丁目8－7　　経済学部7号職員宿舎構内

調査期間　昭和63年4月1日

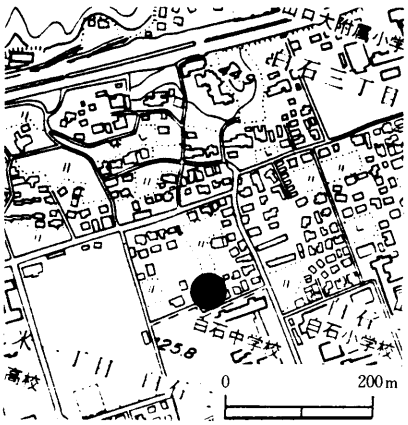
調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約1㎡

調査結果　当該地域は弥生時代から古墳時代の集落跡である、教育学部附属山口小・中学校敷地の西方約200mに位置する。北側の丘陵上には茶臼山古墳群、鴻ノ峰古墳群、糸米遺跡等の古墳時代の埋葬跡が所在し、過去において当該地域での調査が全く行なわれていないことから、工事規模を勘案して立会調査を実施した。

工事は生活排水を公共下水道に接続するために排水管、汚水枡を埋設するものである。調査は掘削規模の大きい汚水枡を中心に、2地点を選定して行なった。A地点では現地表下42cmで層厚10cmの旧耕作土が観察され、その下位に層厚28cmの客土を介在してさらにもう1枚の旧耕作土が確認された。下位の旧耕作土の層厚は工事の性格上確認できなかった。A地点の南東約15mに設定したB地点でも層順は同じである。なお、現地表下50cmで層厚20cmの2枚目の旧耕作土の直下に、地山と考えられる青灰色礫混じり粘土を検出した。しかし、遺構は確認していない。

また、同敷地の北側の水田では須恵器、歴史時代の土師器、瓦質土器、土師質土器、陶器など約20点を表面採集した。遺物は中世から近世のものが主体であることから、周辺地域に当該期の未周知の遺跡が埋存している可能性がある。　　（河村）



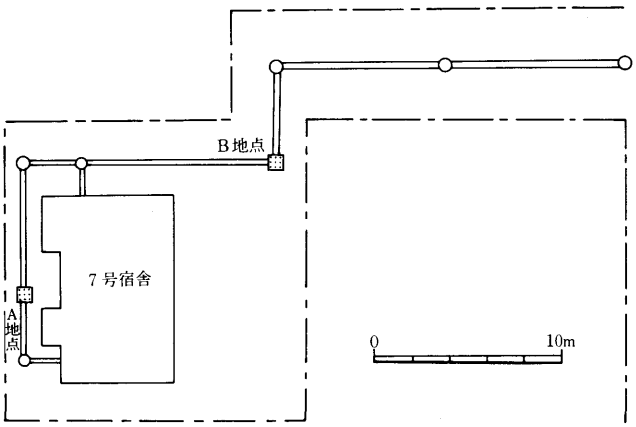


Fig. 20　調査区位置図

付篇Ⅰ

吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和60・61年度）

1　調査の概要

遺跡保存地区は吉田構内の南西部、サッカー場と第一学生食堂間に位置する。約2000㎡の指定地内には弥生時代中期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡21棟が現地保存されており、発掘調査はすでに昭和57年度（第１次調査[1]）および59年度（第２次調査[2]）の二ヶ年にわたって実施している。調査にいたる経過および各年度の調査成果はすでに先の年報で詳述しており、参照されたい。以下では昭和60・61年度の各年度の調査の概要を記することにする。

昭和60年度（第３次調査）は第２次調査区の南東に隣接する地域約470㎡について、昭和60年７月19日から10月９日にかけて実施した。検出した遺構には、弥生時代中期および終末（庄内併行期）の竪穴住居跡４棟、弥生時代中・後期の土壙５基、古墳時代の溝１条、古墳～奈良時代の河川跡１条のほか、弥生～古墳時代のものと思われる多数の柱穴がある。河川跡は第１・２次調査ですでに確認しているもので、南東への延長部分を検出した。出土遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、敲石、石核、鞴の羽口などがある。

昭和61年度（第４次調査）は第３次調査区の南東に隣接する地域約490㎡について、昭和61年７月11日から９月17日にかけて実施した。検出した遺構には、弥生時代中期後半の竪穴住居跡１棟、弥生時代中～後期を主体とする土壙13基、弥生～古墳時代の溝５条、古墳～奈良時代の河川跡１条のほか、弥生～古墳時代のものと思われる多数の柱穴がある。弥生時代中期後半の竪穴住居跡は、周囲を弧状に巡る溝を付設しており、溝との空間地に２基の土壙を伴うものと考えられる。河川跡は第３次調査までにすでに確認しているもので、南東への延長部分を検出した。出土遺物には、縄文土器、弥生土器、土師

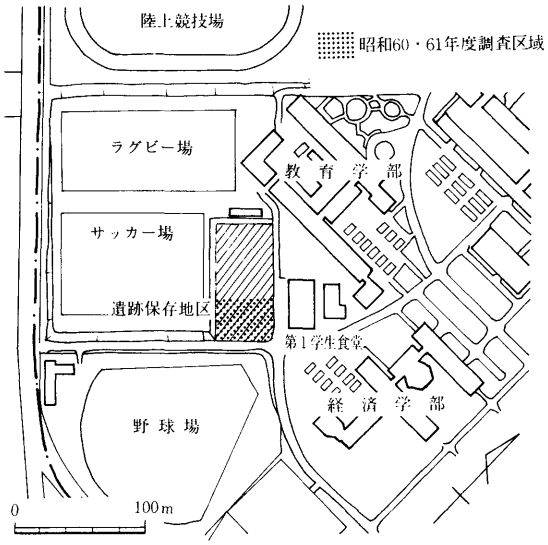


Fig. 21　調査区位置図

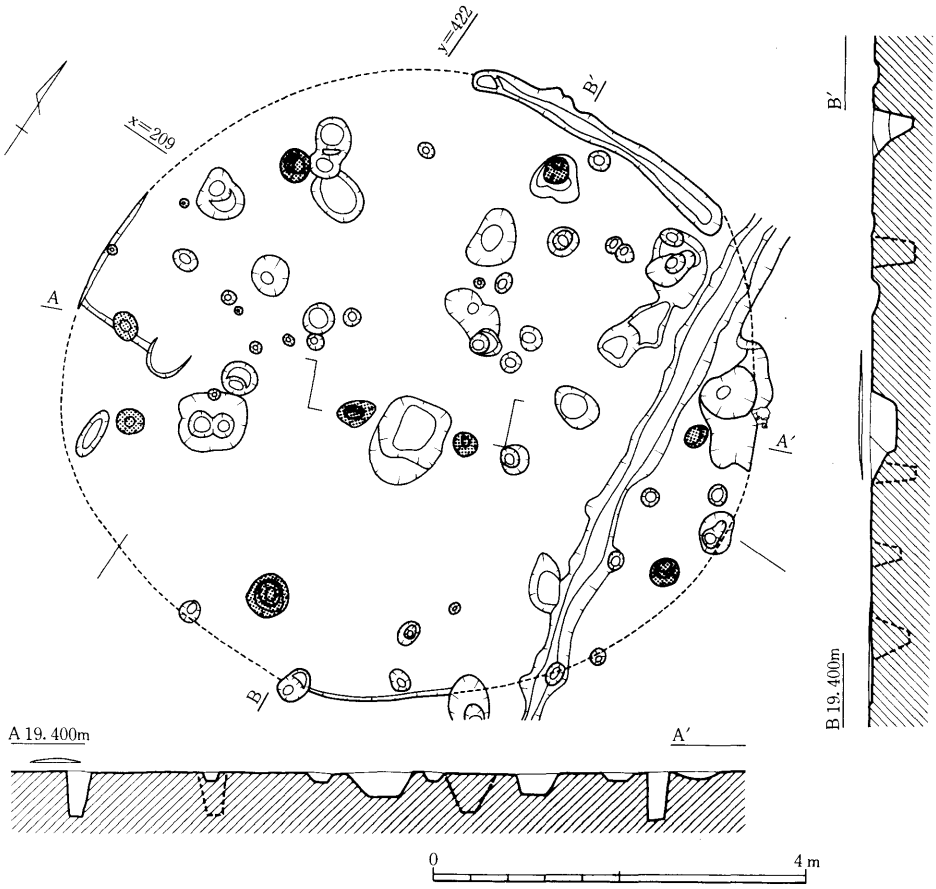


Fig. 22　第14号竪穴住居跡実測図

器、須恵器、石鏃・削器などがある。

なお、第３次調査では昭和60年９月13日、第４次調査では昭和61年９月12日に現地説明会を開催し、各調査の成果を公表した。また、調査後はいずれも遺構面を厚さ約10～15㎝の真砂土であらかじめ被覆した後、埋め戻しを行なった。

2　遺構・遺物

（1）竪穴住居跡

第14号竪穴住居跡（Fig. 22, PL. 8(1)）

調査区の西端部に位置する大形の住居跡で、吉田遺跡調査団によって部分的に、また、昭和59年度にすでに北半部を検出している。平面形態は円形と思われるが削平が著しく、周壁は南北両端部を除いてほとんど消失している。径約7.4ｍ、床面積約40㎡前後の規模を

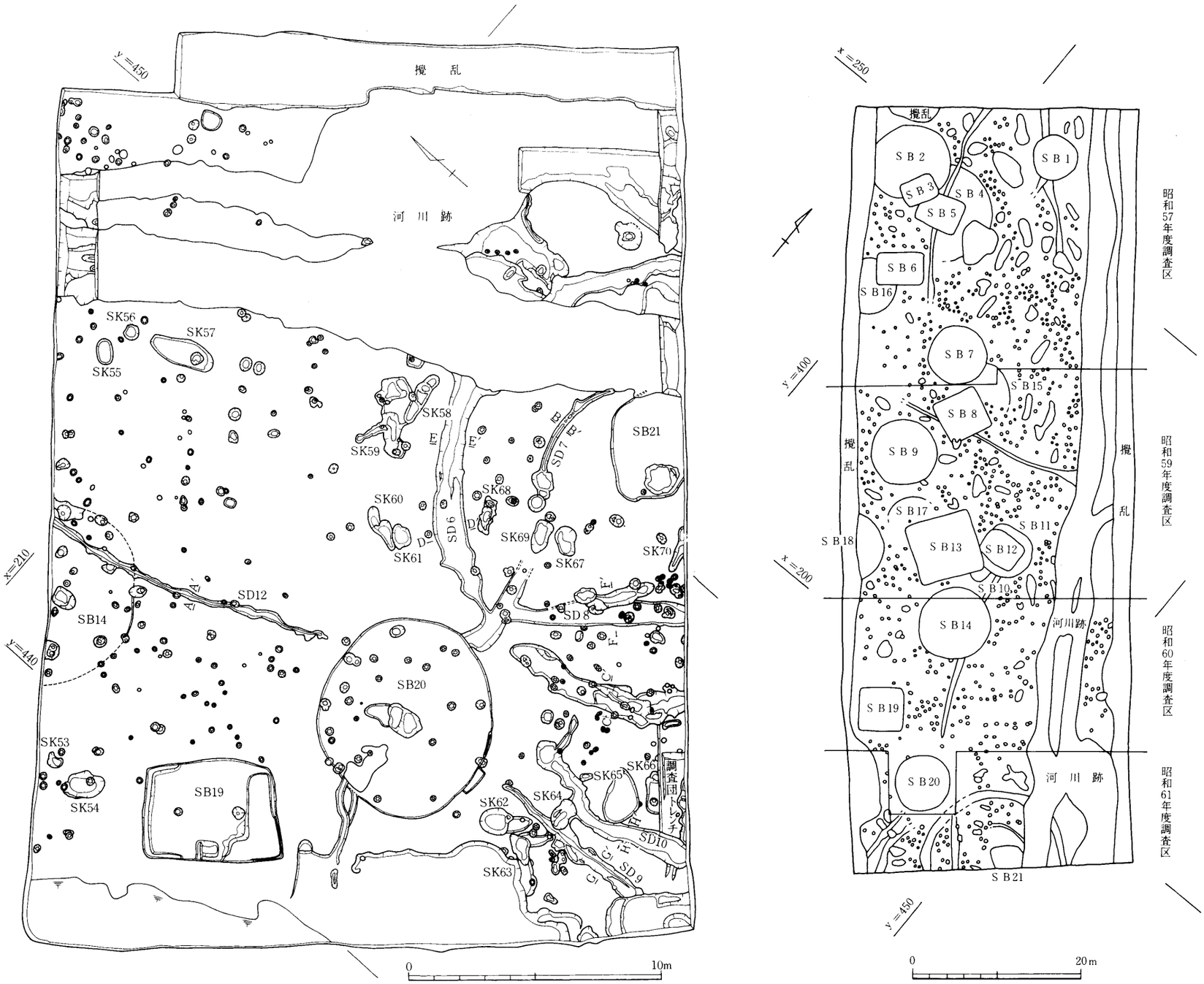

撹乱
河川跡
SK56
SK57
SK55
SK58
SK59
SK60
SK61
SK68
SK69
SK67
SK70
SD6
SD7
SD8
SD9
SD10
SD12
SB21
SB14
SB20
SB19
SK53
SK54
SK62
SK63
SK64
SK65
SK66
調査団トレンチ
y=450
y=440
x=210
0
10m
x=250
x=200
y=400
y=450
SB1
SB2
SB3
SB4
SB5
SB6
SB7
SB8
SB9
SB10
SB11
SB12
SB13
SB14
SB15
SB16
SB17
SB18
SB19
SB20
SB21
昭和57年度調査区
昭和59年度調査区
昭和60年度調査区
昭和61年度調査区
0
20m

Fig. 23 遺構配置図

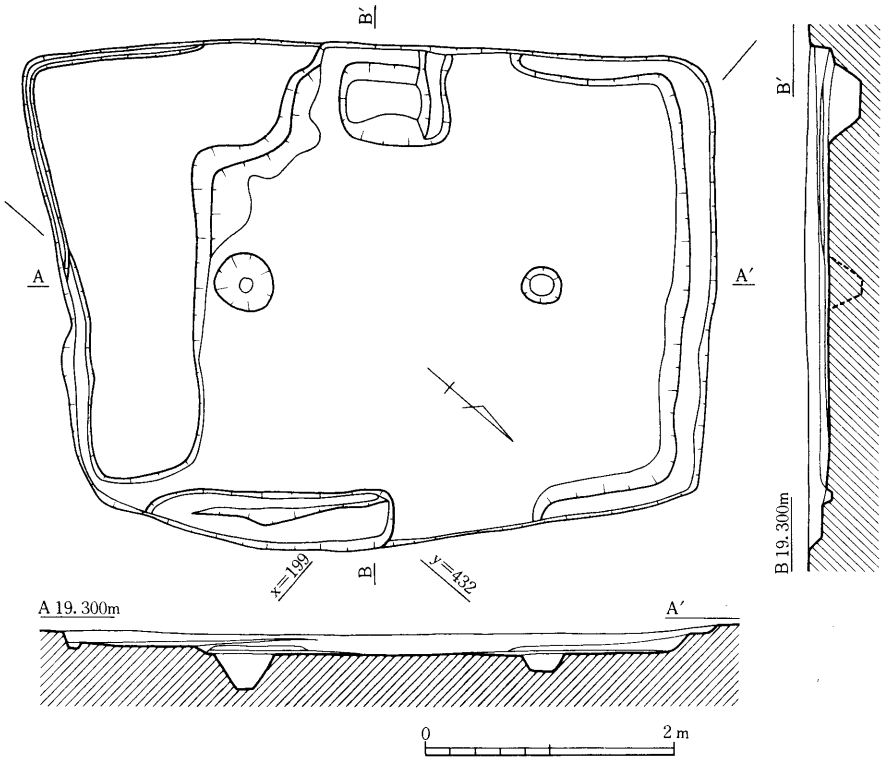


Fig. 24 第19号竪穴住居跡実測図

もつものと推定され、北辺部には検出面からの深さ約6～7cmの壁溝が巡る。主柱は1本未検出であるが、8本前後が配置されたものと思われ、床面中央には支柱穴が認められる。

遺物は全く出土しておらず、また、第12号溝との切り合い関係も判然としないため時期は明らかでないが、椹野川、佐波川各流域での竪穴住居の平面形態、規模、主柱数等から推して、弥生時代中期に属するものと考えられる。[3)]

第19号竪穴住居跡 (Fig. 24, PL. 8(2))

調査区の西端部、第14号竪穴住居跡の南に位置する平面形態長方形の住居跡である。東辺484cm、西辺548cm、北辺344cm、南辺358cm、床面積19.3㎡の規模をもつ。検出面からの深さは20cmで、西辺の中央および東辺の中央からやや北寄りの部分を除いてベッド状遺構が巡る。ベッド状遺構は床面から10～15cm高く、面積は5.5㎡で床面積の約28%を占める。

東辺の南半部および南のコーナー部分には壁溝が巡る。前者はベッド状遺構の下位に幅20cm、深さ3cm、後者は周壁に沿ってベッド状遺構に幅8cm、深さ4cmにわたって掘り込まれる。主柱は2本で、西辺中央部には壁面に近接して、長軸90cm、短軸65cm、床面から・

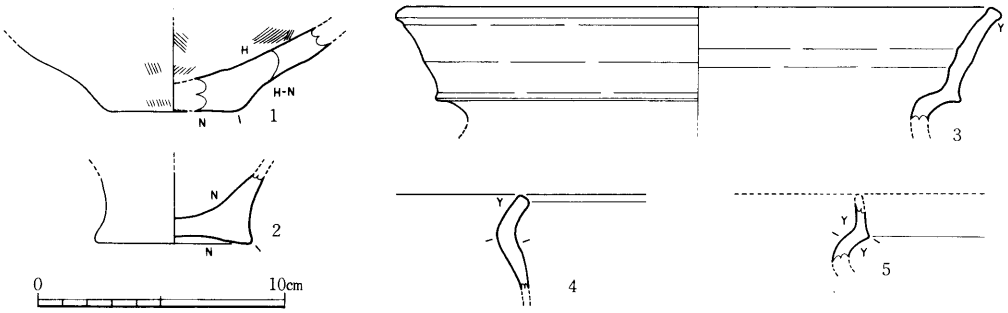


Fig. 25　第19号竪穴住居跡出土遺物実測図

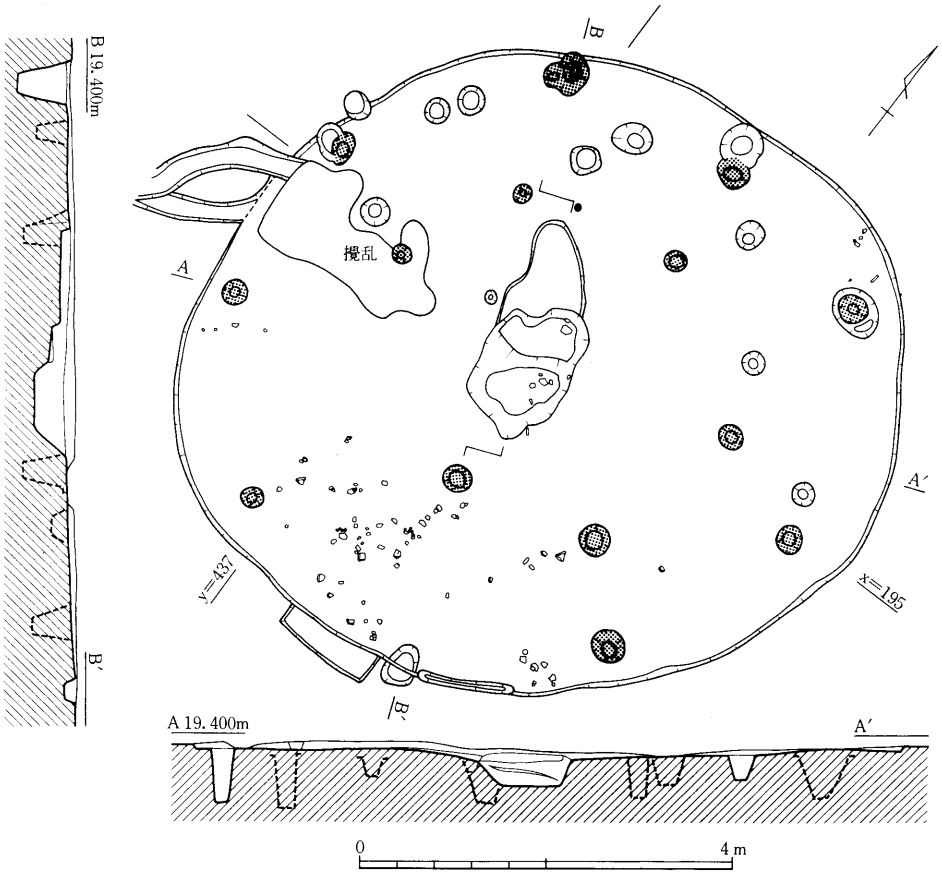


Fig. 26　第20号竪穴住居跡実測図

の深さ25cmの規模をもつ平面形態長方形の土壙が存在する。壁面は熱変していないが、内部には木炭が充填しており、炉跡と考えられる。なお、東辺の中央部よりやや北では、ベッド状遺構が途切れており出入口が想定される。

出土遺物には弥生土器壺・甕、土師器甕などがあるが、前者は混入である。庄内新段階。

出土遺物 (Fig. 25, PL. 14)

1・2は弥生土器。1は不安定な小さな底部をもつ壺。2はやや上げ底になる甕の底部。

3～5は土師器。3・5は複合口縁の甕形土器。3は短い頸部から反転して斜外方へ外弯ぎみに開く口縁部をもつ。口縁部内外面は強い横ナデが施され、口縁端部は平坦面をもつ。4はしまりのない頸部から直線的に短く外反する口縁部をもつ甕。

第20号竪穴住居跡 (Fig. 26, PL. 9)

調査区の南部、第19号竪穴住居跡の東に位置する大形の住居跡である。平面形態は楕円形で、上面径685～775cm、床面積43.7㎡の規模をもつ。残存状態が悪く、検出面からの深さは2～6cmを残すにすぎない。主柱は周壁に近接して8本が配置されるが、さらにその内部には同心円状に5本の補助柱が存在する。床面中央には、長軸240cm、短軸95cm、最深部での床面からの深さ25cmの規模をもつ不整楕円形の炉跡が営まれる。

南端部には幅110cm、長さ20～35cmにわたって、出入口と考えられる住居外への張り出しが認められる。住居外に向かって階段状に高くなっており、床面からの高さは約5cmである。また、この張り出しの付近には周壁に沿って長さ約1m、床面からの深さ3cmの溝が巡るが、あまりにも小規模であることから、壁溝は基本的には造出されなかったものと考えられる。

出土遺物には弥生土器壺・甕・高坏、石核などがある。弥生時代中期前半。

出土遺物 (Fig. 27, PL. 14・20)

6～11は壺。6は口縁端部が上下両方にわずかにつまみ出され、拡張された端部の狭い平坦面にヘラによる鋸歯文を施文する。7は大きく開く口縁部をもち、口縁端部は下方につまみ出されるが、端部の平坦面には施文されない。8は鋤先状口縁をもつもので、斜上下方への拡張は未発達である。9はタマキ貝による羽状文の下位に、少なくとも4条のヘラ描き沈線が巡る。10は頸部の貼付突帯の頂部に刷毛状工具原体による斜格子文を施文する。11は張りの強いソロバン形の胴部をもち、胴部最大径の部位に断面三角形の突帯を1条貼付する。

12～21は甕。12は大形の甕で口縁端部をやや内巻きぎみにする。13～16は跳ね上げ口縁

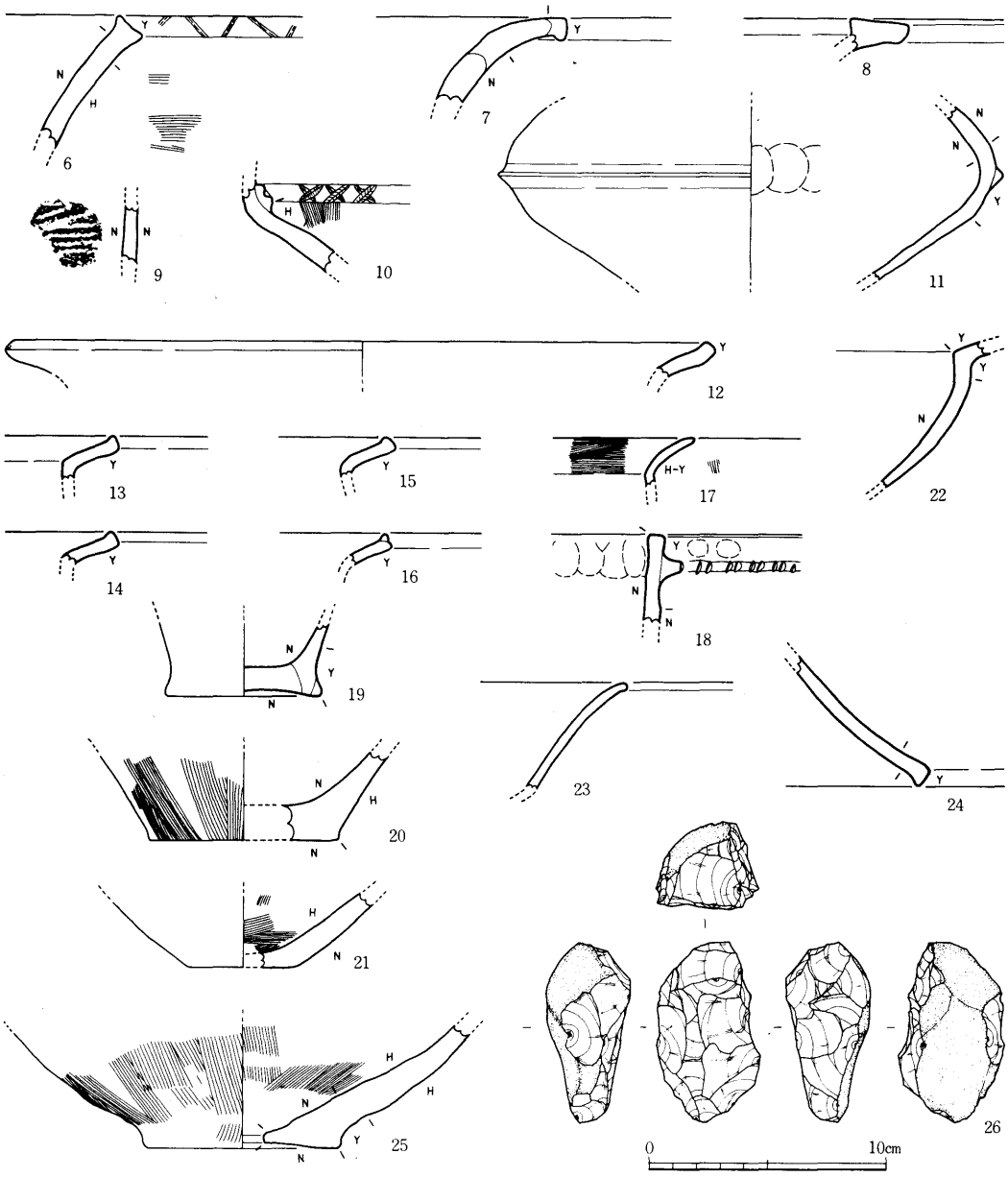


Fig. 27　第20号竪穴住居跡出土遺物実測図

で、口縁部は「く」の字に強く屈曲する。17は外弯しながら「く」の字に開く口縁部をもち、端部は尖る。18は下城式の甕で、口縁部外面に断面台形の貼付突帯を１条貼付する。突帯の頂部にはヘラによる刻み目を施す。口縁端部は平坦で、口縁部内外面は指圧痕が明

瞭に残る。19～21は底部。

22～24は高坏。22・23は坏部で、22は内弯する坏部をもち、口縁部は「く」の字に屈曲する。23は坏部の中位で反転し、外弯しながら開く口縁部をもつ。24は脚裾部で、端部は肥厚して斜下方に下垂する。25は壺の底部を転用した甑で、底部中央を径約2cmにわたって焼成後に内外面から穿孔する。

26は石核。剥片剥離作業は裏面を除く各面で行なわれる。打面は一定しておらず、目的剥片は寸づまりの縦長剥片である。

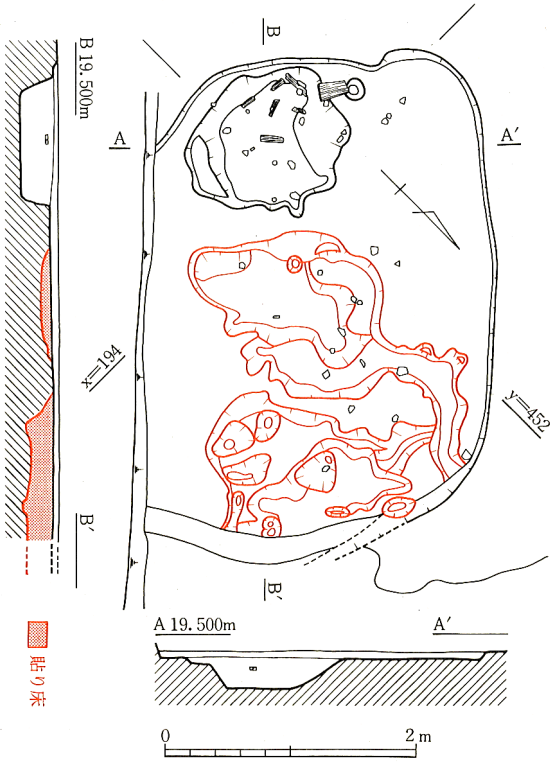


Fig. 28 第21号竪穴住居跡実測図

第21号竪穴住居跡 (Fig. 28,PL. 10(1))

調査区の東部、第20号竪穴住居跡の東に位置する。東半部は遺跡保存地区外にあたるため完掘していないが、平面形態は不整形な隅丸長方形になるものと思われる。長軸530cm以上、短軸370cm以上の規模をもつ。床面積は10㎡以上で、検出面からの深さは5cmである。南辺に接して床面には、住居の規模にくらべてやや大きめの炉が造出されている。内部には炭化木が随所に認められ、長軸125cm、短軸104cm、床面からの深さは24cmである。床面に柱穴は1個存在するが、深さが2cmで主柱穴とは考えられない。

住居の付属施設として、住居の周囲を弧状に巡る溝（第6号溝）が検出された。径は約18mで東半部は保存地区外にあたるため完掘していない。また、住居と溝の空間地には当住居に伴うと考えられる2基の土壙（第67・69号土壙）が並列して存在する。

出土遺物には弥生土器壺・甕がある。弥生時代中期後半。

出土遺物 (Fig. 29, PL. 15)

27・28は壺。27は下垂する口縁部をもつが、拡張部外面への施文はない。28は胴部最大径の部位に断面「M」字の貼付突帯を貼付する。

29・30は甕。29は逆「L」字形に強く屈曲する跳ね上げ口縁をもつ。30は底部。

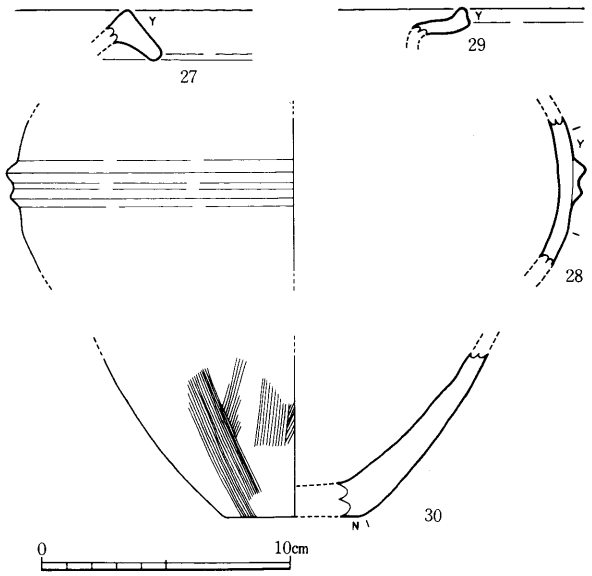


Fig. 29 第21号竪穴住居跡出土遺物実測図

（2）土壙

第53号土壙

調査区西端部、第19号竪穴住居跡の北西に位置する小形の土壙である。平面形態は不整形な楕円形で、長軸66cm、短軸38cmの規模をもつ。壁面の立ち上がりは緩やかで、検出面からの深さは9cmである。長軸方向は北－南で、底面標高は約19.30m。

出土遺物には弥生土器甕などがある。弥生時代後期。

出土遺物（Fig. 31－31, PL. 15）

張りの少ない胴部に「く」の字に強く屈曲する口縁部をもつ小形の甕。口縁端部は内面の強い横ナデによってやや肥厚し、上方に突出ぎみになる。

第54号土壙（Fig. 30, PL. 10(2)）

調査区西端部、第19号竪穴住居跡の北西に位置する。平面形態は不整楕円形で、長軸176cm、短軸104cmの規模をもつ。壁面の立ち上がりは緩やかで、検出面からの深さは10cmである。長軸方向は北西－南東で、底面標高は約19.20m。

出土遺物には弥生土器甕、敲石などがある。弥生時代中期。

出土遺物（Fig. 31－32～34, PL. 15・21）

32・33は甕。32は逆「L」字形に強く屈曲する口縁部をもつ。33は頸部下位に断面三角形の1条の貼付突帯が巡り、突帯の頂部には指頭による押圧によって幅広の刻目を施す。34は円礫を素材とする敲石で、約1/2を欠損する。正裏両面の中央部には浅い敲打痕が認められる。

第55号土壙（Fig. 30）

調査区の北部、第14号竪穴住居跡の北東に位置する。平面形態は楕円形で、長軸96cm、短軸67cmの規模をもつ。検出面からの深さは約10cmで、底面標高は約19.20m。長軸方向は北東－南西。出土遺物はなく、時期不明。

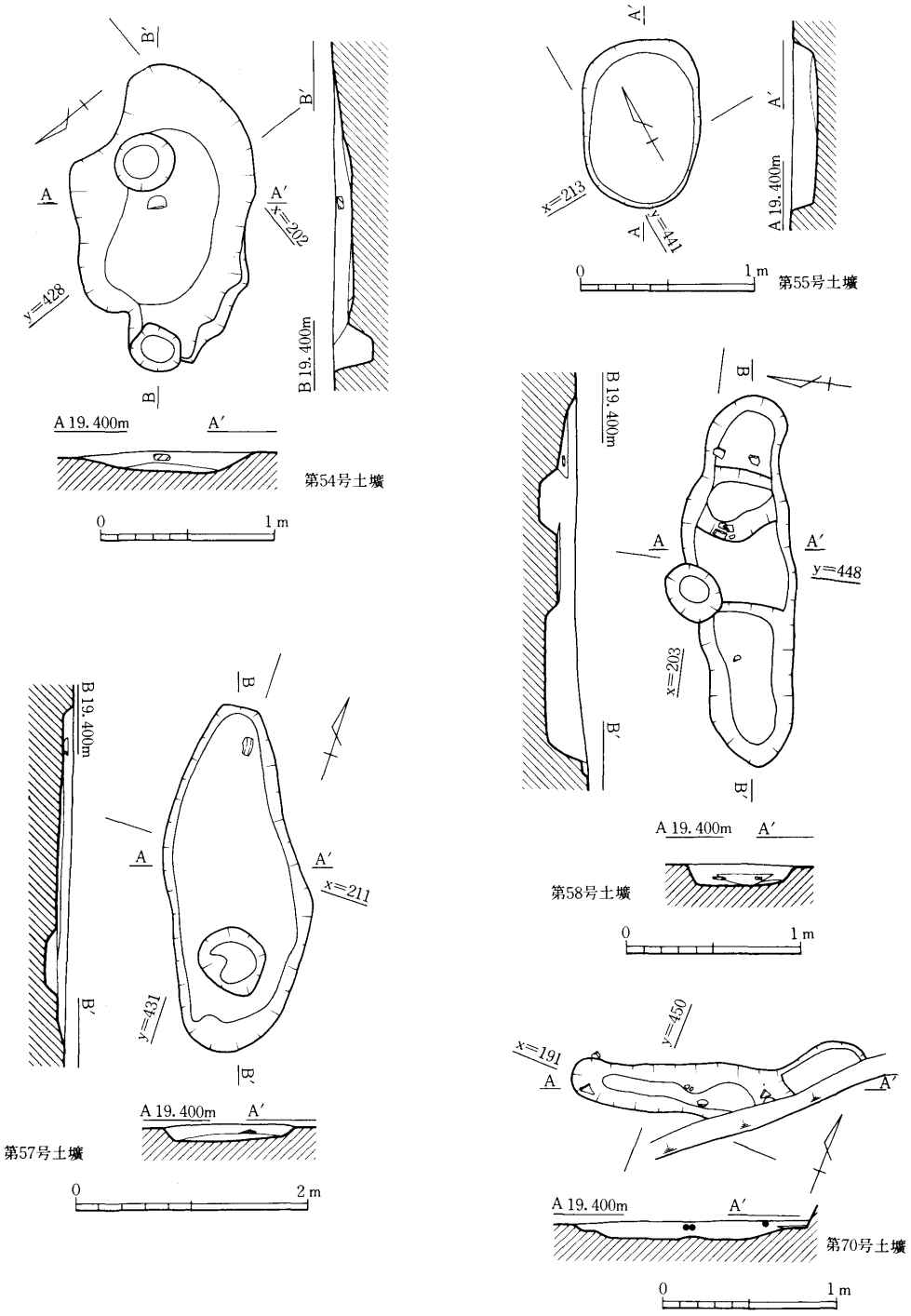


Fig. 30　第54・55・57・58・70号土壙実測図

第56号土壙（PL. 10(3)）

第55号土壙の東に隣接する小形の土壙である。平面形態は円形に近く、径約60cmの規模をもつ。検出面からの深さは約15cmで、底面標高は約19.20m。

出土遺物には弥生土器壺・甕などがある。弥生時代中期後半。

出土遺物（Fig. 31－35～37, PL. 15）

35はソロバン状の胴部をもつ長頸壺。36・37は跳ね上げ口縁となる甕で、口縁端部外面は強い横ナデによって窪みぎみになる。

第57号土壙（Fig. 30, PL. 11(1)）

第56号土壙の南に隣接する、平面形態が不整な長楕円形を呈する土壙である。長軸298cm、短軸116cmの規模をもつ。検出面からの深さは約10cmで、底面標高は約19.20m。長軸方向は北西－南東。底面には柱穴状の掘り込みが存在するが、本土壙に伴うものかどうか不明。

出土遺物には弥生土器甕などがある。弥生時代中期中頃。

出土遺物（Fig. 31－38, PL. 15）

口縁部が「く」の字に屈曲する甕で、口縁端部は肥厚する。頸部直下に断面三角形の突帯を1条貼付する。

第58号土壙（Fig. 30, PL. 11(2)）

調査区の中央部、第20号竪穴住居跡の北東に位置し、第59号土壙によって切られている。平面形態は不整形な長楕円形で、長軸210cm、短軸61cmの規模をもつ。検出面からの深さは最深部で23cmで、底面標高は約19.05m。長軸方向は東－西。

出土遺物には弥生土器甕などがある。弥生時代中期中頃～後半。

出土遺物（Fig. 31－39・40, PL. 15）

39・40は甕。39は「く」の字に屈曲する口縁部をもち、口縁端部は内面の強い横ナデによって跳ね上げ口縁ぎみになる。40は安定した平底の底部。

第59号土壙（Fig. 32, PL. 11(2)）

平面形態が不整形な土壙で、第58号土壙と切り合い関係にある。長軸306cm、短軸80cmの規模をもち、検出面からの深さは最深部で17cmである。底面標高は約19.05m。長軸方向は北東－南西。

出土遺物には弥生土器甕・高坏などがある。弥生時代後期前半。

出土遺物（Fig. 31－41～44, PL. 15）

41～43は甕。41はしまりのない頸部から「く」の字にゆるやかに外反する口縁部をもつ。

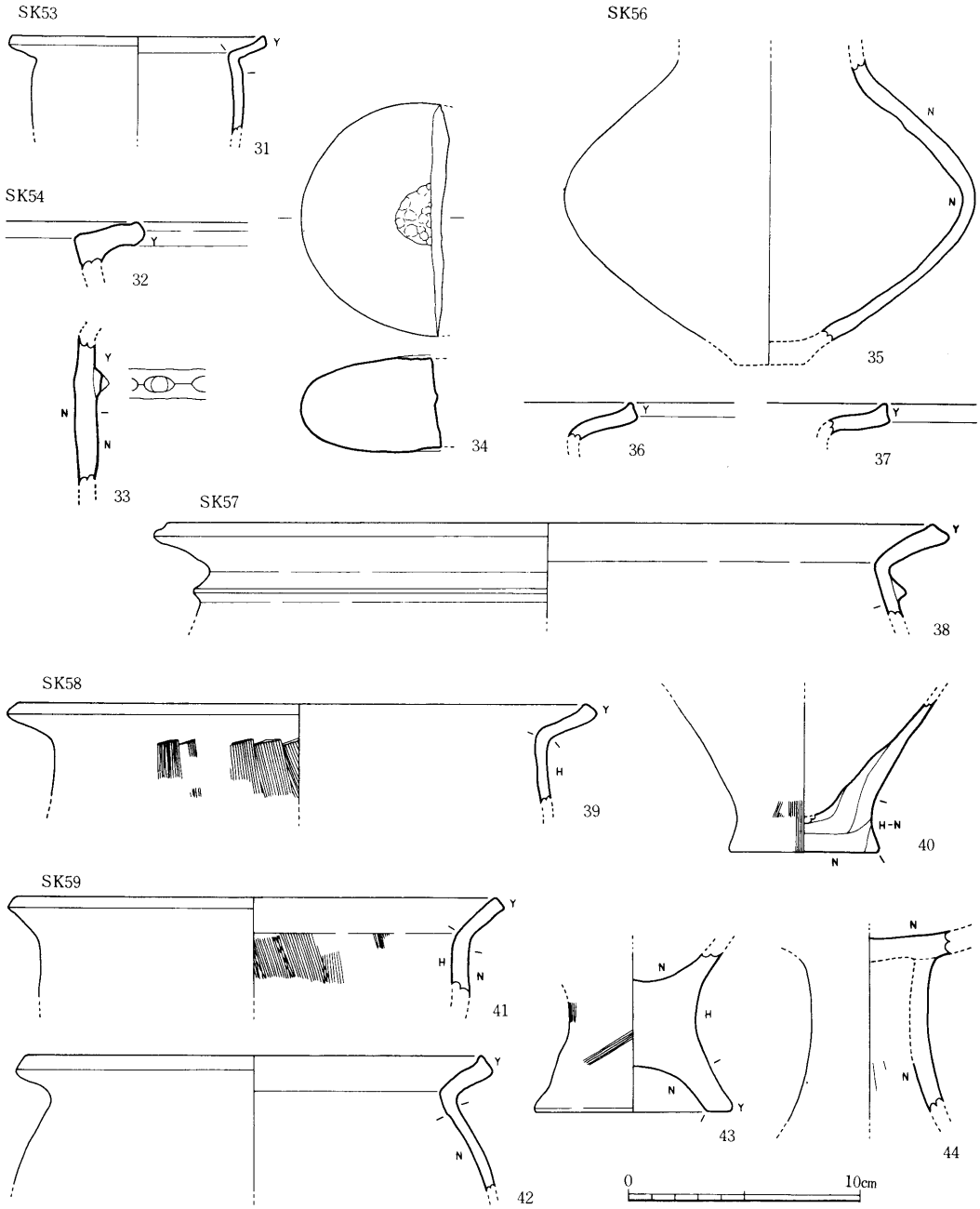


Fig. 31　第53・54・56～59号土壙出土遺物実測図

42は「く」の字に外反する短い口縁部をもつ。口縁端部は肥厚し、跳ね上げ口縁ぎみになる。43は上げ底の底部。44は高坏の脚部。脚部は中空で、坏部に脚部を接合する。

第60号土壙（Fig. 32）

第58・59号土壙の南西に位置し、第61号土壙によって切られている。平面形態は不整形な長楕円形で、長軸163cm、短軸48cmの規模をもつ。底面は北から南へ階段状に低くなっており、検出面からの深さは最深部で12cmである。底面標高は約19.10m。長軸方向は北－南。

出土遺物には弥生土器が若干あるが、小片のため図化できない。

第61号土壙（Fig. 32）

第60号土壙を切る小形の土壙である。平面形態は不整形な円形で、長軸91cm、短軸66cmの規模をもつ。底面は平坦で、検出面からの深さは15cmである。底面標高は約19.05m。長軸方向は北東－南西。

出土遺物はなく、時期不明。

第62号土壙

調査区の南端部、第20号竪穴住居跡の南に隣接して位置する。平面形態は不整形な楕円形で長軸206cm、短軸106cmの規模をもつが、2基の土壙が重複している可能性がある。底面は平坦で、検出面からの深さは15cm。底面標高は約19.20m。長軸方向は北西－南東。

出土遺物はなく、時期不明。

第63号土壙（Fig. 32）

第62号土壙の南に隣接して位置する、平面形態が不整形な土壙である。東端部は第9号溝によって切られており、西端部は一部攪乱を受けている。平面形態が長楕円形の2基の土壙が重複している可能性があるが、調査時には切り合い関係が判然としなかったため、一括して取り扱った。南北軸116cm、東西軸169cmの規模をもち、検出面からの深さは東半部で4cm、西半部で31cmで、両底面とも平坦である。西半部の壁面の立ち上がりは急で、底面標高は東半部で約19.25m、西半部で約18.95mである。

出土遺物はないが、切り合い関係から弥生時代中期以前のものである。

第64号土壙（Fig. 33）

第63号土壙の東に隣接して位置し、第9・10号溝を切っている。平面形態は不整形な楕円形で長軸123cm、短軸70cmの規模をもつ小形の土壙である。検出面からの深さは18cmで、底面標高は約19.10m。長軸方向は東－西。

出土遺物はないが、切り合い関係から弥生時代中期以降のものである。

第65号土壙（Fig. 33, PL. 11(3)）

第64号土壙の南東に位置し、第10号溝を切っている。平面形態は楕円形状を呈し、長軸

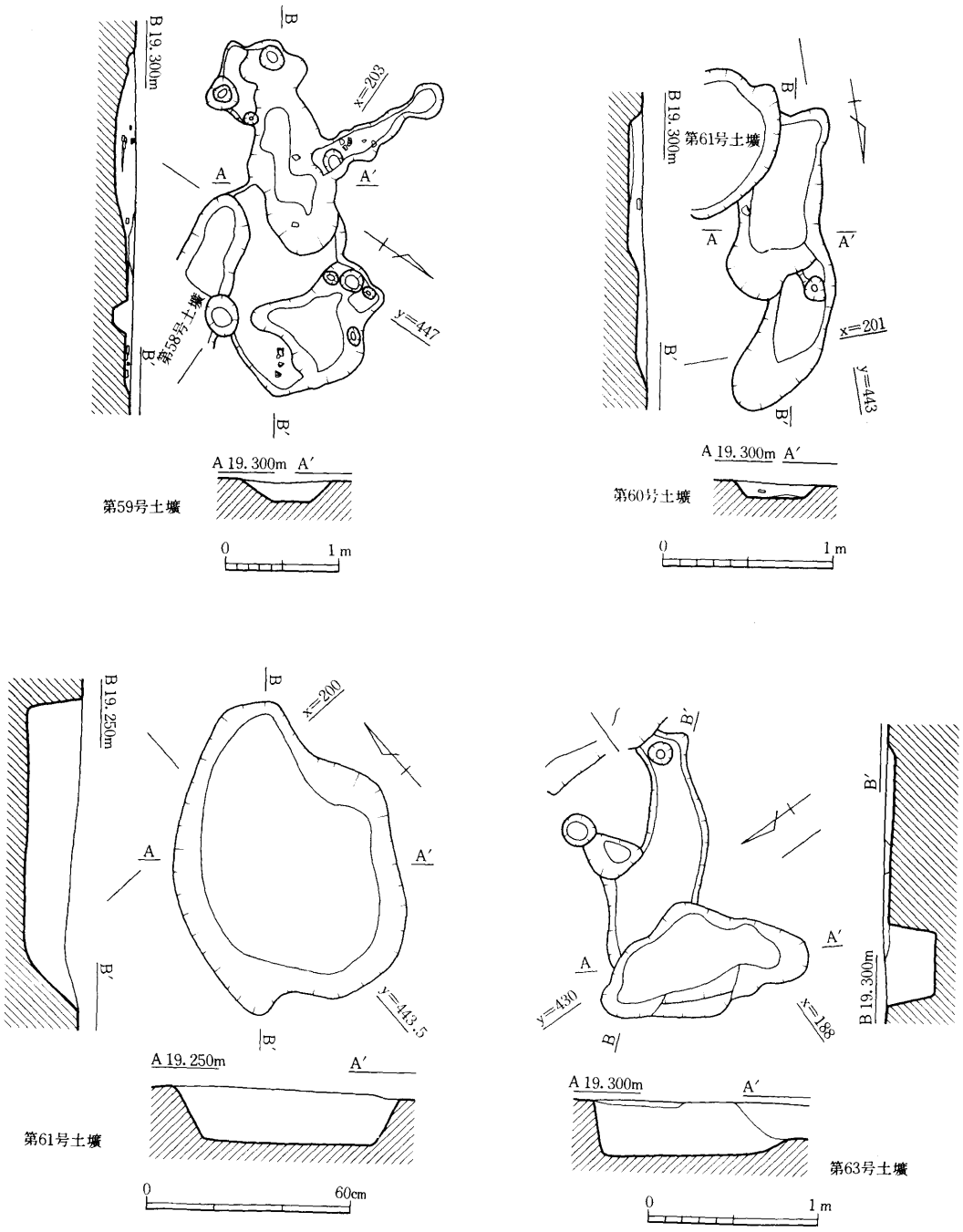


Fig. 32　第59～61・63号土壙実測図

215cm、短軸125cmの規模をもつ。検出面からの深さは15cmで、底面標高は約19.35m。長軸方向は北東－南西。

遺物は底面付近から弥生土器が若干出土したが、いずれも小片のため図化できない。

第66号土壙（Fig. 33, PL. 11(3)）

第65号土壙の南東に隣接して位置する。吉田遺跡調査団のトレンチによって東半部が消失している。平面形態は隅丸長方形状を呈するものと思われ、長軸150cm以上、短軸40cm以上の規模をもつ。検出面からの深さは8cmで、底面標高は約19.35m。長軸方向は北東－南西。底面には数個の柱穴が存在するが、本土壙に伴うものではなく、後世のものである。

遺物は弥生土器甕などが若干出土した。弥生時代中期。

出土遺物（Fig. 34－54, PL. 20）

上げ底の甕の底部で、内外面とも縦刷毛目仕上げ。

第67号土壙（Fig. 33, PL. 11(4)）

調査区の中央部からやや南東、第21号竪穴住居跡の周囲を巡る溝（第6号溝）の内部に位置し、第69号土壙と並列する。平面形態は不整形な隅丸長方形ないしは楕円形状を呈し、長軸104cm、短軸61cmの規模をもつ。南半部には平坦面をもち検出面からの深さは9cmであるが、北半部は擂鉢状にさらに25cm落ち込んでいる。最深部の底面標高は約19.05mで、長軸方向は北東－南西。

遺物は底面からやや上位で弥生土器が出土したが、小片のため図化できない。

第68号土壙

第67号土壙の北に位置する、平面形態が不整形な土壙である。長軸140cm、短軸57cmの規模をもつ。検出面からの深さは10cmで、底面標高は約19.10m。長軸方向は北東－南西。

出土遺物はなく、時期不明。

第69号土壙（Fig. 35, PL. 11(4)）

第21号竪穴住居跡の周囲を巡る溝（第6号溝）の内部に位置し、第67号土壙と並列する。平面形態は不整形な隅丸長方形ないしは楕円形状を呈し、長軸127cm、短軸61cmの規模をもつ。壁面の立ち上がりは比較的急で、検出面からの深さは28cmである。底面は平坦で、標高は約19.05m。長軸方向は北東－南西。

検出地点、土壙の時期、配列状況、規模、構造などから第67号土壙とともに第21号竪穴住居跡に付設するものと考えられる。

遺物は比較的多く、弥生土器壺・甕・高坏などが底面から約25cm上位で集中して出土し

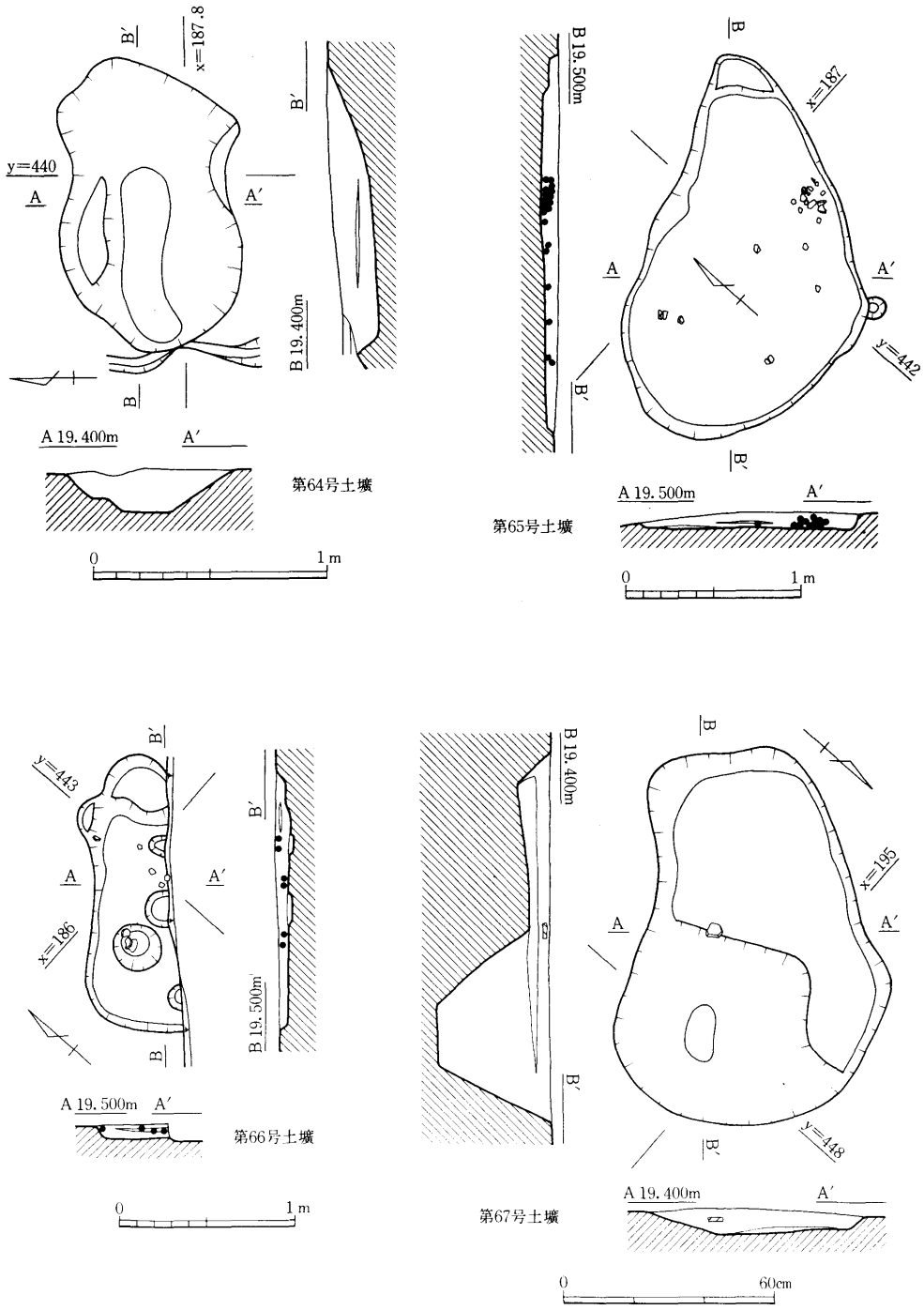


Fig. 33　第64～67号土壙実測図

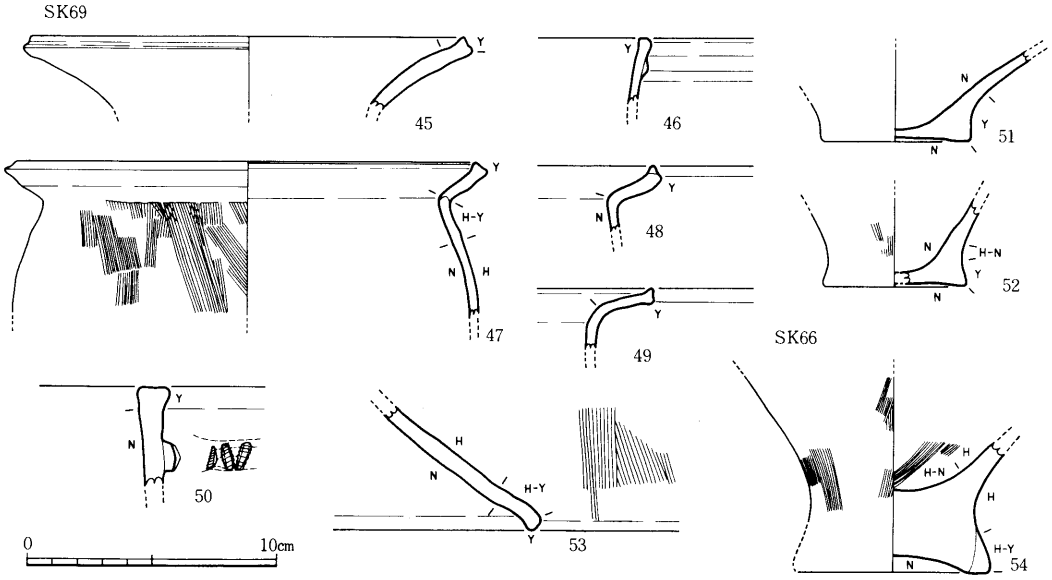


Fig. 34 第66・69号土壙出土遺物実測図

た。弥生時代中期後半。

出土遺物（Fig. 34－45～53, PL. 15・16）

45・46は壺。45は大きく開く口縁部をもち、口縁端部は強い横ナデによって窪む。46は直立する口縁部をもつ長頸壺で、外面には口縁端部よりやや下位に断面三角形の扁平な貼付突帯が1条巡る。口縁端部は平坦におさめる。

47～52は甕。47～49は跳ね上げ口縁をもつもの。47は口縁部が直線的に開くが、48は口縁端部付近で内弯する。49はしまりのない頸部から逆「L」字に開く口縁部をもつ。50は下城式の甕。口縁部のやや下位に断面五角形の貼付突帯を1条貼付し、突帯の頂部には刷毛原体による刻目を施す。口縁端部は平坦で、肥厚する。51・52は上げ底ぎみの底部。

53は高坏の脚裾部で、端部がわずかに下垂する。

第70号土壙（Fig. 30）

調査区の南西部、第21号竪穴住居跡の南に位置する。東への延長部分は遺跡保存地区外にあたるため検出していない。平面形態は不整形な長楕円形を呈し、平面形態、規模などから溝の可能性があるが、ここでは土壙として取り扱う。長軸133cm以上、短軸28cmの規模をもつ。底面は極めて狭く、検出面からの深さは10cmである。底面標高は約19.25mで、長軸方向は東－西。

遺物は底面から上位で弥生土器が若干出土した。弥生時代。

(3) 溝

第6号溝 (Fig. 23・36, PL. 12)

調査区の南部に位置し、第21号竪穴住居跡の周囲を弧状に巡る溝である。住居と溝の内縁との距離は西辺からは約7.6m、北辺からは約5.9m、東辺からは約4.6mである。南半部は保存地区外にあたるため検出していないが、径約18mの規模をもつものと考えられる。西端部は後世の削平、および他の遺構との重複によって途切れるが、幅は約100～120cm、検出面からの深さは8～18cmである。断面形は逆台形で、溝底標高はおおむね19.20mである。

なお、溝の内側にある住居跡と溝の空間地には当住居に伴うと考えられる2基の土壙が並列して存在する。

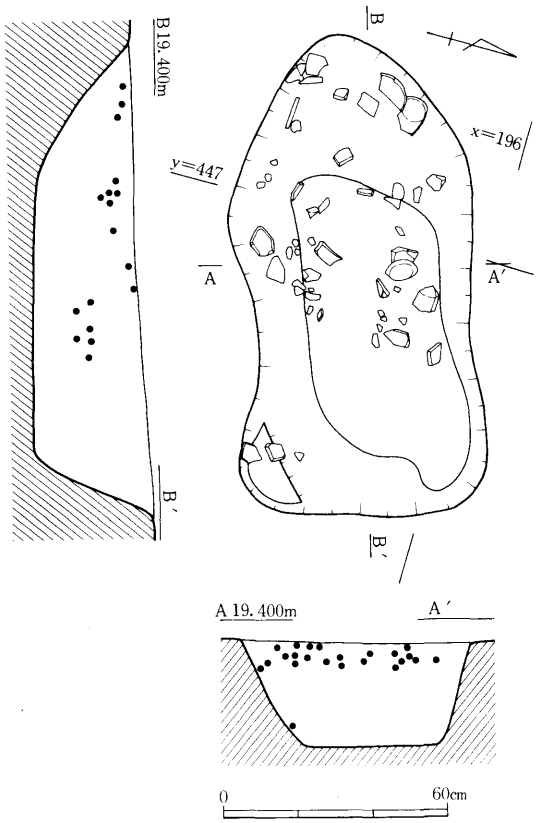


Fig. 35 第69号土壙実測図

遺物は溝底から多量に出土し、弥生土器壺・甕・鉢などの土器類のほか、石鏃・二次加工のある剥片がある。弥生時代中期後半。

出土遺物 (Fig. 37・38, PL. 16～18・20・21)

55～67は壺。55・56は鋤先状口縁をもつもので、拡張部は下垂する。55は口縁端部の内方への張り出しが比較的強く、拡張部外面の内側寄りに扁平な円形浮文を貼付する。57・58は斜め下方に短く下垂する口縁部をもつ。57は口縁端部に面をもち、拡張部外面には施文はなされない。58は口縁端部を尖りぎみにおさめ、拡張部外面にはヘラによる斜格子文を施文する。59～61は直線的あるいは外弯しながら大きく開く口縁部をもつ。59は頸部外面に突帯の剥落痕が認められる。60は口縁端部内面に断面三角形の粘土帯を貼付し、肥厚させる。61も口縁端部内面に突帯の剥落痕が認められることから、60と同様な口縁端部をもつものと思われる。62は短く直立する口縁部をもち、中位でさらに外方に開く。端部は丸い。内外面の整形は粗雑。64～67は底部。いずれも安定した平底で、64は内面が刷毛状工具による擦過によってヘラ削り風に仕上げられ、胴部外面には煤が付着する。

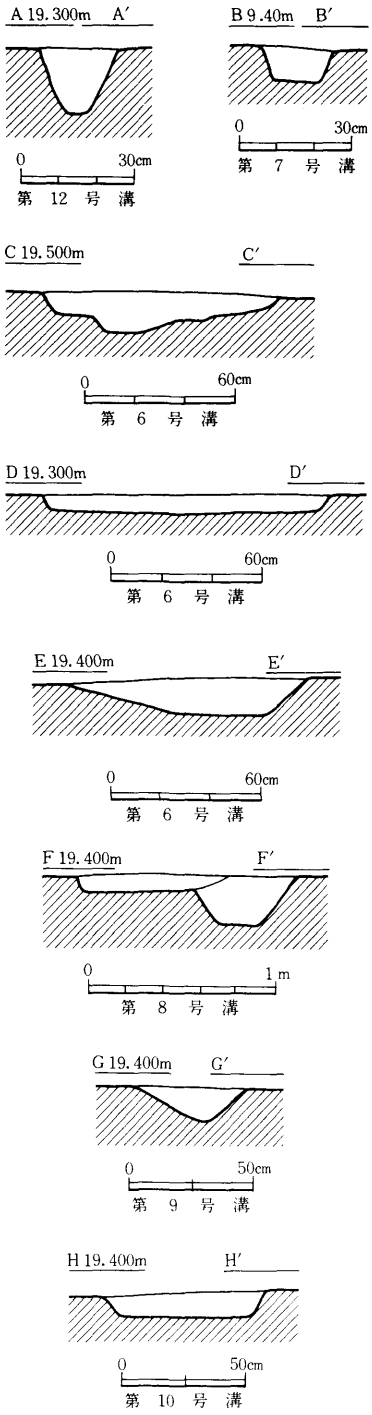


Fig. 36 溝断面実測図

68～80は甕。68～71は跳ね上げ口縁をもつもので、口縁部は大半が「く」の字に開くが、69は逆「L」字形に強く屈曲する。72～75は「く」の字に開く口縁部をもつ。76は小形の甕で、球形の胴部に外弯しながら短く開く口縁部をもつ。77～80は底部。やや上げ底ないしは窪み底で、側面が裾広がりになるもの（77・78）と胴部からそのまま底部へ移行するもの（79・80）とがある。

81は鉢。胴部最大径は頸部径を上回ることなく、口縁部は逆「L」字形に強く屈曲する。

82～85は高坏。82・83は脚部上半で、82は坏部に脚部を接合するタイプであろう。84・85は脚裾部。84は蓋かもしれない。85は緩やかに外弯しながら裾端部に移行する。

86は平基無茎式の石鏃。周縁に二次加工が施されるが、正裏両面の中央部には素材面を残しており、剥片鏃と考えられる。87は扁平な横長の盤状剥片を素材とし、正面右側縁下半に二次加工を施す。正面側が主要剥離面で、打点を除去している。剥片剥離の打面は、正面左側縁の単設の平坦打面である。削器としての機能をもつものであろう。

第7号溝（Fig. 23・36）

調査区の南部を東－西に走行する溝で、東西への延長部分は削平、攪乱によって消失している。弧状に巡ることから竪穴住居跡の壁溝の可能性があるが、溝の内側に主柱に相当する柱穴が存在しないことから、単一の溝として取り扱った。検出長は約4.3mで、溝幅約20cm、検出面からの深さは最深部で約10cmである。断面形は逆台形で、溝底標高は約19.10～19.20m。

遺物は弥生土器が若干出土したが、図化できない。

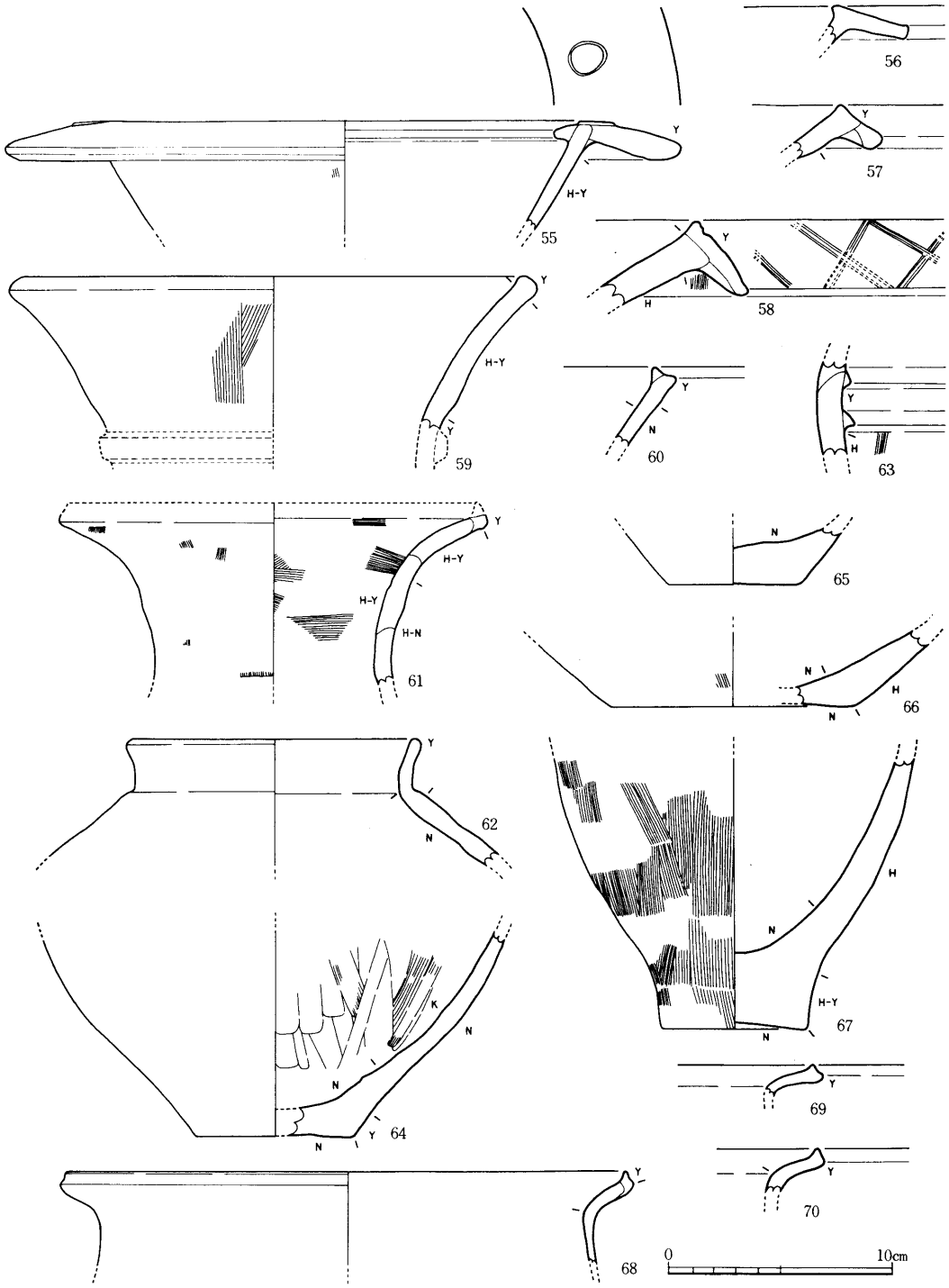


Fig. 37　第6号溝出土遺物実測図 (1)

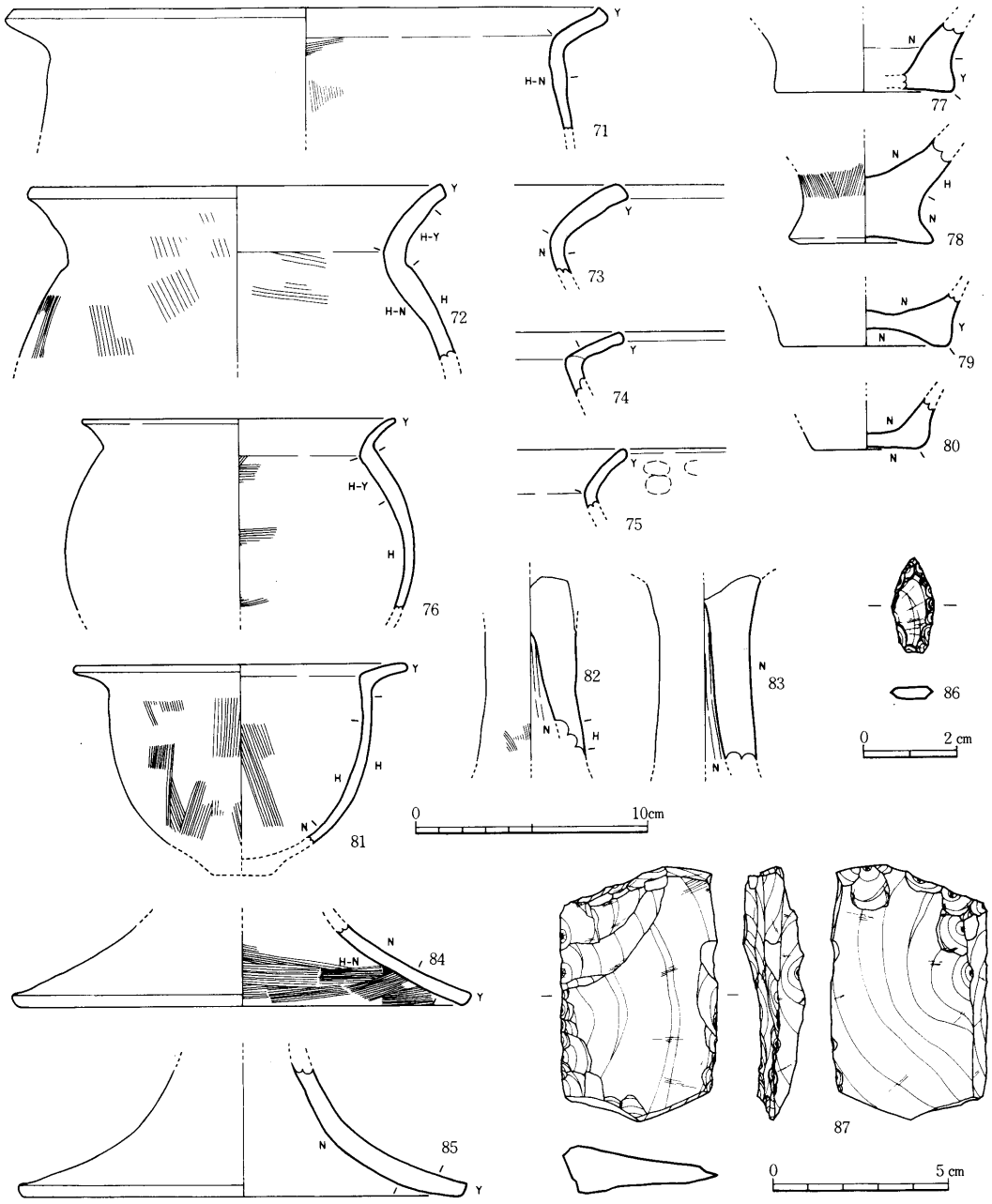


Fig. 38　第６号溝出土遺物実測図（2）

第８号溝（Fig. 23・36）

調査区の南部を北西－南東に直線的に走行する溝で、南東への延長部分は遺跡保存地区

外にあたるため検出していない。検出長は約7mで、溝幅は南東部で約80cm、北西部では溝幅を減じ、約50cmとなる。検出面からの深さは最深部で10cm、溝底標高は約19.30mである。断面形は逆台形を呈する。

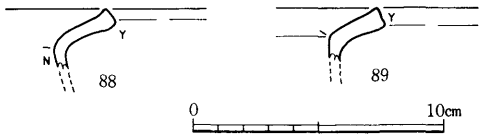


Fig. 39　第9号溝出土遺物実測図

出土遺物には土師器、須恵器などが若干あるが、小片のため図化できない。古墳時代。

第9号溝（Fig. 23・36）

調査区の南端部を北－南に直線的に走行する溝で、南への延長部分は攪乱、北への延長部分は削平によって消失している。検出長は約7mで、溝幅は南部で約60cm、北部では溝幅を減じ、約30cmとなる。検出面からの深さは最深部で約15cmで、溝底標高は約19.20m。溝底は狭く、断面形は「V」字形に近い逆台形を呈する。

出土遺物には弥生土器甕などがある。弥生時代中期後半。

出土遺物（Fig. 39, PL. 17）

2点とも「く」の字に外反する甕の口縁部。88は跳ね上げ口縁、89は短く開く口縁部をもち、口縁端部がわずかに肥厚する。

第10号溝（Fig. 23・36）

調査区の南端部をやや西に湾曲しながら北－南に走行する溝である。第9号溝と並列するが、南への延長部分は保存地区外にあたるため検出していない。検出長は約8mで、溝幅は南部で約100cm、北部では溝幅を減じ、約60cmとなる。検出面からの深さは最深部で約10cmで、溝底標高は約19.20m。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物には弥生土器が若干あるが、小片のため図化できない。

第12号溝（Fig. 23・36）

調査区の中央部付近を北西－南東に直線的に走行する溝である。南東への延長部分は削平によって消失している。第2次調査で北半部を検出しており、総検出長は約17mにおよぶ。溝幅は約20～30cmで、検出面からの深さは約10～20cm、溝底標高は19.05～19.15mである。断面形は逆台形を呈する。

第2次調査時には、竪穴住居跡との切り合い関係から弥生時代中期後半以降と考えたが、今回、土師器が若干出土し、古墳時代のものであるであることが明らかになった。

(4) 柱穴

調査区のほぼ全面で多数検出した。径は約20～30cm前後のものが大半を占める。出土遺

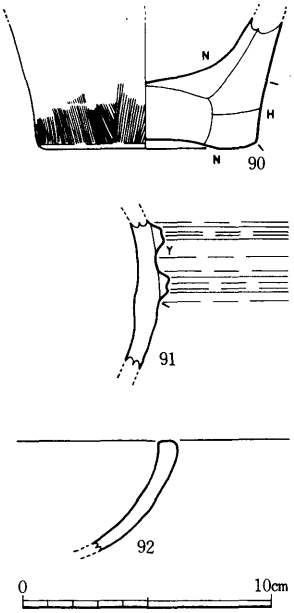


Fig. 40 柱穴出土遺物実測図

物、他の遺構と切り合い関係などから、弥生時代から古墳時代にかけてのもので、竪穴住居跡の主柱穴となるものも含まれていると思われるが、柱穴配置による遺構の復原はできなかった。遺物は34個の柱穴から出土したが、図化できたのは以下の３点にすぎない。

出土遺物（Fig. 40, PL. 18）

90・91は弥生土器。90は甕の底部。窪み底で、外面は縦刷毛目仕上げ。Ｐ１出土。91は壺。胴部最大径の部位に断面台形の少なくとも２条の貼付突帯を貼付する。突帯の頂部は強い横ナデによって窪ませる。Ｐ２出土。92は土師器の鉢ないしは椀。胴部から口縁部まで内弯しながら立ち上がり、口縁端部は平坦におさめる。Ｐ３出土。

(5) 河川跡（Fig. 41, PL. 13(3)）

調査区の東に位置し、南東から北西に走行する河川跡で、第１・２次調査ですでに北への延長部分を検出している。一部重複する部分があるが、第２次調査で分流する同一河川の本流と支流であることが明らかとなった。

完掘はしていないが、トレンチによって部分的に規模、土層の堆積状況、遺物の出土状況を確かめた。東側の南半部は配管工事によって削平され、消失している。北部では、東側で幅約1.2m、検出面からの深さ約75cm、西側で幅約2.7m、検出面からの深さ約70cmの規模をもつ。南に向かうにつれて規模が大きくなり、最大幅は約10mにもおよぶ。南部では東側で幅約５m以上、検出面からの深さ約80～100cm、西側で幅約4.0m、検出面からの深さ約80～95cmの規模をもつ。埋積土は砂礫、黒色粘土が主体で、黒色粘土は多量の植物遺体を含んでいた。

出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、鞴の羽口などがあり、この河川が機能していたのは古墳時代後期～奈良時代と考えられる。

出土遺物（Fig. 42, PL. 18～21）

93～108は河川跡西側出土のもの。

93・94は弥生土器の壺。93は肩部外面に１条の浅いヘラ描き沈線が巡る。胴部は張りが小さく、外面は縦刷毛目、内面は基本的にはヘラミガキであるが、内面下半はヘラミガキ

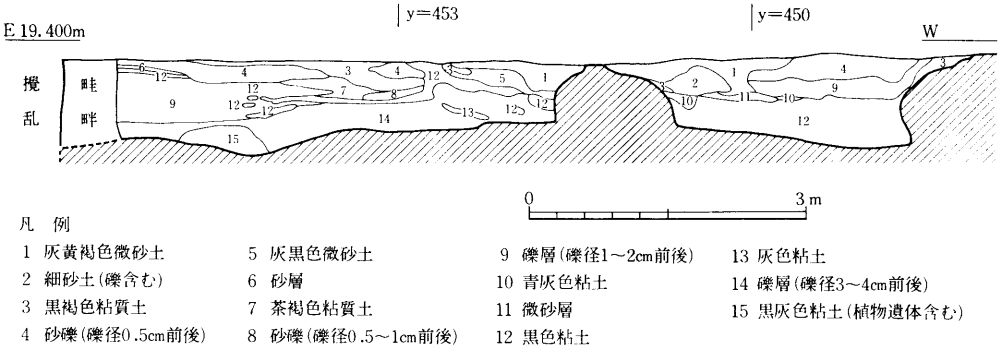


Fig. 41 河川跡土層断面実測図

ののち縦、横刷毛目仕上げを行なう。94は頸部で、93同様、外面に浅い1条のヘラ描き沈線が巡る。内面はヘラミガキ。

95～98は土師器の甕。95は口縁端部に水平な面をもつ布留タイプの甕。96は丸底の底部で、内外面には粗雑なナデが施される。97・98は外弯しながら短く「く」の字に開く口縁部をもつ。口縁端部は丸いもの（97）と尖りぎみのもの（98）がある。

99～108は須恵器。99～101は坏蓋。99は直線的にのびる体部から、口縁部が斜下方に短く開く。100は平坦な天井部の外面に平行タタキが認められる。101は大形品で、口径に比べて器高が低く扁平である。102～108は坏身。全形がわかるのは102で、体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は尖る。底部と体部の境には断面台形の高台を貼付する。接地点は高台内側端である。103は口縁部で、口縁端部は内面を面取り風にし、尖りぎみになる。104～108は底部。高台は底部と体部の境に貼付するもの（104）と底部と体部の境より内側に貼付するもの（105～108）とがある。108は粘土帯を二度にわたって貼付し、高い高台をつくりだす。

109～112は河川跡東側出土のもの。

109は弥生土器の壺ないしは鉢。110は上げ底の甕の底部。外面は縦刷毛目ののち、ヘラナデが施される。111は須恵器の坏身。立ち上がりは中位で上方に屈曲する。112は鞴の羽口。火口部分で、上端部は尖らずやや丸みをもつ。厚さは0.6～0.8cmで、薄手。外面、上端部および内面の一部に滓が付着する。

(6) 土器溜り（Fig. 23, PL. 13(1)(2)）

調査区の東端部に位置し、河川跡に設定した南端部のトレンチで検出した。第6号溝に近接し、規模は未確認であるが、不整形な掘り込みが連続する。検出面からの深さは45cm

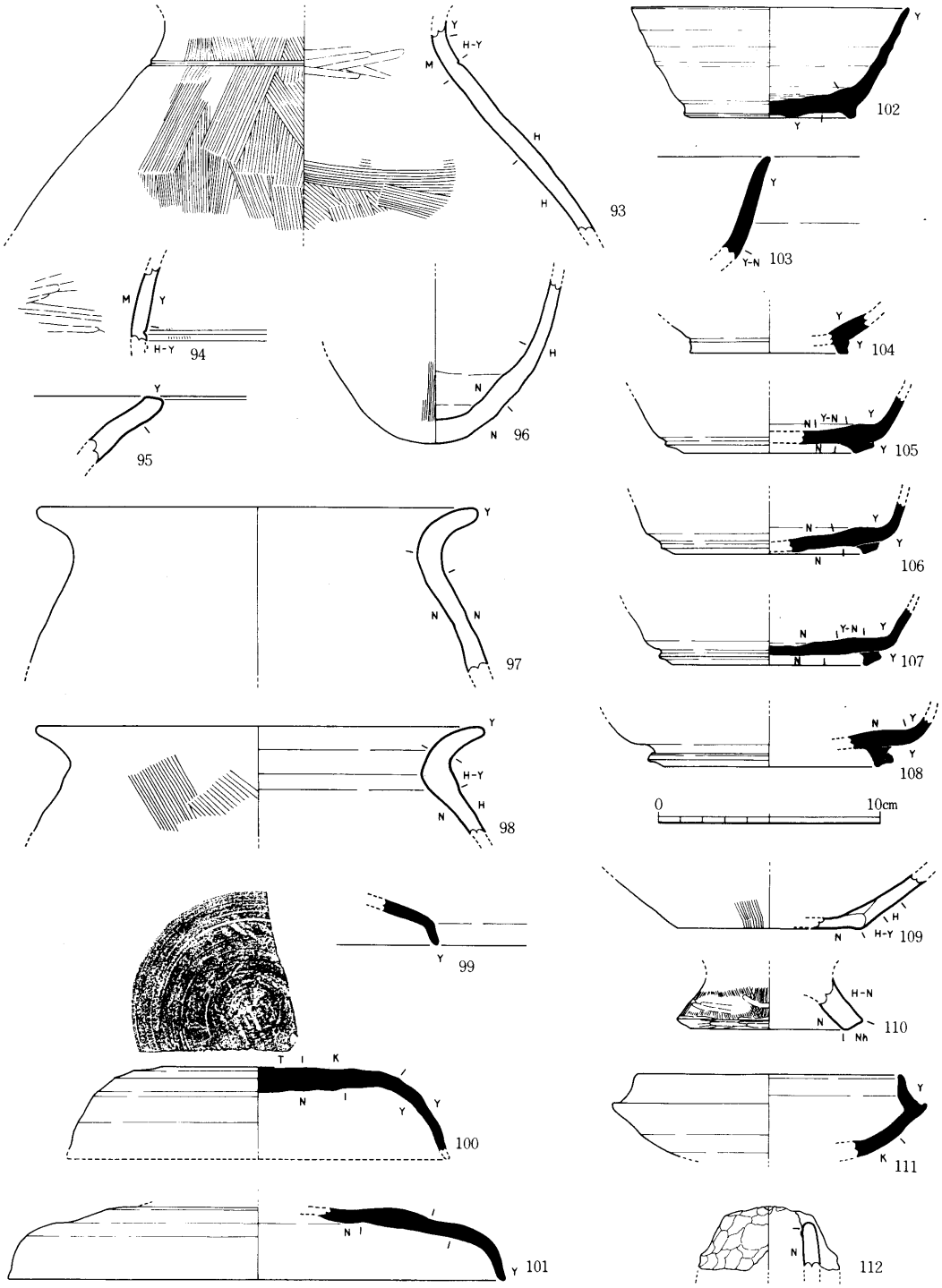


Fig. 42　河川跡出土遺物実測図

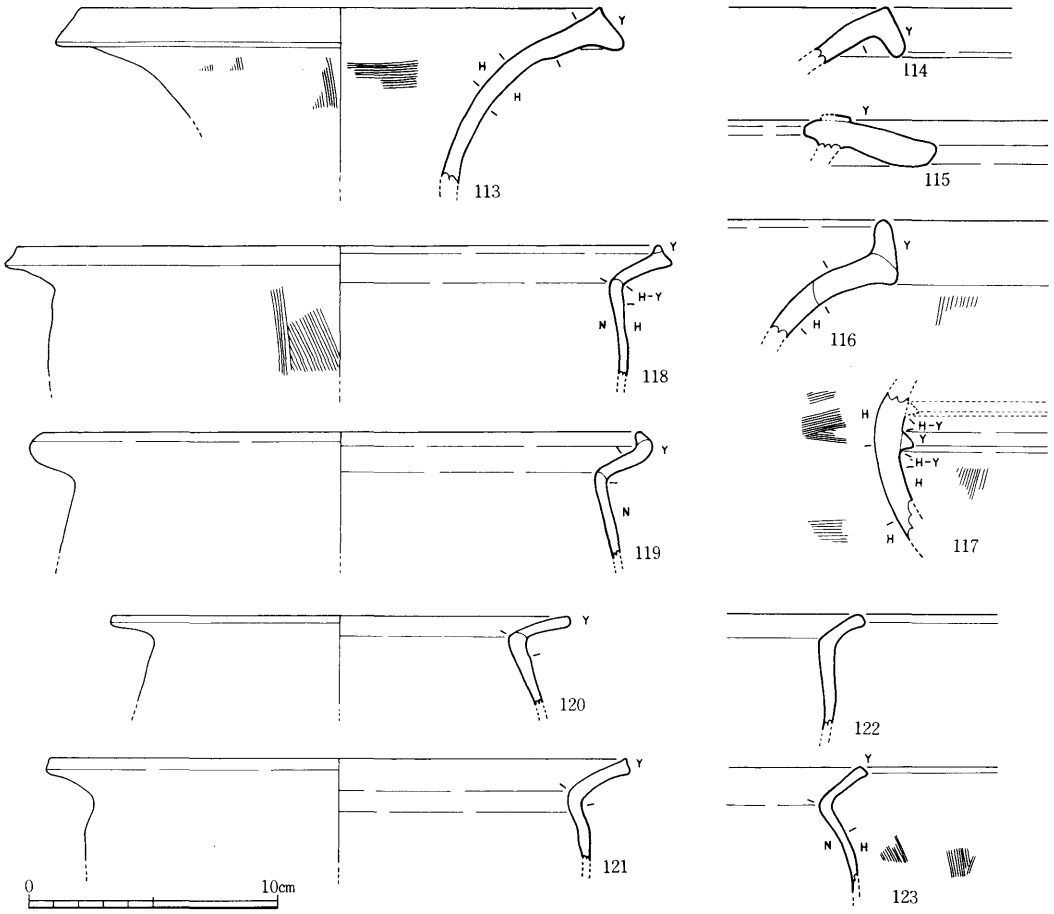


Fig. 43 土器溜り出土遺物実測図 (1)

である。

出土遺物には弥生土器壺・甕・鉢、剥片などがある。

出土遺物 (Fig. 43・44, PL. 19～21)

113～117は壺。113・114は下垂する口縁部をもち、拡張部外面には施文はない。113は下垂度が小さく、口縁端部は尖りぎみに終わる。115は鋤先状口縁になるもので、下垂する口縁部の拡張部外面の内側寄りに円形浮文を貼付する。口縁部の内側への張り出しは強い。116は口縁端部が上方に立ち上がる。117は頸部外面に断面三角形の貼付突帯を少なくとも2条貼付する。

118～127は甕。118・119は跳ね上げ口縁になるものである。前者は口縁部が直線的に開くが、後者は内弯しながら開く。119は外面と口縁部内面の上半に、部分的に煤が付着する。

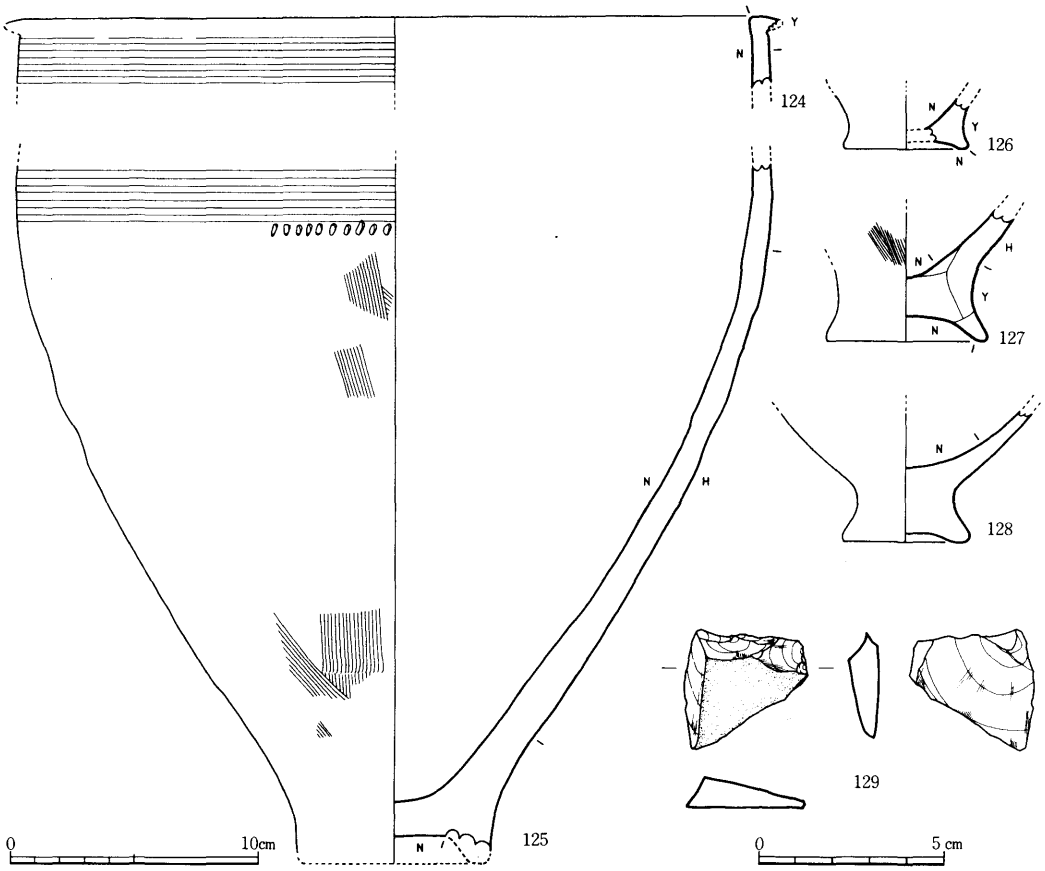


Fig. 44 土器溜り出土遺物実測図（2）

120～123は「く」の字に屈曲する口縁部をもつ。124と125は同一個体である。口縁部は端部外面に断面三角形の粘土帯を貼付し、逆「L」字形に短く開くものと思われる。口縁部直下の外面には櫛描の直線文、その下位にヘラによる刺突文を施文する。126・127は側面が裾広がりになる底部で、窪み底（126）と上げ底（127）のものがある。

128は台付鉢の底部であろう。底径は小さい。

129は寸づまりな横長剥片。裏面が主要剥離面で、正面上端部の剥離面を打面として剥片剥離作業が行なわれる。正面の大半に自然面を残す。

(7) 性格不明の遺物（Fig. 45・46－133, PL. 13(4)・20）

調査区北東部の遺構面から出土した弥生時代前期末の甕である。ほぼ一個体分が出土したが、それに伴う遺構の掘り方が見あたらず、性格はわからない。甕の出土範囲は東西約

65cm、南北約80cmで、検出面から18cmまでの深さに集中する。

口径40.3cm、器高43.3cmの大形の甕で、器高に比べて口径が大きい。胴部最大径は口径をやや上回り、底部から約⅔ほど上位にある。口縁部は如意形に短く外反し、口唇部の下端にヘラによる浅い刻目を施す。口縁部直下の頸部外面には断面三角形の貼付突帯を1条貼付する。突帯頂部には刻目はない。内外面ともミガキは行われず、縦・斜刷毛目仕上げ。

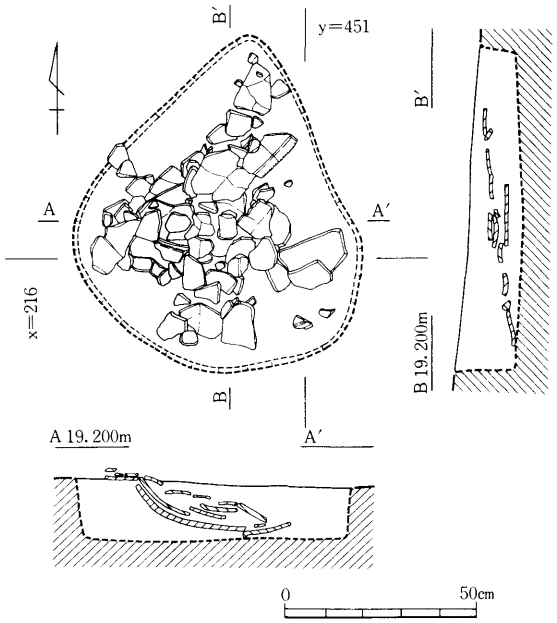


Fig. 45 性格不明の遺物出土状況実測図

(8) 遺構に伴わない遺物

(Fig. 46－130～132, PL. 19)

130～132は遺構面に貼りついた状態で出土した粗製の縄文土器。130は甕で、口縁端部は先細りとなり平坦。内外面とも横、斜め方向の条痕で、内面はその後ナデている。131は深鉢。口縁部は外弯しながら立ち上がり、口縁端部は尖りぎみに終わる。内面の調整は風化が著しく観察しにくいが、外面は横方向の粗い条痕で、口縁端部内面はその後ナデている。132は甕ないしは深鉢。内外面とも横方向の条痕で、内面はその後ナデる。「遺跡保存地区」の北東約150mに位置する教養部複合棟敷地では、弥生時代以降の遺構面を構成するオリーブ灰色粘質土(Hue10Y5/2)が縄文時代晩期の遺物包含層であり[4)]、「遺跡保存地区」の遺構面と同一の色調、組成であることから、縄文時代晩期中頃～後半に属するものと考えられる。

3 小結

第3・4次調査で検出した遺構は、上述したように竪穴住居跡4棟、土壙18基、溝6条、河川跡のほか柱穴多数である。

竪穴住居跡は弥生時代中期前半（第20号竪穴住居跡）、中期後半（第21号竪穴住居跡）、弥生時代中期と考えられるもの（第14号竪穴住居跡）および古墳時代初頭（第19号竪穴住居跡）各1棟の計4棟を検出した。

このうち、平面形態円形の第20号竪穴住居跡は、住居の南縁に沿って出入口と考えられる住居外への張り出しが認められた。遺跡保存地区では第2・9号竪穴住居跡に次いで3例

Fig. 46 性格不明および遺構に伴わない遺物実測図

目の検出例である。

また、第21号竪穴住居跡は平面形態が隅丸長方形で、弥生時代の竪穴住居跡の平面形態が方形から円形へと移行する、前期後半～末頃を第一の画期とするならば、円形から方形へ再び変化する第二の画期に相当する住居である。宇部市北迫遺跡[5]、防府市大崎遺跡[6]、熊毛郡熊毛町岡山遺跡[7]で類例がみられるように、床面積は大半が約20㎡弱の小形である。この時期から大形化する一部の円形住居を除いて他の円形の住居と同規模かやや小さく、平面形態による規模の差はみられない。各住居とも壁溝をもたない点も共通する。

また、この住居には、内径約16m、外径約18m、上面幅100～120㎝の規模をもち、周囲を弧状に巡る断面「U」字形の溝が付属施設として設けられている。住居と溝の内縁との距離は、西辺からは約7.6m、北辺からは約5.9m、東辺からは約4.6mである。住居は円形に区画された空間の中央部からやや東寄りに位置するが、「弥生時代の集落では、併存住居間に最低約20m程度の距離が保たれ[8]」ていると想定されていることから、区画内に他の住居の同時併存は考えにくい。また、住居と溝との空間地には住居に伴うと考えられる2基の土壙が並列して存在することから、この溝で区画された約250㎡のエリアが遺跡保存地区の集落内における弥生時代中期後半の1軒の住居の占有面積と考えられる。県内では豊浦郡菊川町下七見遺跡[9]、下関市秋根遺跡[10]などで後期終末の住居の周囲を巡る溝の報告例があるが、いずれも住居と溝の内縁との距離は約1～2mで、住居外に設けられた雨水処理のための雨落排水溝と考えるのが妥当で、本例とは性格の異なるものである。

なお、南半部は遺跡保存地区外にあたるため完掘しておらず、開口部の存否は不明である。

土壙は18基検出した。帰属時期の明らかでない9基を除いた内訳は、弥生時代中期中頃1基、中頃～後半1基、後半2基、後期前半1基のほか、中期3基、後期1基である。このうち、第67・69号土壙は第21号竪穴住居跡に付設した土壙と考えられる。 平面形態は不整形な楕円形に近いものが多く、円形、隅丸長方形のものもわずかに存在する。規模は、長軸66㎝、短軸38㎝の第53号土壙から長軸298㎝、短軸116㎝の第57号土壙までバラエティーに富み、規模の大小による時期的な差異はみられない。長軸の短軸に対する割合も1.4～3.8までさまざまである。後世の削平によって残存状態は良くないが、断面形は逆台形をなす皿状のものが多い。長軸方向は北東－南西のものが半数を占め、中期の土壙は北－南の長軸方向をもつものはない。

溝は、北－南および北西－南東に直線的に走行するものが多い。後世の削平、攪乱によっ

て残存状態は悪く、完結するものはない。また、出土遺物も少なく、時期がわかるのは弥生時代中期後半の第６・９号溝だけある。このうち、第９号溝は上面幅30～60cmで、断面形は「Ｖ」字形に近く、溝底は狭い。検出面からの深さは約15cmを残すにすぎない。

河川跡は調査区東端部で検出した。北部で幅約１～３ｍ、南部で幅約４～５ｍの規模をもち、最大幅は約10ｍにもおよぶ。検出面からの深さは約70～100cmで、南東から北西へ分流して走行する。

出土遺物のうち、注目しておきたいものが若干ある。

第20号竪穴住居跡出土の一括遺物で、出土遺物には弥生土器壺・甕・高坏などがある。甕のなかには直口する口縁部をもち、口縁端部からやや下位に断面台形の貼付突帯を貼付する下城式[11)12)]の甕が含まれている。口縁端部は平坦で、突帯の頂部にはヘラによる刻目を施す。共伴する甕には跳ね上げ口縁がすでに出現しているが、上方への突出度は小さい。

また、壺は口縁部が大きく開き、端部を上下両方あるいは下方にややつまみだし、肥厚させるものである。端部外面は狭いながらもすでに施文を意識した拡張部をもち、ヘラによる鋸歯文を施文する。周防部に通有の口縁端部が下垂する壺の古い段階のものである。また、口縁部の未発達な鋤先状口縁も含まれており、須玖Ｉ式でも古い要素をもつものである。以上の土器を中期前半の資料として着目しておきたい。

河川跡から出土した鞴の羽口は、奈良時代のもので、構内遺跡では二例目である[13)]。県内では下右田遺跡[14)]、円光寺遺跡[15)]などの集落遺跡からの出土例があるが、いずれも中世のもので、本例によって県内ではかなり早い段階から当地で精錬が行われていたことが明らかとなった。

4　あとがき

以上、昭和57年度以降、四次にわたる遺跡保存地区の調査の成果を報告した。昭和42年以降の統合移転に伴う施設整備のさなかにあって、当地区に埋存する遺構が現地保存されたことは、遺跡保存地区が構内遺跡でも弥生時代以降の住居形式・構造および集落形態・規模の時期的な変遷過程が学習できる、学術、研究上極めて良好な遺構分布地域であることが強く認識された結果であった。しかし、調査後は再び埋め戻され、活用、公開はほとんどなされていないのが現状である。将来的には、遺跡公園として調査データを反映した竪穴住居跡、河川跡、溝などの立体的な復原を行い、大学独自の積極的な利用形態を図ることが課題となるであろう。全学の御支援をお願いしたい。

なお、遺跡保存地区の総括は次年報に譲ることとし、最後に、きびしい予算のなか調査

の実施にあたって御理解、御助力を惜しまれなかった関係各位に心より深謝する所存である。

[注]

1) 河村吉行「山口大学構内遺跡遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1986年）。

なお、今回報告した遺物の整理過程で、第1次調査時に検出した第3号土壙の出土遺物が1点未報告のままであることが判明した。134（Fig47,PL.20）がそれで、頸部外面に断面三角形の扁平な2条の貼付突帯を貼付する壺である。突帯の下位にはヘラによる線刻がなされているが、下半部は欠損している。アーチ状の円弧を向かって左から右へ互いの端部が交差するように描き、各端部から下方に直線的に沈線を線刻する。できあがった少なくとも横三列に重複する幅約5㎝の楕円形状の区画の中には、左側、中央部では4本、右側では少なくとも2本の沈線が縦に線刻されている。中央部と左側は各2本の沈線が上部で交差し、山形になるが、左側では左半部の2本の沈線は交差していない。

突帯より上位は横ナデ、他はナデ仕上げ。成形は粗雑であるが、胎土、焼成は精良。内外面とも浅黄橙色（Hue 7.5YR8/3）を呈する。

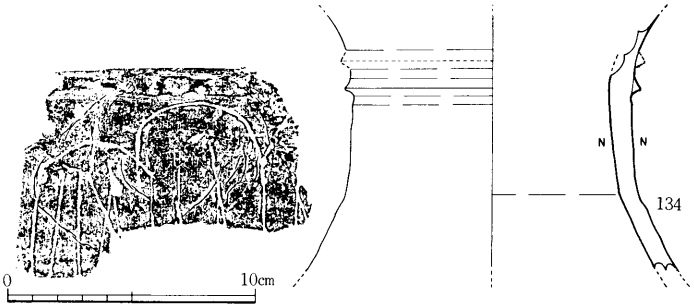


Fig. 47 第3号土壙出土遺物実測図

2) 河村吉行「山口大学構内遺跡遺跡保存地区の発掘調査（昭和59年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1987年）。
3) 注1）に同じ。
4) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』、1988年）。
5) 小野忠熙「北迫遺跡」（『宇部の遺跡』、宇部市教育委員会、1968年）。
6) 三戸田晃司・山本源太郎「大崎遺跡」（『奥正権寺遺跡Ⅱ・大崎岡古墳群・大崎遺跡』、山口県教育委員会、1985年）。
7) 小野忠熙「岡山遺跡」（『島田川』、山口大学島田川遺跡学術調査団、山口大学、1953年）。
8) 藤田憲司「単位集団の居住領域－集落研究の基礎作業として－」（『考古学研究』、第31巻第2号、考古学研究会、1984年）。
9) 村岡和雄・磯部貴文『下七見遺跡Ⅰ』（菊川町教育委員会、1989年）。
10) 下関市教育委員会『秋根遺跡』（1977年）。
11) 後藤宗俊『台ノ原遺跡』（大分県教育委員会、1975年）。
12) 坂本嘉弘「宮ノ原遺跡出土の土器」（『宮ノ原遺跡』、安心院町教育委員会、1984年）。
13) 河村吉行・福島朝子「吉田構内大学会館排水管布設に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1985年）。
14) 山口県教育委員会『下右田遺跡第4次調査概報・総括』（1980年）。
15) 山口県教育委員会『円光寺遺跡』（1987年）。

Tab. 4 出土遺物観察表

法量（ ）は復原値

番号	器種	法量（cm） (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
第19号竪穴住居跡（Fig. 25）						
1	弥生土器 壺	②(5.0)	①にぶい黄橙色(10YR5/3) ②褐灰色(5YR4/1)	やや不良	良好	
2	弥生土器 甕	②(6.2)	①②にぶい橙色(7.5YR7/3) 外底面 黒色(7.5YR1.7/1)	やや不良	良好	
3	土師器 甕	①(23.5)	にぶい橙色(7.5YR7/3)	良好	良好	複合口縁
4	土師器 甕		①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②灰褐色(7.5YR5/1)	不良	良好	
5	土師器 甕		①浅黄橙色(7.5YR8/2) ②灰白色(7.5YR8/4)	不良	やや不良	複合口縁
第20号竪穴住居跡（Fig. 27）						
6	弥生土器 壺		①浅黄橙色(7.5YR8/2) ②灰白色(7.5YR8/4)	やや不良	良好	内面に黒斑
7	弥生土器 壺		①浅黄橙色(7.5YR8/3) ②灰白色(7.5Y8/1)	不良	良好	
8	弥生土器 壺		浅黄橙色(10YR8/4)	不良	不良	鋤先状口縁
9	弥生土器 壺		浅黄橙色(10YR6/2)	良好	やや不良	
10	弥生土器 壺		橙色(5YR7/8)	不良	良好	
11	弥生土器 壺		にぶい橙色(7.5YR7/3)	良好	良好	
12	弥生土器 甕	①(29.0)	にぶい橙色(5YR6/4)	不良	良好	
13	弥生土器 甕		橙色(5YR7/8)	不良	良好	跳ね上げ口縁
14	弥生土器 甕		①にぶい褐色(7.5YR5/3) ②灰白色(2.5Y8/2)	良好	良好	跳ね上げ口縁
15	弥生土器 甕		にぶい黄橙色(10YR7/3)	精良	良好	跳ね上げ口縁 外面に煤付着
16	弥生土器 甕		にぶい褐色(7.5YR5/4)	不良	やや不良	跳ね上げ口縁
17	弥生土器 甕		灰白色(2.5Y8/2)	良好	良好	
18	弥生土器 甕		にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	精良	下城式
19	弥生土器 甕	②(6.4)	①にぶい赤褐色(2.5YR4/3) ②浅黄橙色(10YR8/3)	良好	良好	外底面黒色 (7.5YR7/1)
20	弥生土器 甕	②(7.9)	①にぶい褐色(2.5Y8/4) ②淡黄色(7.5YR6/3)	不良	良好	
21	弥生土器 甕	②(4.4)	①橙色(2.5YR7/6) ②灰黄褐色(10YR7/6)	良好	良好	
22	弥生土器 高坏		灰白色(7.5YR8/2)	不良	やや不良	
23	弥生土器 高坏		にぶい橙色(7.5YR6/3)	精良	やや不良	
24	弥生土器 高坏		淡橙色(5YR8/4)	精良	不良	
25	弥生土器 甑	②(7.9)	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②暗灰色(N3/0)	良好	良好	壺を転用 焼成後穿孔
第21号竪穴住居跡（Fig. 29）						
27	弥生土器 壺		浅黄橙色(7.5YR8/3)	不良	不良	
28	弥生土器 壺		灰白色(10YR8/2)	やや不良	良好	内外面に黒斑
29	弥生土器 甕		にぶい橙色(7.5YR7/4)	精良	良好	跳ね上げ口縁
30	弥生土器 甕	②(5.4)	①にぶい橙色(7.5YR7/1) ②暗褐灰色(5YR7/3)	不良	良好	
第53号土壙（Fig. 31）						
31	土師器 甕	①(10.8)	橙色(5YR7/6)	不良	やや不良	
第54号土壙（Fig. 31）						
32	弥生土器 甕		褐灰色(7.5YR5/1)	良好	良好	
33	弥生土器 甕		浅黄橙色(7.5YR8/3)	良好	良好	

出土遺物観察表

法量（　）は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
第56号土壙（Fig. 31）						
35	弥生土器 壺		①にぶい橙色(5YR7/3) ②浅黄橙色(2.5YR7/3)	良好	良好	
36	弥生土器 甕		①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②灰色(N4/0)	不良	良好	跳ね上げ口縁
37	弥生土器 甕		①にぶい橙色(5YR4/1) ②灰色(5YR4/1)	良好	良好	跳ね上げ口縁
第57号土壙（Fig. 31）						
38	弥生土器 甕	①(33.0)	灰白色(2.5Y8/2)	良好	やや不良	
第58号土壙（Fig. 31）						
39	弥生土器 甕	①(24.6)	①にぶい赤褐色(5YR4/3) ②灰白色(7.5YR8/2)	良好	やや不良	跳ね上げ口縁
40	弥生土器 甕	②(6.4)	①浅黄橙色(7.5YR8/3) ②褐灰色(10YR4/1)	良好	やや不良	
第59号土壙（Fig. 31）						
41	弥生土器 甕	①(20.8)	①灰褐色(5YR5/2) ②灰白色(7.5YR8/1)	良好	良好	
42	弥生土器 甕	①(19.8)	灰白色(2.5Y8/2)	不良	良好	跳ね上げ口縁
43	弥生土器 甕	②8.4	①淡橙色(5YR8/3) ②明褐灰色(7.5YR7/1)	不良	良好	
44	弥生土器 高坏		赤橙色(10R6/4)	良好	良好	
第69号土壙（Fig. 34）						
45	弥生土器 壺	①(17.4)	浅黄橙色(7.5YR8/4)	良好	やや不良	
46	弥生土器 壺		浅黄橙色(7.5YR8/4)	良好	不良	
47	弥生土器 甕	①(18.4)	①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②黄灰色(2.5Y6/1)	良好	良好	跳ね上げ口縁
48	弥生土器 甕		淡橙色(5YR8/3)	良好	良好	跳ね上げ口縁
49	弥生土器 甕		①灰赤色(2.5YR6/2) ②浅黄橙色(7.5YR8/3)	やや不良	良好	跳ね上げ口縁
50	弥生土器 甕		黒褐色(10YR3/1)	良好	良好	下城式
51	弥生土器 甕	② 5.9	褐灰色(5YR6/1)	良好	良好	
52	弥生土器 甕	②(5.7)	①灰褐色(7.5YR6/2) ②灰色(N4/0)	良好	良好	
53	弥生土器 高坏		灰白色(10YR7/1)	良好	良好	外面の大部分に黒斑
第66号土壙（Fig. 34）						
54	弥生土器 甕	② 7.6	①浅黄橙色(7.5YR8/3) ②褐灰色(10YR5/1)	良好	良好	
第6号溝（Fig. 37・38）						
55	弥生土器 壺	①(21.0)	浅黄橙色(10YR8/3)	良好	不良	鋤先状口縁 円形浮文
56	弥生土器 壺		淡赤橙色(2.5YR7/4)	不良	良好	鋤先状口縁
57	弥生土器 壺		橙色(2.5YR6/6)	不良	不良	
58	弥生土器 壺		①淡橙色(5YR8/4) ②にぶい橙色(5YR7/3)	不良	やや不良	
59	弥生土器 壺	①(22.2)	①褐灰色(7.5YR5/1) ②淡橙色(5YR8/4)	良好	良好	
60	弥生土器 壺		①淡黄色(2.5Y8/4) ②灰白色(7.5YR8/1)	良好	良好	
61	弥生土器 壺	①(18.0)	淡黄色(2.5Y8/3)	精良	精良	
62	弥生土器 壺	①(12.4)	①淡橙色(5YR8/4) ②灰白色(10YR8/2)	不良	不良	
63	弥生土器 壺		淡橙色(5YR8/4)	やや不良	良好	
64	弥生土器 壺	②(7.1)	①淡赤橙色(2.5YR7/4) ②灰白色(2.5Y8/2)	良好	良好	
65	弥生土器 壺	②(5.8)	①淡橙色(5YR8/4) ②橙色(5YR8/4)	不良	やや不良	
66	弥生土器 壺	②(10.6)	明褐灰色(7.5YR7/2)	不良	良好	

法量（ ）は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
67	弥生土器 壺	② 6.4	①淡黄橙色(10YR4/3) ②褐灰色(10YR5/1)	不良	良好	
68	弥生土器 甕	①(25.0)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	良好	跳ね上げ口縁
69	弥生土器 甕		灰白色(7.5YR8/1)	良好	不良	跳ね上げ口縁
70	弥生土器 甕		にぶい橙色(7.5YR7/4)	良好	良好	跳ね上げ口縁
71	弥生土器 甕	①(25.2)	①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②明赤褐色(5YR5/6)	良好	良好	跳ね上げ口縁
72	弥生土器 甕	①(17.6)	①灰黄褐色(10YR6/2) ②灰白色(2.5Y8/1)	不良	良好	
73	弥生土器 甕		①橙色(5YR7/8) ②赤灰色(2.5YR6/1)	不良	やや不良	
74	弥生土器 甕		①淡橙色(5YR8/3) ②橙色(2.5YR7/6)	不良	やや不良	
75	弥生土器 甕		浅黄橙色(10YR8/3)	良好	良好	
76	弥生土器 甕	①(13.2)	褐灰色(7.5YR5/1)	良好	良好	
77	弥生土器 甕	②(7.5)	橙色(2.5YR6/8)	良好	不良	
78	弥生土器 甕	② 5.6	①赤灰色(2.5YR6/1) ②赤橙色(10Y6/8)	不良	良好	
79	弥生土器 壺	② 7.0	①淡橙色(5YR8/3) ②にぶい橙色(5YR7/4)	不良	良好	
80	弥生土器 甕	② 4.4	①橙色(2.5YR6/6) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	良好	良好	
81	弥生土器 鉢	①(14.0)	①明褐灰色(5YR7/2) ②灰白色(7.5YR8/2)	やや不良	やや不良	
82	弥生土器 高坏		①灰白色(10YR8/1) ②暗灰色(N3/0)	不良	良好	
83	弥生土器 高坏		①淡橙色(5YR8/3) ②赤橙色(10R6/6)	不良	良好	
84	弥生土器 高坏	②(18.9)	にぶい橙色(5YR7/3)	精良	良好	
85	弥生土器 高坏	②(18.9)	①淡橙色(5YR8/3) ②赤橙色(2.5YR7/8)	やや不良	良好	
第9号溝（Fig.39）						
88	弥生土器 甕		明褐灰色(7.5YR7/1)	精良	良好	跳ね上げ口縁
89	弥生土器 甕		橙色(2.5Y7/8)	やや不良	不良	跳ね上げ口縁
柱穴（Fig.40）						
90	弥生土器 甕	②(7.8)	①橙色(2.5YR7/8) ②浅黄橙色(10YR8/3)	不良	良好	
91	弥生土器 壺		①灰白色(7.5YR8/2) ②淡赤橙色(2.5Y7/4)	不良	やや不良	
92	土師器 鉢or 埦		①浅黄橙色(10YR8/3) ②灰白色(7.5YR8/2)	不良	良好	
河川跡（Fig.42）						
93	弥生土器 壺		①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②淡黄色(2.5Y8/3)	良好	良好	
94	弥生土器 壺		①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②褐灰色(5YR6/1)	精良	精良	
95	土師器 甕		橙色(2.5YR6/8)	不良	不良	布留式
96	土師器 甕		①にぶい橙色(5YR7/4) ②褐灰色(10YR4/1)	やや不良	やや不良	
97	土師器 甕	①(19.2)	灰黄褐色(10YR6/2)	良好	精良	
98	土師器 甕	①(19.8)	①明赤褐色(2.5Y5/6) ②灰褐色(5YR5/2)	良好	良好	
99	須恵器 坏蓋		灰白色(N8/0)	やや不良	やや不良	
100	須恵器 坏蓋	①(17.0)	灰色(N6/0)	良好	良好	
101	須恵器 坏蓋	①(22.2)	①灰色(7.5Y4/1) ②淡黄色(2.5Y8/3)	良好	不良	
102	須恵器 坏身	①12.4 ②7.0 ③5.0	灰白色(N7/0)	不良	やや不良	
103	須恵器 坏身		青灰色(10BG6/1)	良好	堅緻	
104	須恵器 坏身	②(7.0)	明青灰色(10BG7/1)	良好	良好	

出土遺物観察表

法量（ ）は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
105	須恵器 坏身	②(7.6)	灰白色(N7/0)	良好	良好	
106	須恵器 坏身	②(8.4)	①灰白色(N7/0) ②明青灰色(5B7/1)	やや不良	良好	
107	須恵器 坏身	②(8.4)	①青灰色(10GB6/1) ②明青灰色(10BG7/1)	不良	良好	
108	須恵器 坏身	②(9.4)	灰白色(N7/0)	精良	良好	
109	弥生土器 壺or鉢	②(8.2)	灰白色(2.5Y8/2)	良好	やや不良	
110	弥生土器 甕	② 7.0	にぶい橙色(2.5YR6/3)	良好	精良	
111	須恵器 坏身	①(11.8)	①暗青灰色(10BG4/1) ②青灰色(10BG6/1)	精良	堅緻	
土器溜り（Fig.43・44）						
113	弥生土器 壺	①20.8	淡赤橙色(2.5YR7/4)	良好	良好	
114	弥生土器 壺		淡黄色(2.5Y8/4)	良好	不良	
115	弥生土器 壺		浅黄橙色(10YR8/3)	やや不良	やや不良	鋤先状口縁
116	弥生土器 壺		浅黄橙色(7.5YR8/3)	良好	不良	
117	弥生土器 壺		にぶい橙色(5YR7/4)	精良	精良	
118	弥生土器 甕	①(25.8)	にぶい橙色(5YR7/4)	良好	良好	
119	弥生土器 甕	①(24.0)	にぶい橙色(5YR7/4)	良好	良好	外面に煤付着
120	弥生土器 甕	①(18.4)	①橙色(5YR7/6) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	やや不良	やや不良	
121	弥生土器 甕	①(23.2)	灰褐色(5YR6/1)	不良	良好	
122	弥生土器 甕		灰白色(7.5YR8/2)	不良	やや不良	
123	弥生土器 甕		にぶい黄橙色(10YR7/2)	良好	やや不良	
124	弥生土器 甕	①(28.8)	①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②にぶい橙色(5YR7/4)	不良	良好	125と同一個体
125	弥生土器 甕	②(7.5)	①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②にぶい橙色(5YR7/4)	不良	良好	124と同一個体
126	弥生土器 甕	②(4.9)	①にぶい赤橙色(10R6/4) ②暗灰色(N3/0)	良好	良好	
127	弥生土器 甕	② 6.3	①灰白色(10YR8/2) ②明褐灰色(7.5YR7/2)	やや不良	良好	
128	弥生土器 台付鉢	② 5.0	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②黒褐色(10YR3/1)	やや不良	不良	
性格不明および遺構に伴わない遺物（Fig.46）						
130	縄文土器 甕		①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②にぶい橙色(7.5YR7/3)	精良	良好	粗製
131	縄文土器 深鉢		①明褐灰色(7.5YR7/2) ②黒色(N2/0)	良好	やや不良	粗製
132	縄文土器 甕or深鉢		①灰白色(5YR8/1) ②黒色(N2/0)	不良	良好	粗製
133	弥生土器 甕	①(39.4) ②(14.4) ③42.3	淡黄色(2.5Y8/3)	不良	良好	

法量（ ）は現存値

番号	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石質	備考
第20号竪穴住居跡（Fig.27）							
26	石核	7.45	4.4	3.6	111.4	姫島産黒曜石	
第54号土壙（Fig.31）							
34	敲石	10.0	(6.0)	4.1	372.8	デイサイト	転礫河原石
第6号溝（Fig.38）							
86	石鏃	2.0	0.9	0.25	0.43	安山岩	剥片鏃 平基無茎式
87	二次加工のある剥片	7.1	1.75	1.3	49.31	安山岩	
土器溜り（Fig.44）							
129	剥片	3.1	0.8	0.8	6.5	安山岩	

付篇Ⅱ

吉田構内本部２号館新営に伴う発掘調査

１　調査の経過

調査地域は吉田構内の中央部からやや北寄りに位置し、標高約200ｍの姫山から南に延びる丘陵が西に向かって舌状に張り出す洪積台地上に立地する。

昭和54年、本部１号館の北東側に隣接して２号館の新営が計画された。本部１号館の敷地では、弥生時代後期の土壙、古墳時代のものと思われる竪穴住居跡、土壙、溝状遺構および古墳～室町時代の柱穴が多数検出されている。また、北側の家畜飼料園でも弥生、古墳各時代の竪穴住居跡、溝の検出例が報告されている[1) 2) 3)]。新営予定地でもその立地、本部１号館との位置関係などから埋蔵文化財の埋存が十分予想されたため、埋蔵文化財資料館は同年８月20日から９月10日にかけて試掘調査を行なった。

試掘調査は、幅約２ｍのトレンチを新営予定建物の西（Ａトレンチ）、南（Ｂトレンチ）の両辺に沿って設定して行なった。その結果、大学の統合移転前に存在した民家の基礎などによって攪乱を受け、遺構が消失していたＢトレンチ東部を除く両トレンチで弥生～古墳時代の柱穴を多数検出した。また、南西部では地山が大きく西に向かって下降しており、この落ち込み部分に弥生時代前期～古墳時代の遺物包含層が堆積していることが明らかとなった。

試掘調査の結果を受けて、埋蔵文化財資料館運営委員会で協議を行なった。その結果、本部２号館は１号館と機能的な位置関係にあることが望ましく、そのための代替建設地の確保が困難なことから、新営工事に先だって予定地約800㎡について、事前に発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、人文学部考古学研究室および山口県教育委員会の協力を得て、同年９月19日から11月20日にかけて実施した。

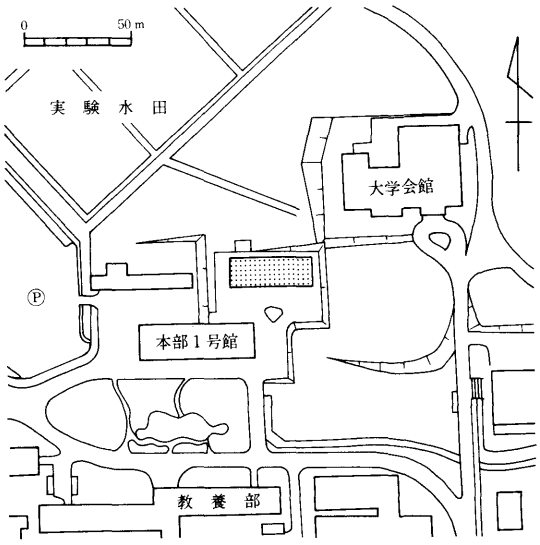


Fig. 48　調査区位置図

2　層位（Fig. 49, PL. 29）

新営予定地は調査前には家畜飼料園として活用されており、地表面は東から西へ延びる丘陵に対応してゆるやかに下降していた。東部で約22.10m、西部で約21.60mで、約50cmの比高差がある。

南東部は、大学の統合移転前に存在した民家の基礎、移転時の造成などによって攪乱を受け、層厚約60～70cmの表土直下が地山である。地山検出面の標高は約21.40～21.50mである。東端部では地山が東から西へ階段状にカットされており、大学移転前の水田の畦畔に伴うものと考えられる。

西半部では遺物包含層が堆積する。地山は約9/100の勾配で北東から南西へ下降し、層厚約80cmの表土の下位に第２層：旧耕作土、第３層：床土が厚さ約10～20cmにわたって存在する。その下には鉄分が沈着し、しまりの強い層厚約３～10cmの第４層：茶褐色土が堆積する。遺物包含層は第５～７層で、縄文時代晩期～古墳時代後期の遺物が多量に出土した。各層とも単一時期の遺物で構成されておらず、二次堆積の可能性が強い。包含層は地山の落ち込みに堆積しており、検出面の標高は約20.50～20.60mである。層厚は、第６層：黒褐色粘質土が最も厚く、最大で約40cm、第５層：茶褐色粘質土、第７層：黒色粘質土は約20cmである。第８層：褐色粘土、第９層：黒色粘土は無遺物層で、極めて粘性が強く、第９層下面では湧水する。地山面の標高は南東端部で約19.50mである。

3　トレンチ出土遺物

（1）Ａトレンチ出土遺物（Fig. 50・51, PL. 30･31･47･54･55）

弥生土器の壺・甕・高坏、土師器の高坏・台付鉢、歴史時代の土師器埦などの土器類のほか、打製石斧・石製円板・二次加工のある剥片などが出土した。

１～27は弥生土器。１～８は壺。１は胴部上半の外面にヘラによる無軸羽状文を施文する。２は鋤先状口縁をもつもので、口縁部は斜下方に開く。口縁部の内側への張り出しは強い。３は口縁端部外面に粘土帯を貼付するとともに、内面を上方につまみあげて端部を肥厚させる。頸部外面には断面台形状の貼付突帯が巡り、頂部には指圧による刻目を施す。４は下垂する口縁部をもち、３と同じく拡張部外面にはヘラによる鋸歯文を施文する。口縁部内面には断面三角形の低い貼付突帯を貼付する。５は胴部最大径の部位に断面三角形の貼付突帯が巡り、その上位に円形の浮文を貼付する。内面はヘラミガキののち横ナデの可能性がある。６～８は平底の底部。

９～24は甕。口縁部が如意形に短く外反するもの（13・14）、逆「Ｌ」字形に近く強く

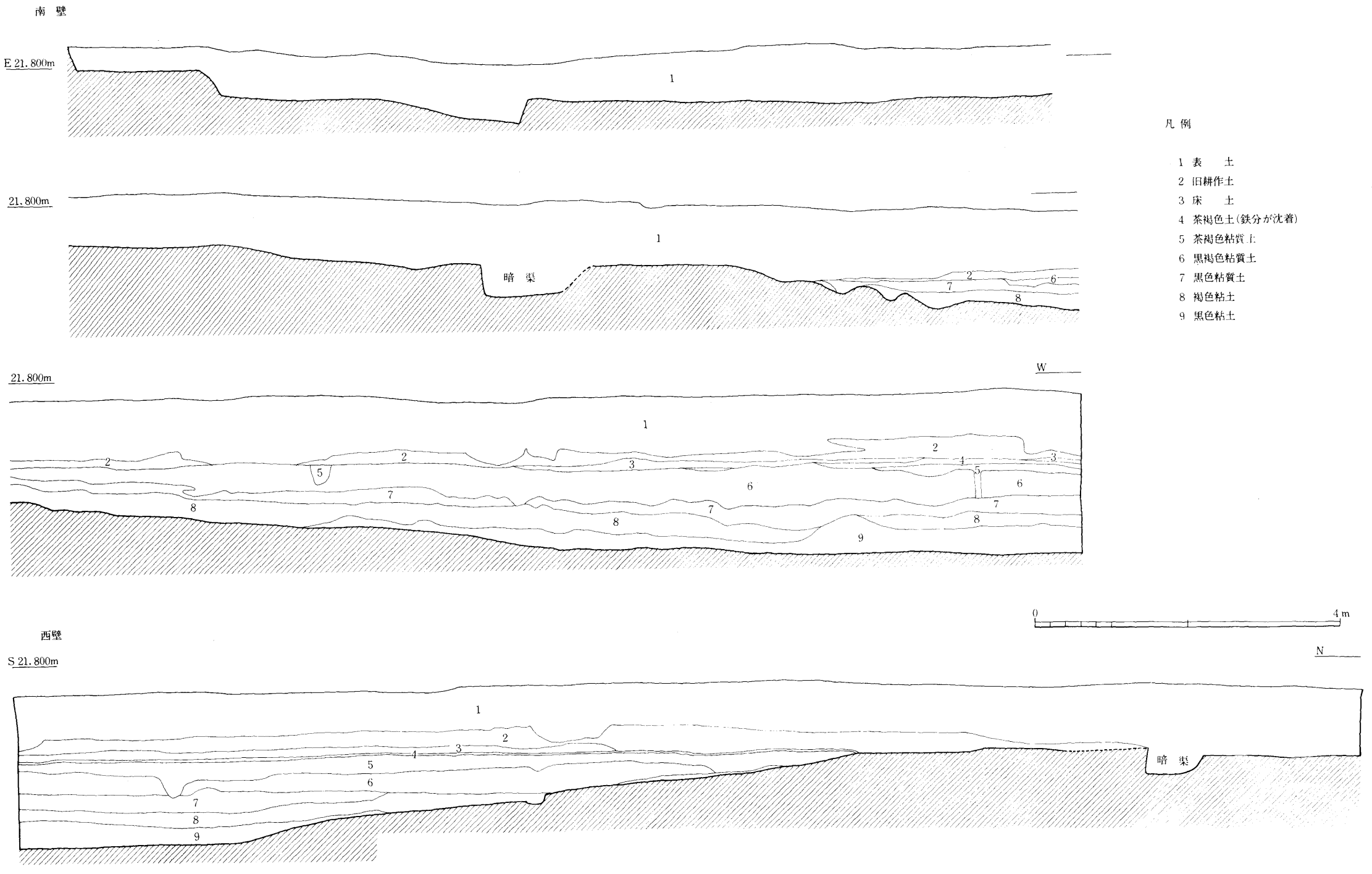

南 壁
E 21.800m
1
21.800m
1
暗 渠
2
6
7
8
21.800m
W
1
2
2
3
4
5
3
5
6
6
7
7
8
8
8
9
0
4 m
N
西壁
S 21.800m
1
2
3
4
5
6
7
8
9
暗 渠
凡 例
1 表 土
2 旧耕作土
3 床 土
4 茶褐色土(鉄分が沈着)
5 茶褐色粘質土
6 黒褐色粘質土
7 黒色粘質土
8 褐色粘土
9 黒色粘土

Fig. 49 土層断面図

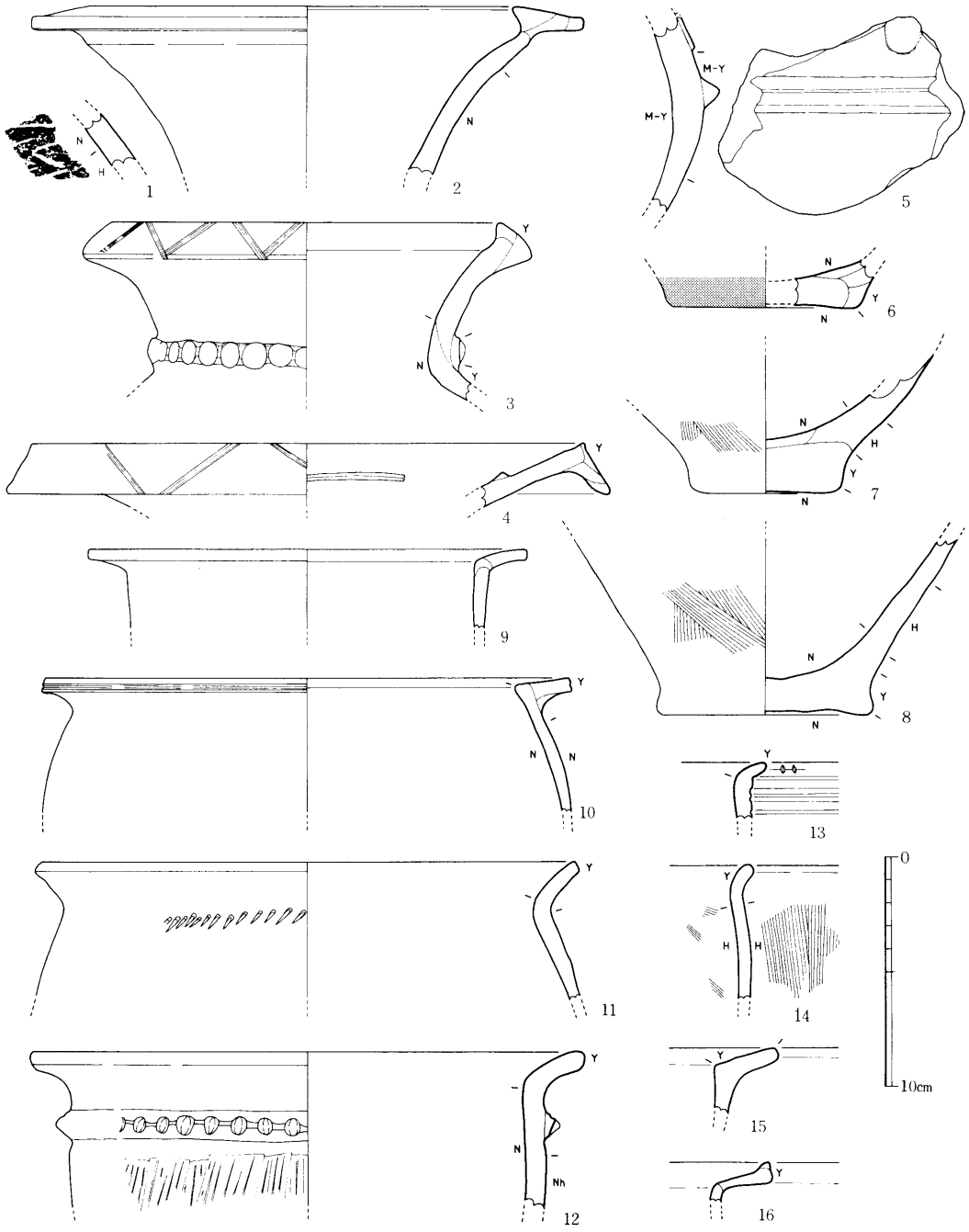


Fig. 50　Aトレンチ出土遺物実測図 (1)

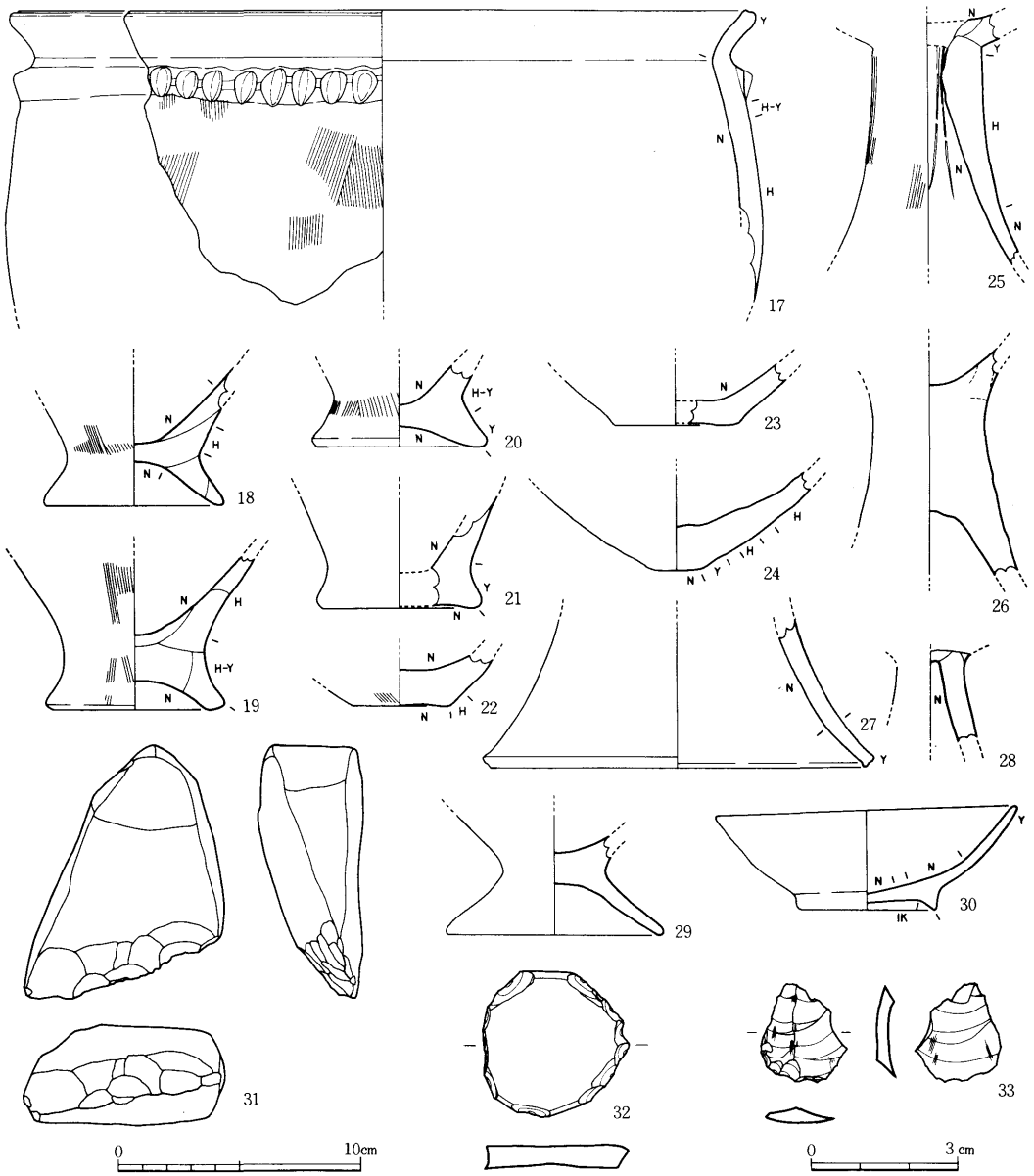


Fig. 51　Aトレンチ出土遺物実測図 (2)

屈曲するもの（9・10・15・16）、「く」の字に外反するもの（11・12・17）などがある。13は頸部以下に少なくとも４条の粗いヘラ描き沈線が巡り、口唇部下端にヘラによる刻目を施す。14は口唇部に刻目をもたない。10は須玖式の甕で、口唇部外面にヘラによる１条の沈線が巡る。16は跳ね上げ口縁をもつ。11は頸部外面にヘラによる「ノ」の字の粗雑な

刺突文を施す。12・17は張りの少ない胴部をもち、頸部下位には断面三角形の貼付突帯を1条貼付する。突帯頂部には指圧による刻目を施す。12は突帯の下位に板状工具による擦過が行なわれる。17は口唇部にヘラによる1条の浅い沈線が巡る。18～24は底部。上げ底で側面が裾広がりになるもの（18～20）、平底のもの（21～23）、丸底に近いもの（24）などがある。

25～27は高坏。25は坏部に脚部を接合する。27はゆるやかに開く裾部をもつが、傾きから壺かもしれない。

28・29は土師器。28は円盤充填法の高坏の脚部。29は台付鉢で、脚台部は直線的に斜下方に開く。

30は旧耕土から出土した歴史時代の土師器。断面三角形の高台をもち、体部はあまり内弯することなく立ち上がる。口縁端部はやや尖りぎみに終わる。

31は打製石斧。三角形を呈する素材の形状を生かし、二次加工は刃部にあたる正面下縁に裏面側から行なわれる。素材の長軸と刃部が斜交する。32は土器の器面調整に用いられたと思われる石製円板。二次加工は正裏両面から行なわれているが、正面上下両縁には加工痕はない。33は二次加工のある剥片。寸づまりの縦長剥片を素材とし、正面下縁および左側縁下半に裏面側から二次加工を施す。

（2）Bトレンチ出土遺物（Fig. 52, PL. 31・47・54）

弥生土器の壺・甕・高坏、磁器皿などの土器類のほか、打製石斧・磨製石斧・紡錘車などが出土した。

34～39は第5層から出土した弥生土器。34～37は壺。34は胴部上半に貝殻腹縁による無軸羽状文を施文する。35は口縁部が下垂する初段階のもので、口縁端部が上下に突出し、肥厚した拡張部外面にヘラによる鋸歯文を施文する。36・37は底部。36は胴部と底部の境がやや不明瞭である。37は底部が円盤状に突出する。38・39は甕。38は張りのほとんどない胴部をもち、口縁部は如意形に短く外反する。口唇部の全面にヘラによる刻目を施す。外面には煤が付着する。39は窪み底の底部。

40～48は第6層から出土した。40～46は弥生土器。40～43は壺で、40・41は胴部上半に貝殻腹縁による無軸羽状文を施文する。42・43は底部。42は器面の状態から外面はヘラミガキかもしれない。44・45は甕。如意形に外反する口縁部をもち、44は口唇部下端にヘラによる刻目を施す。46は高坏の坏部で、口縁端部は外反する。47は打製石斧。扁平な短冊形を呈し、周縁には正裏両面から比較的粗い二次加工が施される。正面下半、裏面には素

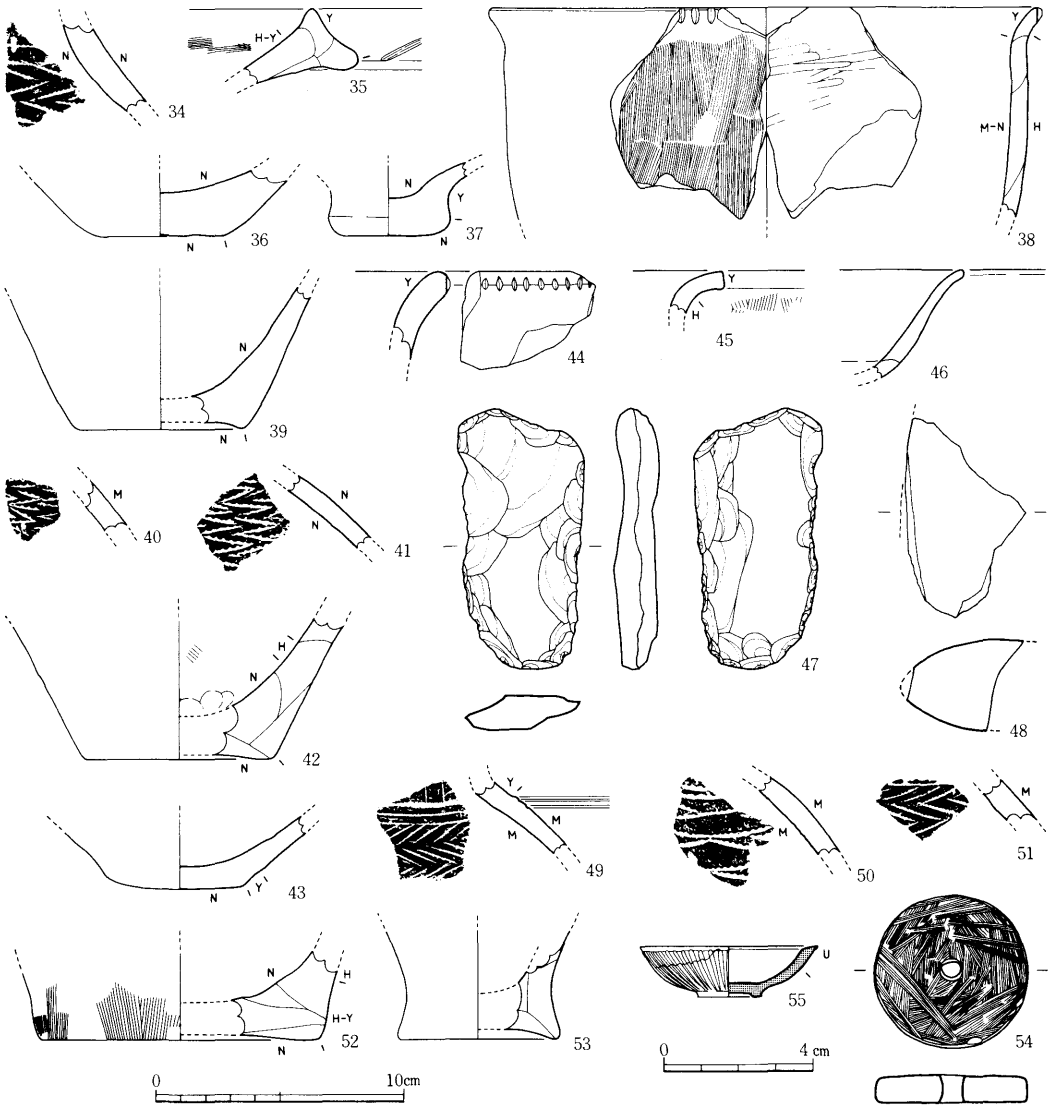


Fig. 52　Bトレンチ出土遺物実測図

材面を残す。48は磨製石斧で、正裏両面は丁寧に研磨される。

49～54は第７層から出土した。49～53は弥生土器。49～52は壺。49は肩部に削り出しによる低い段をもち、ヘラによる２条の沈線の下位に無軸羽状文を施文する。沈線の上位には縦の文様区画分割線がみられる。50・51は貝殻腹縁による羽状文が施文される。53はやや上げ底の甕の底部。54は大形の紡錘車で、正裏両面には丁寧な研磨が行なわれる。

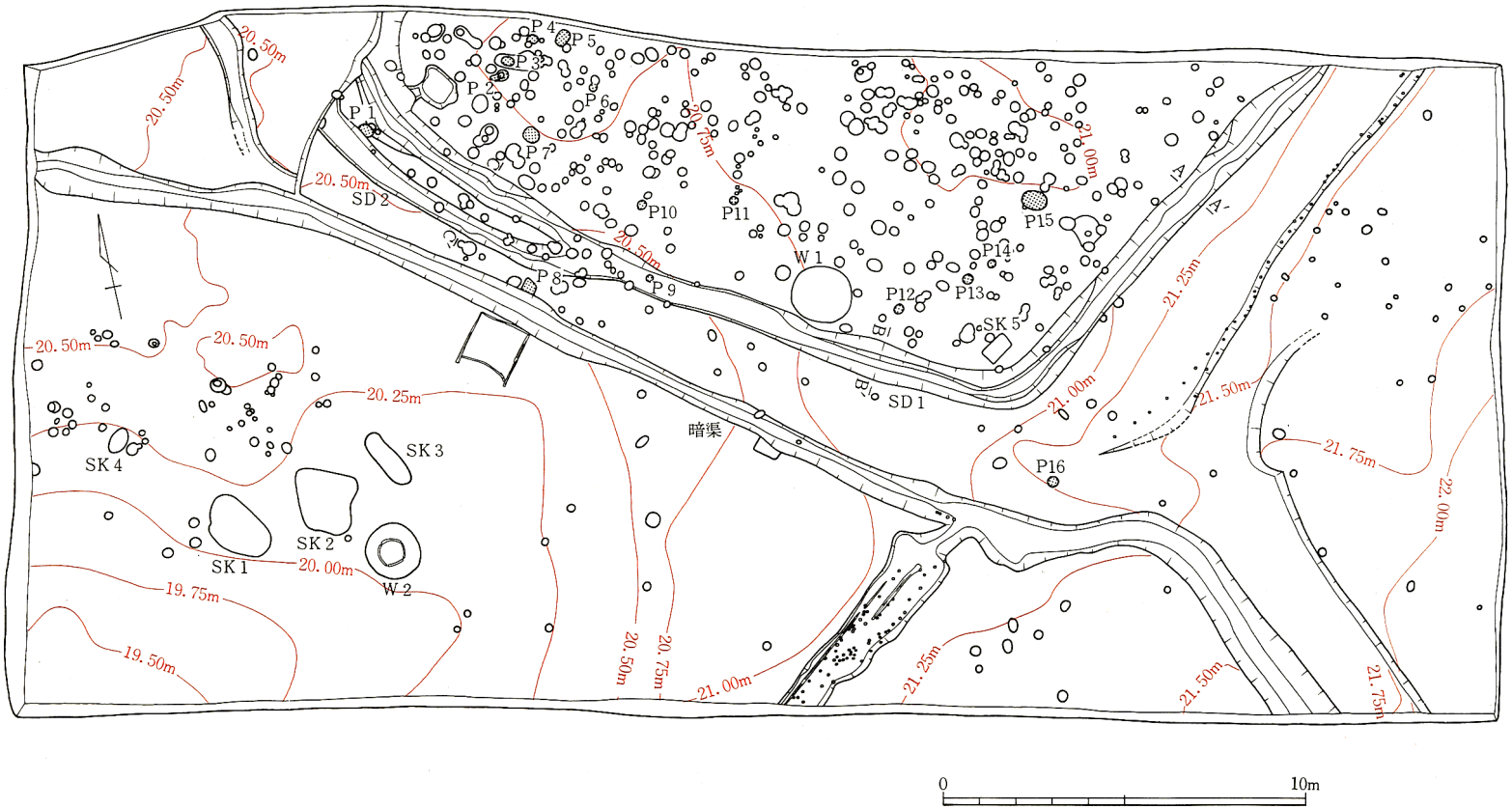

P 1
P 2
P 3
P 4
P 5
P 6
P 7
P 8
P 9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
W 1
W 2
SK 1
SK 2
SK 3
SK 4
SK 5
SD 1
SD 2
暗渠
20.50m
20.75m
21.00m
21.25m
21.50m
21.75m
22.00m
20.25m
20.00m
19.75m
19.50m
0
10m

Fig. 53　遺構配置図

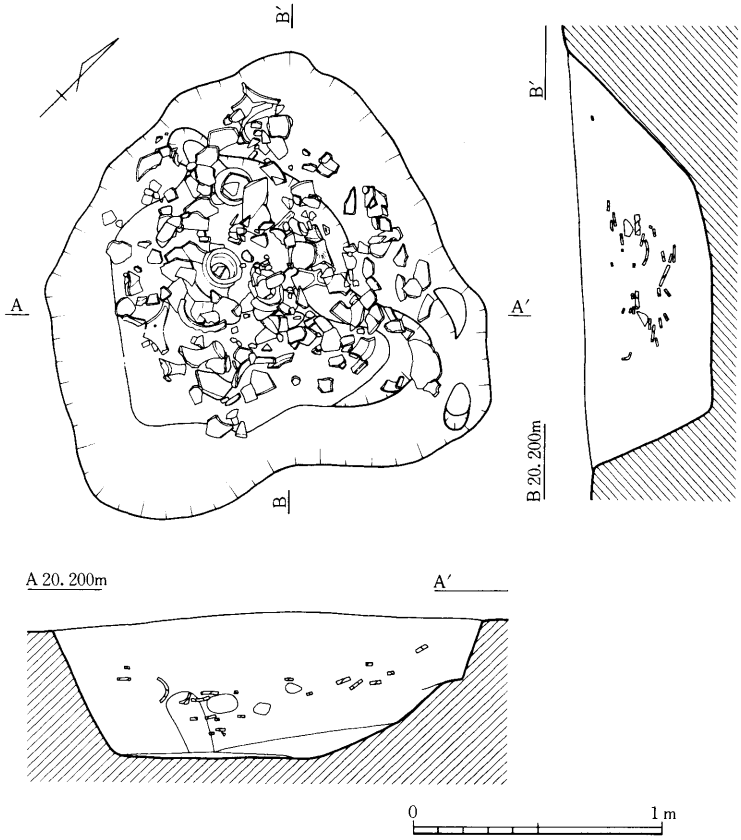


Fig. 54　第１号土壙実測図

55は旧耕土から出土した磁器の紅皿。伊万里系で、体部は内弯して立ち上がり、口縁端部には平坦な面をもつ。低い削り出し高台をもち、体部外面には菊花文を施文する。内面、体部外面上半に施釉する。

4　遺構・遺物

遺構は調査区内で多寡はあるが、ほぼ全面に分布しており、地山の落ち込む南西部では弥生時代の土壙４基、北半部の平坦面では環濠の内側に井戸、土壙墓を併設する室町時代の屋敷跡のほか、弥生時代から室町時代の柱穴多数を検出した。土壙は標高約20.00～20.25mの傾斜面に群集して分布する。なお、大学の統合移転前の井戸、水田に伴う暗渠もあわせて検出している。

（１）弥生時代の遺構・遺物

土壙

第１号土壙（Fig. 54, PL. 23(2)・24）

調査区の南西端部に位置する。平面形態は不整形な五角形で、東西軸174cm、南北軸167cmの規模をもつ。底面は平坦であるが、地山は北東から南西に下降しており、検出面からの深さは北東部で55cm、南西部で45cmである。検出面の標高は約20.00～20.10m、底面標高は約19.55mである。検出地点の状況から上部の削平は考えられず、土壙掘削時の規模、形態を保っているものと推察される。

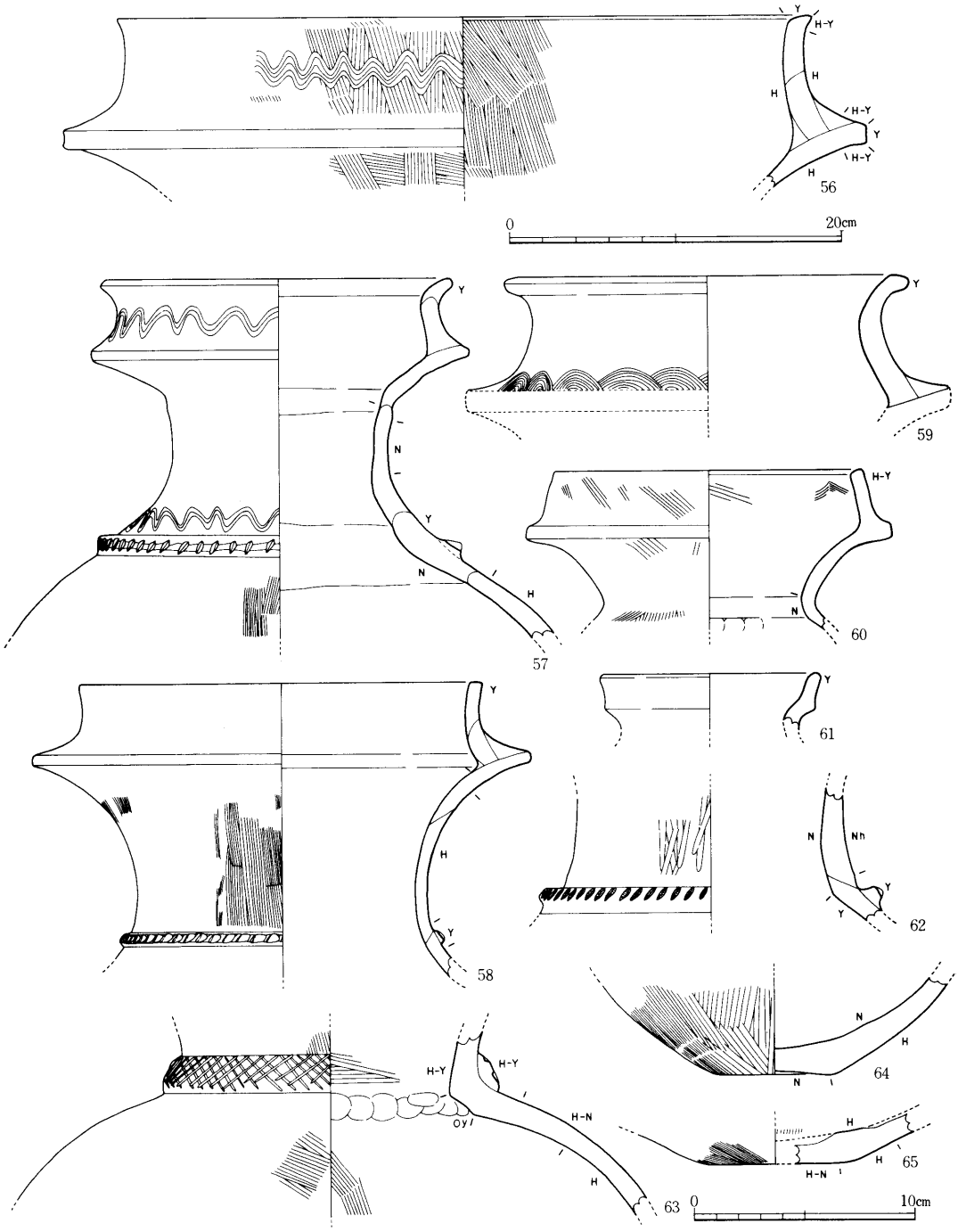


Fig. 55　第１号土壙出土遺物実測図(1)

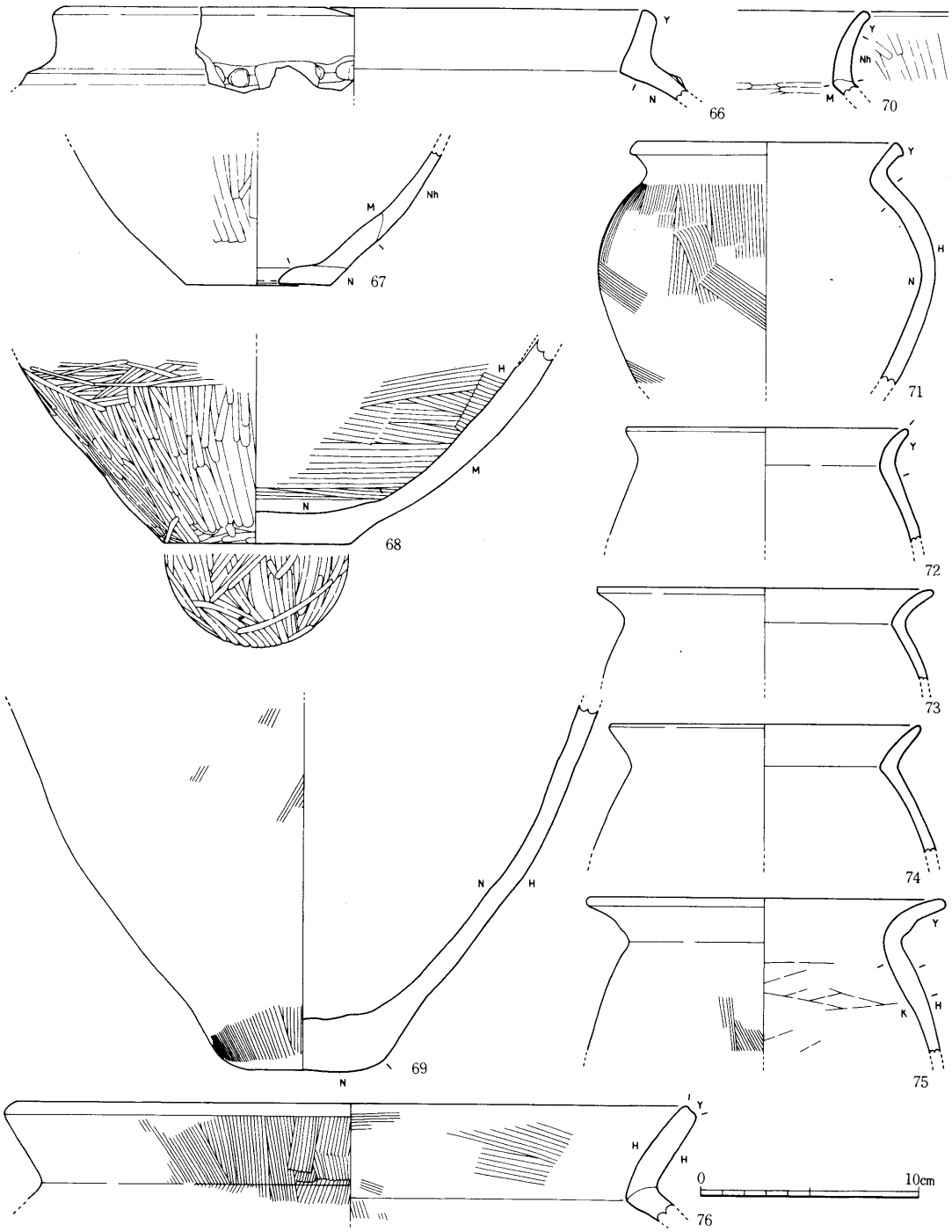


Fig. 56　第１号土壙出土遺物実測図(2)

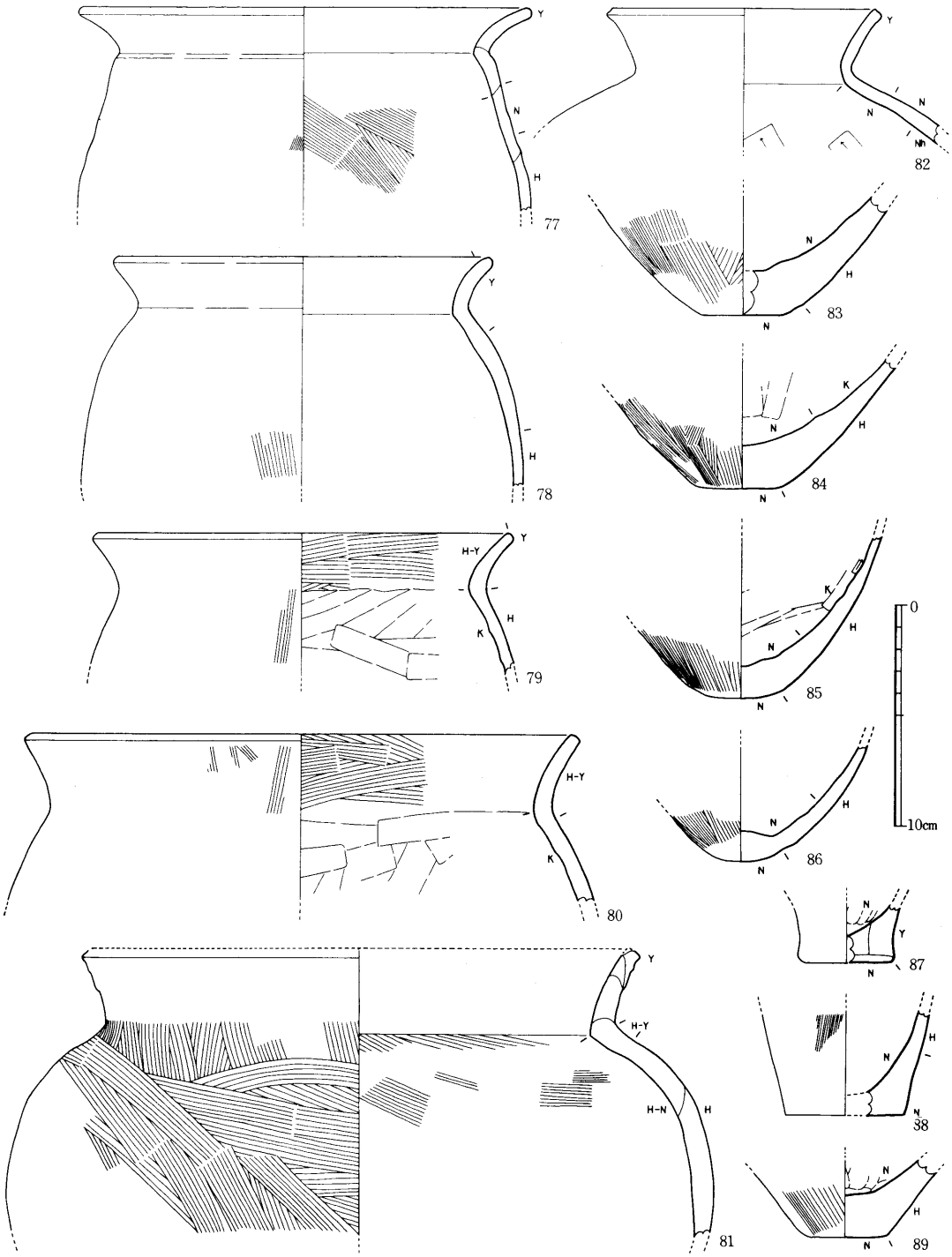


Fig. 57　第１号土壙出土遺物実測図(3)

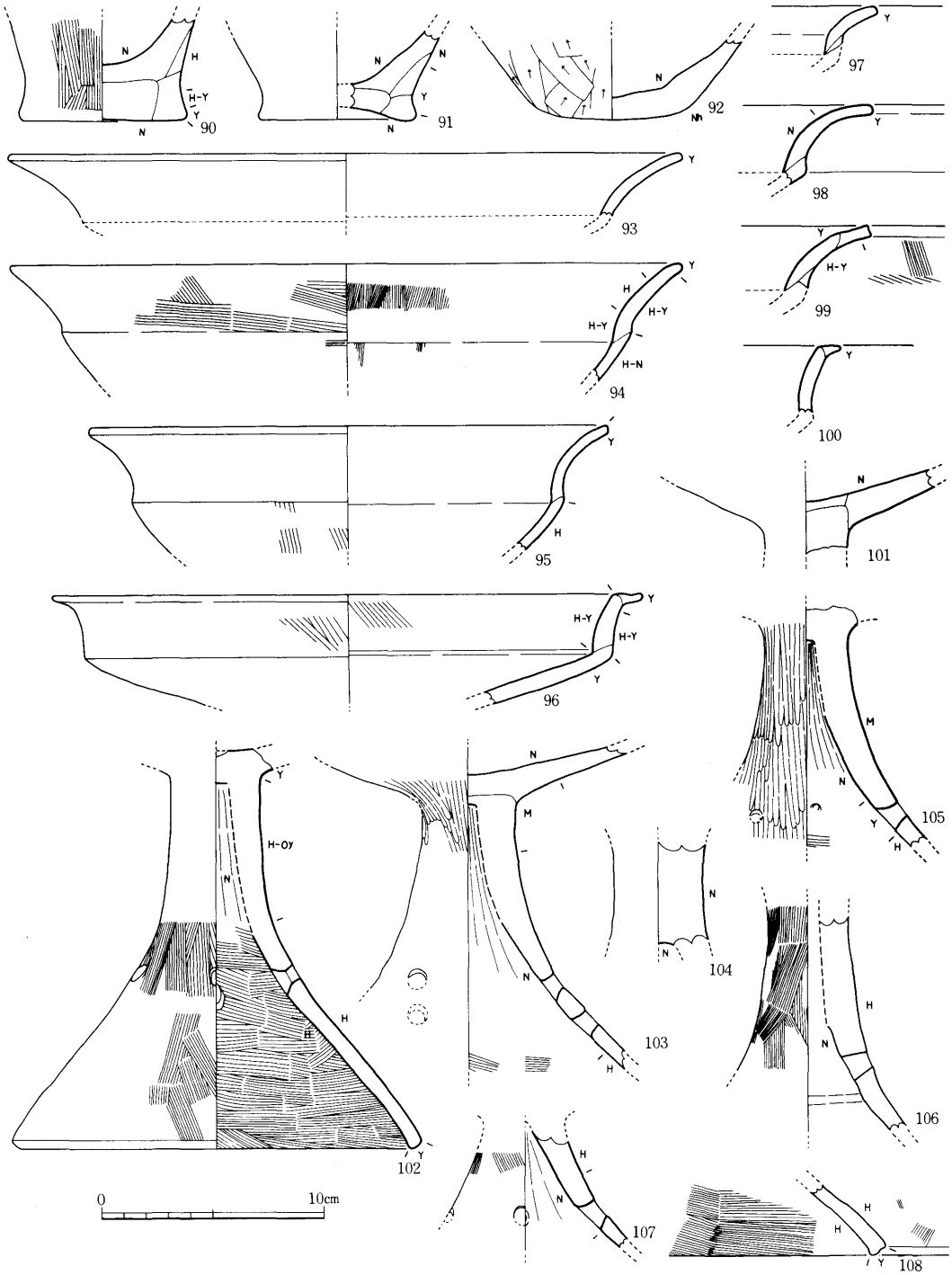


Fig. 58　第１号土壙出土遺物実測図(4)

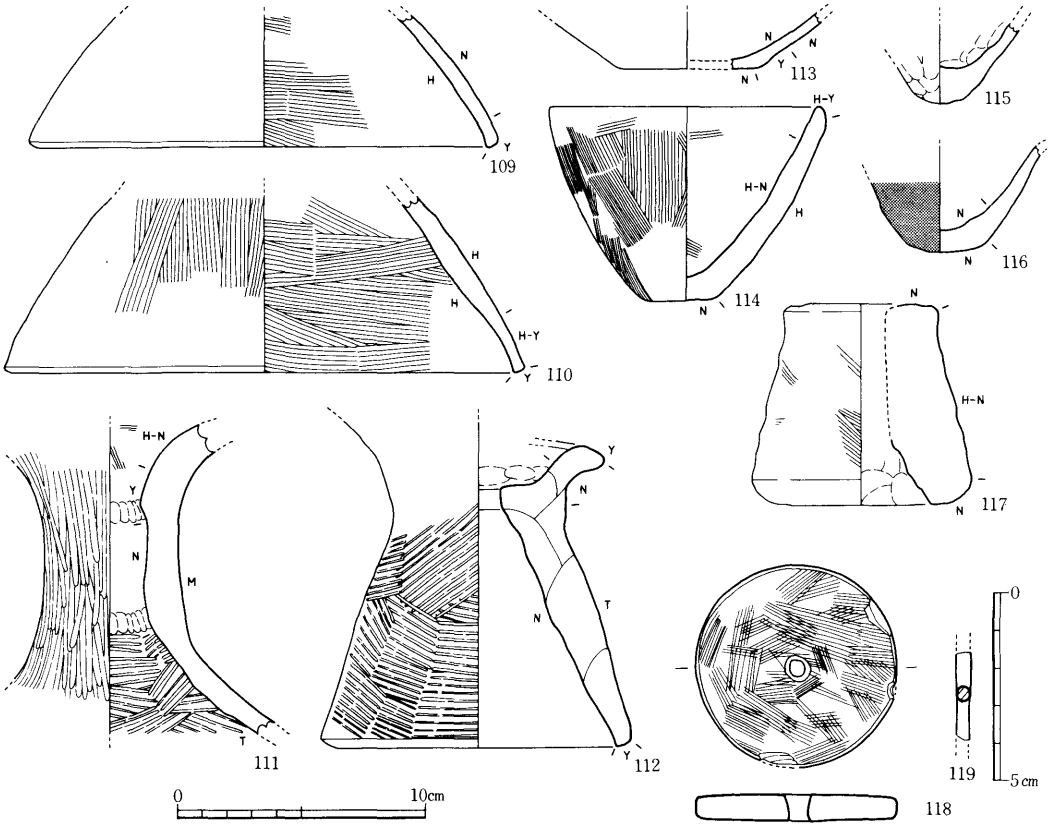


Fig. 59 第1号土壙出土遺物実測図(5)

遺物は多く、弥生土器壺・甕・高坏・鉢・支脚・器台・手捏土器のほか、紡錘車・剥片、鉄鏃などが中央部よりやや南西寄りから集中して出土した。完形品はなく、また、遺物の出土状況から投棄壙と考えられる。弥生時代後期後半～終末。

出土遺物（Fig. 55～59, PL. 32～35・47・48・54・55）

56～69は壺。56～61は複合口縁をもつもので、拡張部が内傾するもの（56～60）と短く外方に開くもの（61）とがある。前者には、直線的に立ち上がるもの（60）、外弯して立ち上がり中位付近で直立するもの（56・58）と口縁端部付近で大きく外反するもの（57・59）とがある。拡張部外面の施文には、波状文（56・57）や重弧文（59）があり、無文のもの（58・60）もある。肩部には貼付突帯を貼付し、突帯頂部にヘラ（57）やヘラ状工具（58）による刻目を施す。62は刷毛原体による刻目を施す。63のように斜格子文を巡らすのも、この時期に一般的にみられる手法である。66は張りの強い胴部をもち、口縁部が直

立して立ち上がる。頸部直下には断面三角形の扁平な突帯を貼付し、指圧による刻目を施す。64・65・67～69は底部。外面は刷毛目仕上げのもの（64・65・69）とヘラミガキのもの（67・69）とがある。67は外底面中央に焼成前穿孔がなされ、外面のほぼ全体に煤が付着する。

70～92は甕。70～82は口縁部が「く」の字に外反するもの。71～74は小形品で、口縁部が短く折れ曲がり、口縁部が直線的に外反して端部に面をもつもの（71）と外弯しながら開き、端部が尖るもの（72～74）とがある。75～82は中・大形品が主体で、口縁部は外弯しながら開くもの（77・78）と直線的に開くもの（76・79～82）とがあり、頸部内面に稜をもつのが通有である。胴部内面はヘラ削りのもの（75・79・80）、刷毛目仕上げのもの（76・77・81）のほか、板状工具による擦過が行われるもの（82）がある。75は胴部外面下半、77は口縁部外面上半に煤が付着する。83～92は底部で、丸底ないしは不安定な平底のもの（83～86・92）、平底のもの（87～90）、窪み底のもの（91）がある。外面は刷毛目仕上げであるが、板状工具による擦過が行われるもの（92）もある。84・85は内面をヘラ削りする。

93～110は高坏。93～100は坏部。上半部で反転して外弯しながら開くもの（93～95・97～99）と浅い坏部で上半部が直立して立ち上がり、口縁端部が水平に折れ曲がるもの（96・100）とがある。101～110は脚部。脚部を坏部に挿入するもの（101）や坏部に接合するもの（103）などがある。長脚でゆるやかに開き（102・103・105・106）、裾部が内弯ぎみに広がるもの（102・109・110）が多いが、短脚のもの（107）も存在する。透し穴は焼成前に穿孔され、三方のもの（105）、四方のもの（102・107）のほか、２穴単位で三方に施されるものもある。外面はヘラミガキされるもの（103・105）がある。

111は器台。筒状の中空部をもち、上下両端はゆるやかに外反するものであろう。外面はヘラミガキ、内面下半はタタキが施される。

112・117は支脚。112は片端が外上方に突出する有翼支脚で、外面にはタタキが施される。

113・114は鉢。114は不安定な平底で、胴部から口縁部までゆるやかに内弯しながら立ち上がる。口縁端部は尖りぎみに終わる。

115・116は手捏土器。丸底の鉢で、116の外面は丹塗りされている。

118は大形の紡錘車で、正裏両面の研磨は比較的粗い。119は鉄鏃の茎。

第２号土壙（Fig. 60, PL. 25）

調査区の南西端部に位置し、第１号土壙の西に隣接する土壙である。平面形態は楕円形

を呈し、長軸 188cm、短軸125cmの規模をもつ。底面はほぼ平坦であるが、地山が北西から南東に下降しており、検出面からの深さは北西部で50cm、南東部で37cmである。検出面の標高は20.00～20.10m、底面標高は19.65mである。壁面は比較的急角度に立ち上がる。第1号土壙同様、検出地点の状況から上部の削平は考えられず、土壙掘削時の規模、形態を保っているものと推察される。長軸方向は北西－南東。

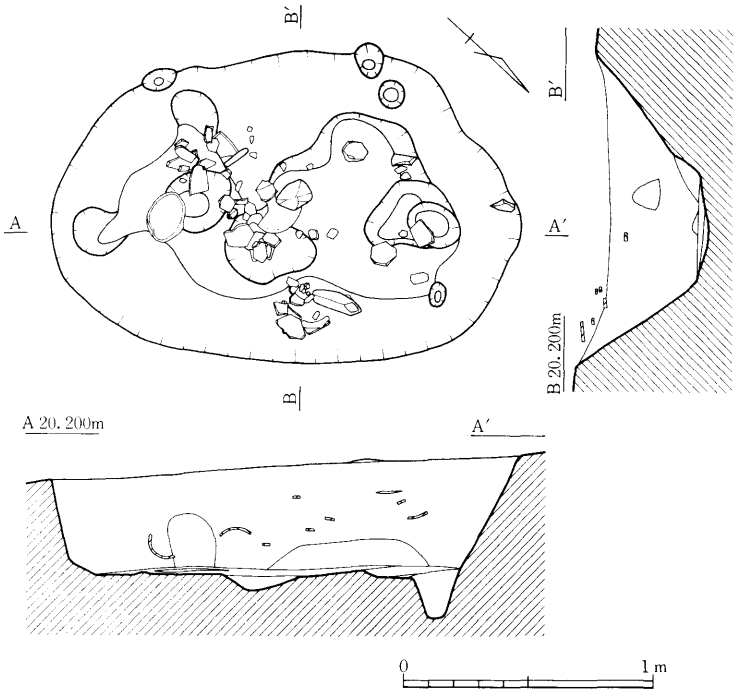


Fig. 60　第2号土壙実測図

規模は第1号土壙と大差ないが、遺物は少ない。出土遺物には弥生土器壺・甕・高坏のほか、扁平打製石斧・砥石などがある。完形品はなく、また、遺物の出土状況から投棄壙と考えられる。弥生時代中期後半～後期初頭。

出土遺物（Fig. 61・62, PL. 35・48・54）

120～125は壺。120は下垂する口縁部をもち、拡張部外面にヘラによる2条単位の鋸歯文を施文する。121は口縁部が屈曲して短く上方に立ち上がる。反転部外面の稜は極めて不明瞭で、袋状口縁に近い。頸部、口縁部の外面にはヘラによる沈線が巡る。122は鋤先状口縁をもつもの。123は口縁部が直線的に内傾する複合口縁をもつ。124は口縁部がゆるやかにひらき、端部付近でさらに外方に屈曲する。125は丸底で、張りの強い球形の胴部をもつ。内面の調整は粗細二種類の刷毛原体を用いている。

126～135は甕。胴部最大径が口径を大きく上回り、外弯しながら開く口縁部をもつもの（126・127）や頸部内面に明瞭な稜をもち、長い口縁部が直線的に開くもの（128）などがある。内面は刷毛目やナデ仕上げし、ヘラ削りは行なわれない。また、逆「L」字形に強

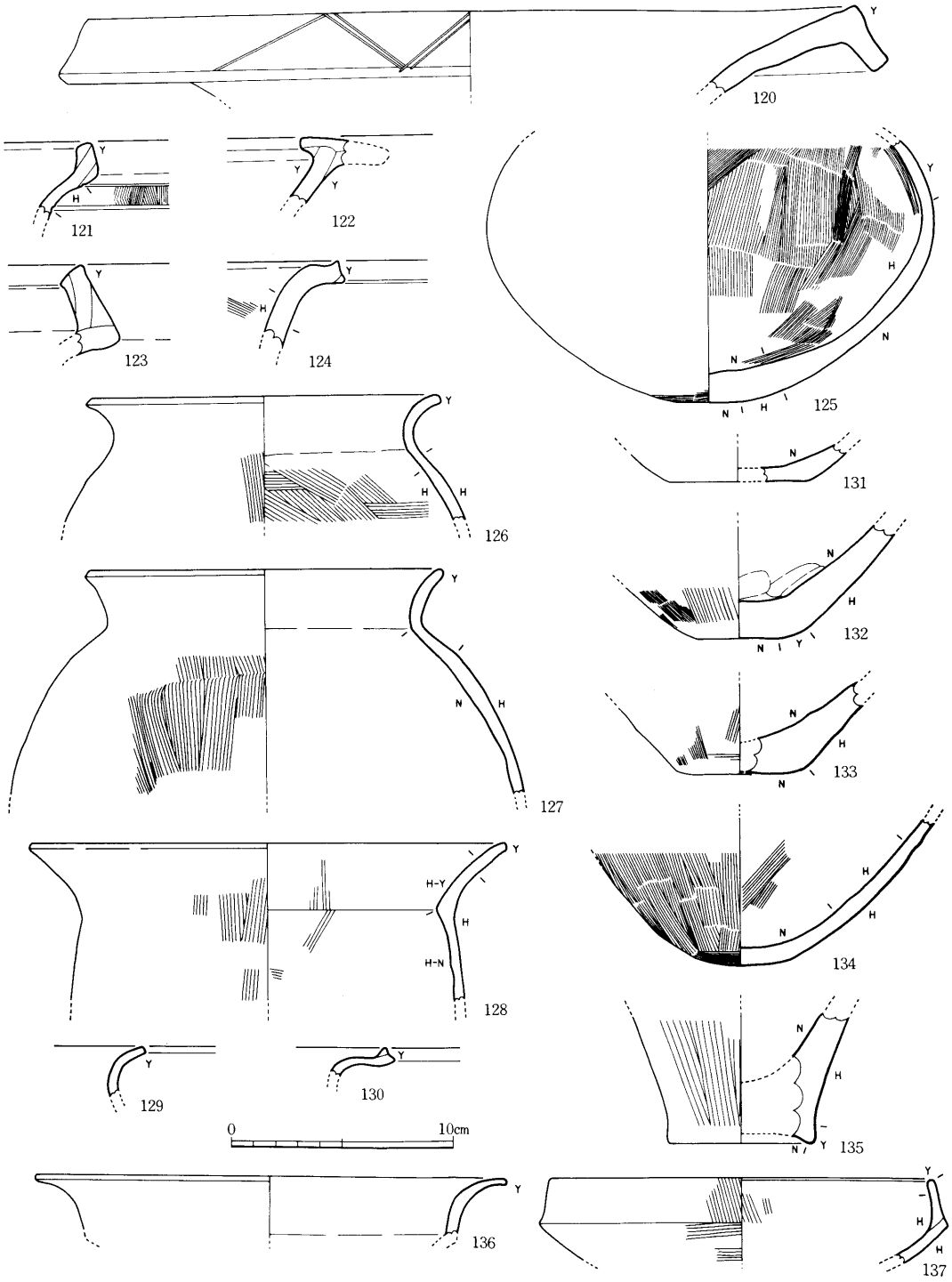


Fig. 61　第２号土壙出土遺物実測図(1)

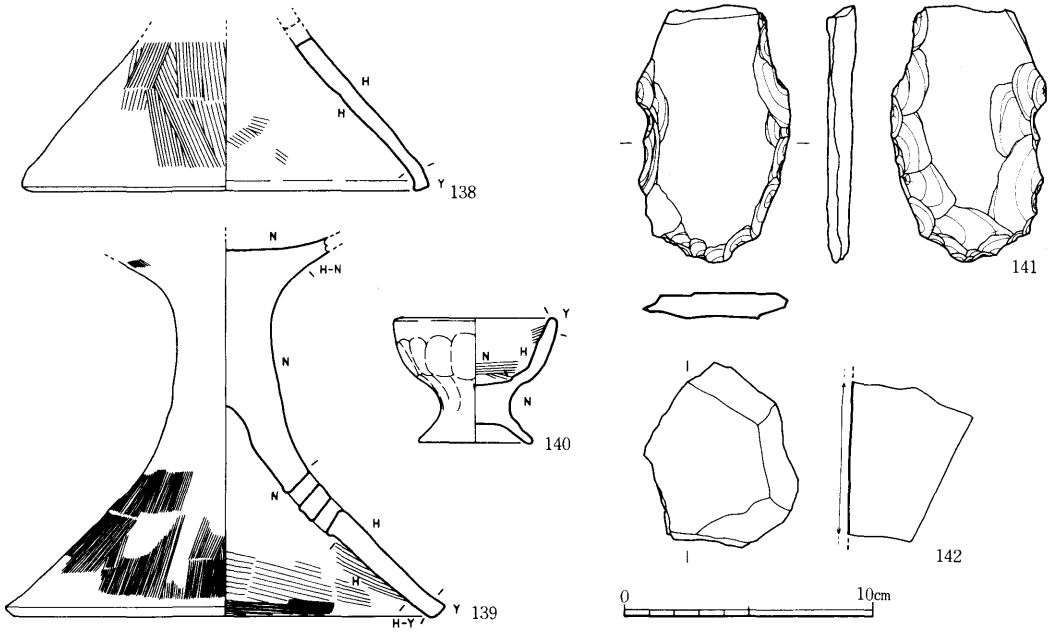


Fig. 62　第２号土壙出土遺物実測図(2)

く屈曲する跳ね上げ口縁をもつもの（130）などもある。131～135は底部。平底のもの、窪み底のもの、底部と胴部の境が不明瞭で不安定な平底のもの、丸底のものなどがある。外面の刷毛目は底部端まで行なわれていない。

136～139は高坏。坏部の形態には二種類あり、上半部で反転して大きく外弯しながら開くもの（136）とゆるやかに内弯しながら立ち上がり、上半部で屈曲して直線的に内傾するもの（137）とがある。脚部は長脚で、外弯ぎみに開き裾端部が内側に屈曲するもの（138）や内弯しながらゆるやかに開くもの（139）がある。

140は手捏土器の高坏ないしは台付鉢。

141は扁平打製石斧。二次加工は上縁部と正面左側縁上端部を除く各周縁に行なわれるが、裏面側は正面側に比べて、大きな剥離面によって構成される。正面左側縁中央部と右側縁上端部にはノッチ状の二次加工が施される。正裏両面中央部には素材面を残す。142は仕上げ砥と考えられる砥石で、研砥面は一面だけ残存する。

第３号土壙（Fig. 63, PL. 26(1)）

調査区の南西端部に位置し、第１号土壙の東に隣接する土壙である。平面形態は長楕円形を呈し、長軸173cm、短軸50cmの規模をもつ。底面は平坦で、検出面からの深さは30cmで

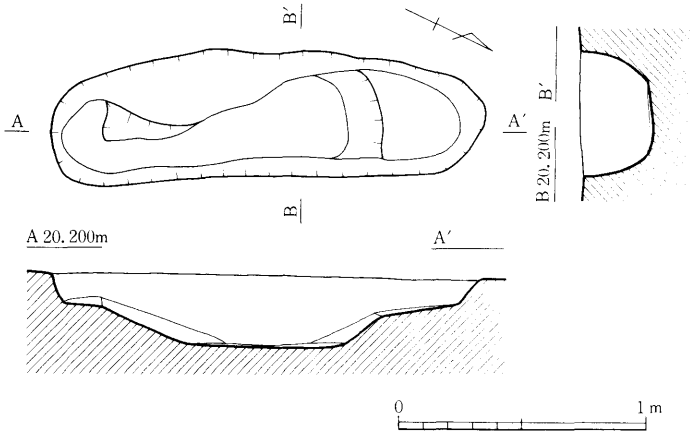


Fig. 63 第3号土壙実測図

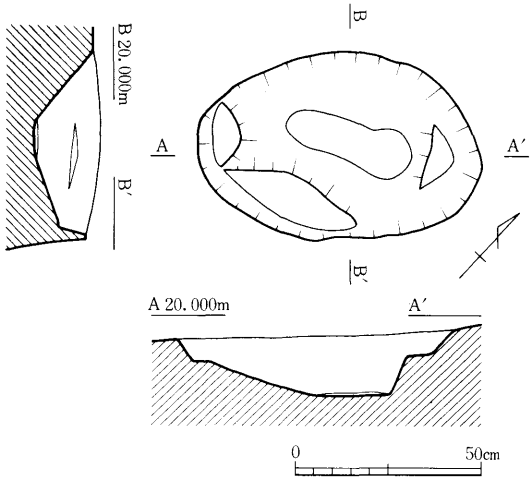


Fig. 64 第4号土壙実測図

ある。北部は底面から約15cm上位に階段状のテラスをもつ。検出面の標高は約20.10m、底面標高は約19.80mである。長軸方向は北西－南東。

出土遺物には弥生土器が若干あるが、小片のため図化できない。

第4号土壙

(Fig. 64, PL. 26(2))

調査区の南西端部、第2号土壙の北西に位置する小形の土壙である。平面形態は楕円形を呈し、長軸75cm、短軸49cmの規模をもつ。上面の規模にくらべて底面は狭く、検出面からの深さは17cmである。検出面の標高は約19.95m、底面標高は約19.80mである。長軸方向は北東－南西。

出土遺物はないが、検出地点および周辺の遺構の分布状況などから弥生時代のものと考えられる。

（2）室町時代の遺構・遺物

1） 土壙

第5号土壙 (Fig. 65, PL. 26(3)(4))

調査区中央部からやや東、第1号溝の内側のコーナーで検出した土壙で、長軸方向が第1号溝の東辺と平行に掘削されている。平面形態は長方形で、長軸81cm、短軸49cmの規模をもつ。壁面は垂直で、検出面からの深さは46cmである。検出面の標高は約21.05m、底面

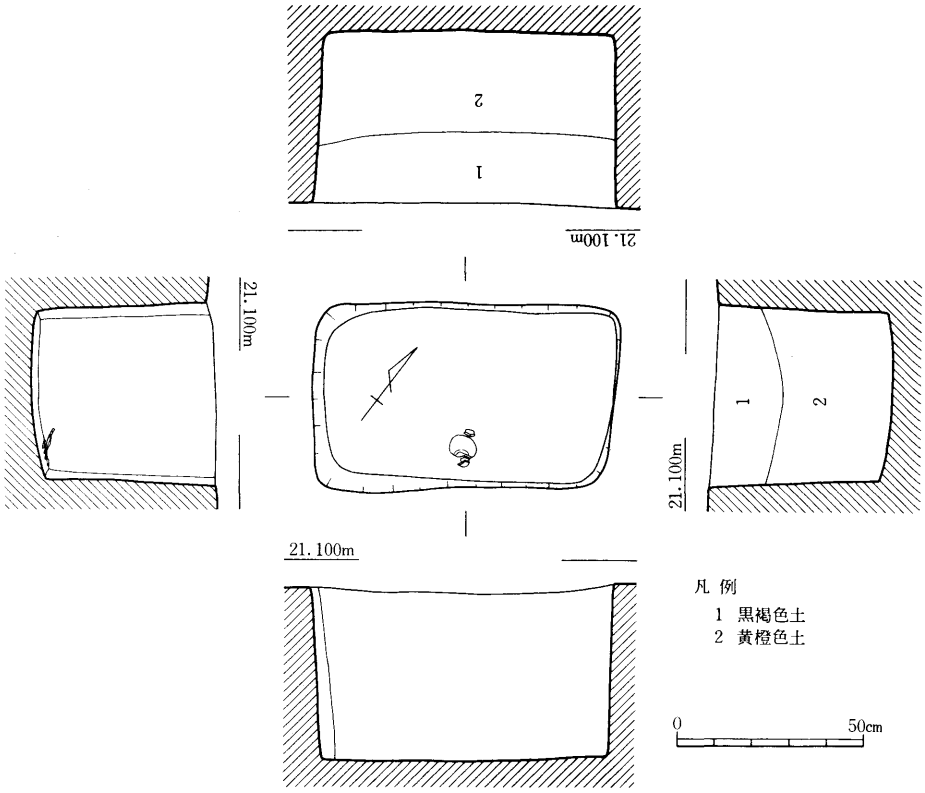


Fig. 65 第5号土壙実測図

標高は約20.60mである。長軸方向は北東－南西。壙底の南辺寄りから歴史時代の土師器皿2個体分が出土している。人骨は出土しなかったが、検出地点[4]、規模、形態、遺物の出土状況などから土葬の幼児墓[5]と考えられる。16世紀末～17世紀初頭。

出土遺物（Fig. 66, PL. 36・48）

143・144は土師器皿。143は底部と体部の境が不明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに肥厚する。144は体部が内弯して立ち上がり、口縁端部は面をもつ。外面および口縁部内面には煤が付着する。糸切り底で、144は板目圧痕を残す。145は非ロクロ成形の土師器坏もしくは皿で、口唇部内面は面取りぎみに内傾し、口縁端部は先細りになる。内面には煤が付着する。大内氏館跡などで特徴的に出土する「B式土師器[6]」にあたる。

2) 井戸

第1号井戸（Fig. 67, PL. 27）

第1号溝の内側のコーナー付近で検出した石組の井戸で、第5号土壙の北西約3.7mに位

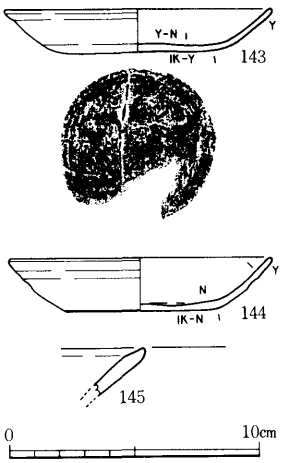


Fig. 66 第5号土壙出土遺物実測図

置する。直径165～180cmの円形の掘り方をもち、検出面からの深さは約2mで、底面では激しく湧水する。石組の内径は上端が75～80cm、下端が55～60cmである。長軸約30～60cmの緑色片岩を主体とした板石を用いて、底面から中位までは大ぶりな板石を垂直に近く、それより上位は外方に開きながら積み上げる。検出面の標高は約21.00m、底面標高は約18.90mである。底面には曲物桶が設置されている。

埋土中から歴史時代の土師器皿、須恵質土器擂鉢、瓦質土器、陶器、銭貨および桃の種子などの植物遺体が出土した。16世紀前半。

出土遺物 (Fig. 68, PL. 36・48・49・55)

146～153は土師器。146～153は皿。口径12～13cm、器高3cm前後で、体部が内弯しながら立ち上がり、そのまま口縁部にいたるもの（146～148）と口縁端部が外反するもの（149）、体部が直線的に立ち上がるもの（150～152）とがある。底部端には稜をもつもの（146～148）と丸いもの（149・150・152）がある。底部内面は回転横ナデのままのもの（149）があるが、大半はそののち静止ナデを行う。体部が直線的に立ち上がるものには外底面に板目圧痕がみられる。153は小皿で、体部は内弯しながら短く立ち上がる。146～153とも糸切り底。154は須恵質土器の擂鉢で、口縁端部は肥厚して内上方に突出する。内面は火熱を受け、部分的に煤が付着する。155は初鋳1037年の皇宋通寶、156は初鋳1068年の熙寧元寶で、いずれも楷書。

3) 溝

第1号溝 (Fig. 53・69, PL. 28(1)～(3))

調査区の北部を「コ」の字状に巡る溝で、北への延長部分は調査区外に及ぶため完掘していない。西への延長部分は後世の削平によって消失している。南辺約21m、東辺約13m以上、幅約70～100cmの規模をもち、検出面からの深さは東辺で35～40cm、南辺で15cmである。断面形はおおむね擂鉢状であるが、溝底が最も広い南辺中央部では逆台形をなす。底面の標高は、東辺で約20.80m、南辺で約21.25mで、溝底は東へ向かうにつれて下降する。

出土遺物には歴史時代の土師器坏・皿、瓦質土器擂鉢・鍋・こね鉢・甕・火鉢、土師質土器鍋、須恵質土器盤、貿易陶磁器青磁椀、陶器椀・皿・鉢・甕、磁器椀・湯呑・燭台、鉄釘、敲石、石臼などがある。16世紀末～17世紀初頭。

出土遺物

(Fig. 70～73, PL. 36・37・49・54・55)

157～163は土師器。157・158は坏で、底部端の稜は不明瞭。159～163は皿で、底部端に稜をもつもの（159～161）と丸いもの（162・163）とがある。163は口縁端部が肥厚し、面をもつ。いずれも糸切り底。

164～185は瓦質土器。164～170は擂鉢。口縁端部の形状によって三種に大別される。端部を内側に丸く折り返すもの(164)、内面に貼付した粘土帯が断面三角形のもの（165・166・168・169）、長方形のもの（167）がある。このうち、168は粘土帯が扁平で、端部が肥厚したようにみえる。166は端部外面に2条の凹線が巡り、170は外底面に板目圧痕が認められる。おろし目は5～7本単位でかき上げられる。171～181は鍋。口縁部が屈曲して短く外上方にのびるもの（171～173）、内面に段をもち、口縁端部が内上方に突出するもの（174・175）、口縁端部が内外方につまみ出されて肥厚し、端部が平坦な面をもつもの(176・177) などがある。

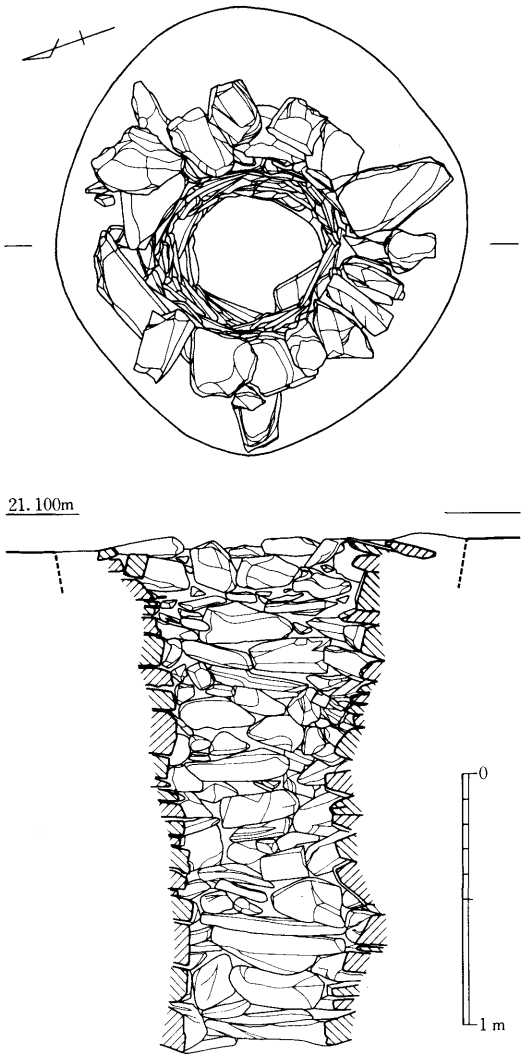


Fig. 67 第1号井戸実測図

179～181は鍋の脚部で、181は端部が屈曲しない。182・183はこね鉢。内弯しながら立ち上がる体部をもち、口縁端部は内側に折り曲げる。183は片口で、体部下半は格子タタキが施される。184は甕で、口縁部は直立し、頸部上位の外面には凹のスタンプ文を施文する。185は火鉢。三足の低い脚部をもち、体部はやや内弯して立ち上がる。肩部の張りは強く、口縁部は肥厚して端部は平坦な面をもつ。口縁部外面には3個単位のヘラによる刻目が巡る。体部外面は平行タタキののちヘラミガキが行なわれる。

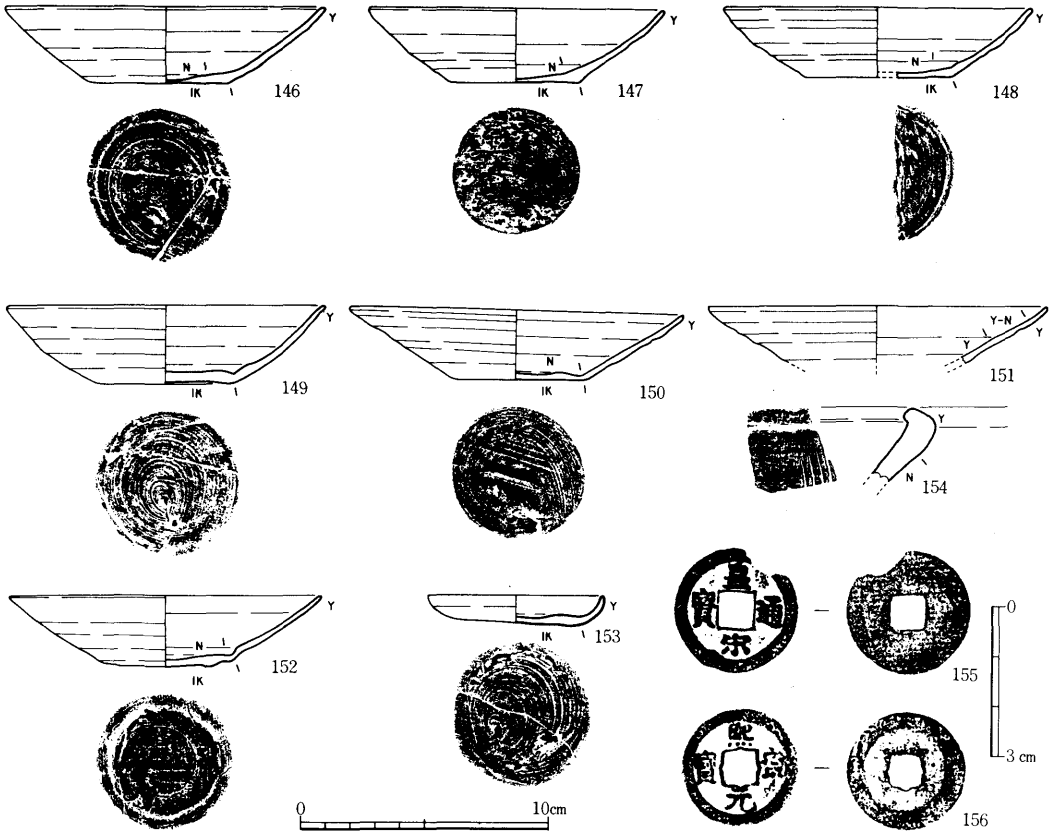


Fig. 68　第１号井戸出土遺物実測図

186～191は土師質土器の鍋の脚部。

192は須恵質土器の盤。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は平坦な面をもちわずかに内傾する。口縁部外面には断面三角形の双耳の把手を貼付する。

193は龍泉窯系青磁の椀。口縁端部は外反し、玉縁状にわずかに肥厚する。内面には２条の沈線と片彫り文様が認められる。

194～203は陶器。194・199・200は皿。194は体部内面に竹草、木の幹、外面に唐草文を染付する。畳付は無施釉。200は低い削り出し高台をもち、見込みに目跡痕が４ヶ所認められる。195～198は椀。195は体部外面に２条の圏線を巡らし、その間に網目文を染付する。高台脇から外底面は無施釉で、内外面に貫入がみられる。肥前系。197は腰の部分でわずかに折れ、直線的に口縁部に移行する。粘性の強い長石釉の総掛けで、高台はしっかり削り出す。萩焼系。198は天目椀。高台脇に段をもち、高台脇から口縁部のくれ部までは丸みを

もちながら開く。口縁下のくれは強い。口唇部は丸く、端部は外反する。高台は深さ3㎜の削り出し高台で、高台脇から外底面までは露胎。美濃系。201は皿で、体部上半で外方に屈曲し、口縁端部は折縁状に肥厚する。体部内面には6弁の菊印花が押圧される。軟質の生地で、釉ががりは悪い。瀬戸系。202は鉢で、口縁端部が玉縁になる。口禿げ。203は甕で、口縁端部を外側に折り曲げ肥厚させる。備前系。

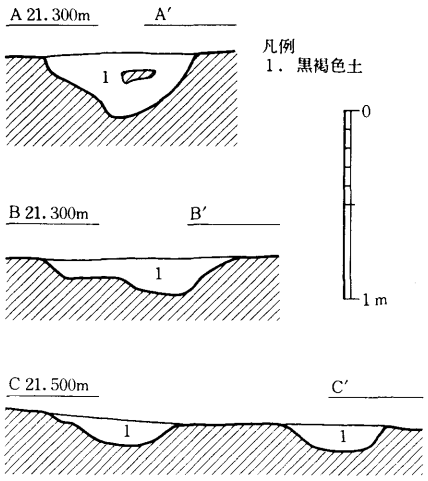


Fig. 69 第1・2号溝土層断面図

204～208は磁器。204～206は白磁埦。207は湯呑で、体部下半で折れ、直線的に口縁部に移行する。外面には唐草文を染付する。208は仏飯器ないしは燭台で、畳付は釉をかき取る。肥前系。

209は円礫素材の敲石で、正裏両面に敲打痕が認められる。210は鉄釘であろう。断面が中空の方形で、頭部が片方に大きく折れ曲がる。211は石臼。下臼で6条単位の刻目が放射状に施される。

第2号溝（Fig. 53・69）

調査区の北西部を北西－南東に走行する溝で、第1号溝に切られている。西への延長部分は後世の削平によって消失している。検出長は約8.5mで、幅約50～55㎝の規模をもつ。検出面からの深さは15～20㎝で、溝底標高は約21.20m。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物には瓦質土器擂鉢・鍋・こね鉢、陶器擂鉢、須恵質土器擂鉢などがある。16世紀末～17世紀初頭。

出土遺物（Fig. 74, PL. 37・38・49）

212～216は瓦質土器。212～214は擂鉢で、体部は直線的に立ち上がるもの（212）と丸みをもって立ち上がるもの（213・214）とがある。おろし目間の間隔が広いもの（214）もあり、6本単位（212・214）、9本単位（213）でかき上げられる。215は鍋。体部の屈曲が弱く、口縁部は直線的に長くのび、端部は肥厚する。外面には煤が付着する。216はこね鉢で、体部は直線的に立ち上がる。

217は陶器の擂鉢。糸切り底で、おろし目は密にかき上げられる。備前系。

218は須恵質土器の擂鉢。成形は粗雑で、口縁端部の上下両端に断面三角形の粘土帯を貼付して肥厚させる。口縁端部には面をもつ。おろし目は7本単位でかき上げられる。

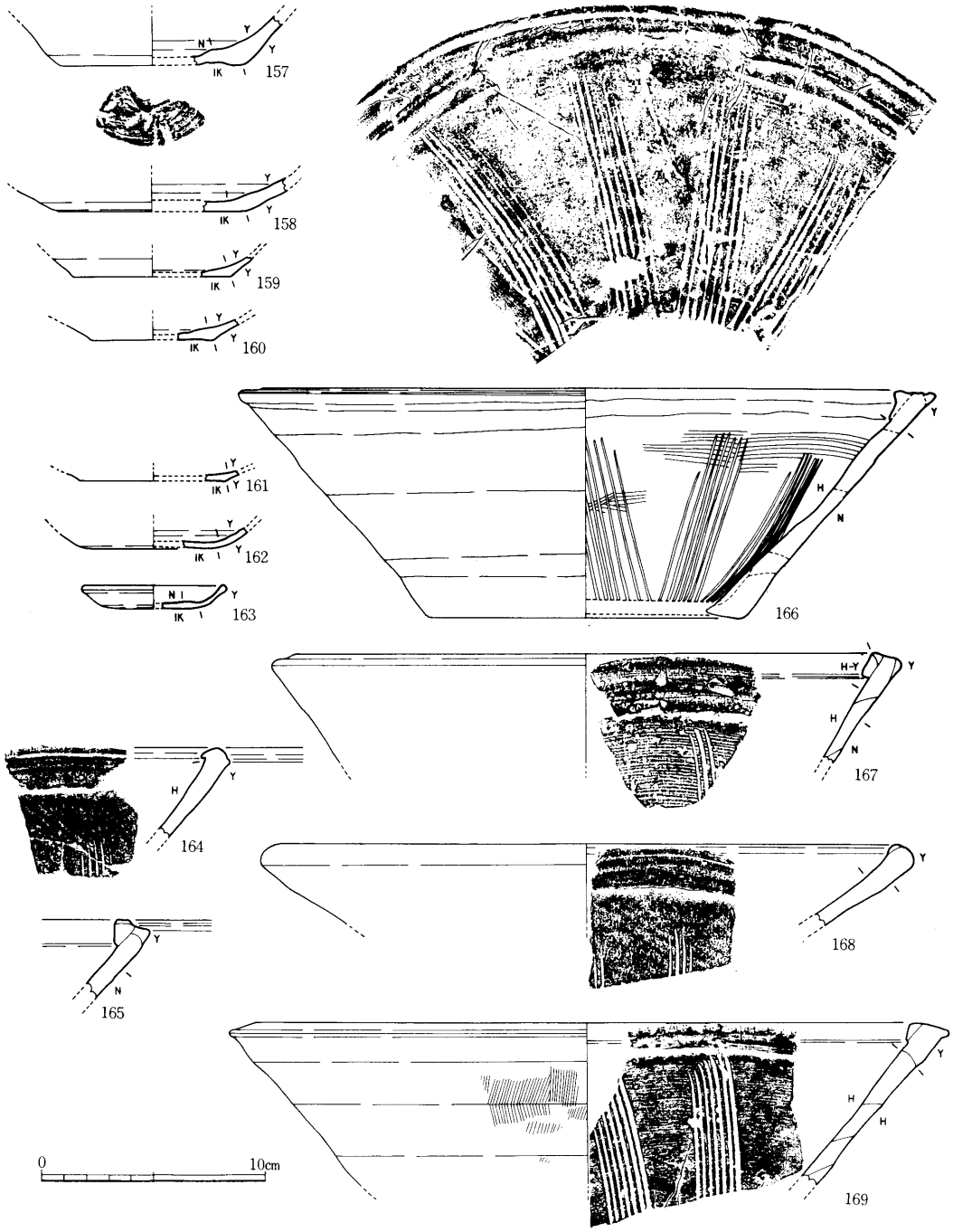


Fig. 70　第１号溝出土遺物実測図(1)

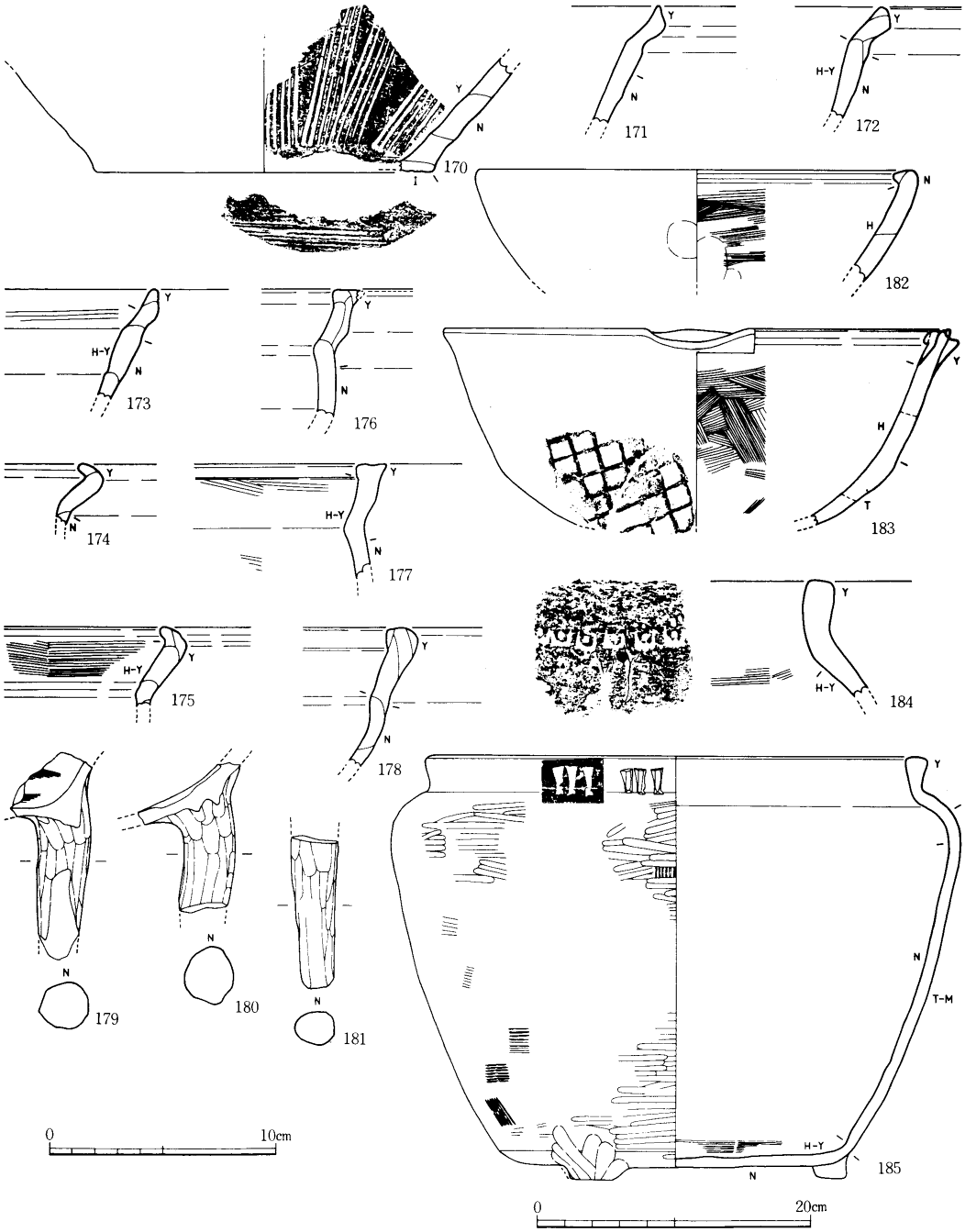


Fig. 71　第１号溝出土遺物実測図(2)

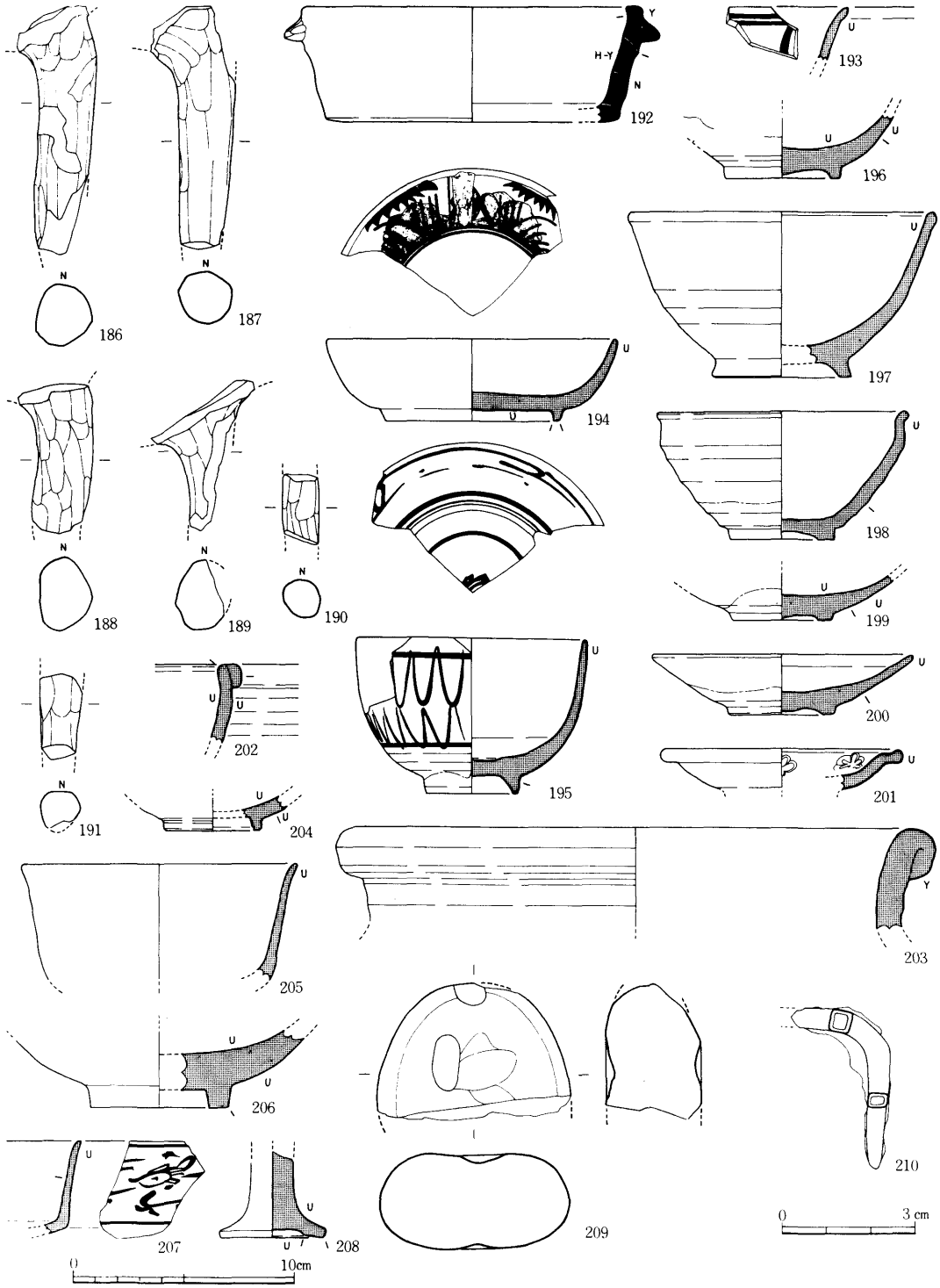


Fig. 72 第1号溝出土遺物実測図(3)

（3）柱穴（Fig. 53, PL. 28(4)）

第1号溝の内部を中心に弥生時代中期～室町時代の多数の柱穴を検出した。なお、環濠内部は一部調査区外にあたるため完掘しておらず、室町時代の掘立柱建物跡の配置状況は将来の調査を待つことにしたい。

出土遺物（Fig. 75, PL. 38・49・54）

219・220は土師質土器。219は鍋で、口縁部は屈曲して短く外上方にのびる。口縁端部は上方に突出ぎみになる。220は甕で、口縁部は外弯しながら短く開き、端部は肥厚する。221～226は歴史時代の土師器。222は糸切り底の坏で、体部が内弯して立ち上がる。221・223～225は糸切り底の皿。223・225は底部端に稜をもつ。224は口縁端部が屈曲して上方に立ち上がる。226は糸切り底の台付皿で、台脚部は直立する。227は龍泉窯系の青磁埦で、内弯して立ち上がる体部をもち、端部内面は面取り風になる。内面には一条の沈線が巡り、その下位に片彫りの唐草文が認められる。228・229は弥生土器の高坏。228はゆるやかに裾部まで開く脚部。229は坏部で、上半部は反転して外弯しながら開く。上半部は長めで、反転部内面には稜をもつ。230は砥石で、上下両面を研砥面とする。231・232は歴史時代の土師器皿で糸切り底。231は口径に比べて器高が高く、口縁端部は尖る。233は陶器の埦で、竹節状の高台はしっかり削り出される。内外面とも無施釉。234・235は弥生土器。甕の底部で、窪み底と上げ底のものがある。236は歴史時代の土師器皿。器壁は薄手で口縁端部は先細りとなる。糸切り底で、板目圧痕が認められる。237は跳ね上げ口縁をもつ弥生土器の甕。

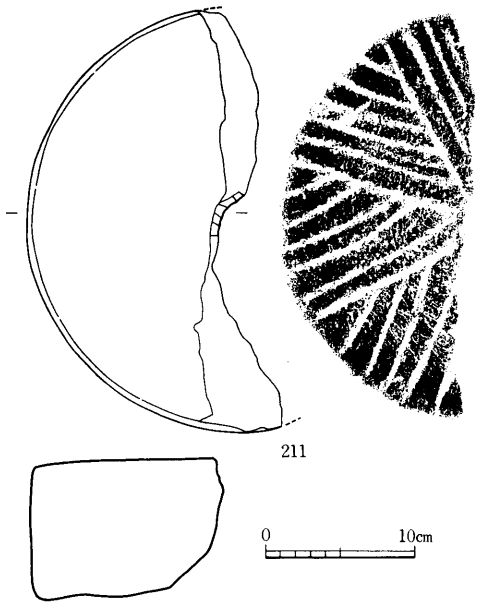


Fig. 73 第1号溝出土遺物実測図(4)

なお、各遺物の出土地点は出土遺物観察表を参照されたい。

（4）包含層出土遺物

1）第5層出土遺物（Fig. 76～83, PL. 39～42・50～55）

縄文土器（257）

257は突帯文の甕で、口縁端部はわずかに外反ぎみになる。突帯は口縁端に近く、頂部には半裁竹管風の工具による刻目を施す。

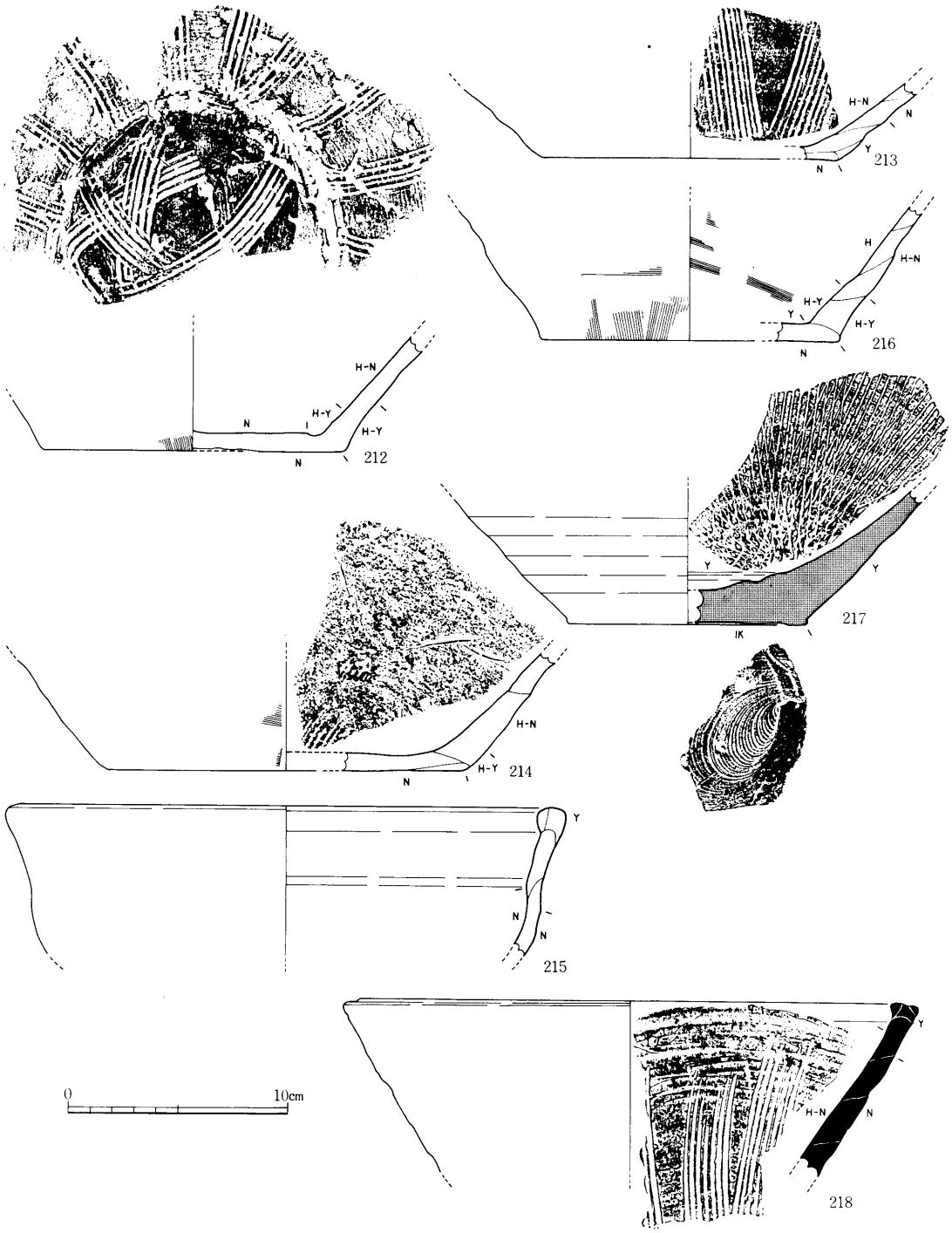


Fig. 74　第２号溝出土遺物実測図

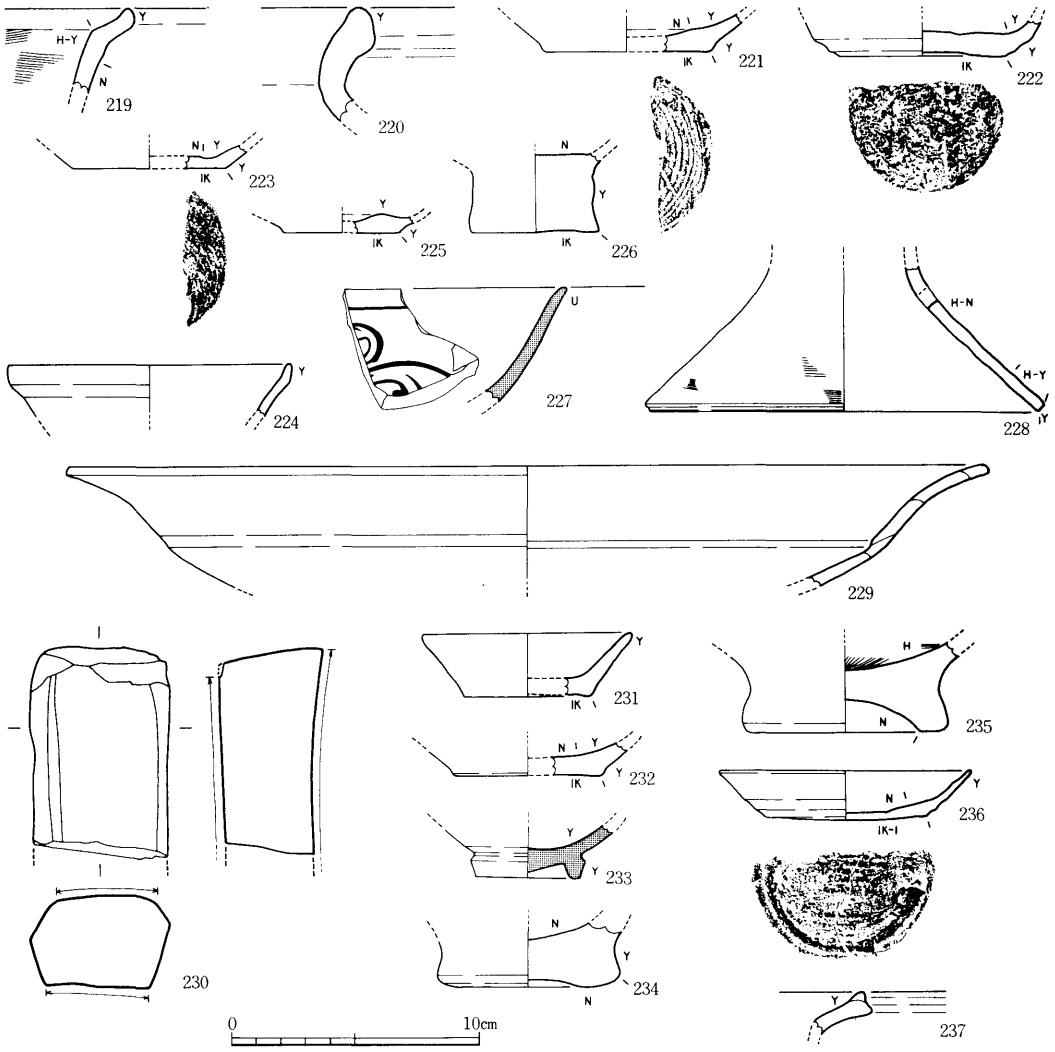


Fig. 75 柱穴出土遺物実測図

弥生土器（238～256・258～308）

238～256は壺。前期のものは、胴上半部に無軸羽状文や山形文を貝殻腹縁（238・239）やヘラ（240・241）で施文するものなどがある。中期のものは、口縁端部を上下両方に拡張させるもの（242）、口縁部を下垂させ、拡張した口縁部外面に鋸歯文を施文するもの（243）、斜下方に開く鋤先状口縁をもつもの（244・255）などがある。255は内側への張り出しが強く、端部は肥厚して口唇部は凹線状に窪む。口縁部外面には扁平な円形浮文を貼付する。また、櫛描文を施文するもの（245・246）もある。245は肩部に4本単位の直線

文、246は頸部に7本単位の直線文を2条巡らし、その間に3本単位の山形文を施文する。245は外面縦刷毛目ののちヘラミガキ、内面はナデ、246は外面縦刷毛目、内面ヘラミガキを行う。後期のものには複合口縁をもつもの（247・256）がある。247は器壁が薄く、口縁部はやや外弯しながら直立して立ち上がる。256は大形品で、口縁部は直立ぎみにやや内傾して立ち上がる。口縁部の施文は、247が山形文の内部および反転部外面にランダムな刺突文、256は5本単位の波状文である。248は胴部の屈曲部を肥厚させ、外面にヘラによる粗い「ノ」の字の刺突文を刻む。249～254は底部。

258～301は甕。前期のものには、やや強く如意形に開く口縁部をもち、口唇部下端にヘラによる刻目、頸部下位には沈線が巡るもの（258）、口縁部が逆「L」字形に屈曲し、上端部に水平な面をもつもの（259）などがある。中期のものには、口縁部が「く」の字に外反するもの（260～262）、跳ね上げ口縁をもつもの（263～266）などがある。前者は胴部が張らず、断面三角形の突帯は口縁直下に貼付される。須玖Ⅰ式併行。後者は口縁部が強く屈曲し、胴部の張りはほとんどない。口縁端部外面が横ナデによって窪むのも特徴的である。また、下城式の甕（268）もあり、直立する口縁部外面に断面三角形の突帯を2条貼付する。後期のものには、山陰系の甕（273～276）が含まれている。口縁部は「く」の字に外反し、上下両方に拡張した口縁端部に擬凹線が巡るもの（274～276）と無文で中くぼみになるもの（273）とがある。276は短く開く口縁部をもち、頸部外面にはヘラによる刺突文を施文する。277～283は「く」の字に外反する口縁部をもつ。277・279は開きの弱い長い口縁部をもち、277は胴部内面をヘラ削りする。278は鉢に近い。281は頸部内面に明瞭な稜をもち、口縁部が肥厚して短く開く。282・283は小形品。丸底の底部をもち、口縁部は内弯ぎみ（282）、直線的（283）に短く外反する。内面はナデ仕上げ。283は外底面に籾の圧痕が認められる。284～301は底部。窪み底のものが多く、他に平底、上げ底、丸底のものがある。

302～306は高坏。坏部が内弯して立ち上がり口縁端部が内側に突出するもの（302）、上半部で反転して、口縁部が外弯しながらゆるやかに開くもの（304・305）と直立ぎみに立ち上がり端部が外方に突出するもの（303・306）とがある。

307は支脚。308は壺の蓋で、大きく広がり、丸い天井部は薄い。

土師器（309～329）

309は直口壺。310～315は甕。310～313は布留式の甕で、口縁部下半がやや膨らみ、端部が尖るもの（310）、口縁端部がやや中窪みの面をもつもの（311）、口縁部が外弯して開

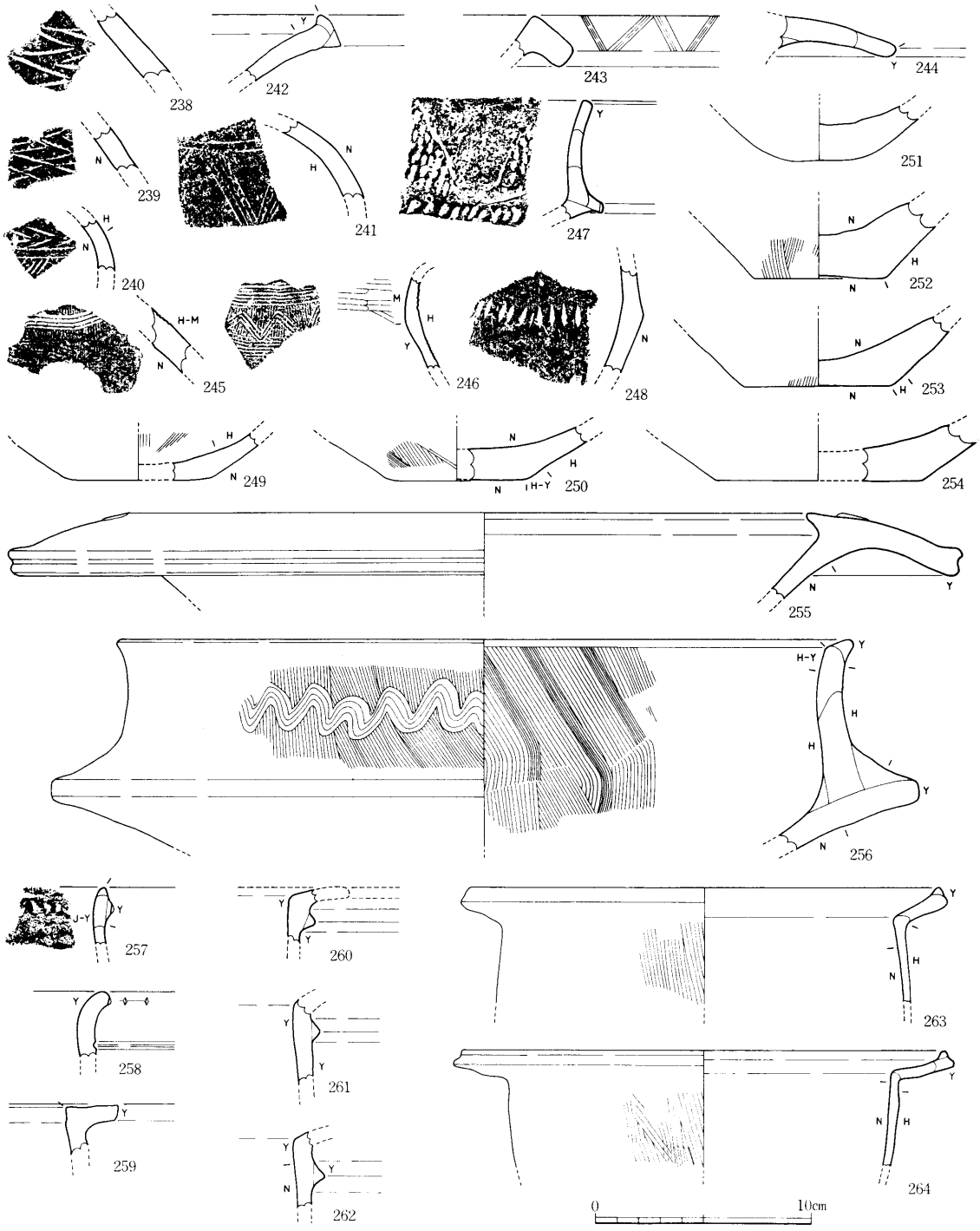


Fig. 76 第5層出土遺物実測図(1)

き、端部内面が内巻きになるもの（312）などがある。また、張りの強い胴部から内弯して立ち上がる口縁部をもち、わずかに外反する端部内面が斜めに面取りされるもの（313）もある。胴部は外面刷毛目（310・313）で、内面はヘラ削り（310）のものと刷毛目ののちナデられるもの（313）がある。314は外弯して長くのびる口縁部をもち、端部は丸い。成形が粗雑で、粘土帯の接合痕が顕著に残る。315はしまりのない頸部に直線的にゆるやかに外傾する口縁部をもつ。胴部外面は斜方向のヘラナデを施す。

316～321は高坏。坏部は反転部外面に明瞭な稜をもつ（316）。脚裾部が大きく外方に屈曲するもの（319・320）とゆるやかに開き内面ほぼ全体が接地するもの（321）がある。

322～328は鉢。体部が内弯して立ち上がり、口縁部が直立するもの（323～325）とそのままゆるやかに内傾するもの（322・326～328）とがある。323・324は器高が高い。322・327はヘラミガキされる。

329は台付鉢で、体部は内弯して立ち上がり、脚台部は直線的に開く。

須恵器（330～339）

330～335は坏蓋。331は平坦な天井部に直下に下る口縁部をもち、端部内面は段を有する凹面をなし内傾する。端部は外反し、鋭い稜以下の口縁部が器高の約1/2を占める。天井部の約4/5強をヘラ削りし、内面は丁寧にナデられる。332・333は丸い天井部からそのままゆるやかに開く口縁部をもち、稜は短く鈍い。端部内面にはわずかに段をもち、凹面をなし内傾するもの（332）と形骸的に1条の沈線が巡り、端部が丸いもの（333）とがある。天井部の約2/3弱をヘラ削りし、内面は粗雑にナデられる。330も333と同様な器形であろう。334は中窪みの扁平な撮み部。335は極めて器高が低く扁平で、鳥嘴状の口縁部をもつ。

336～338は坏身。336は立ち上がりが外弯しながら内傾し、端部は丸い。外底面の約1/2をヘラ削りする。337は立ち上がりが直線的に内傾するもので、端部は丸く、内面には不明瞭な段をもつ。338は高台をもつもので、直立する断面方形の低い高台は底部と体部の境よりやや内側に貼付される。

339は短頸壺。肩部の張りが強く、口縁部は短く直立して立ち上がる。口縁端部は丸い。底体部の約1/2をヘラ削りする。

手捏土器（340～365）

土師質の鉢のほか、甕形のもの（356）、高坏（365）がある。鉢には大小二種類のものがある。前者は、平底のものが多く、胴部は340のようにゆるやかに内弯して立ち上がるものや、341・342のように直線的に立ち上がるものなどがある。口縁部は胴部からそのまま

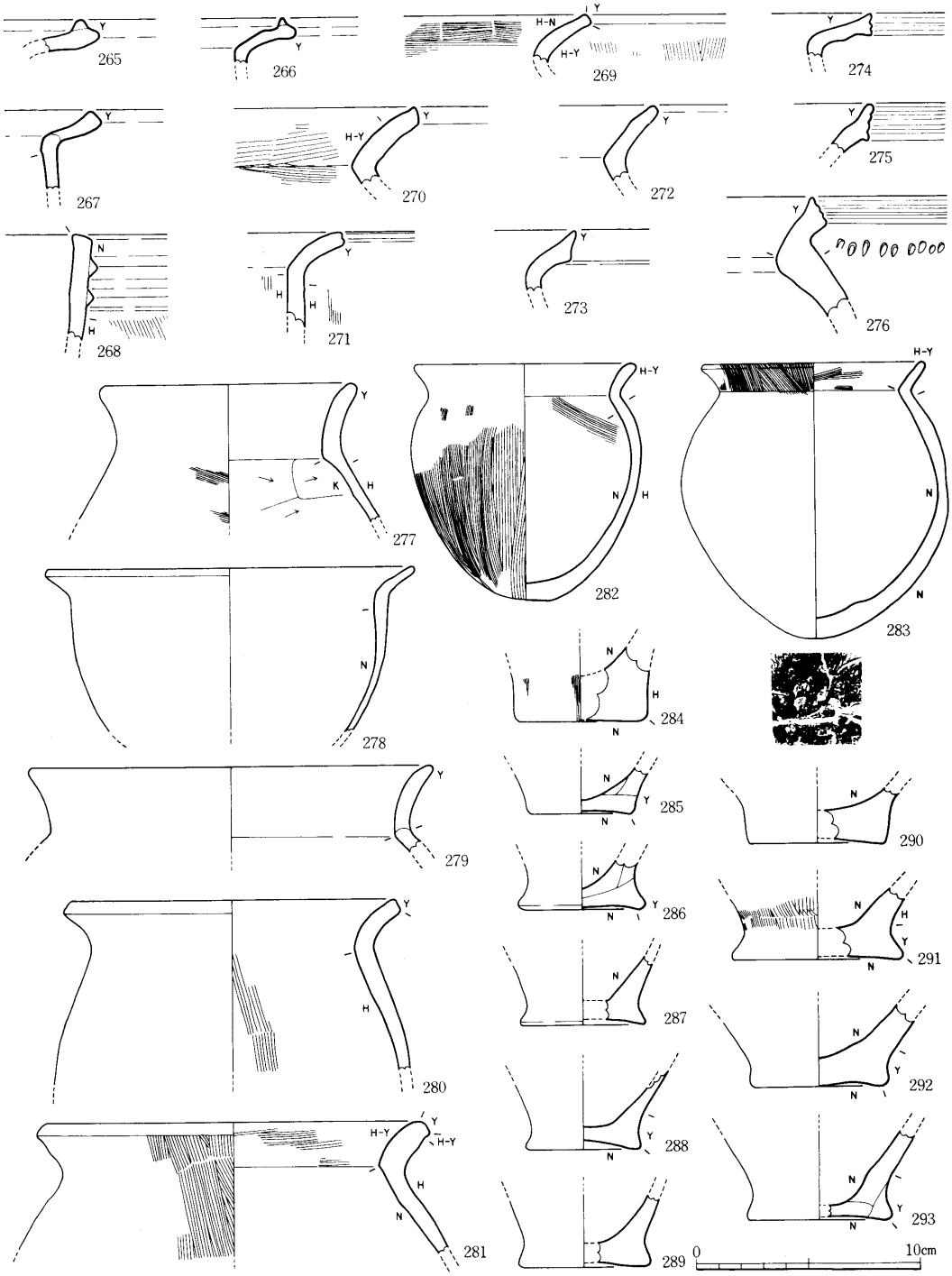


Fig. 77 第5層出土遺物実測図(2)

移行するもの（340～342）や外反するもの（343）がある。363・364のように丸底の椀形を呈するものもある。後者は平底で体部が直立するもの（349～355・361）や尖り底で体部が外方に開くもの（357・358）がある。大半が指圧による整形で、刷毛目を施すもの（340・344・362）もある。概して小形品に胎土が精選されているものが多い。356は平底で、体部は内弯しながら直立する。

土製品（366～373）

366・367は土製模造鏡。中央部をつまみ出して鈕とするが、穿孔はされていない。368～373は土製丸玉。径16～22㎜で、上面から焼成前の穿孔が貫通する。

滑石製模造品（374～384）

374は盾形。四隅を斜めに面取りし、両側縁を繰りこんだ長方形を呈し、正面が凸レンズ状に弯曲する。裏面中央部からやや下位には、長軸に平行に断面長方形の鈕を削り出す。鈕には両側面から穿孔がされるが、貫通していない。正面上下端の研磨は整形時の第一次研磨のままであるが、中央部は長軸に平行した第二次研磨がなされる。裏面は不定方向からの第二次研磨が行われる。上端部には穿孔がなされる。

375～377は斧形。扁平な撥形で、寸づまりのもの（375）と長めのもの（376・377）とがある。いずれも周縁は面取りされて面をもち、上端部には穿孔がなされる。正裏両面とも不定方向からの第一次研磨のままのもの（375・376）と弯曲した裏面に長軸に直交する第二次研磨されるもの（377）がある。375・376は一部に素材面を残す。378は他の3例と形態は異なるが、斧形であろう。短冊形で、穿孔した上端および下端に向かうにつれて先細りとなる。正裏両面とも第一次研磨のままである。

379～383は単孔の円板。厚手で第一次研磨のままの粗雑なつくりのもの（379）と扁平で第二次研磨されるもの（380～383）とがある。前者は周縁の面取りが不十分で不整形な円形をなす。穿孔は粗い両面穿孔で、周縁寄りに偏位する。後者は大小二種があり、部分的に素材面や第一次研磨面を残す。第二次研磨は正裏両面が不定方向から、周縁は縁辺に直交して施される。穿孔は中央部に両面穿孔される。

384は鏃形。細長い扁平な菱形で、最大幅が中位付近にある。正面の第二次研磨は左右各半部で研ぎ分けを行う。

石器・石製品（385～392）

385・386は石庖丁。385は外弯刃半月形の小形の磨製石庖丁で、刃部は正裏両面から均等に研削される。外弯する背部は中央部に面をもち、両面から研ぎ分けている。背部近くに

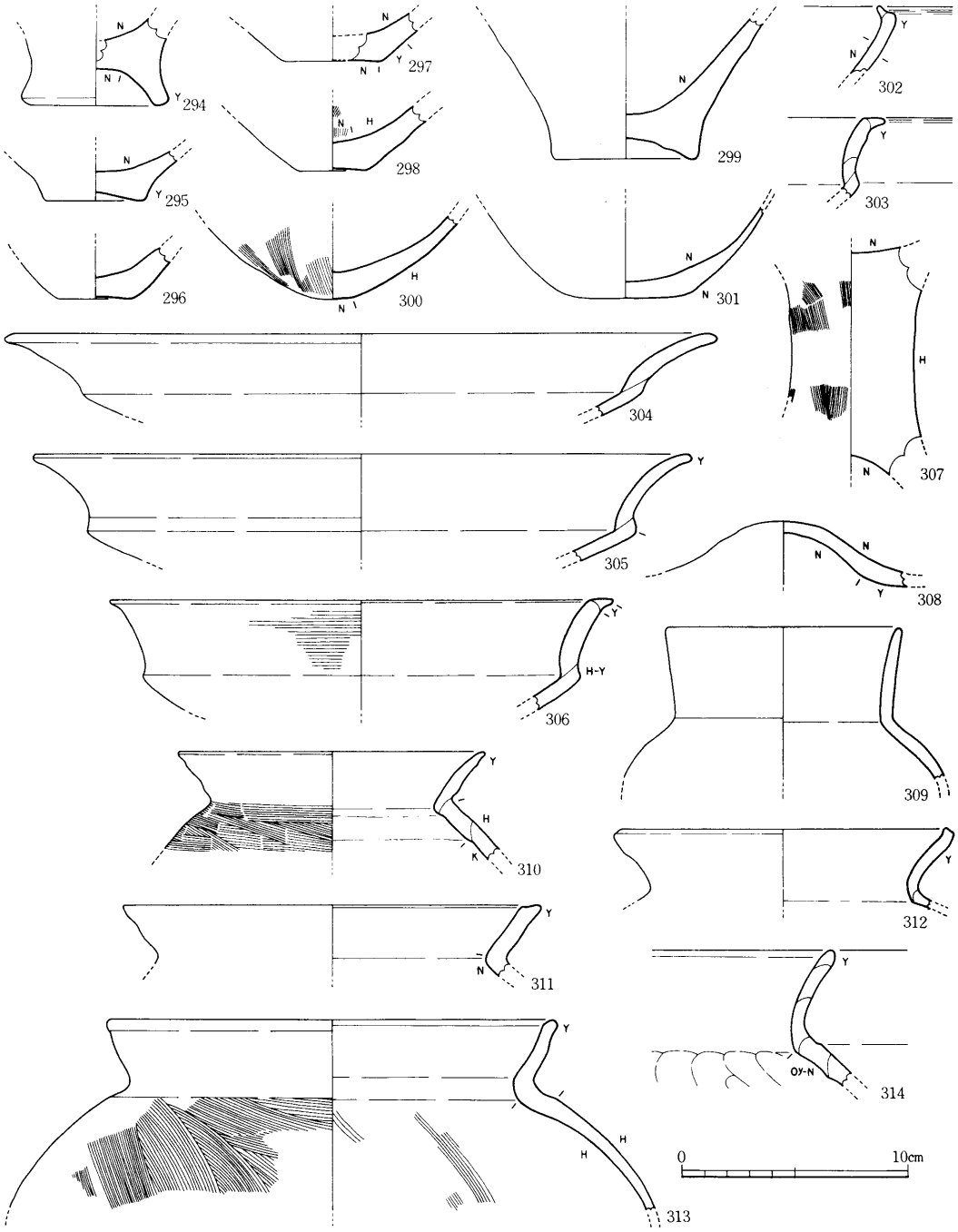


Fig. 78 第5層出土遺物実測図(3)

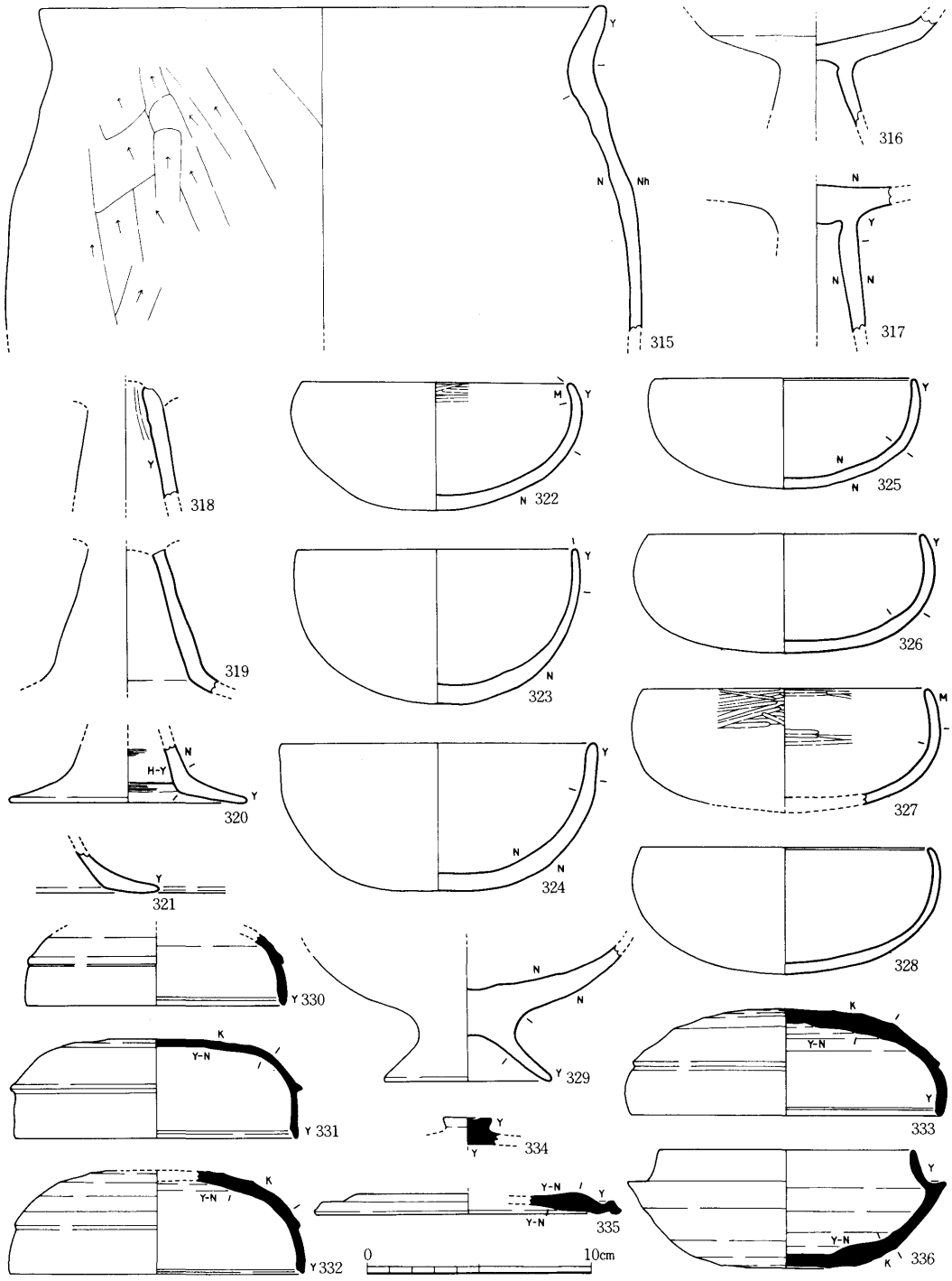


Fig. 79　第５層出土遺物実測図(4)

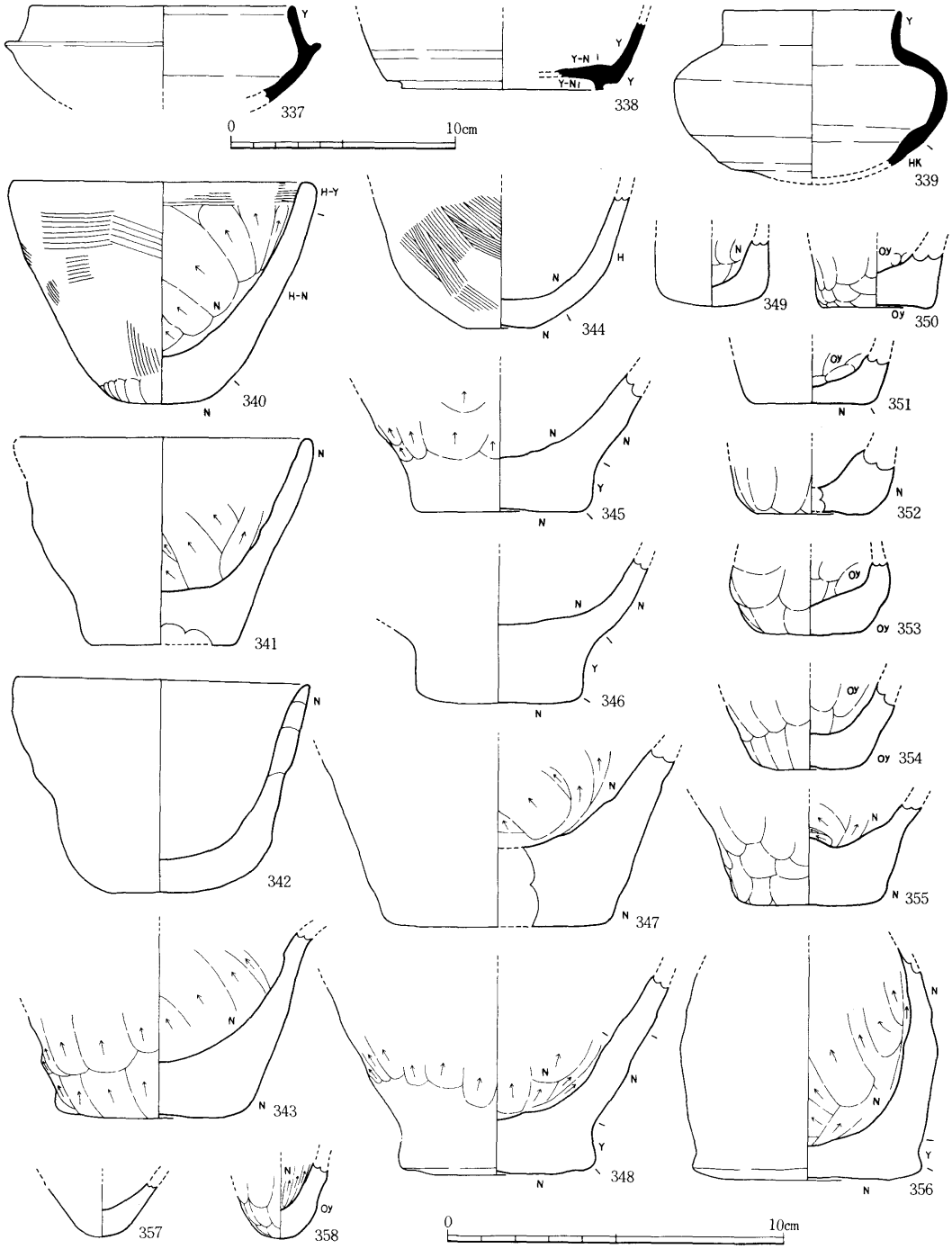


Fig. 80 第5層出土遺物実測図(5)

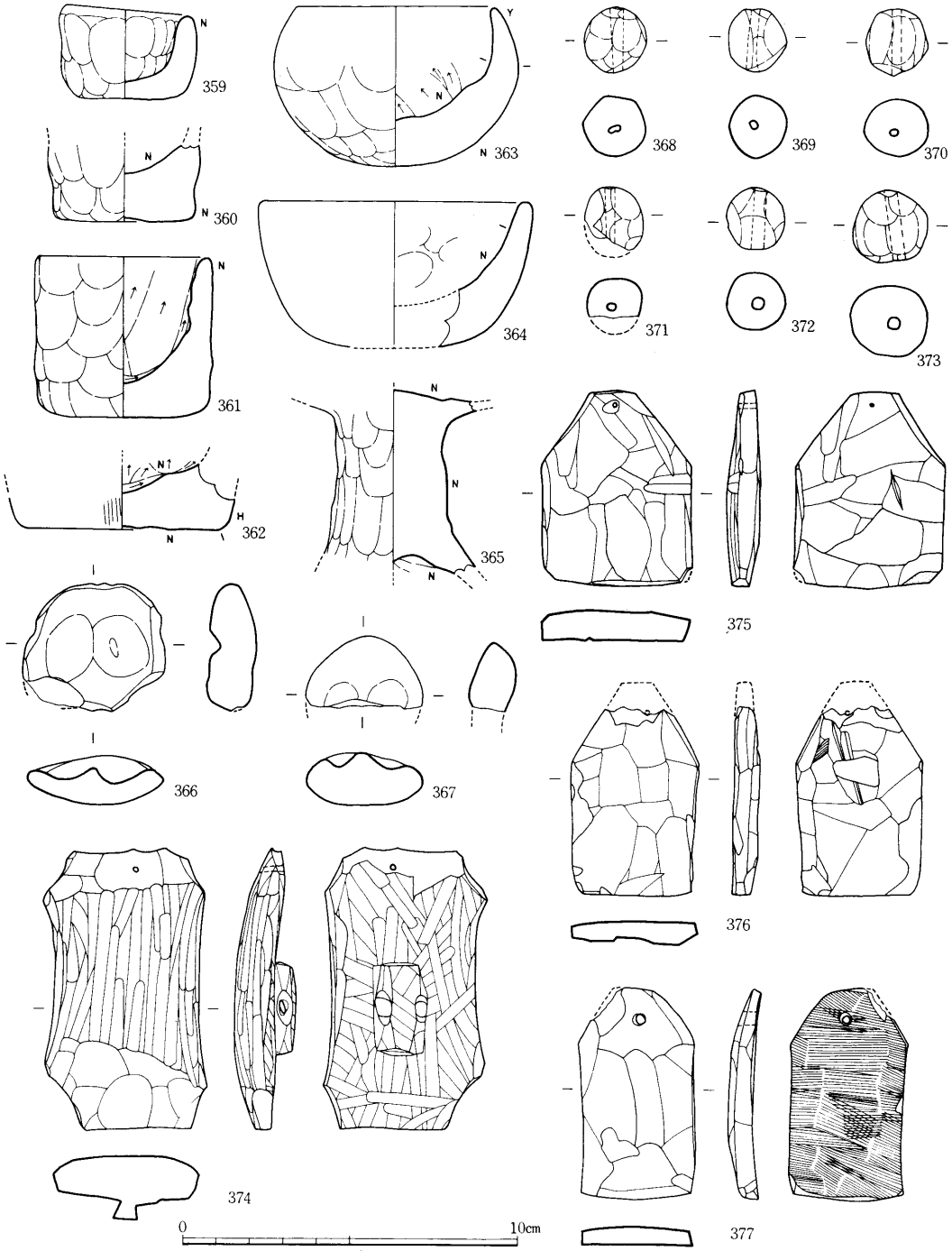


Fig. 81　第５層出土遺物実測図(6)

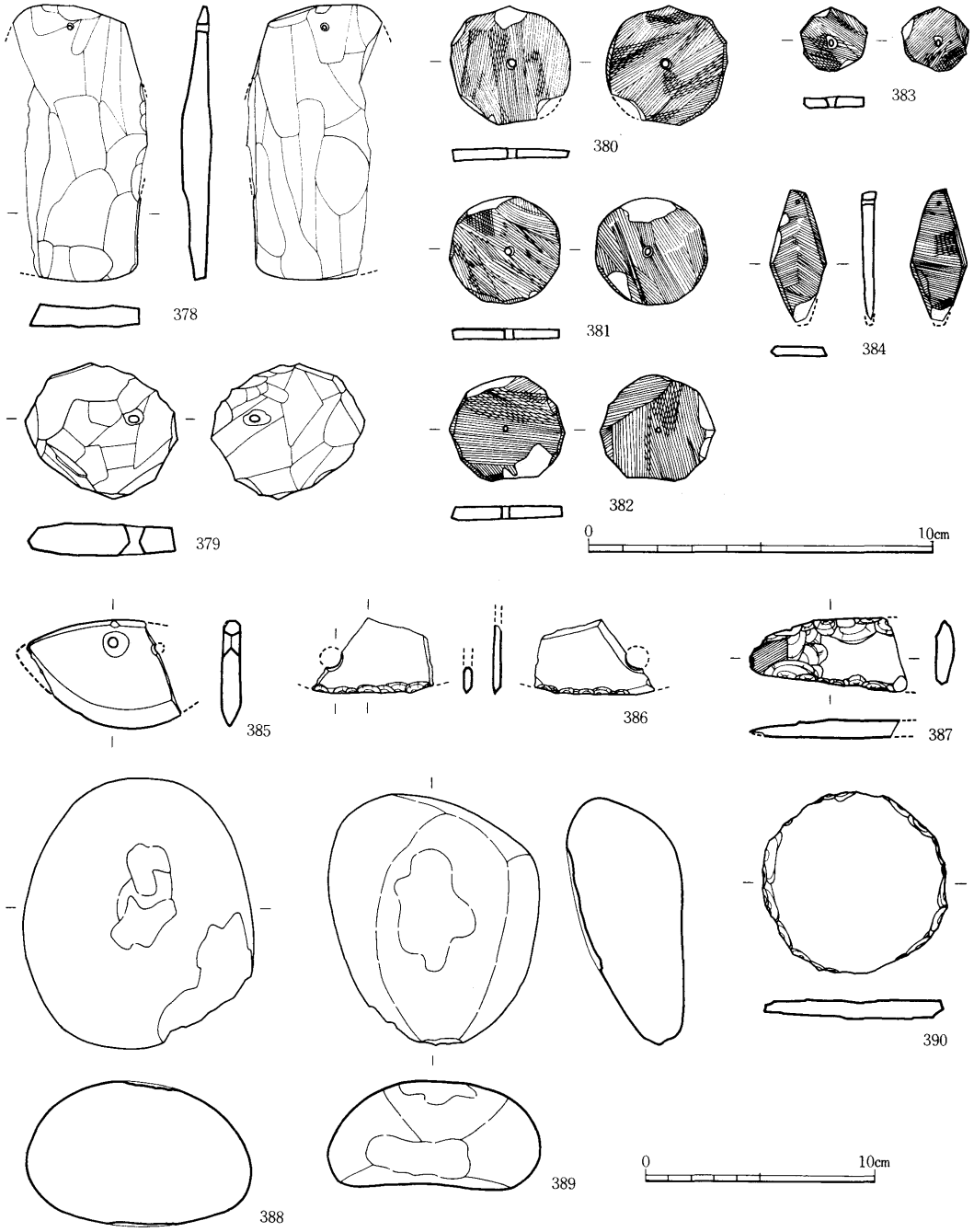


Fig. 82 第5層出土遺物実測図(7)

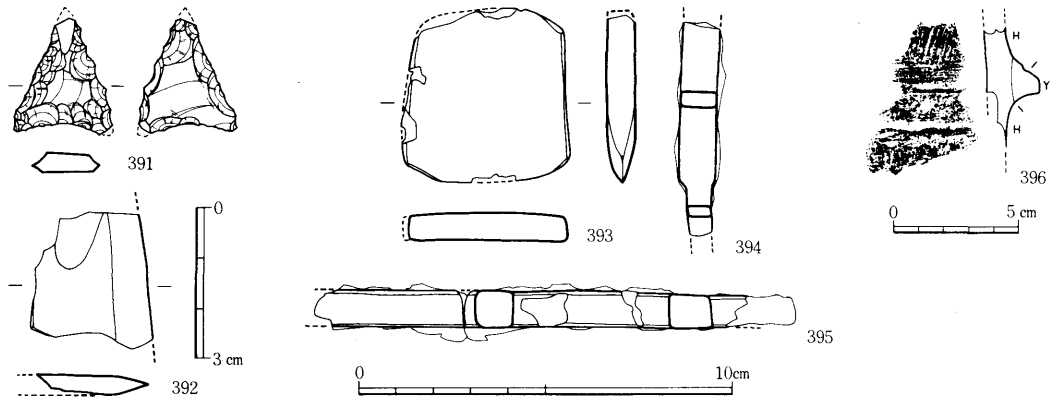


Fig. 83 第5層出土遺物実測図(8)

は2鈕孔が回転穿孔される。386は扁平な打製石庖丁で、やや外弯する刃部は大半が正裏両面からの剥離によって作出されるが、一部には研磨が施される。主要面には素材面を残す。鈕孔は大きく刃部近くに回転穿孔される。387は石鎌。外弯する上縁および直線的な下縁に階段状剥離がなされるが、先端部は剥離作業ののち研磨される。下縁の剥離は上縁にくらべて小さく、急角度に行なわれる。388・389は円礫素材の敲石。敲打痕が正裏両面中央部に残るもの（388）や正面中央部、下端に広く浅く残るもの（389）とがある。390は大形の周縁加工の円板。二次加工は不規則で片面、正裏両面からなされている。391は平基無茎式の打製石鏃で、先端部、脚部の片端を欠損する。正面中央部、裏面下半に素材面を残し、裏面側の二次加工は粗い。392は石剣もしくは石戈。周縁に精細な研磨を施し、側刃縁を作出する。

鉄器（393～395）

393は板状鉄斧。鍛造品と思われ、長幅比が約1:1の寸づまりな矩形を呈する。刃部は頭部にくらべてわずかに広い弧状の両刃で、左右両端部は明瞭な刃部を作出しておらず、狭い面をもつ。正裏両面の研ぎ出しは角度、範囲とも均一でなく、刃部の傾斜角は正面が約30°、裏面が約20°である。394は茎と身部の境に関を有する鉄鏃で、断面は長方形を呈する。395は鑿もしくは鏨であろう。棒状で断面は正方形を呈する。

円筒埴輪（396）

土師質で、タガはやや高く断面台形をなす。外面は縦刷毛で、タガ貼付後、上位は粗い縦刷毛による二次調整が行われる。内面は風化による摩滅が激しいが、ナデと思われる。川西編年のV期[7]にあたる。

2) 第6層出土遺物（Fig. 84・85, PL. 43・52・53・54）

縄文土器（397～399）

粗製の甕。胴部から口縁部まで屈曲せずに立ち上がり、端部が尖るもの（397）と突帯をもたない肩部で屈曲し、口縁部が内傾するもの（398）とがある。399は底部。

弥生土器（400～429）

400～412は壺。前期のものには、肩部に削り出しによる段をもち、その下位に刷毛原体による施文をもつもの（400）、ヘラ描き沈線が巡るもの（401）のほか、断面台形の低い貼付突帯をもつもの（402）などがある。施文は格子文と無軸羽状文を上下に組み合わせるもの（400）、貝殻腹縁による有軸羽状文（404）、ヘラ描きの無軸羽状文（405）などがある。中期のものには、肩部に櫛描きの直線文・波状文（406）、口縁部端内面に断面三角形の注口状の突帯をもち、小さく下垂する口縁部外面に波状文を施文するもの（407）が特徴的に存在する。408は鋤先状口縁をもつ須玖Ⅱ式の壺で、口縁部内面の内側への突出度は強い。409は下垂する口縁部外面にヘラによる鋸歯文を施文する。後期のものには、口縁部が外弯しながら短く直立する複合口縁をもつもの（410）がある。外面には粗い刷毛目が施される。411・412は底部。

413～426は甕。413は如意形に開く口縁部下端に、414は逆「L」字形に短く屈曲する口縁部のほぼ全面に、ヘラによる刻目を施す。416は無文。「く」の字に外反する口縁部をもつものには直線的に開くもの（417）や跳ね上げ口縁をもつもの（415・420～422）などがある。420は頸部下位の断面「M」字形の貼付突帯の頂部、口唇部上下両端にヘラによる刻目を施す。424は外弯しながら開く口縁部をもち、胴部内面は423同様ヘラ削りする。425・426は底部。

427は高坏。脚裾部はゆるやかに開き、内面上半の横刷毛は右上がりに角度を変えて行う。

428は小形の鉢。胴部はゆるやかに内弯して開き、口縁部は直立ぎみに立ち上がる。底部側面には指圧整形痕が残る。

429は受部が「U」字形に開く支脚。受部は一部二次加熱によって赤色に熱変する。

土師器（430）

用途、器形不明の土製品で、端部は砲弾形に尖る。把手かもしれない。

石器・石製品（431・432）

431は磨製石斧。扁平な撥形を呈し、頭部、正面左側縁には研磨前の荒割りの段階での剥離痕が残る。432は扁平な円転礫素材の砥石で、正裏両面を砥面とする。

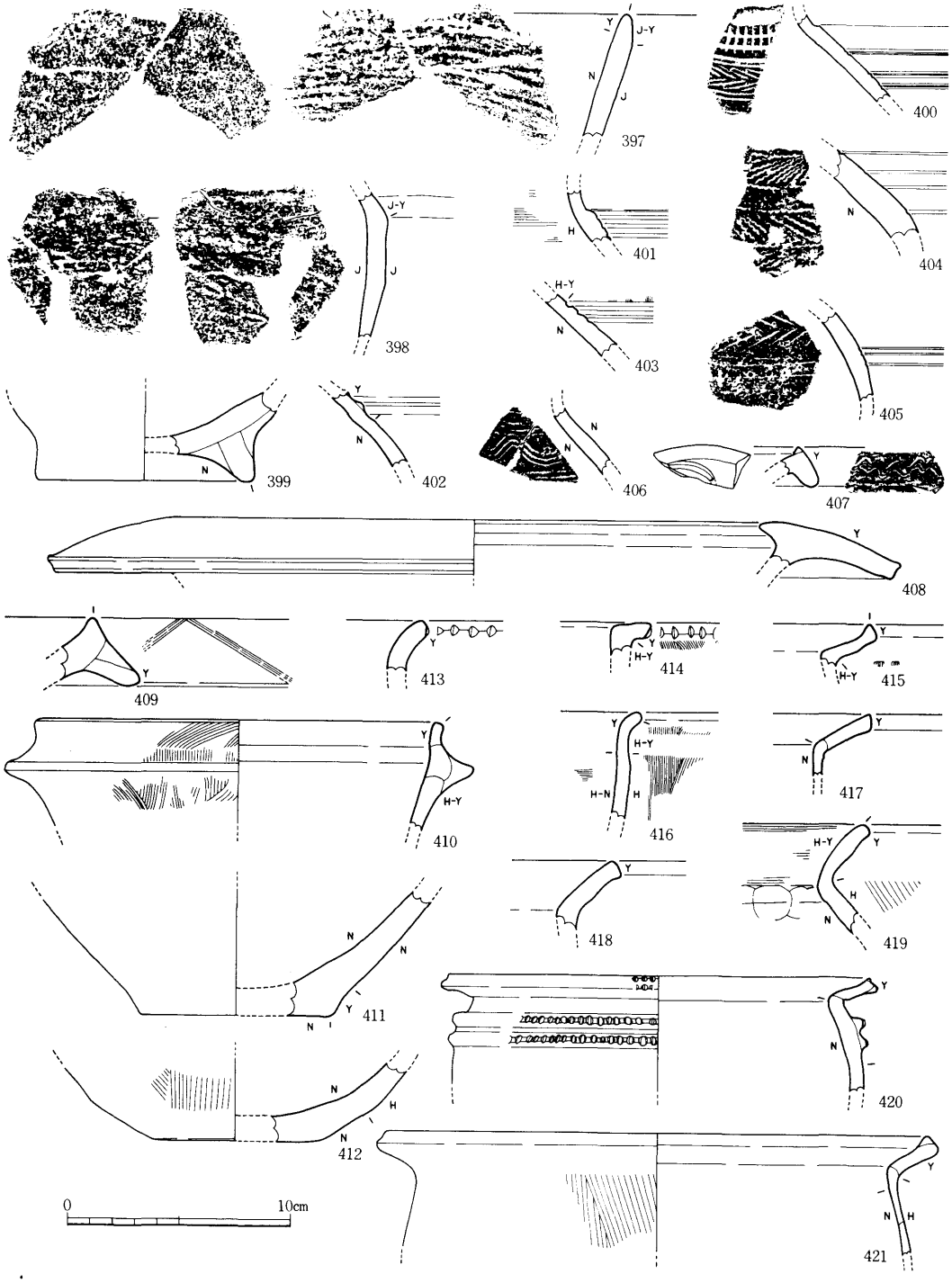


Fig. 84　第６層出土遺物実測図(1)

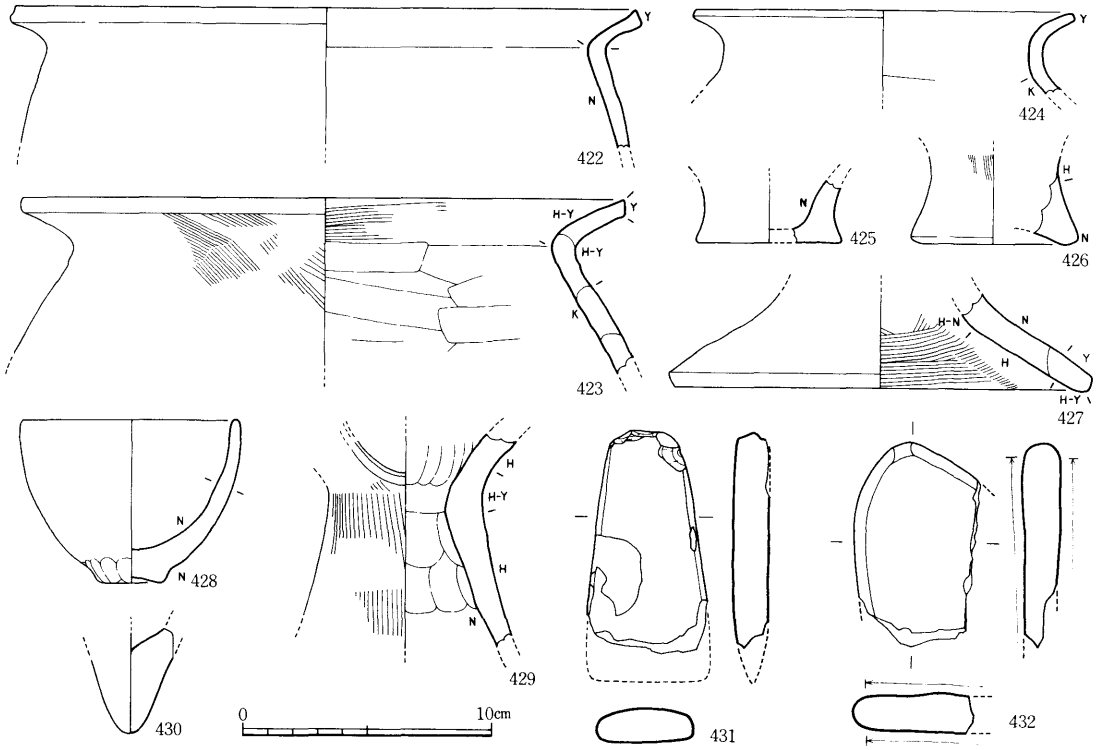


Fig. 85 第6層出土遺物実測図(2)

3) 第7層出土遺物 (Fig. 86～88, PL. 44～46・53～55)

縄文土器 (433)

精製の波状口縁をもつ晩期中頃の浅鉢。頸部が短い無文の浅鉢で、尖りぎみの口縁部は長くのびる。内面の段は消滅している。内外面ともよく研磨されている。

弥生土器 (434～501)

434～467は壺。前期のものには、短く外反する口縁部と頸部の境に段をもつもの (434) や肩部に削り出しによる段をもつもの (435～437) などがある。施文は羽状文が最も多く、他に木葉文 (436) や重弧文 (443・449) などがあり、ヘラ (435～440・448) や貝殻腹縁 (441～447・449) を用いてなされる。また、胴部には1～2条の断面三角形の貼付突帯の頂部にヘラ (445)、指 (446)、刷毛原体 (447) による刻目を施すものや扁平な断面長方形の貼付突帯にヘラ描きの沈線が巡るもの (450) などがある。内外面は大半がヘラミガキされる。中期のものには、鋤先状口縁をもつ須玖Ⅱ式のもの (451・452)、口縁端部が上下に肥厚 (454) または口縁部が下垂 (453) し、外面にヘラによる鋸歯文を施文するもの

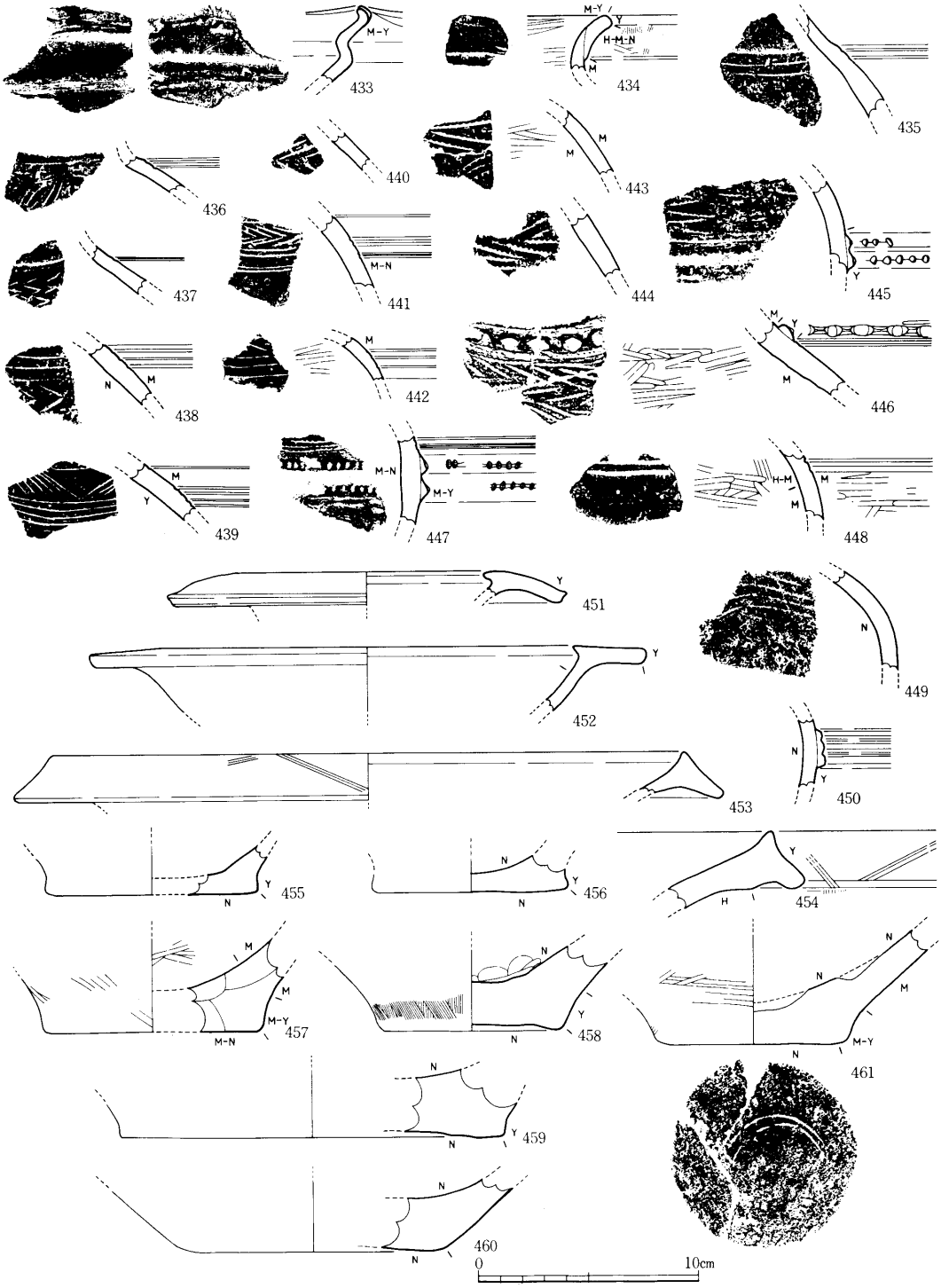


Fig. 86　第７層出土遺物実測図(1)

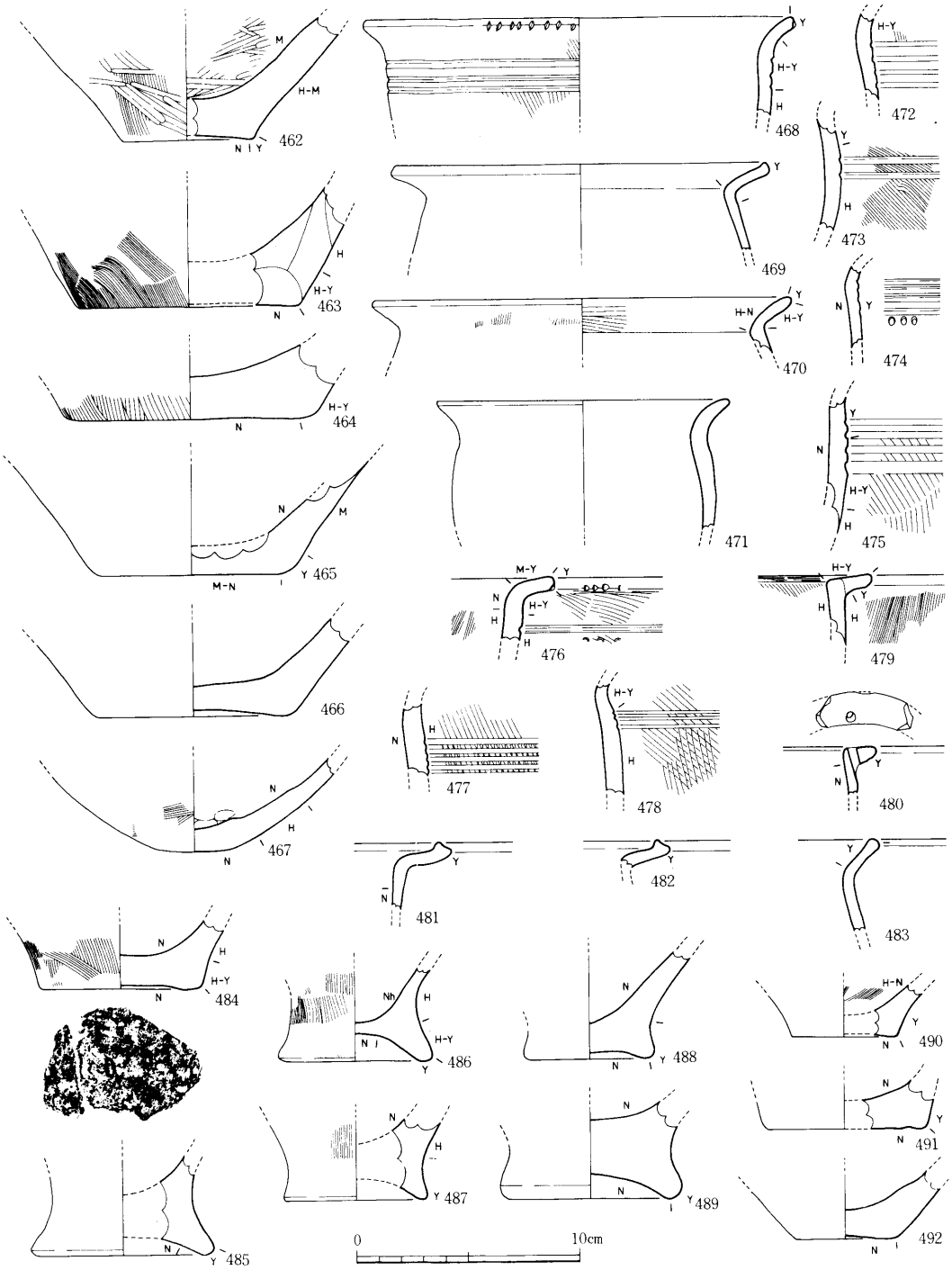


Fig. 87　第７層出土遺物実測図(2)

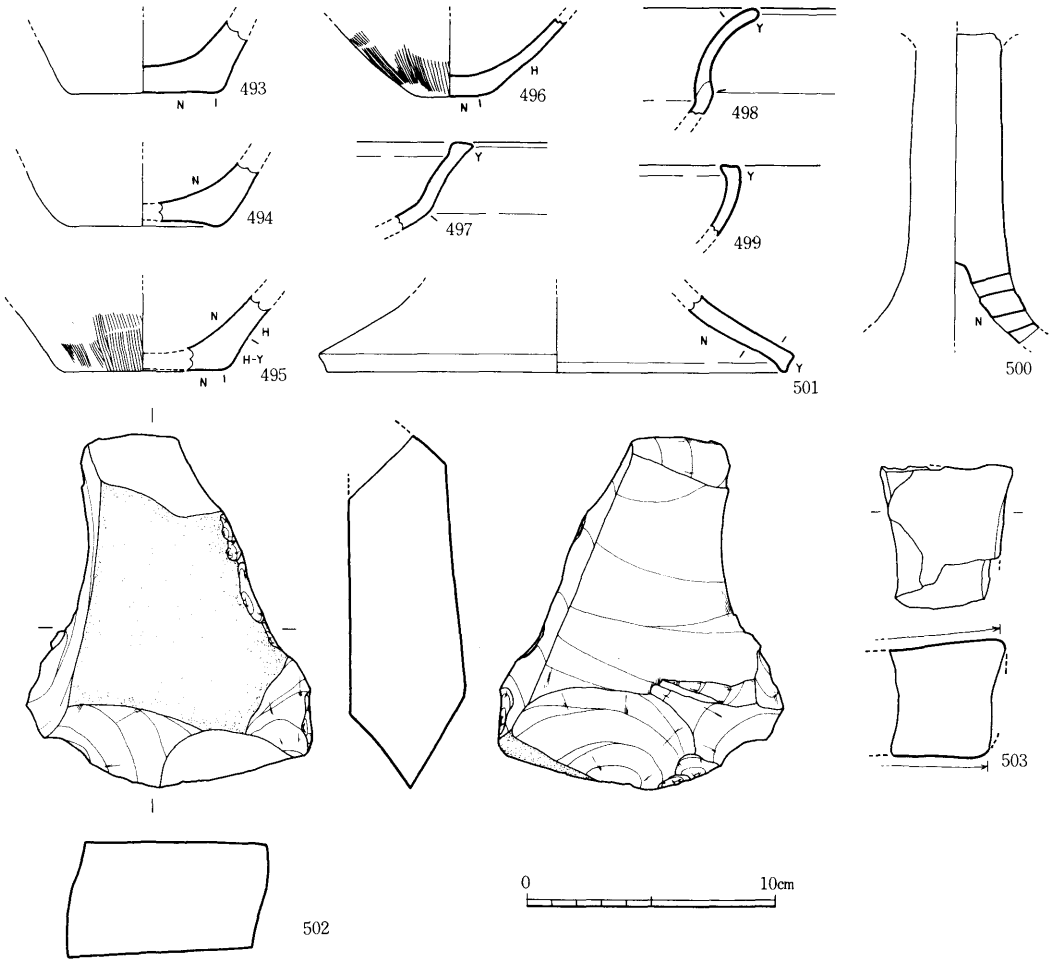


Fig. 88 第7層出土遺物実測図(3)

などがある。452は高坏かもしれない。底部は前期から後期のもので、前期のものが多い。461は外底面中央部にヘラによる重弧文が認められる。

468～496は甕。前期のものには、胴部の張りが少なく、口縁部が如意形に開き、口唇部下端にヘラによる刻目をもつもの（468・476）や逆「L」字形に開くもの（479・480）などがある。口縁下には2～4条の沈線が巡り、刺突文を刻むもの（474・476）もある。480は口縁部に蓋受けの穿孔が存在する。中期のものには、跳ね上げ口縁をもつもの（469・481・482）が多い。484～496は底部。484は外底面に籾圧痕が残る。

497～501は高坏。坏部は上半部で反転して、口縁部が外弯しながらゆるやかに開くもの

(498) と直線的に外傾し、端部が肥厚するもの (497) および内弯しながら立ち上がり、口縁端部が内側に突出するもの (499) などがある。脚部は長脚 (500) で、裾部が外弯ぎみにひろがり、端部内面が下方につまみ出されるもの (501) などがある。

石器 (502・503)

502は大形の打製石斧と考えられる。撥形を呈し、素材となる厚手の板石に正裏両面から均等に粗雑な剥離を加え、弯曲する幅広の刃部を作出する。正面左側縁は弯曲し、正面中央部には原礫面を残す。503は砥石で、少なくとも正裏両面を研砥面とする。

4) 第2・3層出土遺物 (Fig. 89, PL. 46・52)

504・505は歴史時代の土師器。504は糸切り底の坏で、体部から口縁部までゆるやかに内弯して立ち上がる。505は薄手の糸切り底の皿で、体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は尖る。底部端に明瞭な稜をもつ。506は土師質土器の鍋の脚部で、端部は外方に反る。507は貿易陶磁器の白磁埦で、口縁端部はカマボコ状の玉縁となる。

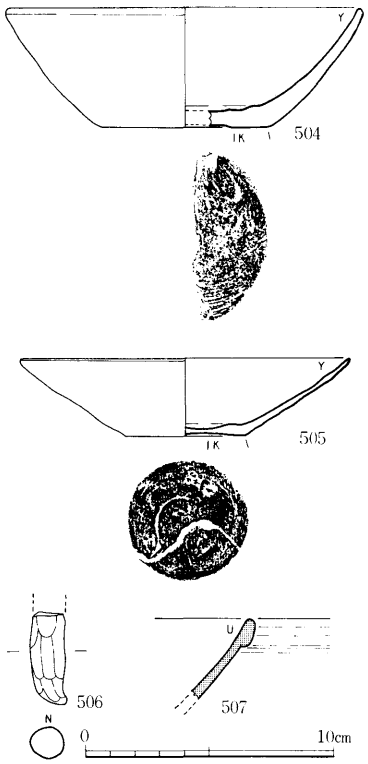


Fig. 89 第2・3層出土遺物実測図

5 小結

調査の結果、検出した遺構には弥生時代の土壙、環濠内に井戸、土葬墓を併設する室町時代の屋敷跡などのほか弥生～室町時代の柱穴多数がある。

弥生時代の土壙は調査区南西部で4基検出したが、時期がおさえられるのは後期後半～終末、中期後半～後期初頭の各1基である。この2基の土壙は規模、形態、遺物の出土状況などから投棄壙と考えられ、北東から南西に落ち込む地山の緩斜面に等高線に沿って並列する。調査区内ではこの時期の住居跡は検出されなかったが、調査区南側の大学会館前庭部では後期終末[8]、北側の飼料園では中期[9]の竪穴住居跡が検出されている。調査区北東の大学会館敷地では北西に開く谷が存在[10]しており、住居は当該地域東側の樹枝状に延びる低丘陵に存在するものと考えられる。

室町時代の屋敷跡は16世紀末～17世紀初頭のもので、「コ」の字状に巡る溝の内側に営まれている。環濠内のコーナーには石組井戸、幼児用と考えられる土葬墓各1基が併設さ

れており、防府市下右田遺跡[11]、同玉祖遺跡[12]など県内における環濠をもつ中世の富裕農民層の屋敷構[10]えに共通する構造である。なお、環濠内部は一部調査区外にあたるため完掘しておらず、掘立柱建物跡の配置状況は将来の調査を待つことにしたい。

出土遺物のうち注目しておきたいものがいくつかある。

まず、第1号土壙出土の弥生時代後期の土器群がある。土壙の検出状況から上面の削平は考えられず、また、明らかに異なる時期の混入品もないことから、一括性の高い資料として取り扱うことができる。壺・甕・鉢・高坏・支脚・器台などの器種がある。

複合口縁の壺は頸部が短くゆるやかに外反し、内傾する口縁部の端部が外方に屈曲するもの（57）や口縁部が中位で直立するもの（58）などがある。肩部には貼付突帯が巡り、頂部にヘラや刷毛原体による刻目や斜格子を施文する。口縁部の屈曲部はやや強く外方に突出する。

甕は「く」の字に外反する短めの口縁部をもち、端部に面をもつものと尖るものなどがある。内面はヘラ削りするものが多く、刷毛目、ナデ仕上げも見られる。

高坏は坏部が深く、上半部で反転して弯曲して開き、口縁端部に面をもつもの（95）や、坏部が浅く、直立する口縁部の端部が水平に折れ曲がり、上面に水平な面をもつもの（96）などがある。脚部は長脚で、ゆるやかに開き、裾部が内弯ぎみに広がる。

以上の土器群の編年的位置づけを検討してみる。複合口縁壺は徳山市円光寺遺跡[14]の複合口縁壺のように頸部に沈線をもつ中期的な要素をもつものはない。また、終末の標識である熊毛郡平生町吹越遺跡[15]土器群に若干先行する玖珂郡玖珂町清水遺跡[16]土器群のように、口縁端部が外方に屈曲するものがあること、高坏の口縁端部が水平に折れ曲がり、上面に水平な面をもつものが北部九州では第3様式に出現している[17]が、坏部が深く上半部で反転して弯曲して開き、口縁端部に面をもつものが量的には卓越していること、また、甕は「く」の字に外反する短めの口縁部をもち、端部に面をもつものと尖るものなどがあり、内面はヘラ削りするものが多い。しかし、頸部が大きくやや強く外反し、口縁部が長いものは含まれていないことから清水遺跡土器群と同時期かやや先行するものと考えられ、後期中頃～後半に位置づけられよう。

第5層から出土した滑石製模造品も特筆される。滑石製模造品は出土状況から6世紀後半のもので、盾・斧・鏃形のほか単孔の円板があり、整形段階の第一次研磨のままのものと第二次研磨まで行なわれるものとが混在する。構内遺跡では大学会館前庭部で、鑿痕を残す滑石の原石が剥片を伴って出土している[18]ことからも、すべての滑石製模造品が製品と

して搬入されたものでなく、当地で加工作業が行なわれたことを示唆している。構内遺跡の南西約2.8kmに所在する山口市西遺跡では、盾はないが円板・斧形・鏃形・鑿形などほぼ同一の組成をもつ滑石製模造品が未製品とともに竪穴住居跡から一括して54点出土している。[19] 同遺跡では原石は出土しておらず、同遺跡では未製品として集落内に持ち運ばれたもので、構内遺跡と模造品の製作過程に相違がみられる。

また、第5層の弥生土器には櫛描文をもつ壺や「く」の字に外反する口縁部をもち、上下に拡張した口唇部外面に擬凹線が巡る山陰系甕、下城式の甕など、[20] 外来系の土器群も存在する。

さらに、タガがやや高く断面台形をなす土師質の円筒埴輪が出土している。川西編年のV期にあたり、タガの形状、調整から6世紀前半に位置づけられる。構内遺跡では、過去に本調査区の南西約400mに位置する、家畜病院から女子寮にかけての丘陵から同時期の土師質の円筒埴輪17点が採集されている。[21] 出土地点に距離的な大きな隔たりがあること、両地点間には谷が存在すること、および、埴輪の残存状況などから相互の流入は考えられない。また、両地点とも結晶片岩の板石もあわせて出土、採集されており、本調査区周辺の丘陵にも古墳の存在が想定される。今後の調査に期待したい。

歴史時代の土器にも特筆すべき資料がある。まず、第5号土壙から出土した非ロクロ成形の土師器がある。口縁部の資料で器形は明かでないが、従来、山口市大内氏館跡[22]や大内氏の別邸である築山跡[23]で特徴的に出土する「B式土師器[24]」と同一タイプのもので、白石構内の附属中学校敷地[25]や山口市瑠璃光寺跡遺跡[26]で出土例がある。瑠璃光寺跡遺跡は大内氏臣下の武士集団である仁保氏家臣の造墓地と推察されており、少なくとも16世紀代にはこの種の「特定のタイプの土器が選択[27]」的に葬送儀礼用に供献されている。本学の所在する吉田の地も仁保氏と無縁ではない。当地は鎌倉時代には恒富保の一部に編入されており、[28] 鎌倉幕府から地頭職として山口市仁保庄に入部した平子重経[29]から四男重継は恒富保地頭職を分割相続している。重継は以後、恒富氏と称し、13世紀には本家の恒富氏と分家の吉田氏両家に分かれ、本学キャンパスの所在する平川の恒富、吉田両郷を支配するようになり、地頭領主として成長してゆく。「両家とも戦国期に至るまで仁保の本家の軍事指揮下にあり、分家後も仁保との交流があったと考えられ[30]」ており、この種の土器が搬入された可能性は否定できない。吉田構内では環濠をもつ屋敷内の土葬墓から出土していることから、恒富、吉田両氏の荘園支配の過程で掌握された富裕農民層が「B式土師器」などの特定のタイプの土器を選択的に葬送儀礼用に供献したものと考えられる。

以上、今回の調査の成果を述べたが、包含層出土遺物の中に縄文時代晩期中頃～弥生時代前期の土器が含まれており、立地からも周辺に当該期の集落遺構が存在する可能性が高くなった。吉田構内では当該期の遺構は希薄で、今後の調査によって構内遺跡の歴史的変遷過程を明らかにしていく必要があろう。

[注]

1) 小野忠熙「山口大学吉田遺跡」（『考古学ジャーナル』第9号、ニューサイエンス社、1967年）。
2) 同　「山口大学構内吉田遺跡の性格」（『学園だより』第6号、山口大学、1970年）。
3) 山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』（山口大学、1976年）。
4) 防府市下右田遺跡、同玉祖遺跡などでも屋敷を巡る環濠内のコーナーから土葬墓、火葬墓が検出されている。
   a 山口県教育委員会『下右田遺跡第4次調査概報・総括』（1980年）。
   b 山口県教育委員会『玉祖遺跡・西小路遺跡』（1983年）。
5) 山口市瑠璃光寺跡遺跡では15～16世紀の 174基の集団墓のなかから、性別・年齢の判明している43基の墓について、墓壙の規模と被葬者の相関関係の分析を行っている。その結果、墓壙の上面の面積が 0.5㎡以下の場合は大半が幼児墓と考えて大過ないと判断された。

   なお、勝田至氏は屋敷墓の被葬者の性格について、屋敷墓成立の要因を「①開発者の霊と土地（とくに屋敷地）との結びつきという観念、②それを支えている屋敷・土地の所有と継承というイエ制度、③墓（死体）に死者の人格が残るという観念」の複合体として把握している。

   本例は後世の削平を考慮に入れても、埋葬形態、墓壙の平面形態および上面の面積が0.39㎡であることなどから幼児墓と考えるのが妥当であろう。防府市玉祖遺跡でも、環濠をもつ室町時代の屋敷内に幼児墓が検出されており、屋敷・土地の継承観念の反映と理解できよう。
   a 小田村宏「墓の分析および墓群の構成と変遷」（『瑠璃光寺跡遺跡』、山口市教育委員会、1988年）。
   b 勝田　至「中世の屋敷墓」（『史林』第71巻3号、1988年）。
   c 前掲注 4）b。
6) 山口市教育委員会『大内氏館跡Ⅶ』（1987年）。
7) 川西宏幸「円筒埴輪総論」（『考古学雑誌』第64巻第2号、1978年）。
8) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。
9) 前掲注1）～3）。
10) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）。
11) 前掲注4）a。
12) 前掲注4）b。
13) 山口県教育委員会『上辻遺跡・鋳銭司大歳遺跡・今宿西遺跡』（1984年）。
14) 山口県教育委員会『円光寺遺跡』（1987年）。
15) 平生町教育委員会・山口県教育委員会『吹越遺跡第2次調査概報』（1972年）。
16) 山口県教育委員会『清水遺跡』（1989年）。
17) 柳田康雄「高三潴式と西新町式土器」（『弥生文化の研究』4、雄山閣、1987年）。
18) 前掲注8）。

19) 山口市教育委員会『西遺跡』（1986年）。

20) a　後藤宗俊『台ノ原遺跡』（大分県教育委員会、1975年）。

b　坂本嘉弘「宮ノ原遺跡出土の土器」（『宮ノ原遺跡』、安心院町教育委員会、1984年）。

21) 吉田寛「吉田遺跡採集の円筒埴輪について」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1985年）。

22) a　山口市教育委員会『大内氏館跡Ⅰ』（1981年）。

b　同　『大内氏館跡Ⅱ』（1980年）。

c　同　『大内氏館跡Ⅲ』（1981年）。

d　同　『大内氏館跡Ⅳ』（1982年）。

e　同　『大内氏館跡Ⅴ』（1983年）。

f　同　『大内氏館跡Ⅵ』（1984年）。

g　前掲注６）。

23) a　山口市教育委員会『大内氏築山跡Ⅰ』（1986年）。

b　同　『大内氏築山跡Ⅱ』（1988年）。

24) 前掲注６）。

25) 山口大学埋蔵文化財資料館「亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、1987年）。

26) 前掲注５）a。

27) 前掲注26）。

28) 内田伸・石川卓美「山口市」（『山口県の地名』、日本歴史地名体系、1980年）。

29) 『三浦家文書』に建久8年（1197年）、平子重経が恒富保の地頭職に任ぜられた記載がある。

30) 田中倫子「中世の仁保」（『瑠璃光寺跡遺跡』、山口市教育委員会、1988年）。

Tab. 5　出土遺物観察表

法量（　）は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面　②内面)	胎土	焼成	備考
Aトレンチ（Fig. 50・51）						
1	弥生土器　壺		にぶい黄橙色(10YR7/2)	精良	良好	
2	弥生土器　壺	①(18.0)	橙色(7.5YR7/6)	不良	良好	鋤先状口縁
3	弥生土器　壺	①(16.8)	①灰褐色(5YR4/2) ②灰褐色(7.5YR6/2)	不良	堅緻	
4	弥生土器　壺	①(24.2)	①にぶい黄橙色(10YR6/3) ②橙色(7.5YR6/6)	良好	不良	
5	弥生土器　壺		浅黄橙色(10YR8/3)	良好	良好	
6	弥生土器　壺	②(7.9)	浅黄橙色(10YR8/4)	良好	良好	外面丹塗り
7	弥生土器　壺	②(5.8)	浅黄橙色(10YR8/3)	良好	良好	
8	弥生土器　壺	②(8.8)	浅黄橙色(2.5YR8/3)	不良	良好	
9	弥生土器　甕	①(17.6)	①浅黄橙色(7.5YR8/3) ②灰白色(7.5Y8/1)	良好	不良	
10	弥生土器　甕	①(23.0)	①橙色(5YR6/6) ②黒色(N2/0)	精良	堅緻	須玖式
11	弥生土器　甕	①(23.4)	灰白色(10YR8/2)	良好	不良	
12	弥生土器　甕	①(24.0)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	精良	堅緻	
13	弥生土器　甕		にぶい黄橙色(10YR6/3)	不良	やや不良	
14	弥生土器　甕		①灰褐色(5YR5/2) ②にぶい橙色(7.5YR7/3)	良好	良好	
15	弥生土器　甕		灰白色(5Y8/2)	やや不良	良好	
16	弥生土器　甕		①灰黄色(2.5Y7/2) ②淡黄色(2.5Y8/3)	不良	良好	跳ね上げ口縁
17	弥生土器　甕	①(29.9)	①灰黄色(2.5Y7/2) ②浅黄橙色(10YR8/3)	良好	堅緻	
18	弥生土器　甕	② 7.2	灰白色(5Y7/1)	良好	良好	
19	弥生土器　甕	② 6.6	①橙色(2.5YR7/6) ②にぶい橙色(5YR7/4)	不良	良好	
20	弥生土器　甕	②(6.9)	橙色(2.5YR7/6)	良好	堅緻	
21	弥生土器　甕	② 6.4	①橙色(5YR7/6) ②褐灰色(10YR4/1)	不良	やや不良	
22	弥生土器　甕	② 4.0	①橙色(2.5YR6/6) ②灰白色(10YR8/2)	やや不良	良好	
23	弥生土器　甕	② 5.0	①明赤褐色(2.5YR7/2) ②灰黄色(2.5Y7/2)	不良	やや不良	
24	弥生土器　甕	② 2.0	①にぶい褐色(7.5YR5/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	良好	良好	
25	弥生土器　高坏		浅黄橙色(10YR8/3)	良好	良好	
26	弥生土器　高坏		①淡黄色(2.5YR7/2) ②灰白色(5Y8/2)	良好	不良	
27	弥生土器　高坏	②(15.4)	浅黄橙色(10YR8/3)	不良	やや不良	
28	土師器　高坏		赤色(10R5/8)	良好	良好	
29	土師器　台付鉢	② 8.8	①淡赤橙色(2.5YR7/4) ②灰白色(10YR8/2)	良好	良好	
30	土師器　埦	①12.2 ② 5.4 ③ 4.1	灰白色(10YR8/2)	良好	良好	
Bトレンチ（Fig. 52）						
34	弥生土器　壺		①浅黄橙色(7.5YR8/3) ②灰白色(10YR8/2)	良好	良好	
35	弥生土器　壺		浅黄橙色(10YR8/4)	良好	やや不良	
36	弥生土器　壺	②(4.9)	①淡黄色(2.5Y8/3) ②暗灰色(N3/0)	良好	良好	
37	弥生土器　壺	② 3.0	①淡黄色(2.5Y8/3) ②にぶい橙色(5YR7/4)	精良	良好	
38	弥生土器　甕	①(21.8)	にぶい褐色(7.5YR5/4)	精良	良好	

出土遺物観察表

法量（ ）は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
39	弥生土器 甕	②(6.5)	①にぶい橙色(5YR7/4) ②暗灰色(N3/0)	不良	良好	
40	弥生土器 壺		橙色(7.5YR7/6)	良好	良好	
41	弥生土器 壺		①にぶい褐色(7.5YR5/4) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	良好	良好	
42	弥生土器 壺	②(7.4)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	堅緻	
43	弥生土器 壺	② 3.3	灰白色(7.5Y8/1)	やや不良	不良	
44	弥生土器 甕		橙色(7.5YR7/6)	不良	やや不良	
45	弥生土器 甕		浅黄橙色(10YR8/3)	良好	やや不良	
46	弥生土器 高坏		にぶい橙色(5YR7/4)	不良	良好	
49	弥生土器 壺		にぶい褐色(7.5YR6/3)	精良	堅緻	
50	弥生土器 壺		①灰白色(2.5Y8/2) ②灰黄褐色(10YR6/3)	良好	良好	
51	弥生土器 壺		浅黄色(2.5YR7/3)	精良	良好	
52	弥生土器 壺	②(11.1)	赤褐色(2.5YR4/8)	不良	やや不良	
53	弥生土器 甕	②(6.3)	①橙色(2.5YR6/8) ②橙色(7.5YR7/6)	不良	良好	
55	磁器 紅皿	① 4.8 ② 1.7 ③ 1.35	素地－灰白色(7.5YR8/2) 釉調－明緑灰色(7.5GY8/1)			伊万里系
第1号土壙(Fig.55～59)						
56	弥生土器 壺	①41.9	橙色(2.5YR7/8)	やや不良	良好	複合口縁
57	弥生土器 壺	①15.6	淡橙色(5YR8/4)	良好	良好	複合口縁
58	弥生土器 壺	①18.2	灰白色(2.5Y8/2)	良好	良好	複合口縁
59	弥生土器 壺	①(16.7)	淡黄色(2.5Y8/3)	やや不良	やや不良	複合口縁
60	弥生土器 壺	①13.8	灰白色(2.5Y8/2)	精良	良好	複合口縁
61	弥生土器 壺	① 9.7	淡黄色(2.5Y8/3)	不良	良好	複合口縁
62	弥生土器 壺		①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②灰黄褐色(10YR5/2)	良好	良好	
63	弥生土器 壺		①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②灰褐色(10YR4/1)	精良	精良	
64	弥生土器 壺	②(5.0)	①橙色(5YR6/6) ②灰黄褐色(10YR5/2)	良好	良好	
65	弥生土器 壺	②(5.8)	①浅黄橙色(10YR8/4) ②灰白色(7.5YR8/1)	不良	やや不良	
66	弥生土器 壺	①26.4	橙色(2.5YR7/6)	良好	良好	
67	弥生土器 壺	② 6.5	①橙色(5YR7/6) ②淡黄色(2.5Y8/3)	良好	良好	
68	弥生土器 壺	② 8.5	①にぶい橙色(2.5YR6/4) ②灰白色(5Y8/1)	良好	良好	
69	弥生土器 壺	② 4.5	①赤橙色(10R6/6) ②灰白色(7.5Y8/1)	不良	良好	
70	弥生土器 甕		①赤色(10R5/6) ②にぶい褐色(7.5YR5/4)	良好	堅緻	
71	弥生土器 甕	①11.8	赤色(10R5/8)	良好	良好	
72	弥生土器 甕	①(11.8)	①淡黄色(2.5Y8/3) ②灰白色(5Y7/1)	良好	不良	
73	弥生土器 甕	①(15.4)	赤橙色(10R6/8)	良好	不良	
74	弥生土器 甕	①(14.0)	淡黄色(2.5Y8/3)	やや不良	不良	
75	弥生土器 甕	①(15.9)	①にぶい橙色(5YR7/4) ②灰白色(2.5Y8/2)	やや不良	やや不良	
76	弥生土器 甕	①(30.8)	橙色(2.5YR7/6)	良好	良好	
77	弥生土器 甕	①(20.3)	①灰褐色(5YR5/2) ②黄褐色(2.5Y5/1)	精良	堅緻	
78	弥生土器 甕	①(17.0)	灰白色(10YR8/2)	不良	不良	

法量（ ）は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
79	弥生土器 甕	①(18.8)	①にぶい黄橙色(10YR7/4) ②にぶい橙色(7.5YR7/3)	良好	良好	
80	弥生土器 甕	①(24.6)	赤色(10R5/8)	不良	精良	
81	弥生土器 甕	①(24.4)	浅黄橙色(10YR8/3)	良好	良好	
82	弥生土器 甕	①(11.8)	灰褐色(7.5YR4/2)	精良	堅緻	
83	弥生土器 甕	②(3.6)	①浅黄橙色(10YR8/3) ②灰白色(10YR8/3)	やや不良	良好	
84	弥生土器 甕	②(3.7)	①灰黄色(2.5Y7/2) ②灰白色(10YR7/1)	良好	良好	
85	弥生土器 甕	② 4.1	①淡赤橙色(2.5YR7/4) ②灰白色(2.5Y8/2)	良好	良好	
86	弥生土器 甕	② 1.5	①淡黄色(7.5Y8/3) ②淡黄色(2.5Y8/3)	良好	やや不良	
87	弥生土器 甕	②(3.4)	①赤色(10R5/6) ②にぶい褐色(7.5YR6/3)	精良	堅緻	
88	弥生土器 甕	②(5.4)	灰黄褐色(10YR6/2)	やや不良	堅緻	
89	弥生土器 甕	②(2.8)	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②にぶい橙色(5YR6/4)	不良	良好	
90	弥生土器 甕	②(7.2)	①灰白色(2.5Y8/1) ②灰白色(5Y7/1)	良好	良好	
91	弥生土器 甕	②(6.7)	①橙色(5YR7/6) ②浅黄橙色(10YR8/4)	不良	堅緻	
92	弥生土器 甕	②(3.0)	①橙色(7.5YR7/6) ②浅黄色(2.5YR7/3)	やや不良	堅緻	
93	弥生土器 高坏	①(30.0)	淡黄色(2.5Y8/3)	良好	やや不良	
94	弥生土器 高坏	①(30.0)	橙色(2.5YR6/6)	良好	良好	
95	弥生土器 高坏	①(22.2)	①橙色(5YR7/6) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	やや不良	良好	
96	弥生土器 高坏	①(26.4)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	やや不良	良好	
97	弥生土器 高坏		橙色(2.5YR7/8)	やや不良	不良	
98	弥生土器 高坏		にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	やや不良	
99	弥生土器 高坏		①褐灰色(5YR4/1) ②橙色(2.5YR7/6)	不良	不良	
100	弥生土器 高坏		①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②灰色(5Y5/1)	やや不良	良好	
101	弥生土器 高坏		淡黄色(2.5Y8/3)	良好	やや不良	
102	弥生土器 高坏	②17.4	灰白色(10YR8/2)	精良	堅緻	
103	弥生土器 高坏		赤橙色(10R6/8)	良好	良好	
104	弥生土器 高坏		浅黄橙色(10YR8/3)	良好	良好	
105	弥生土器 高坏		①灰褐色(5YR5/2) ②黄灰色(2.5YR4/1)	精良	堅緻	
106	弥生土器 高坏		にぶい橙色(5YR7/4)	不良	良好	
107	弥生土器 高坏		にぶい赤橙色(10YR6/4)	精良	不良	
108	弥生土器 高坏		赤橙色(10R6/8)	精良	良好	
109	弥生土器 高坏	②(17.8)	赤橙色(10R6/6)	良好	不良	
110	弥生土器 高坏	②(20.1)	①灰白色(2.5Y8/2) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	精良	良好	
111	弥生土器 器台		灰白色(2.5Y8/2)	精良	堅緻	
112	弥生土器 支脚	②11.0	浅黄橙色(10YR8/3)	良好	良好	
113	弥生土器 鉢	②(5.4)	①灰白色(10YR8/2) ②にぶい橙色(5YR7/4)	精良	良好	
114	弥生土器 鉢	①10.5 ② 2.7 ③ 7.8	灰白色(5YR8/2)	精良	良好	
115	手捏土器 鉢	② 0.8	灰白色(7.5Y8/1)	やや不良	やや不良	
116	手捏土器 鉢	② 1.3	①黄橙色(7.5YR7/8) ②灰白色(2.5Y8/1)	やや不良	不良	外面丹塗り

出土遺物観察表

法量（ ）は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
117	弥生土器 支脚	①(3.6) ②(5.6)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	不良	堅緻	
第2号土壙（Fig.61・62）						
120	弥生土器 壺	①(34.0)	浅黄橙色(10YR8/4)	良好	良好	
121	弥生土器 壺		浅黄橙色(10YR8/3)	不良	やや不良	
122	弥生土器 壺		浅黄橙色(10YR8/3)	良好	良好	鋤先状口縁
123	弥生土器 壺		橙色(5YR7/6)	良好	堅緻	複合口縁
124	弥生土器 壺		にぶい黄橙色(10YR7/4)	良好	良好	
125	弥生土器 壺	② 2.8	浅黄橙色(10YR8/3)	精良	良好	
126	弥生土器 甕	①15.6	にぶい橙色(5YR7/4)	良好	堅緻	
127	弥生土器 甕	①(15.8)	灰白色(10YR8/2)	良好	やや不良	
128	弥生土器 甕	①(21.3)	黄橙色(10R6/8)	良好	不良	
129	弥生土器 甕		①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②にぶい橙色(5YR6/3)	良好	良好	
130	弥生土器 甕		浅黄橙色(7.5YR8/3)	精良	やや不良	跳ね上げ口縁
131	弥生土器 甕	②(6.0)	①橙色(2.5YR6/6) ②にぶい黄橙色(10YR5/3)	不良	良好	
132	弥生土器 甕	② 3.6	①橙色(2.5YR7/6) ②褐灰色(10YR6/1)	良好	堅緻	
133	弥生土器 甕	②(3.6)	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②浅黄橙色(10YR8/4)	良好	良好	
134	弥生土器 甕	② 1.5	にぶい黄橙色(10YR6/3)	良好	良好	
135	弥生土器 甕	②(6.0)	①灰黄色(2.5Y7/2) ②灰白色(10YR8/2)	良好	良好	
136	弥生土器 高坏	①(21.2)	橙色(5YR7/6)	やや不良	やや不良	
137	弥生土器 高坏	①(16.8)	①浅黄橙色(7.5YR8/4) ②灰色(7.5Y8/1)	不良	やや不良	
138	弥生土器 高坏	②(15.4)	①赤橙色(10YR6/8) ②にぶい橙色(5YR7/3)	良好	良好	
139	弥生土器 高坏	②16.8	①浅黄橙色(10YR8/3) ②橙色(7.5YR7/6)	良好	良好	
140	手捏土器 高坏or台付鉢	① 6.0 ② 4.1 ③ 5.0	赤橙色(10R6/6)	良好	良好	
第5号土壙(Fig.66)						
143	土師器 皿	①10.6 ② 6.0 ③1.75	淡黄色(2.5Y8/3)	やや不良	良好	
144	土師器 皿	①10.3 ② 6.2 ③2.15	淡黄色(2.5Y8/3)	良好	良好	
145	土師器 坏or皿		にぶい橙色(7.5YR7/3)	精良	良好	
井戸（Fig.68）						
146	土師器 皿	①12.7 ② 5.2 ③ 3.1	明褐灰色(7.5YR7/2)	良好	良好	
147	土師器 皿	①11.7 ② 5.2 ③ 3.0	①淡黄色(2.5Y8/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	精良	堅緻	
148	土師器 皿	①(12.2) ②(5.8) ③2.85	にぶい橙色(7.5YR7/3)	やや不良	良好	
149	土師器 皿	①12.6 ② 5.2 ③ 3.2	にぶい橙色(7.5YR7/4)	精良	堅緻	
150	土師器 皿	①13.2 ② 5.1 ③2.85	①淡黄色(2.5Y8/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	良好	良好	
151	土師器 皿	①(13.5)	明黄橙色(7.5YR8/3)	良好	堅緻	
152	土師器 皿	①12.4 ② 3.7 ③2.85	灰白色(2.5Y8/2)	精良	やや不良	
153	土師器 皿	① 7.0 ② 4.6 ③1.25	にぶい橙色(7.5YR7/4)	精良	堅緻	
154	須恵質土器 擂鉢		灰白色(10YR8/1)	良好	良好	

法量（　）は復原値

番号	器種	法量（cm）（①口径②底径③器高）	色調（①外面　②内面）	胎土	焼成	備考
第1号溝（Fig.70～72）						
157	土師器　坏	②(8.0)	浅黄橙色(7.5YR8/4)	やや不良	やや不良	
158	土師器　坏	②(8.2)	①灰白色(2.5YR7/1) ②褐灰色(10YR5/1)	やや不良	良好	
159	土師器　皿	②(7.0)	①浅黄橙色(7.5YR8/3) ②灰白色(10YR8/2)	良好	堅緻	
160	土師器　皿	②(5.4)	灰白色(10YR8/2)	良好	やや不良	
161	土師器　皿	②(6.4)	①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②浅黄橙色(7.5YR7/4)	良好	堅緻	
162	土師器　皿	②(5.6)	灰白色(2.5YR8/2)	良好	やや不良	
163	土師器　皿	①(6.2) ②(4.0) ③(1.05)	浅黄橙色(10YR8/3)	良好	堅緻	
164	瓦質土器　擂鉢		灰色(N6/0)	不良	良好	
165	瓦質土器　擂鉢		灰白色(10YR8/1)	不良	やや不良	
166	瓦質土器　擂鉢	①27.4 ②13.8 ③10.1	灰色(N4/0)	やや不良	やや不良	
167	瓦質土器　擂鉢	①(25.6)	灰白色(N8/0)	良好	良好	
168	瓦質土器　擂鉢	①(27.4)	灰色(N4/0)	やや不良	やや不良	
169	瓦質土器　擂鉢	①(28.8)	①灰白色(5Y8/1) ②灰色(N6/0)	良好	良好	
170	瓦質土器　擂鉢	②(14.7)	①灰色(N4/0) ②灰色(7.5Y6/1)	良好	良好	
171	瓦質土器　鍋		明青灰色(5B7/1)	やや不良	堅緻	外面に煤付着
172	瓦質土器　鍋		暗青灰色(5B4/1)	良好	堅緻	外面に煤付着
173	瓦質土器　鍋		①灰白色(2.5Y8/2) ②灰白色(5Y8/1)	良好	良好	外面に煤付着
174	瓦質土器　鍋		暗灰色(N3/0)	精良	良好	
175	瓦質土器　鍋		①灰色(N5/0) ②灰白色(7.5Y7/1)	良好	良好	
176	瓦質土器　鍋		灰色(N3/0)	良好	良好	
177	瓦質土器　鍋		①灰オリーブ色(5Y6/2) ②暗青灰色(5B4/1)	良好	良好	
178	瓦質土器　鍋		灰色(7.5Y5/1)	不良	やや不良	
179	瓦質土器　鍋		青灰色(10BG5/1)	良好	良好	
180	瓦質土器　鍋		青灰色(5BG5/1)	良好	良好	
181	瓦質土器　鍋		灰色(N5/0)	良好	やや不良	
182	瓦質土器　こね鉢	①18.0	①灰白色(10Y8/1) ②灰黄色(2.5Y7/2)	良好	良好	
183	瓦質土器　こね鉢	①21.9	灰色(N6/0)	精良	良好	片口
184	瓦質土器　甕		灰色(7.5Y6/1)	不良	不良	
185	瓦質土器　火鉢	①34.4 ②24.0 ③31.7	灰色(10Y5/1)	良好	良好	
186	土師質土器　鍋		橙色 (2.5YR7/6)	やや不良	良好	
187	土師質土器　鍋		灰白色(7.5Y8/2)	良好	良好	
188	土師質土器　鍋		明黄褐色(10YR7/6)	不良	良好	
189	土師質土器　鍋		赤橙色(10R6/8)	良好	良好	外面一部に煤付着
190	土師質土器　鍋		灰白色(10YR8/1)	精良	良好	
191	土師質土器　鍋		にぶい橙色(5YR7/4)	良好	不良	
192	須恵質土器　盤	①(14.0) ②(13.1) ③5.2	青灰色(5B5/1)	やや不良	良好	
193	青磁　埦		素地－灰白色(7.5Y6/1) 釉調－灰オリーブ色(7.5Y5/2)			龍泉窯系

出土遺物観察表

法量（　）は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
194	陶器 椀	①(12.8) ②(7.8) ③ 3.7	素地－灰白色(10Y8//1) 釉調－明緑灰色(10GY7/1)			染付
195	陶器 椀	①10.3 ② 4.1 ③ 7.0	素地－灰白色(2.5Y8/2) 釉調－明緑灰色(7.5GY8/1)			呉須－青灰色 (5BG5/1)
196	陶器 椀	② 5.0	素地－橙色(2.5YR6/6) 釉調－灰白色(2.5Y7/1)			
197	陶器 椀	①(13.6) ②(6.2) ③ 7.4	素地－灰色(N4/0) 釉調－白			萩焼系 井戸形
198	陶器 椀	①(11.0) ② 4.7 ③ 5.7	素地－明赤褐色(2.5YR5/6) 釉調－暗赤色(10R3/4)			美濃系 天目形
199	陶器 皿	② 4.4	素地－にぶい黄橙色(10YR7/2) 釉調－にぶい黄色(2.5Y6/4)			
200	陶器 皿	① 11.8 ② 4.6 ③ 2.7	素地－にぶい橙色(7.5YR6/4) 釉調－黄褐色(2.5Y5/3)			
201	陶器 皿	①(10.4)	素地－灰白色(10YR8/2) 釉調－オリーブ灰色(10Y5/2)			瀬戸系
202	陶器 鉢		素地－にぶい赤褐色(7.5R5/3) 釉調－半透明、灰黄褐色(10Y6/2)			
203	陶器 甕	①(24.6)	暗灰色(N3/0)	良好	良好	備前系
204	白磁 椀	②(4.2)	素地－灰白色(N7/0) 釉調－明緑灰色(10GY8/1)			内外に貫入あり
205	白磁 椀	①(12.0)	素地－灰白色(10YR8/2) 釉調－灰色(5Y8/1)			
206	白器 椀	②(6.2)	素地－灰白色(N8/0) 釉調－明緑灰色(10G7/1)			
207	磁器 湯呑		素地－灰白色(7.5Y8/1) 釉調－灰白色(10Y8/1)			呉須－暗青灰色 (5BG4/1)
208	磁器 燭台or仏飯器	② 4.6	素地－灰白色(7.5Y8/1) 釉調－灰白色(10Y7/1)			肥前系
第2号溝（Fig.74）						
212	瓦質土器 擂鉢	②13.6	暗青灰色(5BG4/1)	良好	やや不良	
213	瓦質土器 擂鉢	②(13.2)	暗青灰色(5B3/1)	良好	良好	
214	瓦質土器 擂鉢	②(16.0)	青灰色(10BG6/1)	不良	良好	
215	瓦質土器 鍋	①(24.0)	暗灰色(N3/0)	やや不良	良好	外面に煤付着
216	瓦質土器 こね鉢	②(13.4)	①灰色(7.5Y6/1) ②にぶい橙色(7.5Y7/3)	良好	良好	
217	陶器 擂鉢	②(10.8)	赤灰色(2.5YR4/1)	良好	良好	備前系
218	須恵質土器 擂鉢	①(23.6)	青灰色(5BG6/1)	良好	良好	
柱穴（Fig.75）						
219	土師質土器 鍋		灰白色(2.5Y8/2)	良好	堅緻	P 1
220	土師質土器 甕		橙色(2.5Y7/6)	やや不良	良好	P 1
221	土師器 皿	②(6.6)	①にぶい橙色(5YR6/3) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	精良	堅緻	P 2
222	土師器 坏	②(6.8)	①橙色(2.5YR6/6) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	やや不良	良好	P 3
223	土師器 皿	②(6.2)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	良好	やや不良	P 4
224	土師器 皿	①(11.3)	浅黄橙色(7.5YR8/4)	良好	良好	P 4
225	土師器 皿	②(4.7)	橙色(5YR7/8)	良好	良好	P 5
226	土師器 台付皿	② 5.2	橙色(2.5YR6/8)	精良	良好	P 5
227	青磁 椀		素地－灰白色(N7/0) 釉調－オリーブ灰色(10Y6/2)			P 6 龍泉窯系
228	弥生土器 高坏	②(15.6)	淡橙色(5YR8/4)	良好	不良	P 7
229	弥生土器 高坏	①(37.0)	淡橙色(5YR8/4)	良好	不良	P 7
231	土師器 皿	① 8.4 ② 5.1 ③ 2.5	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	P 9
232	土師器 皿	②(5.8)	橙色(2.5YR7/6)	良好	良好	P10
233	陶器 椀	② 4.2	素地－灰白色(10YR8/1)			P11

法量（ ）は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
234	弥生土器 甕	② 5.4	①橙色(2.5YR7/8) ②灰褐色(5YR6/2)	良好	良好	P12
235	弥生土器 甕	② 7.8	淡黄色(2.5Y8/3)	不良	不良	P13
236	土師器 皿	①(10.2) ②(6.2) ③ 2.0	灰白色(10YR8/2)	良好	良好	P14
237	弥生土器 甕		にぶい橙色(7.5YR7/4)	良好	良好	P15 跳ね上げ口縁
第5層 (Fig.76～81・83)						
238	弥生土器 壺		にぶい橙色(7.5YR7/4)	良好	良好	
239	弥生土器 壺		灰白色(10YR8/2)	良好	良好	
240	弥生土器 壺		灰白色(2.5Y8/1)	良好	良好	
241	弥生土器 壺		①にぶい橙色(5YR7/3) ②褐灰色(10YR5/1)	やや不良	良好	
242	弥生土器 壺		浅黄橙色(7.5YR8/4)	不良	良好	
243	弥生土器 壺		浅黄橙色(7.5YR8/3)	不良	良好	
244	弥生土器 壺		にぶい橙色(7.5YR7/3)	不良	やや不良	鋤先状口縁
245	弥生土器 壺		明赤褐色(2.5YR5/6)	精良	堅緻	
246	弥生土器 壺		にぶい橙色(5YR6/4)	精良	堅緻	
247	弥生土器 壺		橙色(5YR7/6)	やや不良	やや不良	複合口縁
248	弥生土器 壺		にぶい橙色(7.5YR7/4)	良好	堅緻	
249	弥生土器 壺	②(5.6)	①灰褐色(5YR6/2) ②褐灰色(7.5YR4/1)	良好	良好	
250	弥生土器 壺	②(6.4)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	良好	良好	
251	弥生土器 壺	②(2.6)	灰白色(2.5Y8/2)	不良	不良	
252	弥生土器 壺	②(6.0)	①淡赤橙色(2.5YR7/4) ②灰白色(2.5YR8/2)	良好	良好	
253	弥生土器 壺	②(6.8)	灰白色(2.5YR8/2)	不良	良好	
254	弥生土器 壺	②(9.4)	①明褐灰色(7.5YR7/2) ②灰白色(10YR8/2)	やや不良	良好	
255	弥生土器 壺	①(29.7)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	良好	良好	鋤先状口縁
256	弥生土器 壺	①(33.5)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	やや不良	良好	複合口縁
257	縄文土器 甕		①にぶい黄橙色(10YR7/4) ②黄灰色(2.5Y4/1)	良好	良好	
258	弥生土器 甕		明黄褐色(10YR6/6)	良好	良好	
259	弥生土器 甕		橙色(5YR7/6)	良好	やや不良	
260	弥生土器 甕		浅黄橙色(7.5YR8/4)	良好	良好	須玖Ⅰ式
261	弥生土器 甕		にぶい黄橙色(10YR6/3)	良好	良好	須玖Ⅰ式
262	弥生土器 甕		①浅黄橙色(10YR8/3) ②浅黄橙色(7.5YR8/4)	良好	良好	須玖Ⅰ式
263	弥生土器 甕	①21.6	にぶい橙色(7.5YR7/4)	良好	堅緻	跳ね上げ口縁
264	弥生土器 甕	①22.0	淡橙色(5YR8/4)	精良	堅緻	跳ね上げ口縁
265	弥生土器 甕		浅黄橙色(7.5YR8/4)	精良	やや不良	跳ね上げ口縁
266	弥生土器 甕		①灰褐色(5YR6/2) ②褐灰色(10YR4/1)	精良	良好	跳ね上げ口縁
267	弥生土器 甕		にぶい橙色(5YR7/4)	不良	良好	
268	弥生土器 甕		橙色(5YR6/8)	やや不良	やや不良	下城式
269	弥生土器 甕		灰褐色(5YR4/2)	良好	良好	
270	弥生土器 甕		明褐灰色(7.5YR7/2)	良好	良好	

出土遺物観察表

法量（　）は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
271	弥生土器 甕		①橙色(2.5YR7/8) ②灰白色(2.5Y8/2)	不良	不良	
272	弥生土器 甕		にぶい橙色(7.5YR7/3)	良好	良好	
273	弥生土器 甕		淡黄色(2.5Y8/3)	やや不良	不良	山陰系
274	弥生土器 甕		①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②淡黄色(2.5Y8/3)	良好	良好	山陰系
275	弥生土器 甕		灰白色(2.5Y8/1)	良好	不良	山陰系
276	弥生土器 甕		灰白色(10YR8/2)	やや不良	不良	山陰系
277	弥生土器 甕	①(11.0)	橙色(7.5YR6/6)	良好	良好	
278	弥生土器 甕	①(16.4)	淡黄色(2.5Y8/3)	良好	やや不良	
279	弥生土器 甕	①(17.7)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	良好	不良	
280	弥生土器 甕	①(14.5)	橙色(2.5YR7/6)	良好	やや不良	
281	弥生土器 甕	①(16.6)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	精良	良好	
282	弥生土器 甕	① 9.2 ③10.5	にぶい褐色(7.5YR6/3)	良好	良好	
283	弥生土器 甕	① 9.6 ③12.2	にぶい褐色(7.5YR5/3)	良好	良好	底部に籾痕
284	弥生土器 甕	②(5.2)	橙色(2.5YR6/8)	良好	良好	
285	弥生土器 甕	②(4.4)	①橙色(2.5YR6/6) ②明褐灰色(7.5YR7/2)	良好	良好	
286	弥生土器 甕	②(4.9)	淡赤橙色(2.5YR7/4)	精良	堅緻	
287	弥生土器 甕	②(5.4)	①にぶい橙色(5YR7/4) ②浅黄橙色(10YR8/3)	不良	やや不良	
288	弥生土器 甕	②(4.8)	灰白色(7.5YR8/2)	やや不良	不良	
289	弥生土器 甕	②(5.0)	①赤灰色(2.5YR4/1) ②灰色(7.5YR4/1)	良好	やや不良	
290	弥生土器 甕	②(6.0)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	やや不良	やや不良	
291	弥生土器 甕	②(7.2)	①にぶい橙色(5YR6/4) ②にぶい褐色(7.5YR6/3)	良好	堅緻	
292	弥生土器 甕	②(5.6)	①にぶい橙色(5YR6/3) ②灰褐色(7.5YR6/2)	不良	やや不良	
293	弥生土器 甕	②(5.6)	灰白色(10YR8/2)	精良	堅緻	
294	弥生土器 甕	②(5.8)	①にぶい橙色(5YR7/4) ②浅黄橙色(10YR8/3)	精良	堅緻	
295	弥生土器 甕	② 4.1	①にぶい褐色(7.5YR5/3) ②にぶい橙色(5YR7/4)	精良	良好	
296	弥生土器 甕	② 3.2	灰白色(2.5Y8/1)	やや不良	やや不良	
297	弥生土器 甕	②(4.2)	①にぶい橙色(5YR7/4) ②灰白色(2.5Y8/1)	良好	良好	
298	弥生土器 甕	②(3.0)	①橙色(2.5YR7/8) ②にぶい褐色(7.5YR6/3)	不良	やや不良	
299	弥生土器 甕	②(6.2)	①淡橙色(5YR8/4) ②淡黄色(2.5Y8/3)	良好	良好	
300	弥生土器 甕		淡黄色(2.5Y8/3)	良好	不良	
301	弥生土器 甕	② 3.0	浅黄橙色(7.5YR8/4)	良好	やや不良	
302	弥生土器 高坏		浅黄橙色(10YR8/3)	精良	良好	
303	弥生土器 高坏		①橙色(7.5YR7/6) ②浅黄橙色(10YR8/3)	不良	やや不良	
304	弥生土器 高坏	①(30.6)	にぶい赤橙色(10R6/4)	やや不良	やや不良	
305	弥生土器 高坏	①(29.0)	①橙色(5YR7/6) ②浅黄橙色(10YR8/3)	良好	やや不良	
306	弥生土器 高坏	①(22.2)	灰白色(2.5Y8/2)	良好	不良	
307	弥生土器 支脚		灰白色(2.5Y8/2)	良好	良好	
308	弥生土器 壺の蓋		にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	やや不良	

法量（　）は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
309	土師器 直口壺	①(10.2)	橙色(5YR6/6)	良好	やや不良	
310	土師器 甕	①13.4	①橙色(5YR7/6) ②淡黄色(2.5Y8/3)	良好	良好	布留式
311	土師器 甕	①(28.4)	①赤褐色(10YR4/4) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	良好	不良	布留式
312	土師器 甕	①14.1	橙色(5YR6/8)	不良	良好	布留式
313	土師器 甕	①(19.6)	橙色(2.5YR6/4)	精良	良好	布留式
314	土師器 甕		にぶい黄橙色(10YR7/3)	精良	堅緻	
315	土師器 甕	①25.0	橙色(5YR7/6)	精良	良好	
316	土師器 高坏		①浅黄橙色(7.5YR8/3) ②灰白色(10YR8/2)	良好	不良	
317	土師器 高坏		橙色(2.5YR7/6)	良好	良好	
318	土師器 高坏		橙色(5YR7/8)	良好	良好	
319	土師器 高坏		橙色(2.5YR6/8)	精良	やや不良	
320	土師器 高坏	②(10.5)	赤橙色(10R6/8)	精良	堅緻	
321	土師器 高坏		①橙色(5YR7/6) ②浅黄橙色(7.5YR8/4)	良好	良好	
322	土師器 鉢	①12.0 ③ 5.7	橙色(5YR6/6)	精良	良好	
323	土師器 鉢	①12.2 ③ 6.9	にぶい橙色(5YR7/4)	良好	やや不良	
324	土師器 鉢	①(13.8) ③ 6.5	にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	良好	
325	土師器 鉢	①(11.4) ③ 4.9	にぶい橙色(5YR7/4)	精良	良好	
326	土師器 鉢	①12.0 ③ 5.3	橙色(5YR6/8)	やや不良	やや不良	
327	土師器 鉢	①12.6 ③(5.5)	明赤褐色(5YR5/8)	良好	良好	
328	土師器 鉢	①12.7 ③ 5.7	淡橙色(5YR8/4)	良好	やや不良	
329	土師器 台付鉢	②(7.4)	橙色(5YR7/6)	精良	良好	
330	須恵器 坏蓋	①(11.4)	青灰色(10BG5/1)	良好	堅緻	
331	須恵器 坏蓋	①(12.4) ③ 4.4	暗青灰色(10BG4/1)	精良	良好	
332	須恵器 坏蓋	①(13.1) ③(4.5)	灰白色(5Y8/2)	良好	不良	
333	須恵器 坏蓋	①13.6 ③ 4.8	①灰色(10Y4/1) ②暗青灰色(5B4/1)	良好	良好	
334	須恵器 坏蓋		暗青灰色(10BG4/1)	やや不良	堅緻	
335	須恵器 坏蓋	①(13.0)	①暗緑灰色(10GY4/1) ②青灰色(5BG6/1)	良好	良好	
336	須恵器 坏身	①11.3 ③ 5.2	灰白色(5Y7/1)	精良	やや不良	
337	須恵器 坏身	①(11.6)	灰色(N6/0)	精良	堅緻	
338	須恵器 坏身	②(9.0)	灰色(N6/0)	良好	堅緻	
339	須恵器 短頸壺	① 7.8 ③(7.8)	①暗灰色(N3/0) ②灰色(N6/0)	やや不良	良好	
340	手捏土器 鉢	①(8.6) ②(2.4) ③ 6.6	にぶい褐色(7.5YR6/3)	良好	良好	
341	手捏土器 鉢	①(8.5) ② 4.2 ③6.15	褐灰色(7.5YR5/1)	やや不良	良好	
342	手捏土器 鉢	① 8.6 ② 3.7 ③ 5.3	①灰白色(10YR8/2) ②浅黄橙色(10YR8/3)	不良	やや不良	
343	手捏土器 鉢	② 3.6	①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②にぶい橙色(5YR7/4)	良好	良好	
344	手捏土器 鉢	② 1.9	淡黄色(2.5YR8/3)	良好	やや不良	
345	手捏土器 鉢	② 4.6	①灰黄色(2.5YR7/2) ②にぶい橙色(7.5YR7/3)	やや不良	良好	
346	手捏土器 鉢	② 3.0	明褐灰色(7.5YR7/2)	良好	良好	

出土遺物観察表

法量（ ）は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
347	手捏土器 鉢	②(6.2)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	良好	
348	手捏土器 鉢	②(6.2)	灰黄色(2.5Y7/2)	やや不良	良好	
349	手捏土器 鉢		にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	良好	
350	手捏土器 鉢	② 3.2	にぶい黄橙色(5YR7/4)	精良	やや不良	
351	手捏土器 鉢	② 3.4	にぶい橙色(7.5YR7/4)	良好	良好	
352	手捏土器 鉢	② 3.3	橙色(5YR7/6)	良好	やや不良	
353	手捏土器 鉢	② 3.1	にぶい黄橙色(5YR7/4)	精良	良好	
354	手捏土器 鉢	② 2.2	橙色(5YR7/6)	良好	良好	
355	手捏土器 鉢	② 3.1	①明褐灰色(7.5YR7/2) ②褐灰色(10YR4/1)	良好	良好	
356	手捏土器 甕	② 6.6	褐灰色(10YR5/1)	良好	良好	
357	手捏土器 鉢		灰白色(7.5Y8/1)	やや不良	不良	
358	手捏土器 鉢		浅黄橙色(10YR8/3)	不良	やや不良	
359	手捏土器 鉢	① 3.6 ② 2.5 ③ 2.6	橙色(5YR7/6)	精良	良好	
360	手捏土器 鉢	②(4.1)	①橙色(5YR6/6) ②灰黄褐色(10YR6/2)	精良	良好	
361	手捏土器 鉢	①(4.9) ②(4.4) ③4.75	橙色(5YR6/6)	精良	良好	
362	手捏土器 鉢	② 5.8	橙色(5YR6/6)	精良	良好	
363	手捏土器 鉢	① 6.0 ③ 4.8	橙色(2.5YR6/8)	精良	堅緻	
364	手捏土器 鉢	① 7.8 ③(4.3)	橙色(2.5YR7/8)	精良	良好	
365	手捏土器 高坏		にぶい黄橙色(10YR7/2)	やや不良	良好	
366	土製模造品 鏡	最大長 3.8 最大幅 4.2 最大厚 1.5	橙色(5YR6/8)	精良	良好	
367	土製模造品 鏡	現存長 2.0 最大幅 3.5 最大厚 1.5	橙色(5YR7/6)	精良	良好	
368	土製丸玉	最大長1.95 最大幅 1.8 最大厚 1.8	灰白色(2.5Y8/2)	良好	やや不良	
369	土製丸玉	最大長 1.8 最大幅1.65 最大厚 1.9	橙色(5YR7/6)	やや不良	良好	
370	土製丸玉	最大長 2.0 最大幅 1.8 最大厚 1.7	橙色(5YR7/8)	良好	堅緻	
371	土製丸玉	最大長(2.0) 最大幅 1.8 最大厚(1.6)	橙色(5YR6/8)	精良	良好	
372	土製丸玉	最大長 1.8 最大幅1.75 最大厚 1.7	橙色(5YR7/6)	良好	良好	
373	土製丸玉	最大長 2.1 最大幅 2.2 最大厚 2.1	にぶい橙色(7.5YR7/3)	良好	良好	
396	円筒埴輪		①明赤褐色(2.5YR5/8) ②浅黄橙色(7.5YR8/3)	精良	良好	土師質
第6層 (Fig.84・85)						
397	縄文土器 甕		橙色(7.5YR7/6)	良好	良好	粗製
398	縄文土器 甕		①橙色(7.5YR7/6) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	良好	粗製
399	縄文土器 甕	②(9.6)	①淡黄色(2.5Y8/3) ②褐灰色(10YR6/1)	良好	良好	粗製
400	弥生土器 壺		①淡黄色(2.5Y8/3) ②明褐灰色(7.5YR7/1)	良好	良好	
401	弥生土器 壺		にぶい橙色(7.5YR7/4)	やや不良	不良	
402	弥生土器 壺		①浅黄橙色(10YR8/3) ②にぶい黄橙色(10YR6/3)	良好	堅緻	
403	弥生土器 壺		にぶい橙色(7.5YR7/4)	良好	良好	
404	弥生土器 壺		にぶい黄橙色(10YR6/3)	良好	やや不良	
405	弥生土器 壺		赤褐色(2.5YR4/6)	不良	やや不良	

法量（　）は復原値

番号	器種	法量（cm）（①口径②底径③器高）	色調（①外面　②内面）	胎土	焼成	備考
406	弥生土器　壺		明赤褐色(5YR5/6)	精良	堅緻	畿内系
407	弥生土器　壺		にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	良好	畿内系
408	弥生土器　壺	①25.6	にぶい橙色(5YR6/4)	不良	良好	鋤先状口縁 須玖Ⅱ式
409	弥生土器　壺		にぶい橙色(5YR7/4)	良好	良好	
410	弥生土器　壺	①(17.6)	橙色(5YR6/8)	良好	やや不良	複合口縁
411	弥生土器　壺	②(8.4)	①浅黄橙色(7.5YR8/4) ②浅黄橙色(10YR8/3)	やや不良	堅緻	
412	弥生土器　壺	②(7.4)	①橙色　(2.5Y7/6) ②にぶい褐色(7.5YR5/3)	不良	良好	
413	弥生土器　甕		にぶい橙色(7.5YR6/4)	良好	良好	
414	弥生土器　甕		①橙色(2.5YR6/8) ②にぶい黄橙色(10YR7/4)	精良	堅緻	
415	弥生土器　甕		①にぶい橙色(5YR6/4) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	不良	良好	跳ね上げ口縁
416	弥生土器　甕		①にぶい黄橙色(10YR5/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	良好	
417	弥生土器　甕		にぶい褐色(7.5YR5/3)	精良	堅緻	
418	弥生土器　甕		灰黄色(2.5Y6/2)	不良	不良	
419	弥生土器　甕		橙色(7.5YR7/6)	精良	良好	
420	弥生土器　甕	①(18.8)	①にぶい橙色(7.5YR6/4) ②灰色(N4/0)	精良	堅緻	跳ね上げ口縁
421	弥生土器　甕	①(24.2)	にぶい褐色(7.5YR5/4)	精良	堅緻	跳ね上げ口縁
422	弥生土器　甕	①(24.8)	浅黄橙色(7.5YR8/6)	良好	やや不良	跳ね上げ口縁
423	弥生土器　甕	①(24.0)	浅黄橙色(10YR8/3)	不良	やや不良	
424	弥生土器　甕	①(15.1)	にぶい橙色(7.5YR6/4)	良好	良好	
425	弥生土器　甕	②(5.8)	淡橙色(5YR8/4)	良好	やや不良	
426	弥生土器　甕	②(5.6)	橙色(2.5YR6/8)	良好	良好	
427	弥生土器　高坏	②(16.6)	①灰黄色(2.5Y7/2) ②にぶい黄橙色(10YR6/3)	良好	やや不良	
428	弥生土器　鉢	①(8.6) ②(2.2) ③ 6.5	灰白色(10YR8/2)	やや不良	やや不良	
429	弥生土器　支脚		①にぶい黄橙色(10YR7/4) ②灰黄褐色(10YR4/2)	不良	不良	
430	土師器　把手？		浅黄橙色(10YR8/3)	不良	不良	
第7層（Fig.86～88）						
433	縄文土器　浅鉢		黒褐色(10YR3/1)	精良	良好	精製
434	弥生土器　壺		にぶい橙色(5YR7/4)	精良	堅緻	
435	弥生土器　壺		①灰褐色(7.5YR4/2) ②灰白色(2.5Y7/1)	やや不良	良好	
436	弥生土器　壺		①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②灰黄色(2.5Y7/2)	やや不良	良好	
437	弥生土器　壺		にぶい黄橙色(10YR7/4)	良好	やや不良	
438	弥生土器　壺		①浅黄橙色(10YR8/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	不良	良好	
439	弥生土器　壺		にぶい橙色(7.5YR7/3)	精良	堅緻	
440	弥生土器　壺		にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	良好	
441	弥生土器　壺		①浅黄橙色(10YR8/3) ②灰白色(10YR7/1)	良好	やや不良	
442	弥生土器　壺		浅黄橙色(10YR8/3)	良好	良好	
443	弥生土器　壺		にぶい赤褐色(5YR5/4)	精良	堅緻	
444	弥生土器　壺		①浅黄橙色(10YR8/3) ②黄灰色(2.5Y5/1)	良好	やや不良	

出土遺物観察表

法量（　）は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
445	弥生土器 壺		①橙色(7.5YR7/6) ②橙色(2.5YR6/8)	やや不良	やや不良	
446	弥生土器 壺		にぶい橙色(7.5YR6/4)	良好	堅緻	
447	弥生土器 壺		にぶい橙色(7.5YR6/4)	精良	堅緻	
448	弥生土器 壺		にぶい橙色(7.5YR7/4)	精良	良好	
449	弥生土器 壺		灰白色(10YR8/2)	不良	やや不良	
450	弥生土器 壺		にぶい橙色(7.5YR7/3)	やや不良	やや不良	
451	弥生土器 壺	①(10.6)	にぶい黄橙色(10YR6/3)	良好	堅緻	鋤先状口縁 須玖Ⅱ式
452	弥生土器 壺	①(18.6)	灰白色(10YR8/2)	不良	良好	鋤先状口縁 須玖Ⅱ式
453	弥生土器 壺	①(28.6)	にぶい橙色(5YR7/4)	不良	不良	
454	弥生土器 壺		浅黄橙色(7.5YR8/4)	良好	やや不良	
455	弥生土器 壺	②(9.6)	浅黄橙色(10YR8/3)	良好	やや不良	
456	弥生土器 壺	② 8.5	灰白色(10YR8/2)	不良	良好	
457	弥生土器 壺	②(9.2)	①橙色(2.5YR6/8) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	良好	
458	弥生土器 壺	②(7.8)	①にぶい褐色(7.5YR6/3) ②浅黄橙色(10YR8/3)	良好	良好	
459	弥生土器 壺	②(17.2)	赤色(10R5/6)	不良	良好	
460	弥生土器 壺	②(10.6)	①にぶい橙色(5YR7/4) ②灰色(5Y4/1)	良好	良好	
461	弥生土器 壺	②(7.8)	①橙色(7.5YR7/6) ②灰色(7.5Y4/1)	良好	良好	
462	弥生土器 壺	②(5.7)	にぶい橙色(5YR6/4)	精良	堅緻	
463	弥生土器 壺	②(9.8)	①橙色(2.5YR7/8) ②にぶい橙色(5YR6/4)	不良	良好	
464	弥生土器 壺	②(9.8)	①にぶい橙色(7.5YR6/4) ②淡黄色(2.5Y8/3)	良好	堅緻	
465	弥生土器 壺	②(8.0)	①橙色(2.5Y6/8) ②明褐灰色(7.5YR7/1)	良好	良好	
466	弥生土器 壺	②(8.4)	①淡黄色(2.5Y8/3) ②灰白色(7.5Y7/1)	不良	良好	
467	弥生土器 壺		にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	良好	
468	弥生土器 甕	①(18.9)	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②にぶい褐色(7.5YR6/3)	やや不良	不良	
469	弥生土器 甕	①(16.4)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	やや不良	やや不良	跳ね上げ口縁
470	弥生土器 甕	①(18.4)	橙色(2.5YR6/8)	精良	不良	
471	弥生土器 甕	①(13.0)	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②浅黄橙色(10YR8/3)	良好	不良	
472	弥生土器 甕		明赤褐色(2.5YR5/6)	やや不良	やや不良	
473	弥生土器 甕		①明赤褐色(2.5YR5/6) ②橙色(5YR6/6)	良好	やや不良	
474	弥生土器 甕		①にぶい黄橙色(10YR7/4) ②浅黄橙色(10YR8/3)	精良	良好	
475	弥生土器 甕		灰白色(10YR8/2)	良好	良好	
476	弥生土器 甕		にぶい黄橙色(10YR7/4)	良好	良好	
477	弥生土器 甕		①にぶい褐色(7.5YR5/4) ②橙色(5YR6/6)	良好	堅緻	
478	弥生土器 甕		①にぶい赤褐色(2.5YR4/3) ②赤色(10YR5/6)	不良	やや不良	
479	弥生土器 甕		にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	良好	
480	弥生土器 甕		橙色(2.5YR7/6)	精良	堅緻	口縁部に穿孔
481	弥生土器 甕		①にぶい橙色(5YR6/4) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	精良	堅緻	跳ね上げ口縁
482	弥生土器 甕		灰褐色(5YR5/2)	精良	堅緻	跳ね上げ口縁
483	弥生土器 甕		①赤褐色(10R6/8) ②橙色(5YR7/6)	やや不良	やや不良	

法量（　）は復原値

番号	器種	法量（cm）（①口径②底径③器高）	色調（①外面　②内面）	胎土	焼成	備考
484	弥生土器　甕	②(6.8)	浅黄橙色(10YR8/4)	良好	良好	底部に籾痕
485	弥生土器　甕	②(7.0)	①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②灰色(5Y5/1)	不良	良好	
486	弥生土器　甕	② 6.3	①橙色(2.5YR7/8) ②黒色(N2/0)	良好	堅緻	
487	弥生土器　甕	②(6.2)	①にぶい橙色(5YR7/4) ②灰色(7.5Y4/1)	精良	良好	
488	弥生土器　甕	② 5.2	①淡黄色(2.5Y8/3) ②灰色(5Y4/1)	やや不良	やや不良	
489	弥生土器　甕	② 7.2	①にぶい橙色(7.5YR6/4) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	良好	やや不良	
490	弥生土器　甕	②(4.6)	淡黄色(2.5Y8/3)	良好	やや不良	
491	弥生土器　甕	②(6.8)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	不良	良好	
492	弥生土器　甕	②(4.4)	①にぶい橙色(5YR6/4) ②オリーブ黒色(5Y3/1)	良好	良好	
493	弥生土器　甕	②(5.6)	①赤褐色(5YR4/8) ②にぶい赤褐色(5YR4/4)	不良	やや不良	
494	弥生土器　甕	②(5.9)	①にぶい橙色(5YR6/4) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	良好	
495	弥生土器　甕	②(6.4)	①浅黄橙色(10YR8/4) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	精良	やや不良	
496	弥生土器　甕	②(1.9)	①浅黄橙色(10YR8/4) ②黄灰色(2.5Y6/1)	良好	良好	
497	弥生土器　高坏		①にぶい橙色(5YR7/4) ②浅黄橙色(7.5YR8/4)	良好	やや不良	
498	弥生土器　高坏		にぶい橙色(5YR6/4)	良好	良好	
499	弥生土器　高坏		にぶい黄橙色(10YR7/4)	精良	不良	
500	弥生土器　高坏		①淡橙色(5YR8/4) ②浅黄橙色(10YR8/4)	やや不良	やや不良	
501	弥生土器　高坏	②(20.1)	①浅黄橙色(10YR8/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	良好	
第２・３層（Fig. 89）						
504	土師器　坏	①14.0 ② 6.5 ③ 4.8	橙色(5YR6/6)	良好	やや不良	
505	土師器　皿	①13.1 ②4.75 ③3.1	淡赤橙色(2.5YR7/4)	良好	良好	
506	土師質土器　鍋		橙色(5YR7/6)	良好	良好	
507	白磁　埦		素地－灰白色(10Y8/1) 釉調－明緑灰色(7.5GY8/1)			玉縁

法量（　）は現存値

番号	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石質	備考
Ａトレンチ（Fig. 51）							
31	打製石斧	10.2	8.3	4.4	385.6	硬質砂岩	
32	石製円板	6.0	5.95	0.95	49.3	角閃石安山岩	
33	二次加工のある剥片	2.0	1.75	0.4	0.56	西九州（腰岳）産黒曜石	
Ｂトレンチ（Fig. 52）							
47	打製石斧	10.45	5.0	1.8	100.2	緑色片岩	
48	磨製石斧	(7.9)	(4.7)	(3.6)	149.3	結晶質凝灰岩	
54	紡錘車	4.05		7.5	23.1	滑石片岩	穿孔外径0.65cm
第１号土壙（Fig. 59）							
118	紡錘車	5.4		0.8	35.2	滑石片岩	
第２号土壙（Fig. 62）							
141	扁平打製石斧	10.35	6.2	1.15	98.0	緑色片岩	
142	砥石	(7.5)	(6.3)	(5.0)	248.7	花崗岩	仕上げ砥
第１号溝（Fig. 72・73）							
209	敲石	(6.1)	8.8	4.3	311.2	花崗岩	円礫素材

出土遺物観察表

法量（ ）は現存値

番号	器　　種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石　　質	備　　考
211	石臼	(28.3)	(16.9)	9.5	6430	砂岩	
柱穴（Fig.75）							
230	砥石	(8.4)	5.65	3.7	299.7	流紋岩質溶結凝灰岩	P8 仕上げ砥
第5層（Fig.81～83）							
374	石製模製品　盾形	8.25	4.85	1.9	86.3	滑石	穿孔径　0.2cm
375	石製模製品　斧形	5.75	4.25	0.9	42.9	滑石	穿孔径 0.5×0.3cm
376	石製模製品　斧形	5.5	3.75	0.75	30.0	滑石	
377	石製模製品　斧形	6.2	3.45	0.7	27.6	滑石	穿孔径　0.4cm
378	石製模製品　斧形？	7.95	3.6	0.9	39.0	滑石	
379	石製模製品　円板	4.3	3.95	1.0	29.2	滑石	
380	石製模製品　円板	3.5		0.35	7.5	滑石	穿孔径　0.3cm
381	石製模製品　円板	3.1		0.3	5.6	滑石	穿孔径0.25cm
382	石製模製品　円板	3.3		0.45	6.2	滑石	穿孔径　0.2cm
383	石製模製品　円板	1.9		0.35	1.7	滑石	穿孔径 0.4×0.3cm
384	石製模製品　鏃形	3.85	1.5	0.3	3.3	滑石	穿孔径　0.15cm
385	磨製石庖丁	(6.7)	4.65	0.8	37.0	讃岐岩質安山岩	
386	打製石庖丁	(5.3)	(3.2)	0.35	8.5	讃岐岩質安山岩	
387	石鎌	(6.85)	(3.2)	0.8	24.1	讃岐岩質安山岩	刃部局部磨製
388	敲石	11.7	10.15	6.25	956.9	花崗閃緑石	円礫の転礫
389	敲石	10.8	9.2	5.1	623.1	花崗岩	円礫の転礫
390	円板	8.0	7.85	0.9	80.1	結晶片岩	
391	石鏃	2.3	1.95	0.4	1.21	安山岩	剥片鏃 抉り深さ 0.2cm
392	石剣or石戈	(2.7)	(2.45)	(0.4)	3.0	デイサイト	
第6層（Fig.85）							
431	磨製石斧	(8.95)	(4.8)	1.45	100.3	緑泥石片岩	
432	砥石	(8.1)	(5.2)	1.6	89.3	角閃質安山岩	円転礫素材
第7層（Fig.88）							
502	打製石斧	14.0	11.5	4.7	884.1	泥岩ホルンフェルス	
503	砥石	(5.65)	(5.3)	4.8	187.4	花崗岩	

法量（ ）は現存値

番号	器　　種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	備　　考
第1号土壙（Fig.59）					
119	鉄鏃	(2.3)	0.35	0.4	茎
第1号溝（Fig.72）					
210	鉄釘		0.55	0.45	脚中位から大きく屈曲
第5層（Fig.83）					
393	板状鉄斧	4.65	4.35	0.7	刃部幅4.35cm
394	鉄鏃	(5.65)	1.0	0.5	茎
395	鉄鑿？	(12.85)	1.0	1.05	

山口大学構内遺跡調査要項

山口大学埋蔵文化財資料館規則

（設置）

第１条　山口大学に山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）を置く。

（資料館の業務）

第２条　資料館は、学内の共同利用施設として、次の各号に掲げる業務を行なう。

一　山口大学構内等から出土した埋蔵文化財の収蔵・展示および調査研究

二　山口大学構内等における埋蔵文化財の発掘調査並びに報告書の刊行

三　その他埋蔵文化財に関する必要な業務

（運営委員会）

第３条　資料館に関する事項を審議するため、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

２　委員会に関する規則は、別に定める。

（館長）

第４条　資料館に館長を置く。館長は委員会の議を経て学長が委嘱する。

２　館長の任期は２年とし、再任を妨げない。

３　館長は、資料館の業務を掌理する。

（調査員）

第５条　資料館には調査員若干名を置く。

２　調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

３　調査員は、資料館の業務を処理する。

（特別調査員）

第６条　埋蔵文化財に関する特別な分野の調査研究を行なうため、資料館に特別調査員若干名を置くことができる。

２　特別調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

（雑則）

第７条　この規則に定めるもののほか、資料館に必要な事項は別に定める。

山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則

（趣旨）

第１条　この規則は、山口大学埋蔵文化財資料館規則（以下「資料館規則」という。）第３条第２項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

（審議事項）

第２条　委員会は次の事項を審議する。

一　山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）に関する基本的なこと。

二　資料館の管理運営に関すること。

三　資料館の整備充実に関すること。

四　資料館の運営に要する経費に関すること。

五　その他必要な事項

（組織）

第３条　委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一　資料館規則第４条第１項の館長

二　各学部および教養部の教官各１名

三　事務局長

２　前項第２号の委員は、それぞれの部局の推薦に基づいて学長が委嘱する。

（任期）

第４条　前条第１項第２号の委員の任期は２年とし、再任を妨げない。

（委員長）

第５条　委員会に委員長を置き、委員の互選とする。

２　委員長は委員会を招集し、その議長となる。

（幹事）

第６条　委員会に幹事を置き、庶務部長、経理部長及び施設部長をもって充てる。

（委員以外の出席）

第７条　委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を委員会に出席させることができる。

（事務）

第８条　委員会の事務は、庶務部庶務課において処理する。

（雑則）

第９条　この規則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

Tab. 6　山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員

（昭和63年度）

部局名	氏名	官職	任期	備考
医学部	黄　基雄	教授	昭62. 4. 1～平元. 3. 31	委員長・館長
人文学部	中村友博	助教授	昭62. 5. 29～平元. 5. 28	
教育学部	三浦　肇	教授	昭62. 4. 1～平元. 3. 31	
経済学部	及川　順	教授	昭62. 4. 1～平元. 3. 31	
理学部	村上清文	助手	昭62. 4. 1～平元. 3. 31	
工学部	島　敞史	教授	昭62. 4. 1～平元. 3. 31	
農学部	藤田則之	教授	昭62. 4. 1～平元. 3. 31	
教養部	木村忠夫	教授	昭62. 4. 1～平元. 3. 31	
事務局	有地成光	事務局長	昭63. 4. 1～	

（平成元年度）

部局名	氏名	官職	任期	備考
医学部	黄　基雄	教授	平元. 4. 1～平2. 3. 31	委員長
人文学部	近藤喬一	教授	平元. 4. 1～平3. 3. 31	館長
人文学部	中村友博	助教授	平元. 5. 29～平3. 5. 28	
教育学部	川村博忠	教授	平元. 4. 1～平3. 3. 31	
経済学部	小島正己	教授	平元. 4. 1～平3. 3. 31	
理学部	遠藤克彦	助教授	平元. 4. 1～平3. 3. 31	
工学部	島　敞史	教授	平元. 4. 1～平3. 3. 31	
農学部	時本　巽	教授	平元. 4. 1～平3. 3. 31	
教養部	木村忠夫	教授	平元. 4. 1～平3. 3. 31	
事務局	有地成光	事務局長		

Tab. 7　山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員

学部等	氏名	官職	専攻等	備考
人文学部	中村友博	助教授	日本考古学	昭和63・平成元年度
教育学部	三浦　肇	教授	地理学	昭和63・平成元年度
理学部	松本徑夫	教授	岩石学	昭和63・平成元年度
農学部	勝本　謙	助教授	植物分類学	昭和63・平成元年度

山口大学構内の主な調査

吉田構内

Tab. 8　山口大学構内の主な調査一覧表

調査年度	旧調査地区名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和41年	第Ⅰ地区A・B区	L・M・N－15	1	30？	弥生竪穴住居・柱穴	弥生土器、土師器、須恵器	事前	調査担当 小野忠熙	
	第Ⅱ地区家畜病院新営	S・T－19 R・S－20	2	2,000	溝、柱穴	弥生土器、土師器、瓦質土器、須恵器	〃	〃	
	第Ⅱ地区	P・Q－19・20	3			弥生土器、土師器	試掘	〃	
	第Ⅳ地区牛舎新営	S－10	4	300	弥生溝・土壙、古墳竪穴住居、中世住居跡・溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器	事前	〃	
	第Ⅳ地区	S・T－9～13	5				試掘	〃	
昭和42年	第Ⅲ地区杭列区	E－20	6	1,100	杭列	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器 矢板状木杭	事前	〃	
	第Ⅲ地区南区	G・H－22・23	7		河川跡、柱穴	縄文土器、弥生土器、木器、石器	〃	〃	
	第Ⅲ地区北区	I・J－20・21	8	1,400	竪穴住居、溝、土壙、柱穴		〃	〃	
	第Ⅲ地区東南区	H－23 I・J・K－24	9		弥生竪穴住居	弥生土器	〃	〃	
	第Ⅲ地区野球場	I－22・23 J－21・22・23 K－22・23	10		中世柱穴	瓦質土器	試掘	〃	
	第Ⅴ地区学生食堂	I・J－19・20	11		弥生溝、古墳土壙	弥生土器、土師器	事前	〃	①
	第Ⅴ地区	H・I・J・K・L・M・N－18・19・20	12		河川跡、柱穴、土壙	弥生土器、土師器	試掘	調査担当 山口大学吉田遺跡調査団	
	第Ⅰ地区C区 大学本部新営	K・L－14	13	600	竪穴住居、溝、土壙	土師器、須恵器、瓦質土器	事前	〃	
昭和44年	第Ⅴ地区教育学部				河川跡	弥生土器、土師器、須恵器	試掘	〃	
昭和46年	第Ⅰ地区D区第1地点	K－13	14		溝	弥生土器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第2地点	L－13	15			弥生土器、土師器、瓦質土器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第3地点	L・M－13	16		竪穴住居、土壙、柱穴、	土師器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第4地点	M・N－13	17		弥生竪穴住居、溝、土壙	弥生土器、土師器、瓦質土器、石器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第5地点	L－13	18		弥生溝	弥生土器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第6地点	M－13	19		古墳竪穴住居、弥生溝	弥生土器、土師器 石器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第7地点	M－13	20		溝	弥生土器	〃	〃	
	第Ⅰ地区E区 第2学生食堂新営	N・O－15	21	900	弥生～古墳竪穴住居、土壙、溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、石器、鉄製品	事前	〃	
昭和50年	第Ⅱ地区					弥生土器	試掘	〃	
昭和51年	第Ⅲ地区				竪穴住居	弥生土器、土師器、須恵器	〃		

※ 文献①　山口大学吉田遺跡調査団『吉田遺跡発掘調査概報』(山口大学、1976年)

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和53年	人文学部校舎新営	M・N－21	22	180			試掘	調査担当近藤喬一	未刊
	教育学部附属養護学校新営	A・B・C・D－20～24	23		溝、土壙	縄文土器 弥生土器	〃	山口大学埋蔵文化財資料館・山口市教育委員会	
昭和54年	理学部校舎新営	O－18・19	24	250			〃		
	農学部動物舎新営	P－18・19	25	380			〃		
	本部管理棟新営	L－14	26	740	溝、土壙、柱穴、中世井戸、土壙墓、住居跡	弥生土器、土師器、石製品	事前		年報Ⅷ
昭和55年	経済学部校舎新営	K・L－21	27				〃		未刊
	農学部農業観測実験施設新営	Q－15	28	50	溝、土壙		〃		
	本部環境整備	E・F－15・16 F－20・21 G・H－12・19	29				立会		
	農学部環境整備	L・M－12・13 N・O・P－10～12 P・Q－17・18	30				〃		
昭和56年	教育学部校舎新営	H－19	31	400	弥生竪穴住居 土壙、溝、柱穴	弥生土器、石製品	事前		年報Ⅰ
	教育学部音楽棟新営	H－16	32	100	溝		〃		
	教育学部美術科・技術科実験実習棟新営	J－19・20	33	130	旧河川、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器	〃		
	正門橋脚新営	H－11	34				立会		
	時計塔埋設	I－14	35				〃		
	本部構内擁壁取設	K－14	36				〃		
	教養部構内擁壁取設	I－16・17	37				〃	工法等変更	
	構内循環道路舗装	J・K・L・M－15 M・N－16	38						
	農学部中庭整備	O－17	39				〃		
	暖房施設改修	O－16	40				〃	工法等変更	
	学生部文化会車庫新営	L－8	41				〃	工法等変更	
	学生部馬場整備	M・N－8・9	42				〃		
昭和57年	附属図書館増築	M－16	43	600	弥生～古墳溝、土壙、柱穴、杭列	弥生土器、土師器、須恵器、石器	事前		年報Ⅱ
	大学会館新営	M－14・15	44	130	弥生竪穴住居、溝	弥生土器	試掘		
	教育学部附属養護学校プール新営	B－22	45				立会		
	放射性同位元素総合実験室排水桝新営	O－18	46				〃		
	教養部自転車置場昇降口新営	K・L－17	47				〃		
	教養部中庭環境整備	J・K－16	48				〃		
昭和58年	大学会館新営	M・N－13	49	2,000	古墳井戸、土壙、柱穴、中世井戸、掘立柱建物	弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器、国産陶器、瓦質土器、瓦器、緑釉陶器、木簡、石器	事前		年報Ⅲ
	ラグビー場防球ネット新営	G・H－19	50	120	弥生溝、弥生～古墳竪穴住居、土壙	弥生土器、土師器、石製品	〃	竪穴住居は工法変更により現地保存	

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	理学部大学院校舎新営	M・N－20 O－19・20	51	410			立会		年報Ⅲ
	正門・南門二輪車置場および正門花壇新営	H・I－23 I－12・13 J－13	52	180			〃		
	学生部アーチェリー場的台・電柱設置	M－8	53	30			〃		
	学生部厩舎整備	L－7	54	2			〃		
	学生部野球場散水栓取設	J－21 K－22	55				〃		
	教養部環境整備	I－16・17 J－17 K・L－17・18	56	80			〃		
	学生部テニスコート改修	C－18、D－17 E－16	57	12			〃		
昭和59年	大学会館ケーブル布設	N－12・14	58	160	弥生土壙、柱穴	弥生土器	事前		年報Ⅳ
	大学会館排水管布設	K・L－13	59	180	弥生～中世遺物包含層、古墳土壙、古代～中世土壙、溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、青磁、白磁、瓦質土器	〃		
	学生部テニスコートフェンス改修	B－17・18 C－16・17・18・19 D－15・16・17 E－15・16	60	25	古墳以降の遺物包含層	土師器	試掘		
	経済学部樹木移植	K－19・20・21	61	8			立会		
昭和60年	大学会館環境整備	L－14 L・M・N－15	62	592	弥生～中世遺物包含層、弥生竪穴住居、貯蔵穴、土壙、古代～近世土壙、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、輸入磁器、国産陶磁器、土製品、石斧、原石、鉄器、窯壁	試掘		年報Ⅴ
	経済学部環境整備（樹木移植）	K－21, L－20	63	5			立会		
	農学部附属農場飼料園排水溝修復整備	R－16～19	64	30	古代末～中世河川跡	須恵器、土師器、輸入陶磁器、鞴口、石器、鉄滓	〃		
	農学部附属農場農道改修	V－15・16	65	325			〃		
	教育学部前庭環境整備（樹木移植）	I・J－19・20	66	430			〃		
	中央ボイラー棟車止設置	O・P－16	67	2.5		須恵器	〃		
	大学会館環境整備（樹木移植）	L・M－15	68	9		弥生土器、土師器、須恵器、石鍋、砥石、鉄滓	〃		
	交通標識設置	J－20, N－14 O－18	69	3			〃		
	農学部解剖実習棟周辺環境整備（実験動物運動場設置）	P・Q－17・18	70	16			〃		
	理学部環境整備（藤棚設置）	N－20・21	71	4			〃		
	農学部附属家畜病院舗装	S・T－19	72	270			〃		
昭和61年	国際交流会館新営	N－22・23	73	70	弥生～古墳河川跡 中世～近世溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、須恵質土器、陶磁器、鉄砲玉、加工痕ある剥片	試掘		年報Ⅵ
	山口銀行現金自動支払機設営（電線路埋設）	I・J－19・20	74	11	包含層（河川跡か）	弥生土器	立会		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和61年	農学部附属農場農道整備	S－20, U－19	75	165	中世溝、柱穴	土師器、瓦質土器	立会	工法等変更	年報Ⅵ
	農学部附属農場農道交通規制（施錠ポール設置）	L－10 Q－15・16	76	2			〃		
	正門横（水田内）境界杭設置	I－10	77	0.25	包含層か		〃		
	経済学部環境整備（樹木移植・記念碑建立）	M－20	78	3			〃		
	吉田構内交通標識設置	H－23, J－9, P－22, S－20, W－16	79	3		須恵器	〃		
	市道神郷1号線および問田神郷線の送水管埋設		80	2,100	古墳・古代溝、 古代河川跡、 弥生包含層	弥生土器、土師器、須恵器（墨書のあるもの含む）瓦質土器、製塩土器、石斧、板石	〃	山口市教育委員会 山口大学埋蔵文化財資料館	
	教養部自動販売機埋設（屋根設置および観覧席移動）	K・L－18	81	3.5					
	教養部身体障害者用スロープ取設	L－15・16	82	3			〃		
	経済学部散水栓取設	L・M－20	83	4			〃		
	吉田構内水泳プール改修等	E・F－16 H－15	84	26.5	包含層		〃		
	農学部附属農場水道管埋設	S－12	85	3			〃		
	吉田構内汚水排水管等総改修	M－18 O－15・16	86	15.5		土師質土器	〃		
	本部身体障害者用スロープ取設	L－14	87	12			〃		
	経済学部身体障害者用スロープ取設	K－20 L－18～20	88	88	弥生～古墳柱穴			工法等変更	
	附属図書館荷物運搬用スロープ取設	L－16	89	8		弥生土器	〃		
	教養部37番教室改修	K－16	90	1			〃		
昭和62年	教育学部附属教育実践研究指導センター新営	K－18	91	240		ブランク、削器、植物遺体	事前		年報Ⅶ
	教養部複合棟新営	J、K－17、18	92	35	埋甕土壙、溝、柱穴	土師器、須恵器、土師質土器、石斧	試掘		
	教養部環境整備	I、J－16	93	30	溝状遺構	弥生土器	立会		
	教養部複合棟新営	J、K－17、18	94	900	落し穴、河川跡、竪穴住居、土壙、溝、井戸、埋甕土壙、掘立柱建物跡、谷状遺構、柱穴	縄文土器、土師器、須恵器、土師質土器、須恵質土器、陶磁器、石鏃、石斧、木製品	事前		
	九田川河川改修	B、C－17	95	20			立会	県教委、山大埋文	
	国際交流会館新営	M－23 N－22、23	96	195			〃		
	教育学部附属養護学校自転車置場移設	B－21	97	45			〃		
	農学部附属農場E7圃場排水管埋設及びE6圃場進入路拡幅	L、N－12	98	45	中世土壙墓か	弥生土器、土師器、須恵器、輸入白磁、国産磁器、敲石	〃		
	農学部植栽	N－17	99	3			〃		
	経済学部集水桝取設	K－20	100	0.5			〃		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和63年	教養部複合棟新営に伴う自転車置場移設	I－16	101	1	包含層か		立会		年報Ⅷ
	国際交流会館新営に伴う排水管埋設	O－22	102	35	河川跡（溝か）、包含層	弥生土器、須恵器	〃		
	教養部複合棟新営に伴うケーブル埋設	J－18	103	1			〃		
	サッカー・ラグビー場改修	F－19, G－19 H－19・20	104	25	性格不明	弥生土器	〃		
	消防用水設置	K・L・M－22	105	7.5			〃		

小串構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	医学部体育館新営		1	260		土師器、瓦質土器、石器	試掘		年報Ⅲ
	医学部図書館増築		2				立会		
	医学部体育館新営		3				〃		
昭和59年	医学部浄化槽新営		4		近世溝	土師器、瓦質土器、磁器	事前		年報Ⅳ
	医学部体育館新営		5	65		土師器、瓦質土器、磁器	〃		
	医学部基幹整備（特高受変電設備）		6	28		動物遺体（貝殻）	試掘		
	医学部臨床講義棟・病理解剖棟新営		7	38			〃		
昭和60年	医学部外来診療棟新営		8	409		土師質土器、瓦質土器、陶磁器	試掘		年報Ⅴ
	医学部基礎研究棟新営		9	11		近世陶器	〃		
	医学部看護婦宿舎改修		10	25		近世陶磁器	立会		
	医学部看護婦宿舎改修		11	20			〃		
	医学部環境整備（樹木移植）		12	40			〃		
昭和61年	医学部附属病院外来診療棟新営		13	5			〃		年報Ⅵ
	医学部附属病院外来診療棟周辺環境整備等（雨水桝埋設）		14	18			〃		
昭和62年	医学部附属病院東駐車場改修		15	6			〃		年報Ⅶ
	医学部附属病院病棟新営		16	104		削器・ナイフ形石器細石刃核	試掘		
昭和63年	医学部附属病院病棟新営		17	300		二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・剥片・敲石・礫・原石土師器、土師質土器、瓦質土器、陶磁器	立会		年報Ⅷ
	医学部附属病院運動場整備		18	220			〃		

常盤構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	工学部校舎新営		1	70		須恵器	試掘		年報Ⅲ
	工学部図書館増築		2	70			〃		
昭和59年	工学部尾山宿舎排水管布設			20			立会		年報Ⅳ
昭和60年	工学部尾山宿舎擁壁取設等			65			〃		年報Ⅴ
	工学部受水槽改修		3	1.5			〃		
昭和61年	工学部尾山宿舎排水管改修			6			〃		年報Ⅵ
	工学部身体障害者用スロープ取設		4	29			〃		
	情報処理センター（常盤センター）空調設備取設		5	30			〃		
昭和63年	工学部焼却炉上屋新営		6	225			〃		年報Ⅷ

亀山構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属山口小・幼稚園運動場整備		1	60	古墳竪穴住居、溝状遺構	土師器、須恵器、瓦質土器、瓦、石製品、木製品	試掘		年報Ⅲ
昭和60年	教育学部附属山口小学校散水栓改修		2	1			立会		年報Ⅴ
	教育学部附属山口中学校球技コート整備		3	2			〃		
	教育学部附属幼稚園環境整備（樹木移植）		4	1			〃		
昭和61年	教育学部山口附属学校汚水排水管布設	幼稚園・小学校部分 中学校部分	5	57 20	中世土壙か 河川跡か杭列	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、土師質土器、陶磁器、不明鉄製品、石鏃、剥片、植物遺体	〃		年報Ⅵ
	教育学部附属山口小学校電柱移設		6	0.5			〃		
昭和62年	教育学部附属幼稚園遊戯室拡張		7	40			〃		年報Ⅶ
昭和63年	教育学部附属山口中学校屋内消火栓設備改修		8	35	包含層	土師器、磁器、剥片	〃		年報Ⅷ

光構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属光小学校自転車置場移設		1		近世～近代石垣	瓦質土器、陶磁器、瓦	試掘		年報Ⅲ
昭和59年	教育学部附属光小・中学校焼却炉新営		2				立会		年報Ⅵ

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和60年	教育学部附属光中学校外灯改修		3	1		土師器	立会		年報V
昭和61年	教育学部附属光小学校創立記念事業（ブロンズ像建立）		4	2.5		土師器、須恵器	〃		年報VI
昭和62年	教育学部附属光中学校グラウンド防球ネット設置		5	2		弥生土器、土師器、瓦質土器、土師質土器、瓦	〃	御手洗湾採集	年報VII
昭和63年	教育学部附属光小学校遊器具移設		6	10		土師器、土師質土器陶磁器	〃		年報VIII
	教育学部附属光小学校屋外スピーカー設置		7	0.5		土師器、土師質土器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶磁器、土錘	〃	御手洗湾採集	

その他の構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和59年	学生部ボート艇庫合宿研修所整備	宇部市小野湖		0.5			立会		年報IV
	学生部ヨット艇庫合宿研修所整備	吉敷郡秋穂町					〃		
昭和60年	熊野荘給湯機器取設	山口市熊野町		7			〃		年報V
昭和61年	湯田宿舎給水管改修	山口市湯田温泉		35	杭		〃		年報VI
	経済学部宿舎公共下水道切替	山口市旭通り		1		土師質土器	〃	6号宿舎	
		山口市水の上町		7		瓦	〃	2号宿舎	
昭和63年	経済学部宿舎公共下水道切替	山口市白石		1		須恵器、土師器、土師質土器、瓦質土器、陶磁器	〃	7号宿舎採集	年報VIII

※　昭和41年以降、吉田構内においては工事に際し、随時継続的に調査を実施しているが、昭和52年以前の吉田遺跡調査団の調査分については調査名をすべて把握しているわけでなく、注意されたい。

Summary

This report accounts the results of archaeological researches in twelve excavated areas located on campus in 1987.

As Appendix, it carries another report of excavation "the Preserved Site" on the Yoshida campus in 1986・1987, and in relation to the construction of the Administration Office №2.

Yamaguchi University Archaeological Museum was established as part of the crossfaculties public facilities of the University in 1978. We refer to a plan from the conference of the Management Committee first and gain approval. We then carried out the research in relation to the construction work on campus. That's why our reserches are helpful to reconstruct the past society,environment and so on.

The current year we carried out researches as follow:

1 Examinations under construction

(1) Examinations under construction on the Yosida campus

As for the establishment of the new bicyle parking at the are of Faculty of Liberal Arts and the laying drain pipes at the International Hall, we found each layer containing artifacts. In the former we could not find any artifact, but we confirmed a layer guessing to contain some objects for it contained much carbon. In the latter we found two different layers daiting from the Yayoi to the Kofun period containing a few Yayoi potteries and Sue wares. Besides, we discovered a small ditch or river flowing from northwest to southeast.

We also found layer contained much carbon in relation to the repair of soccer and rugby football court. By synthetically judging from the result of the past excavation around here, it is pointed out that this layer is soils of dwelling pit or pit for burial and so on. So this construction was practiced in order not to destroy the said ruins.

Also, a river daiting from the Kofun to the Nara period was unearthed as for the establishment of the fireplug at the south-end on this campus. And we found same layers contained artifacts in the late Jomon period discovered at the area of Faculty of Liberal Arts. It was confirmed that the distribution of this layers remained around the south on the Yosida campus.

(2) Examinations under construction on the Kogushi campus

We found retouched flakes, used flakes, flakes, hammerstones, stone materials, pebbles and so on. We guess that these stone tools belong to the Paleolithic age by the form

of stone implements, a great variety of the quality. It becomes circumstantial evidence that obvious artifacts in the Jomon period are uncovered, too.

(3) Examinations under construction on the Tokiwa campus

We could not find any structural remains and artifacts for cutting of the ground around here.

(4) Examinations under construction on the Kameyama campus

We found a few Haji wares, porcelains and stone flakes in the secondary accumlating layers. Putting some examinations till now together, we knew here were at least several layers contained artifact dating from the Jomon to the Edo period.

(5) Examinations under construction on the Hikari campus

As for the installation of the playing utensils, we found some Haji wares and porcelains and so on, But these mostly belonged to the time dating from the modern to the present. Besides we picked out many artifacts (Haji wares, Sue wares ceramics porcelains, Ga ware, clay weight, and so on) dating from the Kofun to the Edo period on the beach of Mitarai Bay.

(6) Examinations under construction on the another campus

We could not find any structural remains and artifacts by excavation at the Faculty of Economics' Dormitory. But, we picked up many artifacts dating from the Medieval to the Modern, we guess there are some unknown ruins around here.

We found many structural remains and artifacts by excavation at "the Preserved Site" on the Yoshida campus in 1986・1987. As to structural remains, there are four dwelling pits dating from the middle Yayoi to the early Kofun period, eighteen pit for burials in the middle and late Yaoi period, a ditch in the Kofun period, a river dating from the Kofun to the Nara period. One of dwelling pits in the middle Yaoi period, have a ditch in arcs round it, we think that some space round a ditch is the area of the residence of one house. Besides, jar, pot, pedestaled bowl enearthed from dwelling pits №20, are worthy of notice as assemblage of remains in the Early middle Yayoi period.

By the excavation in relation to the construction of the Administration Office №2, we discovered settlement associated with a well, pit burial within a ditch in the Muromachi period. It became a precious example that we could understand dwelling pattern of wealthy farmers in the Middle Ages.

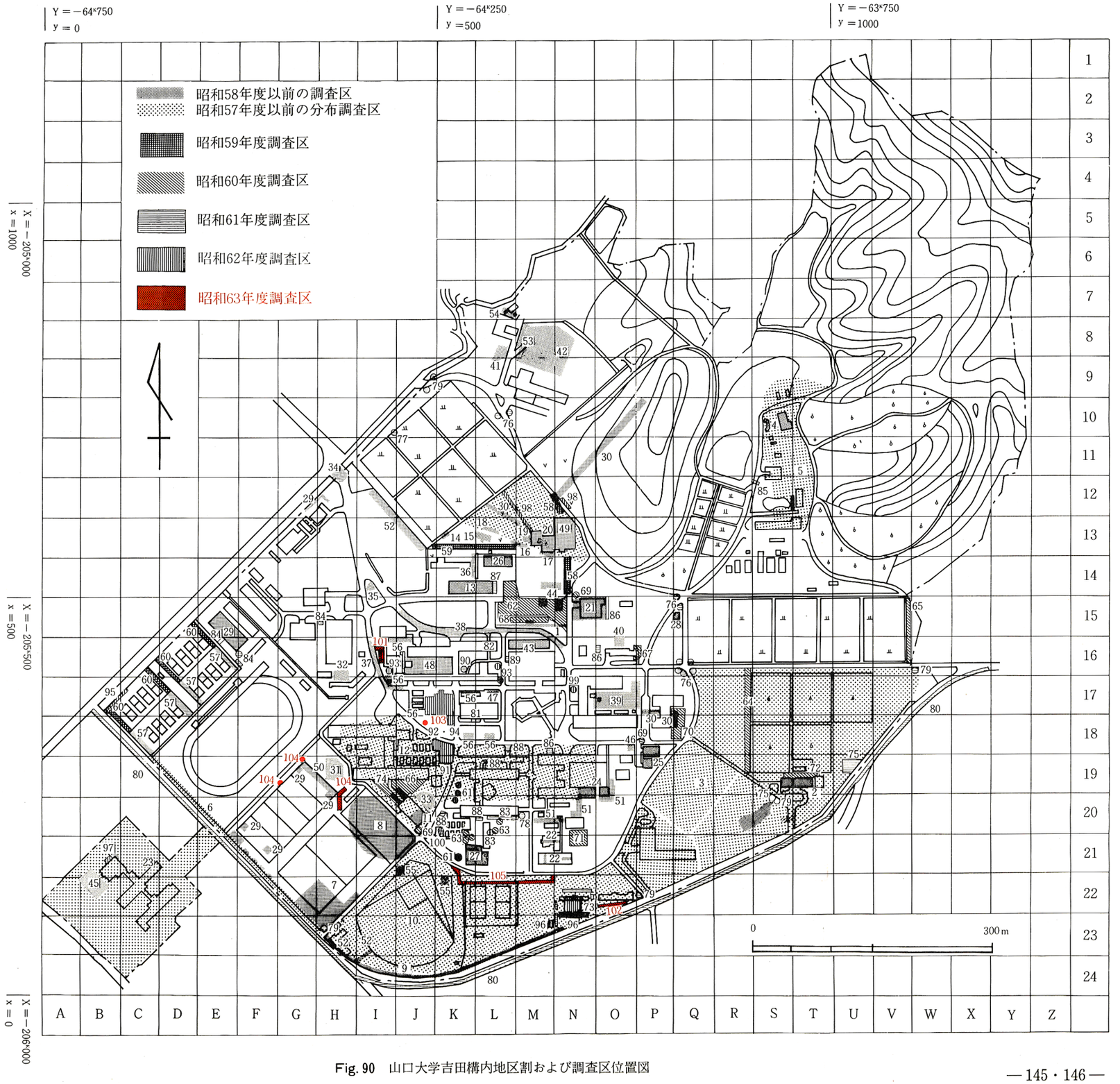


Fig. 90　山口大学吉田構内地区割および調査区位置図

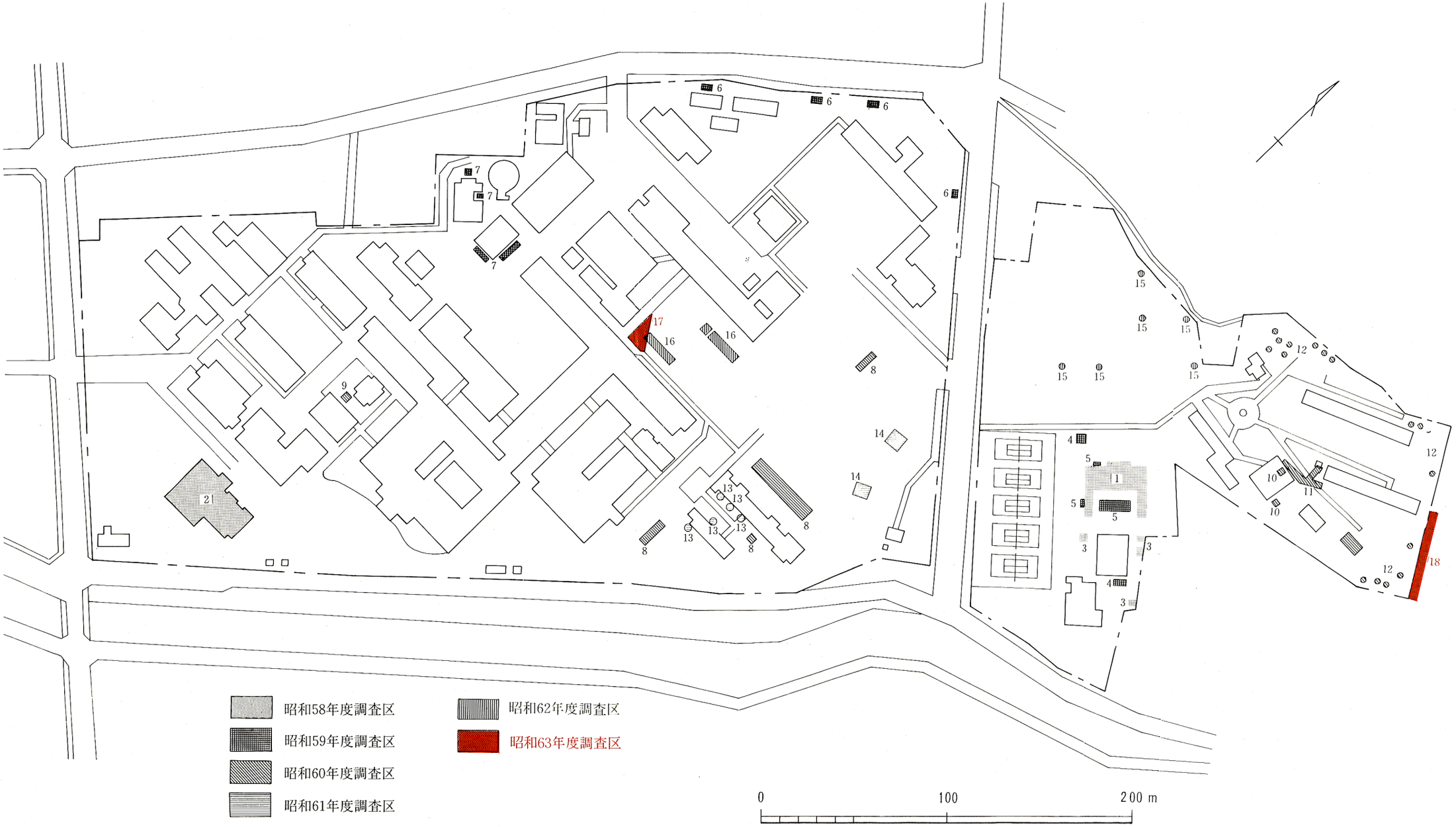


Fig. 91　山口大学小串構内調査区位置図

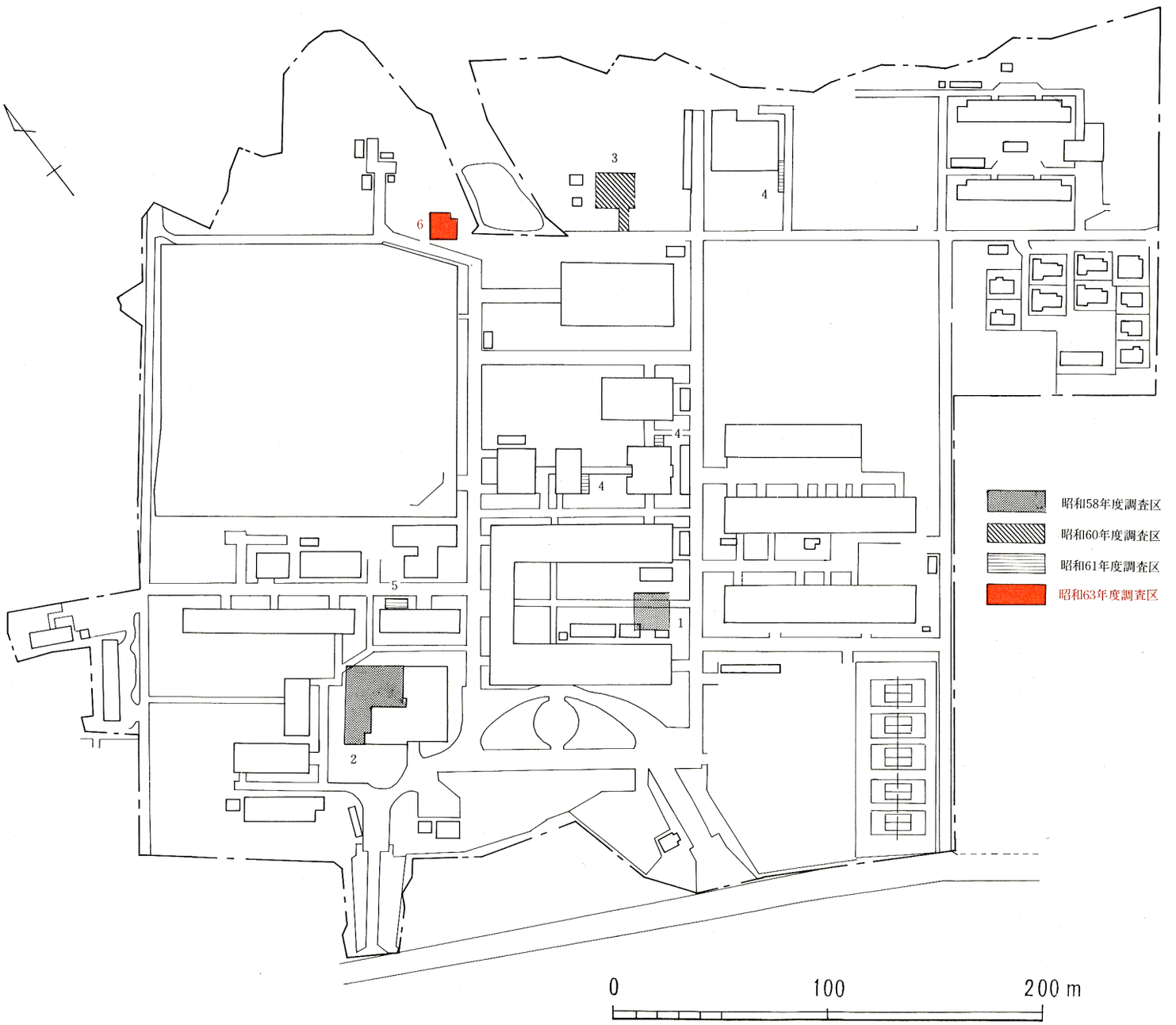


Fig. 92　山口大学常盤構内調査区位置図

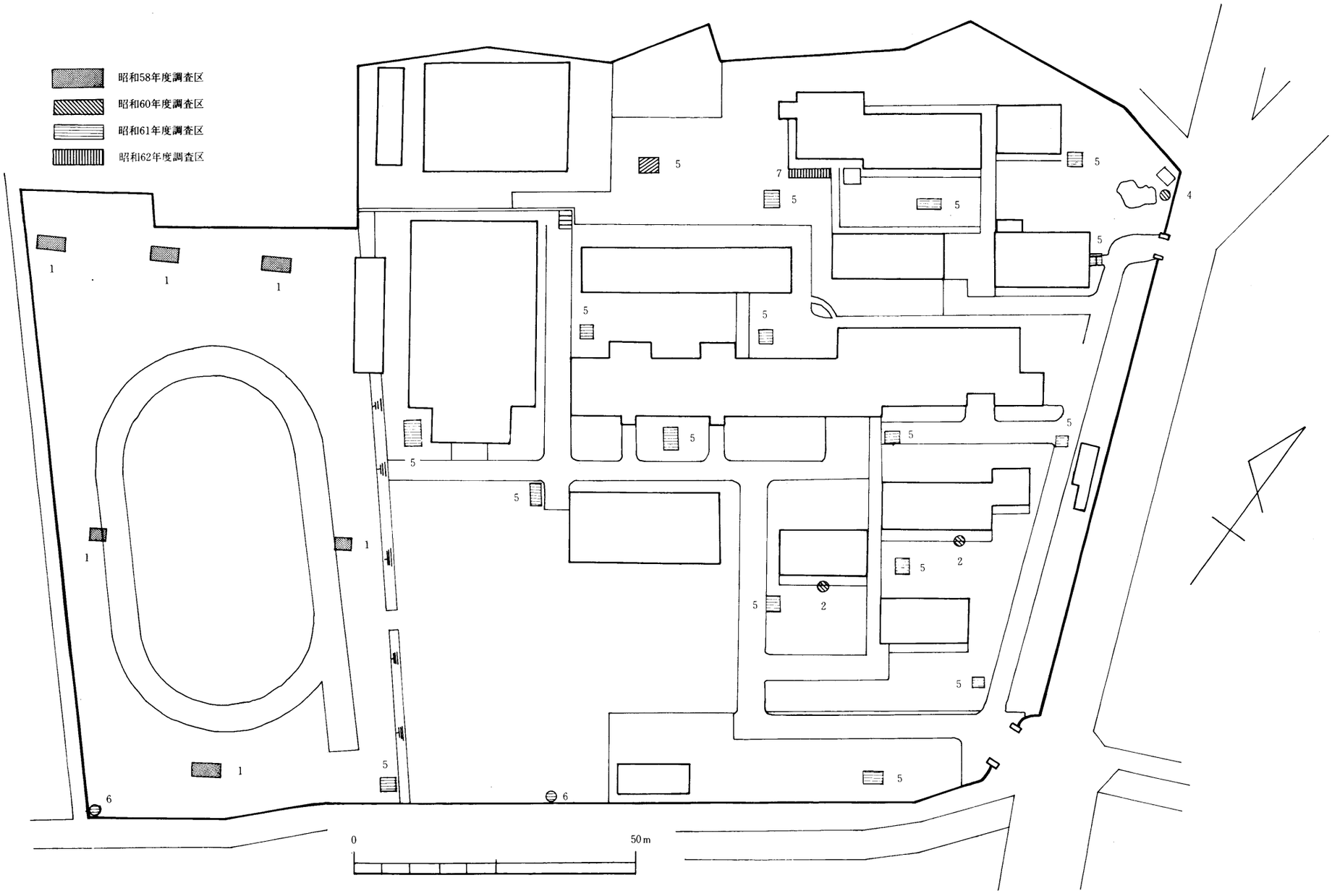


Fig. 93　山口大学亀山構内(幼稚園・小学校)調査区位置図

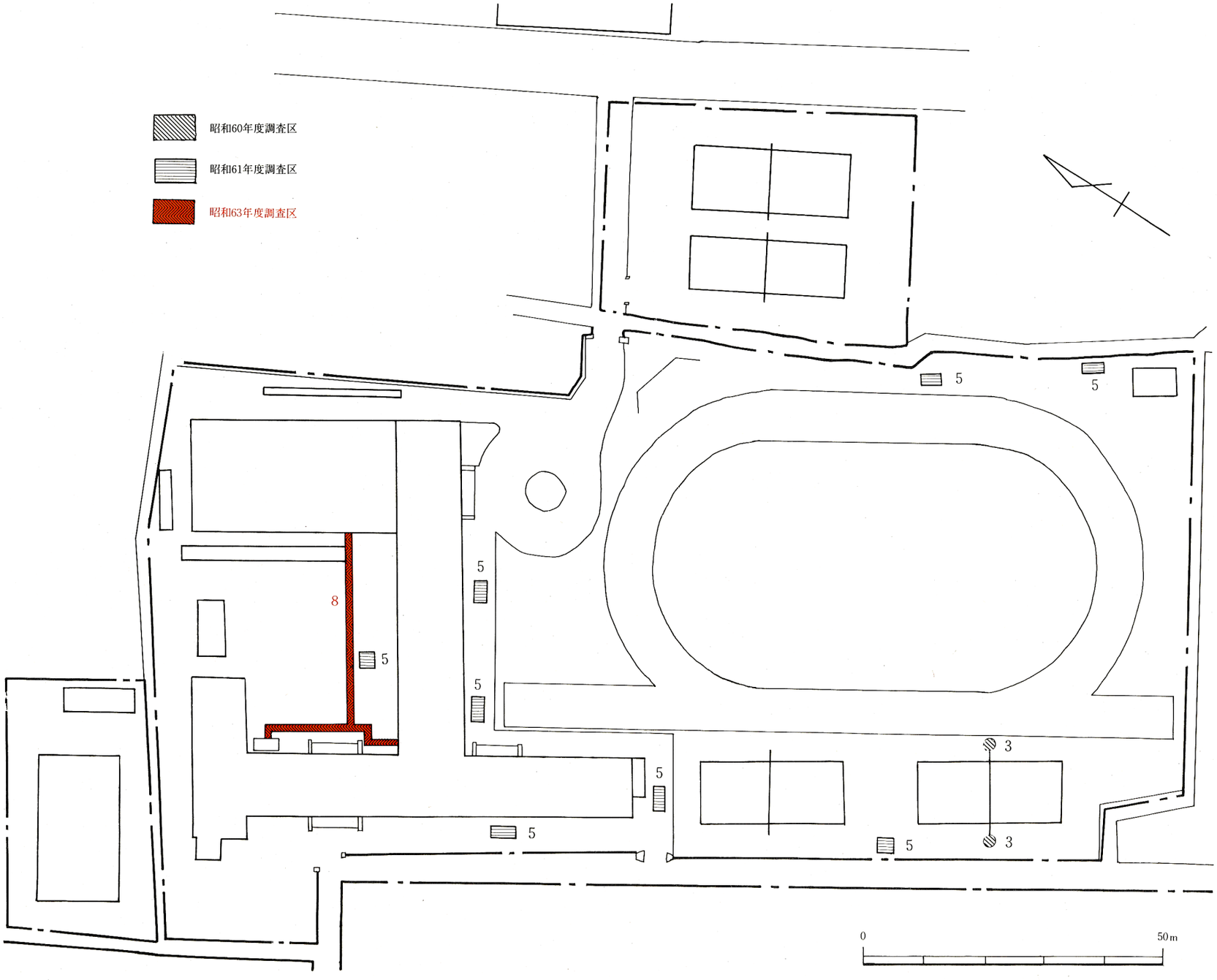


Fig. 94　山口大学亀山構内(中学校)調査区位置図

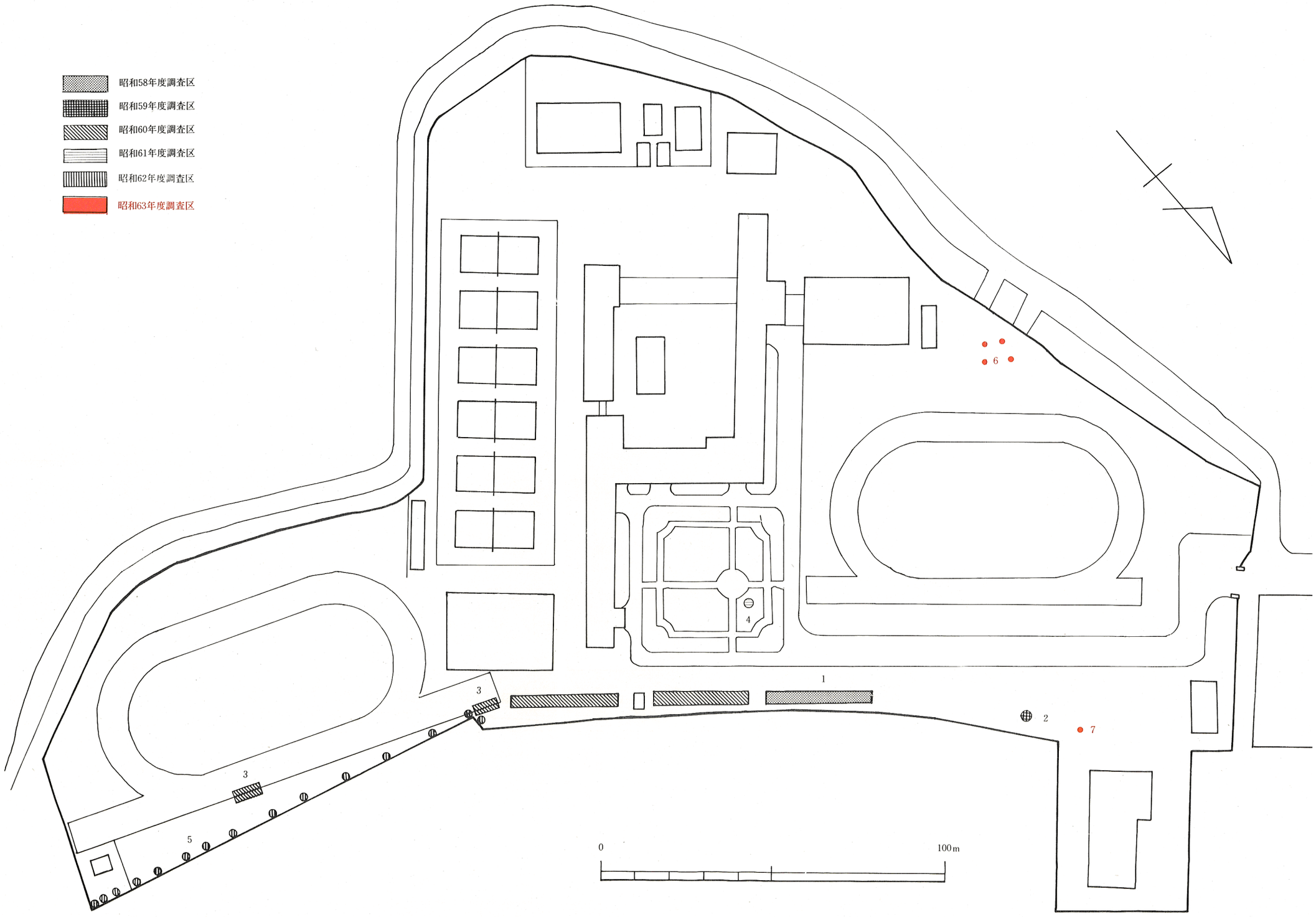


Fig. 95　山口大学光構内調査区位置図